異界の王女と人狼の騎士

ノベラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界の王女と人狼の騎士

【Ｎコード】
Ｎ３５７１Ｏ

【作者名】
ノベラー

【あらすじ】
放課後、親友の恋人に突然呼び出された俺。
その目的は、なんと！　俺への告白だった。
彼女にせまられドギマギする俺（そりゃ……嬉しいけどさ）。そしてキスする二人。
でも、どうにかなってしまいそうな雰囲気の俺たちの邪魔をする闖入者が現れた。
それは人でない、邪悪な意志を持つクリーチャーだった。そいつは俺たちに襲いかかる。

親友の恋人は目の前で蹂躙され殺された。俺は何もできずそれを見守るだけだった。圧倒的力の前に、俺もあっさりと瀕死状態になる。
……俺の未来は確実に訪れる死のみ。
そんな諦めの中にいる俺の前に、突然、何の前触れもなく、一人の金髪の美少女が現れた。
そして、彼女は告げる。
「死にたくなければ、わたしと契約し、下僕となれ」と。

俺は彼女と契約し、復活を遂げることになった。
こうして少女とともに戦いに身を投じることになったんだ。

第1話　日常から非日常の始まり

「柊君、大好き！　」
突然、日向寧々は飛びつくように俺に抱きついてきた。
木曜日の放課後、第一校舎の三階の教室。
香水の心地よい香りが体を包み、俺は一瞬、ぼぅっとなってしまった。
「……おいおい、冗談はよせよ、日向。変なもんでも喰ったんじゃないのか？　日向は漆多と付き合ってるんだろ？　なにわけわかんないことしてんだ……はっはーん、どうせあいつとケンカでもしたんだろ」
冗談めかしながら彼女から離れようとする。しかし彼女は思ったより力が強く、簡単には離せない。
潤んだ瞳で俺を見つめる日向の顔は冗談を言ってる顔じゃ無かった。俺は彼女の瞳に釘付けで、心臓はドキドキ状態に追いやられる。
「私、柊君のことが好きで好きで仕方がないの。もう自分に嘘なんかつけない」
唇に柔らかい感触を感じ、二人がキスをしていることを実感した。
さらに舌を絡ませてきた。
俺は抵抗ができないまま、うっとりとした夢心地で彼女の為すがままにされていた。体は正直なもんで、俺の両手は彼女をしっかりと抱きしめていたんだ。

しかし、……しかし、何でこんな事になったんだろう。
日向は俺の親友の漆多伊吹とつきあい始めたばかりなのに。
まったく……どうしたんだろ。どうなってんだ？

「放課後に第一校舎で待ってる」と彼女からメールが来た時、何か予感めいたものがなかったといえば嘘になる。

ウチの学校のこの校舎は、新築だけど施工不良のために取り壊しの判断がなされていたんだ。でも、工事業者が潰れて夜逃げしてしまったことと、取り壊しや新築の予算が確保できないことから今年度の対応は不可能とかいうことで、ずっと放置されたままになっていた。

当たり前だけど、周囲には柵が作られて入られないようにしているし、建物の入口には厳重に鍵がかけられてる。でもそんなもん応急的な処置でしかないわけで、大した効力は無いのが世の常だ。生徒達によってあっという間に侵入口が作られ、今では生徒達の憩いの場となっていて、夜とかには複数の男女が出入りし、デートスポットになっているという噂だ。

だから、そんなところに呼び出されるなんて、なんか色っぽい話かと思うのが普通。そもそもただの男友達と会うための場所としてはちょっと不自然だし不適切だ。

しかも、二人っきりで……だからね。

だけど、日向と俺の親友の漆多は最近付き合いだしたばかりだから、そういった事はありえず、ただの喧嘩をして、困って俺に仲裁役を依頼したいんだろうって思うようにしていた。

きっとそうなんだ。間違いない。うん。

夕暮れの第一校舎には人の気配は全くなかった。誰かに会ったらそいつと一緒に行くか、行くのをやめようと思っていた。しかしそんなときに限って誰にも会わないもんだ。結局、俺は校舎の入口に立っていた。

こんな場所に俺と親友の恋人の二人っきり。もし誰かに見られたら誤解されるのは間違いない。何を思って日向は呼び出したんだろう。

校舎の最上階の3階の一室に彼女はいた。

夕陽に照らされた彼女はなんだか色っぽくて綺麗だった。

俺はどういうわけか心臓の高鳴りを感じたりして、なんだか恥ず

かしくなっていた。

おもむろに潤んだ瞳で俺を見つめたと思うと、突然抱きついてきて、ふう……この状態なんだ。

もともと日向は可愛い部類に入る子だし、性格も明るく良い子だからクラスでも結構人気がある。もし誘われたら断る理由なんてない。だからこの状況はラッキーと思うべき事なんだ。

……俺の親友の漆多の彼女だという事実を知らなければね。

しかし、キスをされながら俺は彼女を押しのけることができない。体がいうことを利かない。俺は不貞をはたらいているというのに。

漆多から相談を受け、いろいろと方法を考えた日々が思い出される。結局当たって砕けろ戦法でまさかのＯＫを得たんだったけど……。そのときは二人で大喜びだった。

まるで自分のことのように嬉しかった。一緒に遊園地にデートに行った、手を繋いだ。キスをしたぞ！　漆多はそんな他人にとってはどうでもいいことを逐一俺に報告してくれた。なかよくわからないけど、俺はそんな幸せそうなあいつの顔を見ているだけで自分まで幸せな気分になっていたんだ。「いいなあ、マジ羨ましいぜ。ずっとお前達はラブラブなんだろうな。少し腹が立つくらいだ」

親友の恋の成就を本気で喜んでいたのに、俺はどうしたんだろう。

後ろめたさを感じながら、彼女とキスをしていることにどうも背徳的な喜びさえ感じているんじゃないかって思ってしまう。

「好き好き好き、大好き。……お願い。私を奪い去って」

と、寧々が耳元で囁く。

彼女は俺の右手を手に取り、自らの胸へと誘導する。

いかん、これはマズイ。

本気でやばいと思った。そうはいっても彼女は魅力的すぎるし、しかも俺のことを好きなようだ。俺だって嫌いじゃないし。このままだと何の障害もない。行き着くところまで行ってしまう。そして

それを止めるほどの意志の強さは俺にはないし、彼女もそんなつもりないみたい。それに、ここで拒否なんかしたら彼女を傷つけてしまうしね。

だ、だれか来てくれ。じゃないと俺は親友を、そしてその恋人の事を裏切ってしまう。

それは切なる願いだった。外的要因がなければ、もう止まらない。止められない。

ガタガタ。

立て付けの悪い引き戸が唐突に開けられた。

俺たち二人は飛び上がるほど吃驚して、思わず離れてしまった。

人の気配がしたら扉を開けたりしないこと。気づかないふりをして急いで立ち去ること。これは第一校舎使用の暗黙のルールだった。それを破った？　知ってか知らずか。

開けられた扉を見ると、そこには体操服姿の一人の少年が立っていた。

たしか転校生の如月流星（きさらぎ りゅうせい）。

同じクラスじゃないから良くは知らない。名前は格好いいけど、かなり地味な存在で、普通なら俺が彼の名前を知っているはずもなかった。じゃあ、何で知ってるかっていうと、かなり酷い苛めを同じクラスの連中にされている噂を聞いたからだった。クラス全員から除け者にされ、一部生徒からは暴行恐喝を受けているようだった。そのクラスの知ってる奴にちょっと聞いてみたら「気持ち悪いから」というよくわからない理由が原因らしい。運が悪いことに担任が事なかれ主義の典型的な奴でうすうすは知っているのに全く干渉しなかった。

抱き合っている俺たちを見ると、如月はニヤーっと笑った。なんというか卑屈でもあり卑猥でもありそれでいて見た者に激しい嫌悪

感を抱かせる嫌な笑い、声のない笑いだった。
驚いた日向は俺の陰に隠れるように離れた。
「あー、柊君と寧々ちゃんだ。こんなところでなにやってんの」
妙になれなれしい口調だ。俺や日向と話なんてしたことないのに、なんだこれ。
「なにもしてないわよ」
邪魔をされて少し怒り気味の日向が吐き捨てるような感じで呟く。
「へへへえ。夕方の第一校舎でチューしてたのに何もしてないっていうんだあ。舌までレロレロびちゃびちゃいれっこしてたのにぃ。僕が入ってこなかったら神聖なる教室で一発やってたんじゃないのかな。ひゃっ、いやらしいね」
「何わけわかんないこと言ってんの。あんたには関係ないじゃない」
「僕知ってるんだよ。寧々ちゃんは漆多君と付き合ってるんだよね。なのに柊君とも平気でやっちゃうんだろ。すっごいスケベ。柊君だってその事知ってるくせに彼女とレロレロですか」
あまりに嫌らしい口調で如月が話すもんだから日向は切れかかっているのが俺にもわかった。
「おい、如月。そんなことお前には関係ないことだろ。すまないけどさっさと消えてくれないか」
俺は邪魔に入った如月に少しは腹が立ったけど、なんとか最後の一線で踏みとどまるチャンスをくれた彼に感謝もしていた。
ただ、これ以上彼がいたら日向がぶち切れそうだし、喧嘩は嫌いだし、なんか恥ずかしいからそう言った。
「いやだよーん」
如月はあっかんべーをしながら叫んだ。
「こいつ頭おかしい。如月くん!、さっさと消えろっていってんじゃない。言うこと聞かないんなら正一君にいいつけるよ」
脅すような口調で日向が怒鳴る。正一とは如月と同じクラスで彼を虐めているグループのリーダー的な存在だ。結構喧嘩が強くてかつ陰湿陰険な奴だ。俺はとっても嫌いなタイプ。

「言えるもんなら明日にでも言ってえ。今の僕にはちっとも怖くないもんね」
そういて胸を張る。そんな姿勢をとったせいで気づいたがピチピチの体操服の下腹部が大きく屹立しているのがわかった。
それをみた日向が気持ち悪そうに眼を背けた。
「さあさあ、柊君、寧々ちゃん。かっかしないでさっきの続きをしてよ。柊君、先に一発やっちゃってよ。んで僕も混ぜて……。僕も寧々ちゃんとやらせてよ。日向ちゃんもいいでしょ？　どうせ淫乱女なんだから3Pとかになったらとっても喜ぶんでしょ？　僕初めてだから優しくね。……でも僕のモノを知ったら寧々ちゃんもう他の男じゃ満足できなかったりしてね。へへへ」
抑えていたモノがはじけ飛んだように日向がにらみつける。
「柊君、行きましょ。こんなところで、こんな人と同じ空気すってるだけで吐きそうだわ。……如月、いじめられて可哀相だなんてちょっとでも思ってた自分がむかつく！」
俺の腕を握るとさっさと教室から出ようとする。もちろん俺もこんな場所から離れたかった。
しかし、如月が普段のトロい動きからは想像できない素早さで立ちはだかった。
「なによ、退いてちょうだい」
「如月、冗談はよせよ。でないと俺だって怒るぜ」
「二人ともかっかかっかしない。もっと裸で語り合おうよ。素直になろうよ」
さすがの俺も我慢の限界が近づいてきた。嫌悪感と怒りとなんか得体のしれない不気味さで我慢できなくなってきたんだ。
如月がニヤッと嗤うや否や、少し手加減したパンチを彼の左頬に打ち込んだ。
ミシリというクリーンヒットの感触。
「いい加減にしろよ」
俺は少しだけ凄んだ。

如月は殴られたショックか、少し呆然とした顔をしたがすぐに笑顔を取り戻した。
「ふにゅあん。なにすんだよ、柊君。寧々ちゃんを君だけで独り占めなんて狡い狡い。寧々ちゃんも減るもんじゃないのに何怒ってんの？　馬鹿じゃない？　もういいや。君たちの同意なんかいらないや。僕は僕、君は君。いくぜ！」
そういうと如月は中腰になると思い切り息み出した。

「うーうーうーん。もちょっと。うーうーうー！　はぁはぁ」
血が回ってきたのか、彼の顔が紅くなりそして徐々に黒みを帯びてきている。額には血管の筋が数本虫がはい回るかのような形で筋を形成する。ギシギシという歯ぎしり音。体は小刻みに震え、けいれんを起こしているようだ。
俺たち二人は少し恐怖を感じていた。
「きょへー！」
奇声と同時に彼の尻が破裂した。
ブバッ。
真っ赤な血とピンク色の物体が如月の後方に飛び散り、背後の扉を赤く染めた。茶黒い物体がドロドロとケツの穴から垂れだし、猛烈な悪臭を放つ。
「うおおおお、……うおおおお痛てえよぅ。たたたた助けてって、痛い痛い痛いよう痛いよう」
両目から涙をボロボロと流し鼻水は垂れ、涎がとどまること無く垂らしながら如月は呻いた。わめいた。叫んだ。中腰の姿勢を保つことができないのか、彼は跪き、さらに両腕で体を支える。
俺たちはその異常な光景のためにまったく動くことすらできない。
さらに如月は息みつづける。
ぶぶっ。にゅるにゅるにゅる。
屁の出るような音とともに、何か得体のしれない物体がケツの穴からはみ出てきているのを見てしまった。

それはピンクと茶色と赤が入り交じった内臓のような物体だった。それがまるで生き物か何かのように数本破裂した如月のケツから顔を覗かせていた。
グロテスクな光景と猛烈な臭気のため、日向は俺の背後で吐いていた。
教室には日向の吐く音と、如月の呻くような泣くような声だけが響く。
そして次の刹那、彼の尻からはみ出たものが一気に伸びた！
「うおうおうお。きききき気持ちいいいいいいいっいいいいい～っ！！　」
如月の絶叫。
彼の尻から這いだした物体は5本の腸の様な態様のモノだった。血と便がこびりつきどす黒くてかっている。それらが一つの器官のように屹立し、鎌首を俺たちの方に向けている。よく見ると先端の方には吸盤のようなものが無数に張り付いている。それは吸盤というよりも口のようにも見えた。三角形の尖った歯のようなものが生えている。
まるで触手のようなものだ。ウネウネと漂い、臨戦態勢を取っているかのようにさえ見える。
なんという不気味な光景なんだ。ただ、それはこの上なく危険過ぎる事態に俺たちが放り込まれたということだけは本能的に感じた。
俺は考える間もなく、日向の手を握り逃走を図ろうとした。
しかし次の刹那、俺の右足に何かが絡みついたのを感じた。
あわててそこを見ると、いつの間にか伸びてきた如月の触手の一本が俺の太ももに巻き付いていたのだ。それは猛烈な力で足を締め付けている。さらに何かが足に突き刺さるような痛みが走る。必死でほどこうとするが触手はぬるぬるしていてまともにつかめない。糞の猛烈な臭気で吐き気が増す。
「日向、逃げろ」
俺がそう言うか言わないかの瞬間、まるで何かにはねとばされる

ような衝撃を感じたと思うと次には壁に激しく叩き付けられていた。
激しく背中を打ち、呼吸ができない。咳き込んだかと思うと、何かが胃の中から戻ってくる。……真っ赤な血だ。それでも俺は日向の姿を求める。
そこには日向と如月が向き合っているのが見えた。彼の下半身は完全に着衣が吹き飛ばされていて尻から5本の触手がしっぽのように生えているように見えた。そしてそのうちの一本が誰かの足を持っている。
足？　……誰の脚だ？　ふと下を見た。
俺の右足が太ももの中央くらいから消え失せ、ドロドロドクドクと血が流れていた。おまけに骨のようなものが肉の間からはみ出てるのをみつけて、完全に血の気が失せた。
刹那、激痛が襲ってきた。
くそ、気づかなければよかった。そう思っても、もう遅い。痛みとあり得ない出血で気が遠くなっていく。
悲鳴を押さえるのが精一杯。
ヒュン！
音がして何かが飛んできた。壁にぶつかり、ぐしゃりと音を立てて床に落ちる。
それは千切れた俺の右足だった。
死……それが確実なものとして実感された。なんなんだよ、これ。あいつはただの転校生で虐められてて、少し可愛そうだと同情してただけの高校生だろう？　何だよ、あれ。人間じゃ無いじゃん。俺、足千切られちゃってこのままじゃ死ぬな。千切れたってことは多分足まともにくっつかないな。
何か俺悪いことでもしたのかな。これって絶望なんだろうか。などどいろいろなことを考えて極力現実から目を逸らそうとしてたんだ。
唐突な悲鳴で俺はその悪夢から現実に引き戻された。

声は日向のものだった。
ぼやけていく視野の向こうで、彼女は如月に蹂躙されているのがわかった。奴の尻から生えてきた触手の五本の触手の一本一本が彼女の手足を拘束し、そして宙づりにしていた。残された最後の一本がにゅるにゅると彼女の体を這い回り、おもむろに彼女の制服を一気に引きちぎった。
全裸になった如月は俺に背を向け、尻から生えた触手が日向の体を持ち上げる。日向は悲鳴を上げ必死に体を捻って抵抗している。
「柊君、助けて」
必死の叫びを聞き、俺は何とかして体を動かそうとするがまるで自分の体じゃないみたいにピクリとも動くことができなかった。
如月は何かを確認しながら、持ち上げた彼女の体の位置をゆっくりと、そして少し下ろした。
日向が「嫌！　」と微かにうめく。
お構いなしにゆっくりと腰をスライドさせ始めた。両手は彼女の体をまさぐっているようだ。
何かを喚いていた日向の口からは悲鳴と喘ぎ声が交互に発せられる。
「やめろ、やめろ、やめてくれ」
俺の声は空しく響くだけだ。必死にその残虐行為を止めようと這って行こうとするが、相変わらず体が動かない。
混乱と恐怖と絶望と激痛の中、ただ如月のうめき声と日向の喘ぎ声が教室に響いていた。
永遠に続くかと思われるような地獄絵図。俺は自分の好きな女が、そして親友の女が得体の知れない化け物に犯されているというのに何もできず、ただ見ているしかなかった。クソクソクソ！　なんで動かないんだ。
如月の残された一本の触手がゆるゆると日向の体に迫り、動いたと思うと彼女の口から絶叫が発せられた。ブニュブニュブニュと何かがめり込んでいく音が聞こえる。日向は眼をこれ以上開けないく

らい大きく見開き眼球が飛び出さんばかりの状態になる。口は大きく開かれ、歯肉がむき出しになる。同時に如月が腰を激しく振り始めた。

もはや悲鳴としか思えない絶叫。そして「うめめめ、げぼ」っと音がしたと思うと、彼女の口から触手が顔を出した。

「うんおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ」

如月が吠える。触手からは白濁した液体が撒き散らかされ、日向の耳鼻口眼のすべての穴からは血の混じった同様の液体があふれ出した。その声は教室を響かせる程のものだった。

そして果てたかのように触手でとらえた日向は投げ飛ばされ、床をバウンドして壁にぶつかって制止した。

如月も、日向も動かない。特に日向は顔や足が妙な角度にねじ曲ったままピクリとも動かない。

「ひ、日向……」

俺は口をパクパクさせ、声を出そうとするがそれは無駄な努力だった。

第2話　更なる惨劇

静寂は、ほんの数十秒だったかもしれない。だが俺にとっては何時間にも及ぶ空白の時間に感じられた。

目の前に突きつけられた事実。惨殺された友人の恋人。人であらざるモノの存在。引きちぎられた俺の右脚。すべてが信じられないし信じたくない事ばかりだ。化け物の存在や欠損した右脚は今の俺にはどうでもいいことだった。

寧々が殺されたことに比べれば……。

俺は友人の恋人を守ることができなかった。何一つできなかった。いいやそうじゃない。本当に耐えられないのは、俺が親友を裏切ったことなんだ。

「うーん」

呻きとも唸りともとれるような声を発し、如月流星が起きあがった。尻尾のように生えた5本の触手も鎌首をあげるように天を突く。

ゆっくりと振り返り、俺を認識すると嗤った。

嗤った。

次は俺の番か。

覚悟はできている。だが簡単には殺されたりはしない。たとえ一撃でもいいから奴にダメージを与えてやる。寧々をあんな目に遭わせた奴をぶっ殺す。

奴はゆっっくりと歩いてくる。

奴に感づかれないように右手で学生服の内ポケットを探る。肋骨が何本か折れている感じがする。それを庇っているように見えれば満点だ。

確かボールペンを入れたままだったはず。壁に体を預けながらそっとボールペンのキャップをはずし、如月を睨みつける。

出血は止まってないし、痛みは半端なく尋常じゃない。すぐにでも意識が飛びそうなくらいぼーっとしている。反撃は一度が精一杯だ。

「月人君、まだ生きてますか？　」

ぺたりぺたりと歩くたびに音がする。全裸の如月の性器は屹立したままだ。吐きそうなことに先端が三つに分かれあいつが動くたびにクルクル回っている。見たくもないものに目がいってしまう。

「ふふふ。どう、凄いだろ僕のイチモツ。寧々ちゃんもこれで突きまくられてひーひー昇天しちゃったからね。いやすごい」

嗤いながら俺に顔を近づける。

「……っんだよ」

俺は吐き出すように言うがちゃんと声にならない。

「はあ？　なんていってんの」

生ゴミが腐ったような口臭が漂ってくる。

「臭いっていってんだ、よ」

俺は叫び、右手に掴んだボールペンを思いっきり奴の左目に突き刺した。

ズブズブとペン先が奴の眼球の白目と黒目の境目をゆっくりと吸い込まれていく。透明なゼリーみたいなものがテロテロとはみ出してくる。このまま突っ込み、奴の脳を破壊してやる。

「あうあうあう」

押し込むたびに如月が頓狂な声を上げる。

ペン先から１４．４ｍｍの長さの黒色のボールペンはずっぽりと奴の眼球にめり込んでいる。そしてそのペン先は間違いなく奴の脳に到達しているはず。これは致命傷だ。

しかし、……奴の潰されていない側の目が、ゆっくりと俺の顔の方へと動き始める。俺は視線を避けようとするが動かない。動けない。そして奴は笑った。

俺は全身の血の気が失せていくのを感じた。それは明確な恐怖だ

った。背後は壁で逃げることができないのになんとか後方へと逃れようと足掻く。しかし、素早く右手をがっしりと掴まれていた。
「だめだよ、月人君。ボールペンのような尖ったものを人に向けちゃあ。目なんかにささったら失明しちゃうじゃないか。そんな悪い子ちゃんにはメッ！だよ」
そう言いながら俺の右手に奴の左手が絡みつき、ぐっと握りしめた。
パキパキ。
木の枝が何本も折れた様な音がするのと同時に激痛が貫くのを感じた。奴の手の中で俺の右手が握りつぶされ、表皮を突き破って何本も骨が露出し、血と肉が垂れる。
「ぐがっ」
脚が引きちぎられた痛みでさえ精一杯なのに右手をグチャグチャにされた痛みが加わり、俺は再び喘いでしまう。痛みには際限がないってーのかよ、なんだよまったく。
「泣きたいなら泣いたらいいんだよ、月人君。泣いたって誰も助けてくれないけど、その悲しみは僕が受け止めてあげるから安心して。君みたいなクールな奴でも泣き喚いちゃうところを見せておくれよ。へっ」
どうして如月が俺が泣くところをみたいかなんて考える余裕がなかった。ただただ痛い。痛み以上に思ったことがある。千切られた右足、潰された右手……。仮にこの場を助かったところでちゃんと治らないだろう事が想像できる。今まで五体満足で生きていたから考えたことも無かったけど、一体俺はどうしたらいいんだろう。絶望感が俺を襲ってくる。心が折れそうになっているんだ。思わず叫び出したくなる。「助けてくれ」と。「お願いだから解放してくれ」と。
俺は虚ろな目で如月を見返す。そしてその背後に倒れたかつての寧々が無惨な姿でうち捨てられている。彼女の無念を思うと折れそうになる心に炎が滾ってくるのが分かる。寧々が一体何をしたんだ。

こいつだけは許せない。許してはいけない。絶対にぶっ殺す……。
でも、もう俺にこいつを斃すチャンスは訪れないんだろうなって確信している。選択肢は殺されるという一択しかない。こいつと俺の間にある圧倒的な力の差、それはどうしようもない。ちぇっ。なんだかわかんないけど足掻いても仕方ないから殺されてやるよ。……でもお前が望むような死に方だけはしてやらねえ。絶対、泣きわめいて助けを求めたりするもんか。
ニヤニヤと笑う如月の顔に唾を吐きかけてやった。
「くそ、くらえ、だ。ばかやろう」
全身の痛みをこらえながらなんとか言ってやった。うまく言葉にできたことで、よしっと俺は心の中でガッツポーズ。
顔面にかかった俺の唾を如月はゆっくりと右手で拭き取った。その顔からは気持ち悪いヘラヘラ嗤いが消えていた。真顔になると今まで知っていると思っていた如月の顔とはほど遠い面容に少し恐怖する。奴は未だに突き刺さったままボールペンを左眼から引き抜いた。
じゅるるっと糸を引く。それを舌でベロリと舐めて嗤った。
全身に悪寒が走る。
次の刹那、奴は俺の左耳を鷲掴みにすると、無造作に引きちぎった。皮膚と肉が剥がれる聞き慣れない嫌な音がし、顔中に痛みを感じた。だけどその痛みは今俺が感じている痛みと比べれば小さなものだったので悲鳴も上げなかった。奴の手には俺の左耳とおまけでくっついていった顔の皮膚が握りしめられている。どうやら左頬の皮膚もだいぶ持って行かれたようだ。チリチリとした痛みを感じる。
如月は俺の耳を俺に見せつけるようにすると、そのまま口に含んだ。グチャグチャとかみ砕きごくりと飲み込む。
サヨナラ俺の左耳。今までありがとう。俺の左耳はロストした。失ったものは戻らないんだ。
でも泣いたりしない。目の前のバケモノが望むような死に方はしてやらない。最後まで意地を通し最後の最後は舌を噛み切ってでもし

て死んでやる。それが最後の意地だって思ってる。
「泣きわめいてよ、月人君。そうしたら助けてあげるかもしれないよ」
優しくささやくバケモノ。
「なんども、いわすなよ、くそやろう。だれが、いのちごい、なんかするか」
本当は泣きそうだし死にそうだしシャレにならないくらい痛いけど我慢してる。もうちょっと格好良い台詞を決めてやろうとした時、奴の5本の触手の一本が俺の口に押し込まれた。ぬるぬるした触手は喉の奥の方にまで押し込まれ、俺は喋る事も喚くこともでき無くされてしまった。しまったと思ったが手遅れだった。そろそろ舌を噛み切ろうと思っていたのに先手を打たれた。これで俺は奴の解体ショーの餌食になることが決まったようだ。潮時を読み間違えたな、こりゃ。
「こっから酷いよ〜。残念だったね。死に逃げは許さないモンね。えへらへら」
如月は左手に持ったボールペンを右手に持ち直した。残された触手のうちの二本が体に近づいたかと思うと俺の上着を引きちぎった。
むき出しになった俺の腹部に奴はボールペンを這わす。こそばゆい感触で俺は身じろぎしてしまう。そしてツーっと黒い線が俺の腹に横一文字に引かれた。
「この線に沿っておなかを切り開くんだ。生きたままだから結構痛いと思うよ。切腹《ハラキリ》だね。侍だね。月人君にピッタリだ」
ボールペンが左腹部に当てられる。ゆっくりとゆっくりとそのペン先は俺の腹に押しつけられていく。逃げようにも逃げられない。いつの間にか奴のケツから生えた触手が俺の体をガッシリと押さえつけていた。背中は壁にべったりだからどうしようもない。腹筋で抵抗しようにもそんなの無理。
ズブズブと腹の肉に食い込んでくるのが分かった。そして激痛。しかし声は上げられない。なんか唸るだけだ。血が腹から噴き出し

てくるのが視界の隅に見えた。如月は痛みに歪んだ俺の顔を嬉しそうに見ながらペンを引き抜いた。
悪夢だ。悪夢だ。でもさめることのない現実なんだ。
ボールペンを捨てると、今度は右手をボールペンの開けた腹の穴にねじ込んでくる。皮膚が割けていく。さらには左手も俺の腹に突っ込み、傷口を開いていく。これまでにない痛みで俺はひっくり返りそうになるし悲鳴も上げそうになるが、それらの動きは全て不可能の状態だ。失神でもすれば良いのにその気配すらない。本気で地獄の痛みだ。目からは意図しない涙がボロボロ流れ出ているのがわかる。大量の出血で意識が遠のきそうなもんなのに、痛みで意識が戻ってくる。
触手が俺の口の中に入り込み、喉の奥の方までつっこまれている。息苦しさもあるし、顔を固定されているから下を見ることができない。でも痛みの感覚から真一文字に腹をかっ捌かれているのは分かる。
「くへー。臭いなあ。これ」
無邪気な笑い声を上げながら如月は俺の腹の中に手を突っ込んでグチャグチャかき回す。もう痛いのやら何なのやらよく分からない。ただこんなのが永遠に続いたら死ぬ前におかしくなるかもしれない。
「さあさあ見てみて。汚いなあ、月人君のこれ～」
そう言って奴は俺の前に腹から引きずり出した腸とかを見せてくれる。ピンクやら薄肌色やら赤やらで彩られたそれは吐き気を催すし気が遠くなりそうだった。そんなもん見たくもない。
「これからバラバラにしていろいろしてみたいな。それまで死んだりしないでよ」
勝手な事を言う。いそいそと何かを準備をしているようだ。
「うん？」
突然、如月は動きを止めた。警戒するように辺りを見回す。そして肩を震わせケケケケと嗤いだした。
ついに気が狂ったか？

「あいつだ。……感じるぞ。あいつが近づいてる。……うーん、下だな下した」
俺を見る。
「月人君。ごめん。お客さんが来たようだから君の相手はもうできないよ。本当は用事が済んだら帰ってきたいんだけど、その頃には死んじゃってるだろうね。残念。……何か記念がほしいなあ。そうだ！」
そう言うといきなり俺の口に押し込まれた触手が引き抜かれた。気持ち悪さで咳き込み僅かな内蔵物をはき出す。
そんな俺の頭をガッシリと掴むと、奴は俺の左眼に指をつっこんできた。ぐりぐりと人差し指と中指を器用にめり込ませる。もはや痛みなんかない。
ポロンという感じで俺の左眼が摘出された。目ん玉にくっついてる筋肉みたいなのを無造作に引きちぎると、自分と潰れた眼球をほじくり出し、俺のを押し込んでセッティングする。
何度か目をぱちくりしすると俺の目だったものが奴の左眼で馴染み、もとより奴のものだったように動き出した。
「ふふーん。これであいつに相対しても死角はない」
満足そうに言うと、もはや俺に興味が無くしたかのように立ち上がり、三つ叉になった性器を扇風機のように回し、ケツの穴から生えた5本の触手を誇らしげに立ち上がらせ、如月は教室の窓から飛んだ。

ほんのしばしの空白。
とりあえずの地獄巡りからは解放されたようだ。しかし、もう俺が死ぬのは時間の問題だった。体からはみ出した内蔵、ほじくり出された左眼、グシャグシャにされた右手、引きちぎられたままの右脚。これで良く生きていられるもんだ。……まあもうすぐ死ぬけど。
結局、日向寧々を護ることもできなかったし、敵である如月に一矢報いることも結局できず、このまま無念のまま死んでしまうこと

は耐えられなかった。でもどうにもならない。これが運命ってやつか。如月の思うような泣きわめいて命乞するところを見せなかっただけでも奴に一矢報いたということで満足するしかないんだな。世の中には俺より不幸な終焉を迎える人間が数え切れないほどいるんだから。

次第に視界がぼやけてくる。痛みはまだまだハッキリとしているがそれ以上に俺の体の機能がどんどん停止していってるんだろうな。だからなんだか我慢できる。ぼやけた視界の中に日向の亡骸がある。

「ごめんな、日向。怖い想いをしただろう。助けてやれなくてごめん。でも俺もそっちにいくから、また謝るわ」

死んでいく時って寒気も感じるもんなんだな……。

俺は目を閉じようとした。だって目を開いたまま死んでるのって結構発見者が怖がるだろ。

再び教室の引き戸が開かれる音がした。

閉じゆく俺の目が再び開かれ、ゆるゆるとそちらを向こうとする。

「ずいぶんと酷いやられかたね……」

声の主を求めて俺の視線は彷徨う。

誰かが立っているのは分かった。それは如月ではなかった。

――それは、少女だった――

第3話　王女との契約

真っ黒な着衣にブーツも黒。対照的に彼女肌の色は白く、ほとんど真っ白なため、その黒さが余計に目立つ。髪は金色。金色というか黄金色と言っても良いくらいだ。ゴールデン・ブロンドっていう色なんだ。そして、彼女の大きな碧い瞳はその奥底から光を放っているようにさえ見えた。

少女は、もはや単なるグロテスクな存在でしかない俺に驚くことも怖がることもなく、歩いてくる。

側まで来るとしゃがみ込んで俺の顔をマジマジと見つめる。吸い込まれるような瞳になぜかドキドキする。血流が早まって出血する。うはー。

でも……よく見たら、まだ子供だ。子供だから体のバランスは悪く、そのせいか古くさい表現だけどホント人形のように見える。

「どう？　わたしの声が聞こえる？　」

「もちろん、聞こえるよ」

俺はそう答えたが声にはなっていないようだ。口がパクパクしているだけだ。すぐに戻しそうになって慌てて口を押さえる。それでも言いたいことは彼女には聞こえたようで、頷いた。

「違う違う。そんなことどうでもいいんだ」俺は性急に喋った。声にはならないけれどもね。

「君が何でここにいるか、どこから来たか？　君が何者かとかいろいろ気になるところはあるけど、いちいち聞いている暇は無いからこれだけは言わせてくれ！！　ここは危険なんだぞ。俺のこの姿を見たら分かるだろう？　人間をこんな風にするバケモノがさっきまでここにいたんだ。そしていまも付近を徘徊しているんだ。そいつ

は窓から外に飛び降りてどっかに行ったけど、何時戻ってくるかわからない。君みたいな子供がこんな処にいちゃいけないんだ。とにかくここは危険だから逃げるんだ」
と、とりあえず捲し立てるように喋った。喋ったというか俺の中では怒鳴り散らした感じだ。
現在のこの場所がいかに危険か、ここに少しでもとどまり続けることがどれほど危険かを知らさなければならないんだ。奴が戻ってきたらこの少女も蹂躙されて殺されるに違いない。これ以上目の前で人を死なせたくない。しかもこんな子供を……。

「大声で喚かなくてもお前の言いたいことは全て分かっているわ。だから大声で喚かないで。お前はわたしの話を聞いて選択をすればいいのよ」
少女はうんざりしたような口調で話す。
そんな喋り方はガキっぽいんだけど、彼女の雰囲気は年齢にそぐわない落ち着きがあるし、なんだか威厳さえも感じられる。その辺のガキじゃあなさそうだ。
「お前、……名前は何という？」
お前呼ばわりか。ヤレヤレ、何か偉そうだなと思いながらも、
「俺は、月人柊だ」と、答える。実際には言葉にはなってないけ。口を開いたらゲロゲロと血が混じった内蔵物が戻ってきそうなんだ。実際嘔吐いたから必死で飲み込んだけどね。胃酸が苦くて気持ち悪い。喰った物が少し残っていて飲み込むとき喉を刺激してまたその感触が気持ち悪いんだ。
「そう、名前はシュウね。じゃあ、シュウ、言うまでもないでしょうけど、このままだとお前は死ぬわ」
そんなの分かってますって。こんな生けるグロテスクな存在、生存の可能性なんて無いよ。むしろ、この状態で今も生きていることが不思議。

「そうね。でも一つだけお前が助かる方法があるわ。興味ある？」
「そりゃ俺はまだ死にたくないけど、そんなの可能なの？」
少女は頷いた。
「でも、今の状態で生き延びるだけだったら意味がない。そんなんなら、むしろ死なせてくれ」
とワガママ言う俺。
「ふん、こんな状態で生き延びられてもわたしにとっては迷惑だ。当然、もとの状態に戻してあげるわ。潰れてるけど手みたいなものや、その千切れた足も元に戻るし、空洞になってる眼も復活する。それから派手に切り開かれてはみ出してる内蔵も腹の中に戻り傷口も塞がる。傷痕さえ残らない。……残念ながら不細工なお前の顔は治らないがな」
少女の言葉はまるで原稿を読み上げるように淡々と話しているように感じる。かるいジョークが混ぜられているようだけど反応できない。そして少女のその姿に、なんだか俺は夢を見ているような感覚に囚われてるんだ。そう、まるでリアルなゲームの世界の中にいるような感覚だ。自分自身も体の感覚が遠くに行きかけている。あんなに酷かった全身の痛みも今じゃかなり薄れちゃってる。ボロボロになった肉体も目の前の少女の話していることさえも遠い世界の出来事のようだ。眠さを堪えてやっているリアルなＲＰＧな感じがする。意識が遠のくというか猛烈に眠いというか。
……やばい、これって死にかけているんじゃねえか。
「ただし、条件があるわ……」
うんうん、そうだよね。うまい話には必ず裏がある。それでもなんかあんまりに出血しすぎたためか意識がどんどんぼやけていくんで、なんか深く考える気にもならないんだ。なんもかもめんどくさい。少女が話している事も、あの触手の化け物がここに戻ってくる可能性すらなんだか遠い遠い場所のお話しみたい。
「わたしと契約をすれば命は助かる。けれどそれは期限の無い契約。

お前はわたしの下僕になり、わたしを護りわたしと共に生きなければならない。お前の命はわたしの手の中にあり、わたしが死ねばお前も共に死ぬ宿命を背負うことになる。……それはこのまま死んで行く方が遙かに楽かもしれないわ。さあ、おまえには選ぶ権利がある……」

そう言って俺を見みつめる。

寧々のいる世界に旅立ちかけている俺にとって、少女の提案にあまり魅力は感じなかった。これまで受けてきた苦しい思い、痛い思い、悲しい思いをするのは嫌だった。逃げられるものなら逃げてしまいたかった。今の俺は柵の世界の拘束具が外れた状態。すぐにでも旅立てる体になっているんだ。楽になれるなら楽が良いに決まっている。

俺の心は決まった。決意を表明するため目の前の少女の顔を見た。

まだ子供のあどけなさの残る少女の碧い瞳。その瞳を見た途端、様々な映像が流れ込んでくるのを感じた。そこからは絶望・悲しみ・怒り・諦め・恐怖・不安・孤独といったネガティブな要素がごちゃ混ぜになったものだった。それは目の前の少女が見てきた感じてきた世界なんだろうか。そこにあるのはまるで砂漠のような世界に悲しみだけを背負わされ、たった一人行き先もわからぬまま歩かされているだけ。もしそうだとしたらとても一人では耐えられるもんじゃあない。そんな世界をこの少女は生きてきたのだろうか。そしてこれからも生きていかなければならないのだろうか……。そう思った時、俺は遠のいていく意識の奥底から這いだしていくような感覚を覚えた。

孤独と悲しみだけの世界にこんな小さな子を置いてけないな。

それに俺にはやらなければならない事が少なくとも一つある。寧々を殺した奴をぶっ殺すこと。あんな酷い事をした奴は許せない許さない。

にわかに意識が活性化するのを感じた。

「死なずにすむんなら俺は君と契約する。この先にどんな事があっ

たとしてもこのまま死んでいくよりはましな気がするし……」
少女は頷いた。自分の腰に右手を回したかと思うと、小さなナイフを取り出していた。左手の手首に刃先を当てたと思うと、思い切りよく横に引いた。ツーっと彼女の白い手首から、深紅の血が垂れる。
「……さあ、わたしの血を飲み契約を交わしなさい」
俺は言われたとおり彼女の手首から落ちてくる血液を口に含もうとするけど、僅かに上を向くだけで精一杯で体はちっとも動かない。ペタペタと俺の頭に降り注ぐ。考えるまでもなく、もう俺には指すら動かす力が残ってなかったわけ。
「まったく世話が焼けるわね……」
端正な容貌に僅かに苛立ちを表しながら少女は呟いた。

汝、我と契約し、我が騎士となれ。
絶えることなき永遠の時を我とともに歩み、我を護り、我とともに死すことを誓え。

重々しい言葉が脳内に響いた。
誰が喋ってるの？
俺はなんだかわからず、
「は、はい。誓います」
と、答えた。もちろん脳内で。

少女は左手を高く上げ、自らの手首から垂れ落ちてくる真っ赤な血をその口へと導く。その姿はなんだか凄く妖艶で美しくずっと見ていたい気がした。
唐突に彼女は左腕を下げると、両手で俺の顔を掴んだ。
刹那、彼女の顔が近づいてきたかと思うと、自分の唇に柔らかい感触を感じた。口を舌で押し開けられる感覚がしたと思うと、俺の口の中にしょっぱくて鉄の味がする液体が流れ込んできた。

一瞬驚いて彼女の顔を見る。すぐ側に少女の綺麗な顔があった。目を閉じている。ああ、そういやキスの時は眼を閉じないとね。そう思い、俺も眼をとじた。

ああ、これが彼女の血の味なんだ。なんだ俺のとかわんないな。普通じゃん。そんなことも考えたりして。

少女は口づけたまま俺の顔を上に向けてくれる。彼女の血を嚥下しやすいようにしてくれているわけだ。……彼女の血を飲まなきゃいけないことを思いだし、がんばって飲み込もうとする。この有様でなければ何のことはない動作なんだけど、その飲み込むという動作をするだけでもかなり苦戦した。それでもおそらく少女の口に含まれていたであろう血液は、なんとかすべて飲み込んだはず。胃の中へと暖かいものがゆっくりと流れ込んでいくのが実感できた。

確認したのか、彼女も僕から唇をゆっくりと離していく。俺は目を開いた。見えた光景は、お互いの唾液が絡み合って糸を引いているところ。なんだか凄くエッチいよね。

俺から離れた少女は服の袖で唇を拭った。少し恥ずかしそうだ。

……なんやかんやと想いが巡るが特に体がには変化がない。少し眠くて遠くに行きそうになる感覚だけが収まった程度。全然駄目じゃんって言おうとした。

ズン！

まさにそんな擬音が相応しい衝撃が来た。いきなりのビッグウエーブが背後から俺を突き飛ばしてくるような感覚だ。体は一ミリも動いていないのに、なんだこれは凄い衝撃だ。同時に全身の毛穴が開いて髪の毛とか全ての体毛が逆立つような感覚。

何もしていないのに鼓動が高鳴る。どくんどくん。それがドンドンという音になり、そのリズムもどんどんと小刻みになっていく。それに合わせるかのように体が熱くなってきた。特に怪我をしている箇所が熱いというか燃えているように感じるレベルになっている。

ふと思えばずっと感じていたはずの痛みというものが消えていた。
出血は完全に止まり、動かなかった四肢も意識すれば動かせるようになっている。顔も動かせるから自分の体の状態も把握できる。
へし折られて骨が飛び出し、不自然な方向に曲がっていた右手がまるで風船が膨らむように形を変え、元の形へと戻っていく。そしてついには完全に元通りになりおまけに動かせるようになった。左頬から耳にかけて焼けるように熱く感じる。そっと触ろうとする。
「触ったら駄目。今、お前の耳と頬は再生をしようとしてるわ。触ったら変な形になるわよ」
不意に少女に指摘され、動かそうとした左手を慌てて止めた。
まあ治るんならそれでいいや。
俺は醜く切り裂かれた腹部を見た……。腹部は焼けるような高熱を持ち続けたままだ。傷口と少しはみ出した腸の一部を見て気持ち悪くなる。傷口はまるでオキシドール消毒された箇所のように白い小さな泡を吹きながら、徐々に塞がっているように見える。
俺は慌ててはみ出した腸を腹の中へと押し込んだ。これで大丈夫かも。
「これもくっつけたら？　」
そう言って少女が俺の脚を差し出す。グシャグシャに潰れた切断面をこちらに向けているのでまたまた気持ち悪くなる。自分の体なんだけどね。
「ああ、ありがとう」
俺はそれを両手で受け取った。なんと複雑骨折してたはずの右手はもう完全に治癒していておまけに普通に物を掴むことさえできるようになってる。
ズシリと重い。まだテロテロと血が垂れている。
千切れた部分にその脚の切断面を当ててみる。肉と皮膚と骨とよくわからないものが引っかき回されたようになっていて本当に元に治るのか疑問に感じる。それでもこの体の変化を見る限りでは治るんだろうなあ。そう思いながら押し込むような感じで両方の切断面

をくにくにと動かしながらうまく合うように合わせてみる。
　すぐに反応が起こった。シュワシュワ音を立てて泡立つ切断面。本気で燃えているように熱くなる。
「あちち」と声を出してしまう。そして、あっと驚く。いつの間にか声が出るようになっているんだな。これも回復の現象の一つなんだろう。
　治癒中の箇所は猛烈に熱くなるみたいだ。現在、左眼球、左耳及び左側頬、右手首、腹部、脚の付根が燃えるように熱い。まあ全身もなんだか熱っぽいけど。裂傷や擦過傷は瘡蓋に覆われるとすぐに治癒し、剥がれ落ちていく。まるでフケみたいだ。
　再び脚の付け根を見てみるともう殆どくっついているのがわかる。ぐちゃっとなっていた切断面は瘡蓋に覆われ、それがぱらぱらと剥がれ落ちていくともうそこには傷すらついていないフレッシュな皮膚になっている。思い切って脚を動かしてみる。
　……動いた。最初は少しぎこちなかったけど、ちゃんと思い通りに動くようだ。
「信じられないな……」
　俺は呟いた。
「ほぼ完治したみたいね。……さあ、立ってみなさい」
　言われるままに起き上がってみる。少し蹌踉けるがすぐに感触が戻る。軽く腕を回したり屈伸したりしてみる。全く問題ない。痛みもない。……なんということだろうか。本当に治ってしまった。これはまるで魔術だ。夢のようだけど現実なんだよな。すると前にいるこの金髪の少女の下僕になったっていうのもこれまた現実なんだな。……ちょっとおっかない感じだけどそんなに悪い奴に見えないから、まあいいけど。
「左眼はまだ完治してないみたいだけどそれもすぐに治るわ。……のんびりしてられないわね。じゃあ行くわよ」
　そう言って彼女は歩き出す。
「え、逃げるのか？　」

彼女は振り返り呆れたような顔をした。
「お前、まさか戦うつもりだったのか？　だとしたら、お前はまったく救いようのない馬鹿ね？　自分の力の限界をあれほど見せられたばかりなのに。……せっかく治ったのにまたバラバラにされるつもりなのかしら。残念だけど、わたしは何度もそんな気持ち悪い物を見たくない。それに、わたしはあんな下等で愚かな生き物に殺されてやる道理はないんだけど」
「いやぁ～、このありえないくらいの回復力、それとなんかみなぎる力感。もしかしたら超人的な力が宿るなんてことは無いのかなって思ったんだけど……」
「ただ傷が元に戻っただけで、お前はなんら変わってないわ」
「それを早く言ってくれよ！！」
俺はそう叫ぶと、少女を抱き上げ、一気に走り出した。彼女は思ったよりずいぶんと軽かった。大あわてで階段を駆け下りていく。
てっきり超人的な力を得たんだと思いこんでいた。普通そうだろ。危機的状況で現れた存在と契約を結ぶとき、悪と戦う力を与えられるのはこの世のルールじゃないの？　元の体に戻ったのは嬉しいけどあの化け物はまだ生きている。戻ってくるとも言っていた。再会なんかしたらまた喜々としてぶち殺されそうだ。それ以上に思ったのはあいつがここからいなくなったのは何かが来たからだ。それはいま抱きかかえている少女のことを言ってるんじゃないのか？　うん多分間違いない。やつのターゲットは、きっとこの子だ。

急がないと！

俺は階段を駆け下り駆け下り、踊り場を突っ走り下へ下へと走る。
再生した体は以前より力強く、スタミナもあるようだ。小学生くらいの女の子を抱きかかえてるのに、荷物を持たない状態で駆け下りるのと変わらない感覚。
上の階で派手にガラスが割れる音がした。同時に壁だか扉だかが

派手に壊れる音がして、複数の足音がもの凄い速度で近づいてくるのがわかった。
「ドラドラドらおら～」
先ほどまで聞き慣れた声が誰もいない校舎に響き渡る。
「急ぎなさい、あいつが帰ってきたわ」
「言われるでもないよ」
奴が帰ってきたんだ。そして階段を駆け下りて来ている。切迫した状況。
何で足音が複数なのかはわからないけど。
一階のフロアへと出た。玄関まで数十メートル。あと少しだ。
そう思った時、転がるような勢いで人であらざる形の生き物が駆け下りてきた。壁を一気に走り、俺たちを追い越したかと思うと激しくブレーキをかけて停止した。板張りの壁が派手に捲れあがり、ガラスも飛び散る。
如月流星だった。

第４話　式鬼たちの想い

……でも、かつてそうだった存在、としか言えないな。
もう人間としての形態をとってないもん。

尻の穴から生えた５本の奇怪な触手のうち４本を脚にして、奴は浮かび上がった状態でこちらに走り寄ってきたんだ。遠目にはアメンボか蜘蛛のようにさえ見えた。触手に支えられた彼の体はフワフワと浮かんでいるように見える。複数の足音と感じたのは奴が４足歩行をしていたからだったんだな。

そして宙に浮いたのこり１本の触手の先端は何かを貫いていた。

それは全裸の人のようだった。逃げようともがいているのか手足をバタバタさせている。まるで空を走っているようにさえ見える。激しく動いているためにハッキリと誰とかはわからない。でも妙につるつるした肌色の体だ。酷いことに顔や体の皮を一部引きはがされているようだ。どうみても皮膚とは思えない部分が右半身に集中して見える。

誰かが捕まったのか？

「くそ、助けないと」

俺は口走る。これ以上の犠牲者なんて見たくない。

「こんなモンで、よくも僕をだましやがったな、このクソガキ！クソチビ！」

如月は俺の腕に抱かれたままの少女に対して汚くののしった。両目をつり上げ、鋭い眼光で睨みつける。

「ハハン！　下等生物は騙すのが簡単だわ。実にたわいもなくひっかかったわ。本当に単細胞の馬鹿なのね」

負けじと金髪の少女が切り返す。

騙した？　……俺はなんだかわからず二人を見、そして気づいた。

なんと如月のケツ触手が貫いていたモノはよく見れば、いや普通に見ればすぐわかる。人間じゃなかった。動揺していたせいか、こんなのもわかんなくなるんだ。

……人形だ。

それも学校でよく見かけたあの人体模型だった。

違う点は頭にシルバーのティアラがのっかっているところだな。

左半身は全裸、右半身は内臓をむき出し状態のアレだ。どういうわけか模型が命を吹き込まれたように動いていて、それを如月は少女と間違えたのだ。頭に載せていたティアラの影響なのかな。……そして嬉しげに捕まえると触手の一本で少女を犯したつもりになってたんだな。

……こりゃ馬鹿だ。

「クソクソクソー！！　みんなでよってたかって僕を馬鹿にしやがってぇ。こんなもんで僕をよくも騙すなんて許さないよ、……このクソガキャアッ」

ブンと音がし、人体模型を串刺しにした触手が、模型を俺たちのほうに叩き付けてきた。目測を誤ったのか俺たちより数メートル左の壁に派手な音をたてて激突し、手足があちこちに千切れ飛ぶ。

模型は体をくの字に曲がって転がった。頭と右手と左足は胴体にくっついたままだった。はずれて飛んでいったのは左手と右足だ。どっちも付け根から飛んで行ってる。

やはり学校の（この校舎ではない）理科室にあった模型だった。誰かが落書きしたチョビ髭がしっかりとその顔にあったから。おそらく人間の雌なら性器があるであろう場所に深い大きな穴がポッカリと口を開けている。

また頭部に載っけられたティアラには沢山の宝石が埋め込まれているのがわかる。すげえ高そう。

「シュウ、下ろして」

少女が言い、言われるままに彼女を下ろした。
彼女は模型の処まで歩くと、頭のティアラをはずし、自分の頭につけた。
「まあ時間稼ぎにはなったけど、時間が足りなかったか。あーあ。それにしても、状況は芳しくないようね」
そう言って振り返る。
本来の持ち主の元に戻ったティアラはより輝きを増したようだ。テレビで見た王族がつけているのとそっくり。そしてそのティアラを得た事により、少女からもオーラが漂う雰囲気さえある。
「さて、どうしたものかしら」
腕を組み、何かを考えるかのように呟く。

「うへうへゆへ。もう逃がさないもんね。お前捕まえたも同然。絶対許さないもんね。めちゃめっちゃのグッチャグッチャでヒーヒーにしてやるな。中に突っ込んでかき回してやるよ。……ふたりめ、ふたりめ。僕ってモテモテ」
如月が嬉しそうな笑みを浮かべて「キャッキャキャッキャ」と触手の上で揺れている。すでに衣服は全て脱ぎ捨てたのか千切れてなくなったのか全裸になっている。股間でグルグル回る三つ叉のドス黒い一物が気持ち悪い。
俺は学ランの胸ポケットに携帯を入れたままだったことを思い出した。こんなバケモノどうにかできるかはわからないけど、とりあえずこんな時は警察だ。素早く取り出そうとする。しかし、ストラップが引っかかってモゴモゴしてしまう。そういや寧々に無理矢理つけられたポ〇モンのストラップをつけたままだった。取り出した携帯電話にはピンポン球大の2体のモンスターがぶら下がり、ゆらゆら揺れている。
「シュウ、それを貸しなさい」
俺の携帯に気づいた少女が命令する。
「ちょっと待って、警察を呼ぶからその後な」

素早く１１０をプッシュする。
……プー、プー。
間抜けな話し中の音。
１１０番が話し中なんてある？！
そんな俺を無視して、少女は携帯電話をひったくる。二匹のポ〇モンを握ると思いっきり引っ張った。ぷちりって音がしてストラップからちぎれた。
「あー、なにすんだよ」
情けない声を上げてしまう。あのストラップは寧々からのプレゼントだから、乱暴に扱われショックだ。
「すまないな、シュウ。大事なものなのはわかるけど、命には代えられないでしょ。我慢して」
「何を我慢するんだ？」
俺の問いに答える事無く、少女は二個のぬいぐるみをそれぞれの手に握り口の側に持って行くと、目を閉じた。
微かな光が両手から漏れてくる。青白い光だ。小さいキャンドルが灯ったようだ。
少女は炎に向けてゆっくりと息を吹きかける。まるで火をおこすようにその呼気にあおられて炎まその勢いを増す。瞬く間に青白い炎はバレーボールくらいの大きさになり、辺りを白く照らす。
「行け！」
少女が両手を振り、炎が飛び出す。
炎は二つに分かれ、炎をまといながら如月流星を囲むように移動した。二つの炎は次第に勢いを無くし、消え去る。そしてそこに２体の生物らしきものが現れている。
「まじかよ」
俺は思わず呟く。
そこにはさっきまで携帯のストラップとしてぶら下がっていた２匹のポ〇モンが戦闘態勢で如月に対峙していたんだから。
一匹はハムスターみたいなぽっちゃりした体型で黄色い体毛、背

中に茶色い縦縞。耳の先っぽだけ黒い。そして尻尾は誇らしげに天を貫くようなギザギザ稲妻型。
もう一匹はほっそりとした体型の猫みたいな奴。白い体だけれどこいつも耳は黒。頭に小判みたいなのを載せてる。
二匹のモンスターはお互い合図するでもなく、それでもピッタリと呼吸は合っているようだ。
ジリジリと如月との間隔をつめている。
「なめてんのか、チビちゃん。こんなおもちゃで僕をやっつけようとしてるの？　ったく、ありえないよねえ」
奴からはいつの間にか笑顔が消えていた。真剣になったのか、馬鹿にされたので本気で怒ったのか。どちらにしても良い状態ではないな。
そんな奴をおちょくるように、二匹のモンスターはアニメでおなじみの声で威嚇している。
「奴を斃せ！」
少女が命令すると、二匹は攻撃態勢に入る。体から消えていた青白い炎が二匹の体から立ち上り、まるでオーラのように包み込んでいる。
ハムスター型が体をプルプル震わせる。空気が焼けるような臭いが漂う。何かがはじける様な音も聞こえてくる。発信源はそのハムスターだ。電気を起こしているようだ。
まるでアニメと同じように発光すると、可愛いうなり声をあげて飛びかかっていく。
空中で体勢を整えると、全身から放電する。
空気が引き裂かれるような雷鳴がとどろき、ほとんど目で追うことはできなかったがハムスターからら放たれた電撃は稲妻のように空気を切り裂き、如月の体を直撃したようだった。
「ほんげー」
間抜けな悲鳴が響いた。それは如月が発したものだった。電撃が結構効いたようで、周囲に肉が焼ける臭いが漂う。

ハムスターが着地すると同時に、反対方向にいた猫が二本足で立ち上がり両手のツメを鋭く立てているのが見えた。次の刹那、そいつは背後から如月に飛びかかり、そのツメで奴の背中を一直線に切り裂いた。
「うぎゃー」
これまた情けない悲鳴。
二匹のモンスターは如月から飛び退き、距離を置く。
次の攻撃に備えて体勢を整えているんだ。

案外やるじゃないか。
俺は少し感動していた。
あんな小さな、ほとんど実物大のポ〇モンが触手お化けに善戦している。いやむしろ押しているくらいだ。いけ、このまま押し切るんだ。一気にいっちゃえー！　そんな想いで彼らを操る少女を見た。

そして驚愕した。

少女は膝をつき、肩で息をしていた。額からは汗がしたたり落ち、異常なほど困憊している。
ただでさえ白かった彼女の顔はいまや蒼白になっている。ふらついて立っているのがやっとの様にさえ見える。
俺は慌てて彼女に駆け寄り、体を支える。
「おい、大丈夫なのか？　」
「ハハハ、思った以上に消耗が激しいみたい……。3体しか起動させていないのにこの有様とは……、情けないものだな」
喋るのもやっとの状態の少女に、俺はどうしていいかわからなかった。ただわかることはこのままでは少女の体が保たないということ。とにかく、ここから彼女を連れて逃げなければならない。
教室の中では二匹のモンスターと触手の化け物が対峙している。ファーストアタックで二匹のポ〇モンが与えたダメージはすでに回

復しているようで、雷撃や居合い切りといったワザはすでに見切られ、以降何度か行った攻撃は、まったく奴にダメージを与えなくなっていた。
ポ〇モン達を覆っていた青白いオーラは次第に光を弱めている。
まるでエネルギーが切れるかのように。
「そうだ、与えた命がもうすぐ尽きる……。やはり、今のわたしではこれが限界みたいね」
悟りきったような表情で少女が呟く。その瞳には諦めの色が浮かんでいる。

触手が乱れ飛び二匹に命中する。派手に吹っ飛ばされ、壁に激しく打ち付けられる。
「たいして面白い遊びじゃなかったね。こんなおもちゃで僕を倒そうなんて計画からして無理があったね」
余裕の笑みで２ｍの高みから如月が見下ろす。
勝負あった感じだ。
壁に打ち付けられた二匹はよろよろと立ち上がる。もはや勝敗は決しているがその瞳には諦めはない。まるで意志でももつように二匹はお互いを見つめあい、そして頷いた。消えかけた青白い炎が再び燃え上がる。
かけ声らしきものをあげ、二匹は駆け出す。如月に向かって。
「今更！　笑止！　フハッ」
複数の触手が彼らを襲う。
彼らは左右に回避行動を取りながら触手の攻撃をかわし、如月の本体に飛びついた。
「なにすんじゃあ、このクソ虫」
如月が叫ぶ。
二匹はこちらを見た。
……そして笑ったように見えた。
その真意を悟った俺は、少女を庇うように地面に倒れ込む。

刹那、二匹の体が激しい光を放つと同時に、爆発が起こった。
轟音が響き、突風が吹き抜ける。
教室のガラスや蛍光灯が吹き飛ぶ音。壁板が捲れあがり吹き飛ぶ音。

必死で少女を爆発から護るだけで精一杯だった。埃が舞い落ち、辺りが煙る……。爆音で耳がキンキンする。

俺は少女の無事を確認すると、辺りを確認する。
舞い上がった大量の埃が落ち着くにつれ、次第に状況が把握できるようになる。
教室の窓ガラスはほぼ吹き飛び、窓枠があり得ない形にねじ曲がっている。床には残骸やら割れた蛍光灯が散らばり、酷い有様だ。
結構派手な爆発だ。モンスター達は主人である少女に爆風の影響を与えないように細心の注意を払ったようで、俺たちにはダメージはなかった。しかし、教室の他の部分への破壊は相当なものでこれだとあの如月も無事では済まないだろう……。
そう思い、再び教室の中央を見る。
「嘘だろ……」
俺は思わず声を上げる。
爆心地にいたはずの如月はまるでダメージを受けていないかのようにヘラヘラした笑みを浮かべて宙に浮いたままだった。
彼の触手でできた足下には黄色と白の布きれが転がっているだけだった。

第5話　FINAL　FORTUNE

「あーびっくりした……。いきなり爆発だもんなあ」とのんびりした口調。「でもなあ。こんな危ないことする子はお仕置きだよ、わかる？　」

そう言って俺たちを睨みつける。触手がグニュグニュと床を這い回る。

俺は少女の庇うように立ち、睨みつけるのがやっと。頭の中ではどうやってここから逃げ出すかを必死で考えていた。あの触手は高速で動く。

俺の走るスピードでは、追尾からまず逃れられない。しかもこの少女を護りながらそれをやんなきゃならないから、結果、不可能となる。では俺が盾になって庇いながらではどうか？　しかし、生身の人間の体ではあの触手を防ぐ事など不可能であることは実証済み。むろん、俺が戦ったところで勝機はゼロ。

結論。

俺が玉砕覚悟で奴に突っ込み、注意を惹く。その隙に少女は教室から逃走する。それしかない。

「俺が……」

少女に作戦を言おうとするのを遮り、少女は俺の前に立った。

「わたしがあいつを引きつけるから、……その間に逃げなさい」

「馬鹿言ってるんじゃない。女の子を残して俺だけ逃げられるわけないじゃないか」

「お前……、本当に呆れるほどの馬鹿だな。お前がどうがんばったところで勝てる見込みなど無い。いるだけで足手まといなだけだし、結局二人とも死ぬことになる」

と、至極まともな事を言う。それでも疲労が相当なものか、苦しそうだ。立っているのも本当は辛いはず。

まったく、ガキのくせに生意気だな。俺は思う。

「おちびちゃんを残して俺だけ逃げるなんてできるわけないだろ？
嬲り殺されるぜ。……一日に二人も、二人もだ。これ以上、俺の目の前で人を死なせない、絶対にね」
「意気込みだけは素晴らしいけれども、結果を伴わせる能力が無ければ只の戯れ言でしかないわよ。……そもそもがわたしがこの世界に逃れてきた事が原因。そのせいで一人の少年と一人の少女がすでに死んでしまった。さらにお前まで死なせてしまったら、さすがに辛いからな。自分のことは自分で片をつけなきゃいけないわ」
「今の君の状態で、勝つ見込みがあるのか」
「それはやってみないとわからないわ。安心しなさい。勝つ見込みがない戦いは、やらない主義だから。心配することはないわ。お前はわたしがあいつに攻撃を始めたらすぐに外へ逃げなさい。それくらいの時間は稼いであげるから」
「そんなのできるわけない。できるわけ無いじゃないか」

解決法があるわけではなかった。

俺の話を無視して彼女は背を向ける。
「3つ数えたら、始めるわよ」
その声は震えている。
「わかった……」
俺はそう答えるしかなかった。結局、俺は何もできない。俺は目の前の少女の名前すら知ることもなく、この場を逃げなければならないのか。
少女はカウントダウンを始める。
「3……2……1」
刹那、空を切り裂く音がして視界を何かが横切ったと思うと、少女が吹き飛ばされていた。すぐ横を飛んで行ったと思うと、激しく壁に叩き付けられていた。
微かに呻き、吐血する。少女はずるずると床に倒れ込む。

「大丈夫か！！」
俺は叫びながら少女に駆け寄ろうとするが、足首に激痛が走った。見ると奴の触手の一本が俺の足にしっかりと巻き付いていた。触手は足に深く食い込み、血が滲んでくる。
ズルズルと音がし、如月が触手の足を這わせてこちらに近づいていた。
「安心してよ、月人君。このガキはそう簡単には死なないよ。……じっくりと楽しませてもらう予定だから、そこで見ていて。君はその後で殺してあげるから」
自らの体を地面へと下ろす。二本足で立ち、触手は体を中心に扇形に開いた形になる。
股間に生えたものは、くるくるとその回転速度を上げている。
このまま同じことを繰り返させられるのか。
少女は意識を取り戻し、なんとか体を起こす。絶体絶命の状態でありながら、恐怖などまるで見せず、高貴な瞳で奴を見つめ返している。
そんな彼女を見て益々興奮の度合いを強める如月。

やられる。きっとやられる。寧々の様に。
少女は蹂躙され嬲りものにされ、そして殺されるんだ。
俺はただ見ているだけ。寧々が殺された時もただ見ているだけだった。今度も同じだ。俺は何もできず、ただ無力さを感じるだけ……。
力が欲しい。
奴を倒せるだけの力が。
彼女を護るだけの力が。
いや、せめて彼女をここから逃がす力だけでもいい。せっかく俺を生き返らせてくれた少女を護りたい。
俺は祈った。祈ったところでこの絶望的な力の差を埋めることなどできないだろう。それでも祈ることしかできない空しさ。

ああ、絶望というのはこういうことなのかな。これまで生きてきて何度も何度も後悔を繰り返してきた。でも、後悔は次があるから後悔できるんだ。なんであの時こうできなかったんだろうと思うのは、今があるから。そして未来が当たり前のように存在しているからだ。挽回のチャンスがあるから悔やむことができる。

次が無い今の俺の状況を絶望というんだろう。深い深い闇。はい上がることのできない闇。やり直しができない現実。

頭の中で怒りと悲しみが螺旋状に捏ねくり回されている。その想いはうねりとなり波動となり、俺の体を突き抜けてそして体外へと抜けていく。残されるものは何もない。何もない希望。

不意に感じる。

何も無いはずの左眼の奥が痒い……。如月流星にえぐり取られた、左眼のあった場所のさらに奥が痒くてそして痛みさえ感じる。

痒みは痛みと混在し、俺の左眼の奥の方、それはまるで脳の中から何かが這い出てこようとする得体の知れない感覚。そのは頭の真ん中から次第に外側へと動いて来る。

眼窩に何かを感じる。

瞼は閉じられたまま。血が固まり瘡蓋になっているはず。そこが猛烈に痒くなってきた。我慢しきれずにごしごしとこする。

俺は指越しに感じる。……眼球の存在を。失われ、如月流星の眼にはめ込まれたはずの眼球を。

来る……。

何かを感じた。そして明確にそれを感じる。

それは沸き立ち荒れ狂う膨大で圧倒的な力であり、だがしかし、それを遙かに上回る禁忌と恐怖を伴う「モノ」だと感じた。

理由は解らない。……それは知っているというより、覚えているという感覚なんだ。

左瞼を開けば、それは解放されるという予感があり、その予感は間違いのない事だともどういうことも知っている。
だけど、それをやっていいのか？　どういうわけか俺は怖れている。具体的じゃない怖れ。なんだそれ。でも……深い深い谷底をのぞき込むような恐怖感。それが今の俺にある。その下に何があるかはわからないけど、何か良くないことが起こる予感。本能的な怖れ。禁忌。

俺は頭を振った。
そして決心した。
俺は少女を護り、寧々の敵を討つと。そのための代償なら何でも払ってやる。

覚悟を決め、閉じた左眼の瞼を開けようとする。まだ瘡蓋が張り付いていて、きちんと開くことができない。俺は両手で無理矢理瘡蓋を剥がす。ヒリヒリと痛むが構っていられない。

そしてパンドラの箱は開かれた。

第6話　深淵よりの覚醒

ずん。

左瞼が開かれると同時に背後から猛烈な突風が舞い上げられる感覚。……そして浮遊感。目映い光を感じる。

それは今まで感じた事のないものだった。微かな空気のゆらぎ、音の動き、漂う気配、命の脈動、死の臭い。今まで感じることなどできなかった、存在すら認識できないのが風景に投影されているみたいだ。

それは点と線で構成された経絡図のように見える。床にも壁にも天井にも灰色の線が血管のようにあらゆるモノの中をうねるように縦横に走り、その上を黒や赤や緑色の点が漂っている。

点の存在はその血管の上に乗っていて、まるで血管の途中に現れた瘤のような存在だ。それは糸の上をそれぞれが好き勝手な方向に不規則な速度で動き、時折、属している糸から別の糸に飛び乗って移動したりもしている。

如月流星だった化け物を見る。

あいつにも同じように体の中を血管のような線が走り、その上を大小さまざまな瘤のような点が漂う。大きさはビー玉程度のものから拳大のものまで。

何なんだ、あれは。

俺は奴を視界に捉えながら、ゆっくりと両手を握ったり開いたりする。何か妙にすっきりと晴れ晴れした気分になっているように思えるけど、体に変化は感じられない。

自分の体に目をやる。……俺の体には線や点は見えない。そして少女の体にも見あたらない。……はて？　この違いは何なんだろう？

唐突にだけど、思い出したように足首に激痛が走り、俺は自分が戦闘状態、しかも劣勢にある現実を思い出す。
足首に絡みついた触手はさらに強く俺の足を締め付け、皮膚を抉り骨をむき出しにしようとしているかのようだ。血がにじみ出している。その触手の中を血管のようなものが浮きだし、それを伝うように瘤が上下している。俺はその血管のようなものを掴もうと手を伸ばす。指は何の抵抗もなく、奴の触手を通り抜け、その中に入り込んでいく。その一本を掴んでみる。ブヨブヨした触感。
それを引っ張ってみると、あまりにあっけなくその糸は千切れた。まるでそれがきっかけとなったように、その触手がスパリと切断された。

「うぎょう！！」
気持ち悪い男の悲鳴が響く。見ると如月が悲鳴を上げていた。俺の足に絡みついていた触手は瞬時に俺を離れ、奴の側に縮こまっている。
粘りけのある赤黒い液体をその触手から流している。みるみる床にその液体溜まりができあがる。切断された触手が床を血と透明の粘っこい液体をまき散らしながら跳ね回り動かなくなった。。
「て、てめー何しやがったんだ……」
威圧するようにこちらを見るが、明らかな動揺の色がその顔に浮かんでいた。

あの血管のような線は非常にもろい、少しつまむだけでその細い血管の様な糸はあっさりと切れる。その結果、奴にはダメージが与えられるようだ。……すると、プカプカ動いているあの瘤を潰せばどうなるんだろう？　俺は僅かな勝機を感じ、奴へと歩み出す。
如月は煩悶するような表情を見せ、おもむろに大きく頷いた。体

をこちらに向け、５本の触手をだらりと床に垂らして両手を挙げた。
「あ、あん。ごめん。ごめんです。僕の負けです。スミマセン、許してください」
あっさり降伏宣言を始める。
「抵抗はやめます。月人さんに勝てない事が今解りました。僕は全面降伏します。だから好きにしてください……」
急に力が抜けるようなことを言う……。
突然の全面降伏にうさんくささを感じながらも、息絶え絶えとなっている少女の事が気になっていた。壁で体を支えて立ち上がってはいるが、かなり辛そうだ。
如月への注意を怠る事なんて当然無い。奴にはまだまだ戦闘力が残ったままだし、俺に対する殺意が消えてないことなんてバレバレだ。隙をみて攻撃しようとしているのは間違いない。だけどなんかうまくやる気をそらされたみたいで、なんとも言えない気分。
「大丈夫か？」
と、彼女の方をみる。
「よそ見をしないで。まだ戦いの最中でしょう……。あいつは全然懲りていない……」
言いかけて少女は蹌踉めく。
慌てて俺は彼女に駆け寄ろうとする。当然奴への注意はそれてしまう。

その刹那。
このチャンスを待ってましたとばかりに、ダラリと垂れていた如月の触手が一斉に俺に向かって突き立てられてきた。速度ゼロからいきなり最高速度で突き上げられる槍の様に、５本の触手が明確な意志を持ち、俺の眼・喉・胸・腹をねらって突き出された。
しかもそいつらは一直線に、あるいは大きく迂回しながら、または地面を這いながらとすべてがトリッキーな動きだ。さらに残りの一本が剣のように、俺の体を真横に薙ぎ払うように風切り音を立て

て振り出される。

油断した！

俺は自らの失策とそれに伴う代償に恐怖する。

……するはずだった。

奴の攻撃は速すぎて肉眼では捉えられない速度のはずだった。でも、俺の左眼はそれをスローモーションのように捉えていた。しかも相手の動きはスローモーションなんだけど、俺の体は普通の速度で動く！

俺の周りの世界の時間の流れが突然遅くなったようだ。その中で俺は普通に動ける？

ゆっくりと近づいてくる殺意のエネルギーをフル充填の４本の触手を緩やかに交わしながら、両手を触手の中に突っ込み、手が届く範囲のプカプカと漂う瘤を手に取ると次々と握りつぶす。

腐ったミカンを握りつぶしたような嫌な感触がするけど、我慢した。ぬるぬるした感触も嫌だけど仕方ない。

手を引き抜いた後の触手にはまるで傷がない。どういう訳でこんな事ができるんだろうって思ったけど、考える暇なんてない。

そして最後に横から斬るように来る最後の触手を飛び越え、足で瘤を蹴り潰した。

着地すると、そのまま少女の側に駆け寄り、倒れ込む彼女を抱きかかえた。

それは時間にして1秒に満たない出来事だったはず。

俺は奴の必殺の攻撃を全てかわし、さらに倒れる少女を抱き上げることに成功したんだ。

全ての触手が目標を捉えられず、壁に床へと突き刺さる。

「なんですとぅ！　」

素っ頓狂な声を上げる如月。しかし、さすがバケモノ。驚愕から

瞬時に立ち直った彼が再度攻撃をしようと触手を再び振り上げようとする。
触手は少しだけ動いたが、いくつもの赤黒いラインがまるでひび割れのように触手全体に走ったと思うと、一気に崩壊した。それは触手が爆発したようにも見える。肉片と血液が床にぶち巻かれる。
「ウッギャー！」
教室中に彼の悲鳴が響き渡った。
激痛に襲われた如月は吹っ飛び、床を狂ったかのように転がり回る。

「何なの、これ。……お前は一体」
俺の腕の中で金髪の少女が驚愕の表情を見せ、俺を見る。
「さあ。わからない。でもここから逃げ出せる可能性が高まったよ」
瘤や血管のようなものは生物の崩壊点のようなものなのか？　俺はそんな仮説を立てていた。血管のような糸を斬れば血が噴き出し体組織は切断される。瘤を潰せば、その瘤の影響範囲にある体組織は組織の形を維持できず崩壊する。
線の様なものは体の部位部位を繋ぐ糸、瘤はきっと急所なんだ。
……たぶん。
でもそれは普通、生物とかの体内にあって触れることはできない。でも俺はその糸や瘤が見えるし、しかも掴むことも潰すこともできるんだ。……相手の死をこの手につかみ取ることができる能力。
そんな力、本気で現実なんだろうか？　そんな疑問も起こるけど、まあどうでもいいや。考える時間も無いし、今は攻めるしかない。
いまだに悲鳴を上げて転がり回っている如月流星。
【おいおい、まだこれからだろ、如月。もう少しやる気を出してくれよ。でないとあっさりと潰しちゃうよ】

俺は奴の体を見る。
奴の胴体の腹の辺りに一際大きな瘤があるのが見える。だが、それは緩やかな螺旋を描くように回転しながら胴体の中をを行ったり来たりしている。しかもそれは体表面ではなく、どうも体のかなり深い場所にあるのが透けて見えるようだ。
あれが奴のコアで、あれを潰せば斃せる……のか？

第7話　双方闇に沈む

俺は奴に駆け寄ろうとする。視線が衝突する。
一瞬、怯えたような顔をしたかと思うと、如月は猛スピードでバク転をし、壁際まで一気に退避する。
そして壁を背に俺を睨みつけてきた。
ケツから生えていた触手はもはや根本の部分しか残されていない。驚きと恐怖か呼吸が荒くなっている。

「なんで吹っ飛んだんだ？　なんでだよ。いてぇよ。こんちくしょう……月人ぅ～。月人柊めぇええ……。チンカスてめえの仕業なんだよな。気色悪い術を使いやがってえ。このバケモンめ！　痛えよ。クソ、畜生、み、みてろよ……」
痛みを堪え、憎しみに満ちた瞳で奴は俺を睨んでくる。その視線は俺を呪い殺しかねないほど憎悪に満ちている。

どういうわけか背筋に寒気がする。

奴は中腰で前傾姿勢をとる。腕を抱きかかえるような姿勢だ。そしてまたあの時の様に息み出した。
ハアハア、ふーふー、ハッハッハッ。
両手握ったり開いたり、腕を激しく前後に縮めたり伸ばしたりしながら叫ぶ。
「ぬおうおうおう

そして盛大な爆発音がしたと思うと、奴の尻の穴から生えていた触手が肉塊のように吹き飛んで壁に打ち付けられる。
「おりゃあ、まだまだあー！！　」
さらに息むと再び尻から真っ赤な噴水。奴の背後の壁が血で真っ赤に染まる。
「ふんふん、い、いやっほうー！！　きた来た来たキタきたあああああああああ！！　」

ぬるぬるぶりぶり。

粘液まみれの何かがはい出す音とそれと相まって空気が抜け出すおならのような音がして、再び奴の尻の穴から触手が生えだしてきた。
今度のは先ほどの半分以下の細さしかないが数がまるで違う。
１０本、いや２０本以上はあるだろう灰色の触手がテラテラ光りながら生えだし、ウネウネと宙をさまよい出す。

その光景のあまりの気持ち悪さに吐きそうになる。

「うんにゃ、まだまだ。僕はがんばるがんばれる」
再び叫ぶとさらに激しく息む。
如月の面容は、もはや人間とは思えないくらい不気味に変容している。顔のあちこちに太い毛管が浮き出し、息みすぎたせいか耳から鼻から口から眼から全ての穴から血が垂れ流れる。眼球は血走り、こぼれ落ちそうになるくらいまで飛び出している。
やがて喉から空気が漏れる音がし、何かが這いだしてくるような嫌な音が聞こえる。
「げ！　……うげぇ！　」

何かを吐き出すような音を立てると、口から黄色い内容物がまずは吐き出された。続いてイソギンチャクの触手のような、灰色の異様なものが1本、2本と這いだしてくるのが見えた。
触手はその程度の量ではなく、かなりの数があるようで、みるみる奴の喉は、そして口は膨らんでいく。

「むぐぐん」

口いっぱいに触手を頬張った如月。まるで栗鼠のようだ。
そして臨界点に達し、ついに頬は崩壊する。
皮膚が裂ける音とともに一気に口が切り裂かれ、たまっていた触手が一気に露出した。もはや如月のあごは完全にはずれてだらりの垂れ下がってブラブラしている。そして眼球もぽろりと顔から落ち、プラプラと垂れている。

口とケツの両方から生え伸びた触手は粘液にまみれて蠢き、宙を漂う。
体をくの字にし、両手をダラリとたらした如月はもはや人ではなく。ただの抜け殻のような存在にしか見えなかった。

触手はイソギンチャクの形態をとり、いくつかの触手が足の代わりをするかのように位置取る。そしてゆっくりと如月は浮上する。うなじ辺りから何かが蠢いたかと思うとそれはゆっくりと体を動いていき、胴体の横腹辺りで止まった。
それは横に並んだ2本の線のように見えた。それが震えるように動いたと思うと、ゆっくりとその傷が開かれる。

……それは眼だった。二つの赤い眼だった。
それがついに本性を現したのだ。もはや如月流星ではない、別のイキモノに姿を変えたんだ。

口と肛門から這いだした触手が手であり足である。かつての人間のからだはただの胴体となり、中央に眼が発生している得体のしれない生物の誕生だ。。可哀相に足と性器はブラブラぶら下がったただの飾りだ。

気味の悪い敵を前にして、俺の心が昂ぶっていく。人ではないモノになった存在の見た目のグロさに嫌悪感と敵意がわき出す。

しかし、どういう訳か自然と笑みがこぼれるのを感じた。

【フハハ。いいぞいいぞ。面白いぜ、如月。すぐには殺さないよ。楽しませてくれよ、見かけ倒しで失望させないでくれよ。頼むよ、バケモノくん】

普段考えたこともない言葉が頭をよぎる。興奮していて意味不明なキーワードが乱発されたんだろうな。そう思い、頭を振る。

とにかく奴を撃退する。

俺は息を吐き、一直線に駆け出す。

待っていたかのように奴の触手が放射状に開きながら、俺を取り囲むように襲いかかってくる。

しかし、その攻撃は止まっているかのようなものでしかない。俺は冷静に状況を把握し、一番触手の少ない上に向かってジャンプした。邪魔な触手に絡みつくように這っているあの糸のような線を断ち切る。

触手は次々と千切れ落ちる。俺はその勢いのまま奴の真上に飛び上がっている。奴の背後に飛び降りるつもりだったんだ。

そして視界の隅に無数の触手が俺めがけて突き上げられてくる体勢で待機しているのが見えた。それらが一気に俺に向けて射出される。その速度は先ほどのものとは比較にならない速度だった。

罠か……。

最初の攻撃は俺をジャンプさせる布石。そのために取り囲むように放った触手の網の上のほうを意図的に開けていたんだ。宙に浮いた状態では回避行動は取れないからね。
何十本の針のように尖った触手が一気に俺に向かってきた。

【やるじゃん、バケモノ】

また声が聞こえる。
体が急に軽くなったように感じる。襲いかかる触手の先端に足が触れたかと思うと、それを踏み台にして俺はさらに後方に飛んだんだった。
全くの無意識の行動だった。針よりも鋭利に尖り、触れば何でも貫きそうな触手を踏み台にしてどうして無傷なのかは解らない。しかし、それが能力なんだと納得する。

触手は俺を捉えることができずにそのまま天井を貫いた。
そして勝負は決した。

奴にとっての必殺の罠。必殺の攻撃だったため、奴は次の手を考えていなかったんだ。そして油断もしていた。
突き刺さった触手は天井に深々とめり込んでいたため、駆け寄る俺に攻撃するには遅すぎた。

奴の「背後」にたどり着いた俺は、力任せのパンチを奴の体でもっとも大きい瘤に向けてたたき込んだ。何の抵抗もなく、俺の拳が奴の体内に入り込んでいく。その瞬間、奴のからだが一気に膨らんだ。

巨大ゴム風船を殴ったような感触がした。同時に体が奴の膨らんだ皮膚に押され、否応なく後退させられる。

俺のパンチはぶよぶよのゴム風船のように変化した奴の皮膚に阻まれ、瘤まで手が届かなかった。あと数十センチなんだけど。瞬間的な反応としては奇跡的に素晴らしい対応だった。この防御を取らなかったら、確実に俺は瘤を破壊していたはず。

だけど、それまでだった。

再び反撃しようと突き出された触手など、もはや完全に見切った俺にとって意味など無かった。同じ攻撃など無意味だ。一本一本潰すのも面倒なので、触手の二箇所の付け部分を狙い、集合した触手に絡みついた糸に触れ、一気に切断する。

激しく血を噴き出し、全ての触手が切り落とされ床に落ちる。千切れた触手はピチャピチャと床で跳ね回りすぐに動かなくなった。

奴は転がるように回避行動を取る。触手を再び生やすには何かが足りないのだろう。かつての如月流星の手と足を使い、四つんばいで這い回るように逃げるしかない。

脇腹の付近に現れた眼には、明らかな恐怖の色が出ていた。

「シュウ、今よ。そいつを倒しなさい」

「言われるまでもないよ」

少女の声に呼応し、俺は駆け出す。一足飛びに距離を縮めると右拳を握りしめた。

キーキーという悲鳴に思える声が聞こえる。それは奴の悲鳴なのか。奇妙な体勢から奴はジャンプし、その勢いのまま窓枠から転がるように外へと飛び出した。

「逃がすかよ」

俺は叫び、窓枠に足をかけて、外へ飛び出そうとする。

しかし、次の瞬間、窓にかけた足に力が入らないことに気づいた。どうしても窓枠にかけた足を動かすことも、床で踏ん張ろうとした足も動かないんだ。
同時に急に視界がグルグル回り始める。悪寒がし、体が震えるのを感じた。その感覚はどんどん強くなっていく。いつのまにか汗が全身にまとわりつく。

俺の異変に気づいた奴は一気に俺との距離を開くべく逃走し、俺を振り返った。

逃がすもんかと自分の体に鞭を入れようとするが、まったく反応しない。おまけに視界が端から黒くなっていき、その暗闇が次第に俺の視界を蝕んでいくんだ。

「シュウ、どうしたの！」
背後から少女の声が聞こえるけど、答えることができない。
やがて立っていられなくなり、窓枠から足を踏み外す。慌てて窓枠にしがみついて転倒だけは防げた。

なんだ……？　どうしたっていうんだ、よ。

狭まる視界の中で、奴が、口もないはずの奴が嗤ったように見えた。
そして俺を勝ち誇ったように睨みつけながら地面に沈んでいく。
そして完全に地面のなかに没した。

逃げられた……。

それで緊張の糸が切れたんだろう。
少女が俺に何かを話しかけてくるのが聞こえたけど、もう何も答

える気がしなかったし、できなかった。体に力が入らないし、視界も真っ暗、音も聞こえない……。

俺はブラックアウトした。

第8話　残された想い

静かな夜だな……。
いつもは都会の喧噪が消えることのない街に住んでいるのに、今日はどうしたんだろう？

俺はまどろみながら考える。
俺の部屋は１Ｋで決して広くはない。玄関を入るとすぐ左が狭いキッチン。右はユニットバス。数歩もあるかないうちに六畳のリビングだ。
学生用マンションだから狭い。おまけに廊下を歩く音や話し声が良く聞こえてくる。

それにしても、今は何時なんだろう……。
もう夜中なんだろうか。腹減ったな。学校終わってからなんも喰ってないからな。
俺、なにしてたんだろ？

……。

不意に目の前で映像が蘇る。

寧々とキスした。

どうしてだか、如月流星が現れた。

そんで、あいつのケツから触手が生えてきて、寧々がレイプされ殺された。

俺は寧々を護ることができなかった。いや、その動きすらできなかった。足を引きちぎられ、手を潰され、腹を引き裂かれ、内蔵を引きずり出された。眼もえぐり出されたからね。
そして、失意の中、死にかけている俺の前に、黒衣の金髪の少女が現れた。

ああ、これって夢だ。
……いや夢じゃない。
如月には逃げられた。奴は、奴じゃないモノなんだけど、……生きている。
あのバケモノは生きているんだ。

追いかけないと！！

「起きたか……」
声が聞こえた方をみる。
そこでやっと現実に戻ったことに気づいた……。

やっぱり、夢だ。

俺は窓際の床に横たえられ、側にあの金髪の少女がちょこんと座っている。
柔らかい月明かりに照らされた室内は薄暗いはずなのに、電灯が点いているかのように良く見渡せる。
「俺はどうなったんだ……」
「ただの燃料切れか何かだと思うわ。沢山の血液を失ってるのに、一切の補給無しにあんなに激しく動いたら、ああなるのは当然ね。……ただでさえ、お前は自分の傷や組織の再生に大量のエネルギーを消費していたんだから」
確かにそうだ。あの時の俺は致死レベルまでの大量出血だ。それ

を彼女の血を分けてもらったことで、このシステムは全く解らないけど、どういうわけか再生できた。でも、失った血を補給した訳じゃないもんな。

俺は手を持ち上げてみる。特に違和感なく動かせる。……思い切って起き上がってみる。

特に目眩も何も起こらない。

「体力が回復したのか？　でも俺は何も食べてないし、点滴もなし。輸血なんてのもしてないはずだけど」

不思議そうな顔をする俺に少女は呟くように言った。

「わたしが血をお前にあげたからだ……」

「でも俺は気を失っていて……」

「最初にお前に血を分けたようにしたのよ。……まったく世話が焼ける」

ああそうか。口移しで血をくれたんだ。

「ごめん。世話をかけるね」

「まったく、……ありがたく思うがいい。あれはわたしのファーストキスなんだからな」

その言葉に俺は一瞬、動揺した。まあそりゃそうだ。目の前にいる少女は見た目は大人びていて綺麗だし、言葉使いは偉そうで上から目線だけど、小学校の４，５年生くらいにしか見えないもんな。

ファーストキスなんて言われたら何か意識してしまう。俺はペド

フィリアじゃない。

「うん。それはごめんって言えばいいのかな？」

「別に礼を言われることじゃないわ……」

何か怒ったように言う。

ヤレヤレ。

俺は辺りを見渡す。さっきまで戦っていた教室であることがわかる。窓ガラスが派手に割れ、夜気が入り込んできて少し寒い。

「あの時の教室の中なんだな、ここは」

誰へとも無く呟く。あれだけの騒ぎを起こして、よく誰も来なかったモンだ。

「仕方ないでしょう？　わたしにお前を担いで安全な場所まで連れて行けっていうの？」

「いやいや、そんなつもりで言ったんじゃないよ。こんなに派手にやったら誰かが見に来てもおかしくないからな。そんな場所でこんな時間まで……えっと何時だったかな」

今の時間が気になり、俺はポケットから携帯電話を取り出す。

取り出すとストラップに2つの人形が揺れている。たしかこいつらは如月と戦って爆発したはずじゃあ？

「治してみたの。うまく元通りになってるかしら」

「わざわざ治してくれたのか？　……でもどうして」

「そのぬいぐるみは大事なものなんでしょう？　よくは解らないけど、その人形には相当に強い想いがこもっている」
めんどくさそうに彼女は呟いた。
「確かにこれはもらい物で結構気に入ってたんだけど、想いがこもっているってどうして？」
「わたしは物に命を与えて操る事ができる。物を運ばせたり、誰かを監視させたり、何かと戦わせたりと単純なことなら一通り命令できる。だけどあの戦いの中、あいつらではあのバケモノを斃せないと判断し自爆したのを覚えているか」
「もちろん。あれは君を護るため、一か八かの賭けにでたように見えたけど」
少女は首を横に振る。
「わたしは自爆など命令していない。あいつらは自らの意志でそれを決断したのよ。そもそも式鬼に爆発する能力なんて無い」
「どうしてそんなことを？　」
「それがその人形の送り主の想いの強さだってこと。あいつらは勝ち目がないとわかった。それでもお前を護りたい。護らなければならないと思った。……だから自爆する選択をしたのよ」
あの時、少女をみてほほえんだのは本当は俺に対してだったのか。
「あのぬいぐるみは……寧々、如月に殺された女の子がくれたんだ。

……そうか、彼女は俺を護ろうとして……」

「自分の命よりお前のことを大事に思っていたみたいね……。とりあえずお前が生き残ったということで彼女は少なくとも後悔を一つせずにすんだということだ」

俺はストラップからぶら下がった二つのぬいぐるみを見つめた……。

寧々はそこまで俺のことを想っていてくれたのか。……彼女の想いにまるで気がつかず、親友が好きだと聞いてそいつのために二人の仲を取り持とうとした俺。ドラマのように自分の想いを隠し、自分が身を引くことで親友の愛を成就させてやろうと煩悶することなんてなかった。特に何も感じていなかったんだ。俺にとって、寧々は結構可愛い女の子でただの友達。その程度にしか思っていなかった。

ああ、俺は彼女を傷つけていたんだなと初めて気づいた。

漆田の為にいろいろと動いて寧々とくっつけようとした俺を見て、彼女はどう考えたんだろう？

自分の無神経さに今更ながら腹が立った。

そして、寧々に迫られたら、特に好きでもないのに、親友と付き合いだしたばかりだというのに（てめえでくっつけておきながら）、キスをするしあわよくば最後までいっちゃえって思っていた俺。

……最低だ。

そんな俺を好きでいてくれた寧々に俺はなんて言えばいいんだろう……。

胸が締め付けられるように痛んだ。

でも彼女はもういない。

死は無情だ。

謝ることもできないし、彼女に俺の愚かさを罵られることもできない。

「俺は、……俺は馬鹿だ。本当に馬鹿だ」

思わず呟く。

それは自分自身に対する失意だった。

第9話　（幕間）

しかし、それ以上どうすることも、考えることもできない自分がそこにいるだけなんだ。

今は落ち込んでいる場合じゃない。

そう自分に言い聞かせ、俺は立ち上がった。

必ず仇は討つから……。

強く念じ、俺は二つのぬいぐるみを握りしめた。そうすることで寧々の想いを自分の力に変えられそうな気がしたからだ。

まだあのバケモノは生きている。奴を倒さない限り、終わることはないんだ。まだ悲しみに沈んでいるわけにはいかない。……悲しみが癒されることはないだろうけど。

俺は立ち上がった。そして辺りを見回す。

愚かにもそこで初めて気づいた。

そこが如月流星と戦った1階の教室であることに。

「まじかよ……」

「どうかしたの？」

少女もつられて立ち上がる。

「ここはあの教室じゃないか。こんなところで俺はずっと転がっていたのか？」

「ああ、笑えるくらいバカ面で死んだように寝ていたわよ」

俺は恐慌状態だ。

ここでかなり派手に俺たちは戦った。爆発も起こり、教室中の窓ガラスが吹き飛んでいる。かなり大きな音が立ったんじゃないのか。

……異変を感じた誰かが来てもおかしくない。

「こんなところにいたらマズイじゃないか。誰かに見つかってやっかいなことになるだろ」

俺は少女を責めるような口調になる。

「お前、何を無茶な事を言ってるの。わたしにお前を担いでどこかに避難しろっていうのか？　」

怒った様な口調になる。なんか小学生に怒られている自分に混乱が生じてしまう。

でも彼女の言うことはもっともだ。女の子でしかもおちびちゃんに俺を担いでどこか人目につかない場所まで連れて行けというのは酷だろうな。

俺はすぐに謝った。

「ごめんね。そりゃ君が言うことが正しいよ。でも長居は無用だな。幸いなことに、あんなに派手に暴れたのに、どういうわけか人に気づかれなかった奇跡に感謝しても、さっさと離れた方が良い」

「安心しなさい。誰もここでの騒ぎは知らないから」

「そんなことあるわけないじゃん」

「また説明させられるのか……もう。まあ知らない奴に言ってもわ

からないでしょうけど、ここを中心に結界が張られていたのよ。施術者を中心にして一定のエリアを外界から遮断し、邪魔の入らないようにする事象。それを施すのは狩りをするものの掟。これにより、この中で何が起ころうとも、どんな巨獣が暴れても、外の人間にはわからないし、知ることもできない。変化などは見えない。仮に何かの異変に気づいたとしてもこの中に入ってこようと思っても入ってこられない。……つまり、結界が構成され、世界から隔離される。そして全てが終わった後は施術者によって綻びは修正され、誰も気づくことがないのよ」

「……それって封絶みたいなものかな」

俺はあるアニメを思い出した。

「言ってる言葉はわからないけど、お前が考えているような【もの】であることに間違いはないわ」

なるほど。それで携帯がつながらなくなったのか。

「でも、今は奴が逃走しちゃったから、結界は解けているわ。破壊した世界を修復することなく逃げたから、やがて誰かに発見されて騒ぎになるでしょうね。いまだに誰も来ないのは夜であることと、ここが普段人が近づかない廃校舎だからよ」

「じゃあさっさと逃げないといけないわけだ」

「そういうことね」

俺たちは校舎から逃げることにした。

寧々をこの校舎に置いていかなければならないのが本当に忍びない。でも彼女の遺体を持ってどこへ行けばいいっていうんだ。

安全が確保できたら、救急車を呼ぼう。

時間は深夜０時５０分……。

当たり前だけど、校舎には誰もいない。

全校舎のセキュリティシステムがオンになっている時間だ。

学校中に設置されたセンサーが稼働しているから不用意な侵入には警報をもって答えてくれるはずだ。

あちこちに設置されたカメラは２４時間稼働中だ。こんな時間に金髪の女の子を連れて歩いている高校生は明らかに異常だな。おまけに俺の今の格好は人にはあまり見せられない。ズボンは右脚の付け根から下は無い。右脚は剥き出しなんだ。上だって学生服の下は如月に引きちぎられたせいで裸だ。ボタンは全部あの時に脱落しているからボタンを留めて誤魔化すこともできない。裸の上に学ランを羽織り、右脚は太ももから下を露出。顔や体は大量の血を浴びて汚れている。このままウロウロしてたら完全に不審者でアウトだな。

ま、そうはいってもセキュリティシステムは侵入者に対して向けられているから、外からの侵入者には厳しいが、中から出る人間に対しては隙が多い。監視カメラのエリアに入らないように逃げ切ればなんとか大丈夫だろう。

校舎の外に出ると、

「俺の後をついてきてくれ」

そう言うと少女を手を掴んだ。

廃校舎を出るとすぐに雑木林の中に入り込み、木々の中を歩いていく。

木々の合間から月が辺りを照らしている。月明かりがあるとはいっても、林の中まではほとんど届かないから、少女にとっては歩き

づらいに違いない。
「足下に気をつけろよ」
「そんなのわかってるわよ」
そう言ったそばから、木の根っこに躓いて転びそうになる。
「だから言っただろ」
「うるさいわね。……そもそも、お前」
そう言いながら、彼女は立ち止まる。
俺は彼女を見る。
「どうした？　」
「お前はわたしの下僕になると約束した。いくら頭の悪そうなお前でもそれくらいは覚えているわね？　」
「……頭が悪そうに見えるかもしれないけど、それほど悪くないよってまずは否定しておくけど。うん、君との約束は覚えている」
「下僕ってどういうことかわかってる？　」
「召使いとか使用人？　……だったかな」
「わかってるわね。じゃあ、お前は改めなきゃならないことが何点かあるでしょう」
俺は意味がわからないといった表情をしてみせる。
「まず……」

と少女は俺が答えないのに業を煮やしたのかしゃべり出す。
「言葉遣いがご主人様に対するしゃべり方じゃないわ。態度も同じでとてもご主人様に対する態度ではない。失礼でしょう」
「う、うん……。じゃあどうすればいいんだよ。そもそも俺は君の名前も知らないんだから」
「お前に名前は教える必要もないし、そもそも下僕がわたしの名を知る必要もない。わたしのことは姫と呼びなさい。そして、まず、偉そうにタメ口で喋るな」

俺はまじまじと少女を見る。
ううーん。この子は頭が大丈夫なんだろうか。自分のことを姫だなんて……。如月の触手に吹っ飛ばされたときに頭を強く打ちすぎたんだろうか？　だとしたら可哀相に……。
まあ確かにこの子は謎の力を持っているし、命を助けてもらったから感謝してるのは間違いない。それに、俺はちっちゃい子の扱いになれてないし、どうやったらいいかわからん。
とりあえずこの子のいうことを聞いてあげようかな。それでギャーギャー喚かなくなるんならまあ良いとしようか。おちびちゃんのご機嫌を損ねるわけにはいかないな。

フッ、大人の対応だね。

「わかりました、姫さ……」
言葉の途中で股間に衝撃が走った。
見ると少女の右脚が俺の股間にめり込んでいた。

第１０話　月人家存亡の危機

うガ……。

俺は呻いた。

初めての呻き声といってもいい。

でも呻いただけで悲鳴すら上げられないもんなんだ。

視界がピカピカした明滅する。

満天のお星様がぁ～。

強化されたはずの俺の体が、まるでもろく感じられる。さっきの戦いでの俺の強さはどこへ行ったんだ？　ありえない激痛が全身を駆け抜けていった。

声が出ず、力も入らない。股間を押さえ、情けない格好でフニャフニャとそのまま地面に膝を突いてしまう。

……ああ、格好悪い。

これほどの醜態は滅多にさらせないよ。

「だ、誰がギャーギャー喚いているっていうの！　誰が可哀相な子なの！　わたしは正常だ、馬鹿者！　無礼者！」

「えーえー、なんで聞こえたの？」

俺は喋った後に後悔した。

「お前が考えてる事は全部わたしに伝わってくるのよ。横であんなに大声で怒鳴られたら聞くつもりがなくたって聞こえてくるわ、バカばかばか。死んじゃえ！」

あちゃー。
怒られちゃった。

「だって、頭の中で考えるのは仕方ないよ。……それにしてもいきなり男の子の股間を思いっきり蹴り上げる事は無いだろう？　もろに入ってるんだぞ。破裂したらどうするんだ。子孫を残せなくなるんだよー。そんなことになったら大変なんだよ、まったく。……そもそも、女の子はそんな乱暴なことしたら駄目って教わらなかったのかよ」
痛みを堪えながら反論する。

「うるさい。そんな猿以下の劣等遺伝子など、この地上から消え去ればいいのだ。……そもそもお前の遺伝子を引き継いでやろうなんていう頭のおかしいメスがこの世界は存在しているというのか？　もしそれが存在するというのなら、それは【奇跡】というはずだぞ」

メチャメチャ言うなあ。

俺は股間を押さえながらなんとか立ち上がった。
ぴょんぴょんジャンプを繰り返す。まだ体に力が入らないよ。
「ううう。それにしても痛い、痛いよ……。死んじゃいそうだよ。本気でよくタマタマが破裂しなかったって自分を褒めたいよ。お前、そのブーツ、つま先に鉄板でも入ってんじゃないのか」

「うるさい。お前は黙ってわたしに従えばいいのよ。だいたい……」
暗闇の中、少女の俺に対する説教が延々と続いたんだ。
俺の人間性の否定から始まり、俺について全ての存在価値が徹底的に否定された。
俺は何も考えないようにしながら、それに耐え続けた。余計なこ

とを考えると少女に筒抜けみたいだし。また怒らせたら死んじゃいそうだし。

……しかし、バケモノ化した如月の攻撃をかわすスピードを手に入れているのに、何で彼女の蹴りをかわせなかったんだろうとかという疑問についても考えたりもした。

「フン……もういいわ。とりあえずここから逃げるのが優先順位は高いからこれ以上は時間の無駄ね。わたしは、こちらに来たばかりだから何にもわからない。……納得は行かないけど、お前に任せるしかないんだ。さあ、さっさと安全な場所にわたしを連れて行きなさいよ」

怒り疲れたせいか、少女は素直になった感じ。

俺は内心でホッとした。

「了解。じゃあさっさと学校から出ますか」

再び俺は少女の手を掴もうとしたが、こんな人の通れない場所を移動するには少女を歩かせるのでは効率が悪すぎることに気づいた。

少女をぐっと引き寄せると、そのまま抱きかかえた。

当たり前だけど、とても軽い。軽い軽い。何か良い香りが少女から漂ってくる。

「ちょ、お前、何を……」

「だって、こっちの方が話が早いだろ」

俺は走り出した。

薄明かりの林の中でも視界は昼間なみにクリアだ。抱きかかえた少女は俺にとっては重量が無いのと同じだ。木々の中を俺は平地を走るように抜けていく。

体が軽い。闇夜でも風景が微細な部分までハッキリと見える。音も空気の流れも全てがもの凄くハッキリと感じられる。
あちこちに配置されている監視カメラの捉えてるエリアさえもわかる。……見えるんだ。
俺はその死角を縫うように走った。

ほんの数分走っただけで、外と学校を隔てる塀の側に来ていた（といっても今の俺の身体能力での話だからかなりの距離を走ってるんだけど。だからこの学校の敷地の広さはかなりのものなんだ）。結構なスピードで走ったのに、俺の呼吸は全く乱れていない。
塀の高さは3メートルくらい。景観を損ねないようにデザインされているけど、下からは見えないてっぺん部分にはガラス片が埋め込まれ、場所によっては有刺鉄線がぐにょぐにょに巻かれていたりする。
とても飛び越えられる高さじゃないね。

当然監視カメラも設置されているけど、それは外を向いている。だから場所によっては塀の側に近づくこともできるんだ。
全然わかるはずもない警備エリアの死角が何も知らないはずの俺にはハッキリとわかる。感じられてしまうんだ。

これは凄いな。
素直にそう思った。

周囲を見渡す。
塀の近くのポールにカモフラージュされた監視カメラがあるのがわかった。定期的にグルグルと回ってモニターしているようだ。カメラの捉えているエリアがまるでサーチライトで照らされているように俺の視界は捉える。

便利な機能だなあ。

「どうするつもり？　」

少女が俺を見つめる。

ほんの数十センチの場所まで彼女の顔が近づいている。

よく見ると結構大人びた顔をしているんだなと思った。

……しかし、結構可愛いじゃん。

「……お前は頭が悪いし顔も悪い上にかなり変態の気があるようね。……ご主人様をお前は自身の爛れた欲望の対象として見ているのか？　まったく反吐が出る」

すぐに俺の思考が彼女に届いたようだ。呆れたような調子だ。

俺は顔が真っ赤になったことに気づき、余計に恥ずかしくなった。

「いや、そんなんじゃないよ。俺は変態じゃない。ロリコンじゃないし。あ、いや……でも、すごく可愛いとは思ったけどね」

と、訳のわからない事を口走る。

少女にボロクソにけなされても、どういうわけか俺には全然応えない。普通なら怒ったり落ち込んだりするような事を言われているんだけど。

「やはり、あの時もう少し力を入れて蹴り潰しておけば良かった。もういい。……はぁ、なんでなんだろう。わたしは、やはり選択を誤ったのよ」

投げやりな感じで恐ろしいことを言い、少女は話を打ち切った。

俺は少女の追求から解放されたことにホッとした。

「じゃあ、学校からとりあえず出るとしますかね。……しっかり掴

まっててよ」
俺は彼女にそう言うと、助走なしで跳躍する。
少女が俺の首に必死になってしがみつく感触を感じながら、俺の体に宙に舞った。
塀の高さを少し超えたところでジャンプの頂点となり、ゆっくりと降下しながら俺のつま先が塀の上に乗る。

ここで一息。

そのまま塀の向こう側に着地しようと思ったんだけど、監視カメラの撮影エリアがちょうど落下予定地点を捉えていることに気付いたんだ。
片足、しかもつま先だけで全体重を支えているけど全然苦痛じゃない。余裕だ。この体勢でも数時間はいられる。

カメラが落下点から離れた。

俺はそっと踏み切った。

3メートルから落下したらかなりの衝撃のはず。しかも女の子を抱いたままなんだ。
それでも俺はふんわりと着地した。着地音さえしない。猫がしなやかに着地するような感じかな。
少女は何の衝撃も感じなかったはず。

着地するとすぐにカメラがこちらを向いてくるのを知覚し、即座にダッシュして安全圏まで移動する。

そうして路地の陰に隠れる事に成功し、俺は少女を下ろした。

「とりあえずは脱出成功です、姫様」

「そ、ごくろうさま」

素っ気なく少女は言う。

まだ怒っているみたい……だね。

第11話　十　兜（もぎき　かぶと）

「シュウ、これからどうするの」

「とりあえず俺のアパートに行こうと思うんだ。どこか安全な隠れ場所があれば良いんだろうけど、学生の俺にはそんな場所ないし。……友達の所という手もあるけど、こんな格好で行ったら、退いちゃうからなあ」

「わたしは……お前に任せるわ」

「そうだなあ。俺んちはここからモノレールで5駅あるんだよ。それにこんな時間だからとっくに終電は出ちゃってる。……歩いていくしかないんだろうけど、この町はあちこちに監視カメラがあるんだ。こんな深夜に学区、……学校ばかりがあるエリアなんだけど、こんな時間に許可無くいるやつなんてまずいない。パトロール中の警官に見つかったらすぐ職質されるんだ。おまけにこんな格好じゃあ、余計に人目を惹くよね。監視カメラでチェックされてるから、即警官がやってくる」

そう言いながら、俺は考えを巡らせた。

タクシーを拾うか……。財布の中には1，000円くらいしか無かったはず。……却下。

やはり歩いて行くか？　モノレール駅までは2キロ。最寄り駅まで5駅。営業距離で15キロくらいあったか。今の俺なら楽勝だろうな。……しかし、その距離を監視カメラを避けながら行けるものなのか？　そして警ら中の警官に見つかる可能性もある。こんな格好で小学生の女の子（しかも金髪の美少女）を連れて歩いていたら

絶対に人の目を惹くな。……やはり却下。

バイクを盗んで移動するか？……バイクといっても電動バイクしかないんだけど。

でも、こんな時間にそんなにうまいことバイクが置いてあるとも思えない。……やはり却下。

移動するなら車が必要だけど、バイクと同じく、盗むのは絶対に無理。盗難装置が働くだろうし、たとえ無効化して動かせることができたとしても、あらゆる道路に張り巡らされたシステムがナンバーから所有者を割り出し、運転者との合致をチェックする。当然登録者と違えば異常を検知し、即、検問が行われるとともにパトカーが出動する。

それほどこの街（関西科学技術・学術文化研究都市）のセキュリティは強力なんだ。さすが第２学園都市として造られただけのことはあるんだよな。様々な最新テクノロジーがこれでもかってくらい投入されている。その全貌を知っている住人は殆どいないんだろうな。知ろうとしても教えて貰えないだろうけど。

街は教育施設地区、技術研究地区、住宅地区、都心地区が３，０００ｈａの土地に４つの地区が配置されている。そして、各種学校がある教育施設エリアは技術研究エリアに次ぐ並んでセキュリティ度に設定されている。安全安心がモットーのこの関西科学技術・学術文化研究都市にとっては、ごくごく当たり前の事なんだろう。

さらに俺が通っている国立関西文化大学付属高校（中等部含む）↓新設校である、はその学校方針として独自に地区最高レベルのセキュリティシステムをに導入しているんだ。補助金もいっぱいでたのかもしれない。

普通なら、普通の人間ならセキュリティシステムを通過せずに出入りはできないんだ。これ情報の外国への流出を防ぐ為にも一役買

ってるらしいけどね。よくは知らない。

そもそもこの街区に自動車を乗り入れられる人間は殆どいない。すべて地区を巡回しているモノレールか市バスで通勤通学は事足りる設計だからだ。せいぜい、電動バイクで通う大学生・院生くらいだ。中高生は終電がなくなるまでには帰らされるからね。

許可車両だけしか入ることができないから、街の空気はとっても綺麗。緑もいっぱいだから国際的エコロジー都市という面も売りの一つだ。

このエリアに自家用車で入ってこられる人間なんて、学校関係者かコネのある大金持ちが子供の送迎に使ってるだけなんだ。

「やっぱ仕方ないか」

俺は残された最後の選択肢を選ぶしかないことを認めざるを得なかった。

「決まったのか」

腕組みをしてこちらを見ていた少女がため息をつく。

「家に電話して迎えに来てもらうよ」

「そんな結論に達するためだけに、わたしを真夜中の寒空の下で待たせていたというのか？　」

「ごめんごめん。こんな俺でもいろいろあるんだよ。はっきりいうと実家にはあまり頼りたくないんだよね。こっちの高校に入るために擦った揉んだあったからなあ」

俺は言葉を濁す。

自分ちの込み入った事情なんて人に聞かせもんじゃあないからね。家から飛び出したままこっちの高校に進学し、一人暮らしをしてい

るからね。バイトをして生活費だけは稼いでいるけど、結局学費は出してもらっているから、独立しているわけでもないんだな。

少女は呆れたような瞳で俺を見ている。

俺が考えていることは彼女には筒抜けだからあんまり意味が無かったか。

ため息をつくと、俺は携帯を手にした。素早くプッシュする。

……頼む、あいつがでないように。

俺は必死で念じた。

2コールめに受話器が取られた。

「もしもし、月人でございます……」

若い男の声だ。懐かしい声だ。

俺は大きくため息をついた。

「十(もぎき)さん、俺です」

「おお、柊様。お久しぶりです。元気にされていますか？　もう1年以上経つんですよね。……たまにはこちらに帰ってきてください。旦那様も奥様もお会いになりたがってます」

久々に聞く彼の声はあの時からちっとも変わっていない。

十　兜　（もぎき　かぶと）。凄い名前。俺が小さい頃から親父の弟子として家に出入りしていて、よく遊んでもらったりもした。歳は離れているけど、兄貴のような存在でもあった。そして、ある時期からは親父の会社で秘書兼ボディーガードとして雇われたみたいだった。

俺が家を飛び出してからは、妹の家庭教師兼送迎の仕事もしているらしい。

「いや、まあね。気が向いたら帰るよ」

「そんなことをおっしゃらずに。……まあいろいろあったでしょうし、柊様もいろいろと考えがあるとは思いますけど、そろそろ意地を張るのもやめていい頃合いじゃないでしょうか。そう私は思います。……亜須葉（あすは）様も寂しがられておりますよ」

げ……。

その名前を聞いただけで、俺はどういうわけか戸惑ってしまうんだ。

月人　亜須葉……。

俺のたった一人の、2歳年下の妹。

甘えん坊でワガママで優しくて怒りん坊で素っ気なくて、でも寂しがり屋で泣き虫の女の子だ。

生来の相性の悪さからか俺はアイツがとっても苦手で、でもアイツは俺にやたらとじゃれついてくるんだ。そのせいでどれほど酷い目に遭ってきたか……。そんなこんなで、妹は俺にとって小さいときからのトラウマ的存在となっている。ハッキリ言って大の苦手だし、俺にとっては天敵みたいなもんなんだ。だから出来る限り関わりたくないっていうのが本音なんだ。

これぱっかりは十何年もの積み重ねの結果だから、今更どうにもなんないんだよね。もはや遺伝子レベルの苦手意識なのかもしれない。

「ややや、やめてください。亜須葉のことは言わないでくださいよ。アイツは元気にやってるでしょ？　うんうん、良かった良かった。それが一番です」
意味不明なことを言って俺は誤魔化す。
十さんはそれ以上は余計なことを言わなかったので助かった。

「わかりました。……ところで柊様。わざわざこんな時間に電話をかけてこられたからには、何かお困りのようですね」
さすが、何年もの付き合いだけのことはある。おそらく俺からの電話だというだけで、どうにもこうにも困った末に電話してきたってわかったみたい。

「う、うん。ちょっとトラブルに巻き込まれてね。今、学校の外にいるんだけど」

「こんな時間にですか。一体、何をされていたんですか？　」

「うんー。まあそれは置いておいてね、今からアパートに帰ろうと思ってもこんな時間だから終電もとっくに出た後だし……。それにお金もないし」

「わかりました。すぐお迎えに参ります。……こちらからの距離もありますので、３０分ほどお時間をいただけますか。準備ができ次第、お迎えに参ります」
さすが行動が素早い。
俺は現在地を知らせた。
「あ、それと……」

「なんでしょうか？　」

俺は少し口ごもった後、

「あいつに、亜須葉だけには絶対気づかれないように来てくださいね。これだけはお願いします」

「無論ですよ。ご安心ください」

と答えてくれたので、俺はほっとした。

亜須葉が今の俺をみたら卒倒してしまうのは間違いない。その後なんでこうなったかを延々喋らされるんだ。

当たり前だよね。

服はボロボロで血まみれになっていて、おまけに金髪の小学生を連れてたら……。

お前何やったんだって誰でも思うよね。

第１２話　異世界よりの王女

３０分以内に到着するともことだったので、俺たちは近くの公園へと移動した。
公園にもカメラが設置されてはいるが、それはトイレ付近にしか置かれていない。パトロール中の警官に見つからない限りは安心だ。

俺は近くにあった自販機で缶コーヒーを購入。
「何かいる？　」
と少女に声をかける。

少し考えた後、
「これがいい」
と、ホットレモネードのボタンを押した。

公園の中に移動すると、二人してベンチに腰掛ける。俺は、なんかとても疲れていたので、腰掛けるとベンチに背を持たれかけ大きくのびをした。
俺は缶コーヒーのプルタブを引き、一口含む。
缶コーヒーとはいっても、暖かいものを飲むと、なんか落ち着くなあ。

少女もそばで、ホットレモネードをコクコク飲んでいる。
こうやって二人で座っている所を見たら、仲の良い兄妹に見えるのかなって思う。
なんかぼんやりした時間だ。

「ところで、さ」

「何だ？　」

「迎えが来るまで少し時間があるから教えて欲しいことがあるんだけど。今まではそんなこと聞く暇がなかったけど、今なら大丈夫だろ？　」

「……お前もわたしの下僕になったからには、知っておかねばならないこもあるでしょう。いいわ、わたしが知っていることなら答えてあげるわよ」

「じゃあ、まず。君の名前はなんて言うの？　」

いつまでもお前とか君とかこいつとかいうのも何だしね。姫って呼べと言われたけどそれはそれでもいいんだけど、本当の名前を知らないとなんだか落ち着かない。

「……マリオン・アドミラルだ。継承順位第3位の王女だ」

「えー、まじで王女様だったんだ……」

まあ、それっぽい格好をしているからそうなんだろうとは思っていたけど。

「こんなことで嘘をついてどうする。お前のような下民がわたしと口を利くことなど本来なら叶わぬ事なのよ。わたしの世界ならお前は即串刺しにされているわ」

いや、もうさっきそれ以上の目に遭ってるんだけど。

それは口にはしなかった。

「王女というからにはどこかの国のお姫様なんだよね。その国はど

こにあるの？　」

「お前が考えているような、どこかの国の王女という存在ではない。種族からしてお前達とは異なるのよ。世界を統べる王の一族という存在だと考えればいい。わたしの住む世界では国という概念は被支配者層しか使わない。……お前達にわかりやすく言えば人民にとっての【神】みたいなものといえば解りやすいかしら」

【神】という存在に少し違和感を感じてしまうが、実際に彼女の見せた能力は人というくくりに収まるような存在ではないから、そうなのかなとも思う。なんたって瀕死の俺を復活させたからね。

「じゃあ、神様である君を襲ってきたアレはなんなんだい？　どうして君を殺そうとしたんだ」

「その前に、何故わたしがこの世界に来たかを話したほうがいいわね。……わたしの住む世界では、わたしを含む王族と呼ばれる存在が世界を支配している。……していたと【過去形】にしたほうがいいわね。あらゆる生き物がわたしたちを頂点としたヒエラルキーを構成していた。　そんな世界に突然あれがやってきた。

はるか宇宙の彼方から彼らは飛来したといわれている。見た目はこれまでの世界には無い、異形であらゆる点でわたしたちの世界の生き物とは思えない形状、能力、目的を持っていた。

異形のモノ達はわたしたちの世界を汚染し破壊し支配しようとしたのだ。

当然のように、わたしたち王族は生き物たちを引き連れて彼らと戦った。そして一時は勝利した。

だが、それは彼らの計略だったのだ。

一度勝利の味をわたしたちに味あわせることで油断させ、そして王族の一部に取り入ったのだ。
わたしたち王族が一枚岩の存在でないことを彼らは知っていた。
王族の中には常に権力闘争があり、主流派から疎外された不平をもつ存在が逆転のチャンスを常に求めていた。彼らはどういう経緯かそれを知り、いや最初から知っていたのかもしれない……そしてそこに取り入った。あらゆる策略が巡らされ、王族は分裂し争うことになってしまった」

人類と何ら変わることのない権力闘争が彼女たちの世界でも展開されているのだなと思った。
今の状況に不満をもつ勢力はどこにも存在し、機会をみてこの虐げられた現状を打破し、日の当たる場所にでたがるんだ。そしてそんな存在を利用しようとする勢力もいて魑魅魍魎の争いがどこででも行われる。

「戦いはいまだ決着がついていない。……王族だけでなく、あらゆる生き物がその戦乱の中にある。
しかし、遠からず決着がつく。異形のモノ達とその勢力側についた王族達が勝利する。
裏切りが裏切りを呼び、共闘すべき王族の主流派は疑心暗鬼に陥り、誰を信じて良いかわからず、それぞれが孤立している。おまけに数も少ない状況だ。彼らは自分たちの臣下だけしか信じられず、それでは圧倒的多数の敵に対応などできるはずもない。
わたしも戦いに敗れこちらの世界に逃げてくるしかなかったのだから……」

第13話　サイクラーノシュ（Ｃｙｋｒａｎｏｓｈ）の寄生根

「じゃあ、あの如月の体を乗っ取ってた生き物はその君たちの敵なのか？　」

少女は首を振った。

「違うわ。異形のものはこちらの世界とわたしたちの世界の境界を越えてくることはできない。強力な結界が双方の世界から張られているから。越えようとしても、命あるものはその結界に阻まれて近づくことすらできない。……境界を越えてこられるのは王族の中の本流のごくごく一部のものだけだ」

「じゃあ奴は何なんだい？　」

「異形のモノ達の体から生えている、ただの根っこみたいなものだ。生物と物質のちょうど中間にあるような存在でしかない」

「根っこ？　」

「そう。サイクラーノシュの寄生根と呼んでいる」

「サイクラーノシュ？　」

「サイクラーノシュとは、わたしたちの世界にある星の名前だ。異型のモノがその惑星の方向から来たとされることからそう呼ばれるんだけど、寄生根は彼らの体の一部であり、使い魔的なものなの。ごくごく小さなもので、髪の毛程度の太さ大きさ重さしかない。見た目はただの細い根っこみたいなものだけど、それはフワフワと浮遊し、宿主となるものを発見すると吸い寄せられるように着床

する。そしてそれはそこに根を張り、宿主の体の中へと根を張り巡らせ、力を吸い取り支配する」

「なんだそれ、気持ち悪いよ」

「寄生根は意志を持たない。ただ、プログラムされた【目標】の為だけに動く。今回の奴はわたしを捕らえる事と、張られた結界を破壊することの2点のみだ」

「それが如月に寄生したっていうのか？　でも如月は話をしたし、自分の意志で動いているようだったけど」

「その通り。寄生根には意志はないが、その宿主の魂を捕らえて自らに取り込み、そのまま行動するのよ。だから思考は宿主である生物と変わらないけど、プラスして寄生根の【目標】がそれに上書きされてしまうの。いつもと変わらない行動をしているようでも、己の欲望に異常なまでに執着するようになり、かつその根底では寄生根の望む【目標】実現のために行動するようになってしまうの。

だから一見して、如月という少年の存在が凶暴になっただけに見えたわけよ」

完全に支配するわけでなく、とりついて自分の目標を達成させるために利用する存在。乗っ取った宿主のキャラクターそのままに行動ができる存在なのか。

「そして、さらに問題なのは……」

彼女は一呼吸置く。

「寄生根の宿主には、寄生根を護るために宿主の能力の強化という特典が与えられる。その姿は宿主が心の奥底で望む欲望を実体化したような形状・能力となる。

やがて寄生根は宿主を食い尽くし、宿主の記憶、能力全ての自らの物として吸収したまま、さらに新たな宿主を求めて移動するの。宿主を変える毎に寄生根は宿主の能力記憶を得ていくし、その形態も変化する。当然どんどんと強大なものになっていく。これがどういう意味かお前にわかる？　」

「強くなるのはわかるけど……」

「そのとおり。お前とわたしで戦ってなんとか勝てそうなレベルだったアレは、もう次の宿主を手に入れているかもしれない。もしそうだとしたら、あたりまえだけど、前の宿主である如月流星という少年の能力も記憶も何もかもを手に入れている。それはつまり、今度戦う時、相手はさらに手強くなっているということ。そしてもたもたしていると、もう勝ち目が無くなるかもしれないってこと。

それだけじゃない。それはもっと大事なこと。奴は目的のもう一つであるこちらとあちらの世界の結界を破壊する行動を並行して行う。もし結界が壊れて向こうから本体が来たら……もうわたしたちに勝ち目は無いだろう」

世界は大変な危機に瀕している。

俺はそれを否応なしに実感せざるを得なかった。

はたして、次に如月、もしくは次の誰かに寄生していた奴が現れたとき、俺は勝つことができるのだろうか？

第１４話　ハイブリッド・モンスター

「ただ、唯一の救いは、寄生根の宿主たりえる存在は誰でもいいというわけではないと言うことよ」

「どんな人間なら取り憑かれるんだい？　」

「人間である必要はないけど。……何かに対して強烈な欲望を抱いているもの。何かに対して激しい憎悪を抱いているものが相応しいみたい。その者の負の感情が寄生根を呼び、根を育てる力となる。欲望の形態により宿主の形態が変化する。

　如月流星が触手と性器のバケモノになっていたのは、おそらく、彼が激しい性欲と狂おしいまでの力への渇望を持っていたからあんな姿になったんだと思うわ。セックスと破壊の化身となってしまったわけよ」

「如月がそんな感情を抱いていたとは知らなかった」

　普段凄くおとなしくて、いつも虐められていた姿しか見ていない俺にはその変貌ぶりと内に秘めた本性のおぞましさと狂気に寒気がした。

　彼にどんなことがあったかはわからない。想像するしかできない。

　でも、如月以外の人がそうならないとは言い切れない。

　そして人は誰でも心に深い闇を抱えているということだけは間違いないんだ。

「原因はシュウ、お前にもあるのだと思うわ」

「え、なんで」

　唐突に原因者とされたことに驚愕する。

「あいつはわたしを捕らえ殺すことより先に、あの女の子を犯すことそしてお前を解体することを優先していた。それは何故か解るか？　お前達に構うことなくどこかに隠れていればわたしはアレの存在に気づくのが遅れたはずだ。そうなら、あっさり奴に捕らえられていたはず。……なのにあれは何を思ったか、能力全開放出で邪悪な気をまき散らしてお前達を蹂躙していた」

確かに目標が少女であるならまずは異世界からこちらに来るであろう王女を待ち伏せした方が良いに決まっている。

……なのに何故。

「奴の根底にあるもの。それは日向寧々への愛情と、彼女が想いを寄せているお前に対するコールタールのようなねっとりとした深い深い嫉妬だったみたいよ。そんなこともお前はわからないのか？

まあ、そこが寄生根の運用の問題点であるんだけれど。……宿主の意志のほうが優先されるため、どうしても目標の為に回り道をしすぎ、効率が悪すぎるというな」

「でも如月が寧々のことを好きだなんて知らなかったよ。……それ以上に、寧々が俺のことを好きだったなんて、言われるまで全くわからなかった。気づきもしなかった。もし、わかってたら……」

彼女の気持ちがわかっていたら、漆田との仲を取り持ったりしない……よ。

「お前が人の心に鈍感なのは、人それぞれだからまあ仕方ないわ。でも如月流星は嫉妬というどうしようもない感情のため、サイクラーノシュの寄生根を呼び寄せて寄生されたという事実は変わらない。あれは加害者であるけれど、被害者でもある。もちろん、同情はで

きないけれど」

しかし、その程度の感情であんなふうになるんだろうか？　俺を切り刻んだりするほど、俺のことを憎んでいたのか？　ほとんど話したこともないのに……。

俺に対する如月の執拗なまでの破壊衝動については全く理解できていなかったんだ。普通あそこまでやろうなんて思わない、と思う。そんな衝動を抱かせるほどの恨みなんて買ってないはず。……知らない間に人の恨みを買うことは無いなんて言えないけど、あそこまでやられるなんてね。

今度会ったら、まずそれを問いただしたい気持ちは、ある。

それについての解答は得られることはないんだろうけど。

「俺はどうすればいいんだろう？　」

「寄生根を叩き潰す。ただそれだけよ。放っておいたら、アレはわたしを探しだすことに必死になるでしょうし、結界を解除するために行動をする。

そして、アレはそんなことをしながらも、自らの欲望を満たす為に行動するでしょうね。……それにより、多くの人が死ぬことになるわ」

「そんなことはさせない。俺が止めてみせる。奴を、如月を、そうでないなら次に寄生した人間を倒すよ。これ以上誰かが犠牲になるのは見ていられないから」

人であって人でない存在になってはいる。外見はバケモノでしかない。心は元は人間のものだとすると、そいつを倒すと言うことは人を殺すということなんだろうか？

【殺してしまえよ。どうせ生きていても仕方がないヤツらなんだか

らな。ヤツらと言ったら人間っぽいからやめておこう。アレだな。ちゃっちゃっちゃっとぶっ殺そうぜ】

再び頭の中に普段の俺じゃない思考が現れる。戦いの中でノイズのように聞こえた声だ。

幻聴か？　そんなこと思うが、とりあえず無視することにする。

第１５話　寄生根の目的

「残念ながら、そう簡単にはいかないかもね」
と、王女。

「そんなこと無いよ。マジで、あと少しで倒すことができたと思うんだ。……今度こそ逃しはしないよ。必ず倒してみせる」
実際に体調はだいぶ戻ってきているんだ。今度はガス欠にはならないという自信がある。体の動かし方はまだ完全じゃないけど、あの時よりは遙かにうまくやれる。あの時は必死だったからね。今度は燃料の残量を計算しながら戦えばあんなことにはならない。
あの時の俺はアクセル全開でやりすぎたんだ。

「そうね……確かにお前の戦闘能力は異常に高い。それは認めるわ。なんでわたしと契約しただけの死に損ないのブサイクが、あれほどの能力を持っているのかはわからない。ほんと、そんなことは今まで無かった。わたしの血と異世界の住人であるお前の血が何らかの反応でもしたとしか思えない。……でもそんな都合良く行くとは思えないんだけどもね」
王女は不思議そうに話す。

死に損ないは事実だけど、ブサイクとはあまりにも酷いし、余計な事じゃんと思いながらも口には出さない。

「如月流星という少年が生きていたら、……これでは言い方は変ね。まだ寄生されたままなら、わたしたちにとってはこれ以上無いラッキーなこと。あの姿のままでしょうから発見は容易だし、戦闘能力もあの時以上には上がることは無い。……でも他の宿主を見つけていたとしたらとても面倒なことになるわ」

「確かに……」

如月は変化してもはや人間とは呼べない姿になっている。危険であることは間違いないけど、あんなバケモノ形状をしていたなら、誰にでも容易に発見できるだろう。あんな姿は明らかに目立つからな。

フルチンでケツと口から触手がはみ出て、ウネウネじゃあね。それりゃみんな大騒ぎだ。

しかし、仮に他の宿主を見つけていたとしたら、そしてそいつの体が如月みたいに変化をしていない状態ならば発見は困難だろう。

人間との相違点は発見なんてできやしない。

仮に俺の生活圏とはまるで関係ないところで生活している人間を餌食にしていたとしたならば、そいつが本性を現して暴れ回り、誰かに目撃されない限りはニュース、いや噂にすらならない。

俺は存在に気づくことができないし、気づかないだろう。

そして、気付かない内に力を得たサイクラーノシュの寄生根に奇襲を受けるかもしれないんだ。

そうなったら俺は王女を護ることなんてできない。それどころか自分の命だって守れる保障はないんだな。

戦った如月よりも強くなっているヤツからの不意打ちに俺の能力が対応できるなんて自惚れてなんかいない。

「まあ心配ばかりしても仕方がない。如月という少年にいまだ寄生していることを祈るしかないわ」

「確かにその通りなんだけど……」

しかし、はたしてそううまく行くんだろうかという不安の方が大きかった。ネガティブな考えは良くないって教わったんだけど。

「あいつがどの程度ダメージを受けていたか、実際のところはわかんないけど。でも、ヤツはあの場所から逃走しようとしてたよね。ターゲットである君を置いて。……体勢を立て直すために一時退避をしたのかもしれないけど、やはりダメージは深刻だったんだと思う。実際に戦った俺がいうのも何だけど、かなりのダメージを与えてたはずだと思うからね」

「ふむ。だとするならば、すでに次の宿主を求めて移動しているわね」

王女の言葉には不安な気持ちが伴っている。

「そうならしばらくは安心だ。学区エリアには深夜は殆ど人がいない。……寄生する対象がいないってことになるよね。だったら……」

俺は僅かばかりの期待を持った。

宿主が存在しなければ、ヤツは寄生することは出来ないってことだから。

「寄生する対象を求めようともいないというわけね。もしも宿主を求めるとすれば人が訪れる朝以降ということになるわ。……ヤツが宿主から離脱していたなら、それまではどこかで息を潜め宿主たりえる存在が来るのを待たざるをえなくなる。そしてわたし達は、ヤツが宿主を取り込む前に見つけ出し破壊する作戦を選択する」

「……」

俺は何も言えなかった。王女の作戦は成功するとは思えなかったから。

ごくごく小さな根っこが宙を舞い、人に寄生する瞬間を押さえるなんてできるとは思えなかった。対象を特定できないかぎりは不可能なことなんだ。学校にはいったいどれほどの生徒がいると思っている？　教職員まで含めたら相当な数になる。

その個人個人がどんな考えを持ち、どんな欲望を抱えているかなんて誰にも解らない。

サイクラーノシュの寄生根のターゲットが誰かを予想するなんてできっこない。

第１６話　それは、悪魔の選択

「そうね。もちろんベストは誰かに寄生する前に叩くことなんだけど、それはほぼ不可能だとわたしも思っている」

「まさか……」

俺の脳裏にある考えが浮かんだ。

それは、おそらく効果的ではあるんだけど、吐き気を伴う案だった。

「そう。そのまさかよ」

王女はあっさりと俺の心を読み取り、答えた。

「お前が考えているとおり、如月流星がそのままであればそれを倒すだけ。もしそうじゃなくても、ヤツが寄生するのはこの学校の生徒および教員に限定されてしまっている。わたしは、その状況を最大限生かそうと思っているわ。

寄生根が寄生すればその人間の欲望のままに校内で行動を開始するだろうし、行動を結界により隠そうとしてもわたしを誤魔化すことなどできない。

そこでわたしたちはヤツを特定できるわ。あとは、わたしとお前の力で抹殺するだけ」

「それは、誰かを、つまりはうちの生徒か先生の誰かを犠牲にするってことなんだよな」

言いながら気分が悪くなるのは仕方がない、な。

「当然でしょう。寄生根と戦ったのが不特定多数の人間がいるような町中で無かったことは幸運だった。ヤツが人混みのなかに紛れこんで逃げることができないから。

わたしたちはこの学校の関係者をマークし、その中でおかしな行動をするヤツを探し出せばいいだけだから簡単よ」

「でも、でも何の関係もない人を犠牲にしなけりゃなんないのか？」

如月を斃すのはやむを得ないと思う。でも次に誰かが犠牲になるかもしれないのに、それをわざと放置し、誰かに寄生させ、見殺しにするという話に、俺は何とも言えない違和感を感じるんだ。

……違和感は適切じゃないな。感じているのは嫌悪感だよ。

俺たちは敵の存在を知っているし、それを斃す能力も持っているんだ。それなのに何もせずに、あえて誰かを犠牲にしようとしているんだ。……より確実な勝利のために。

もちろん頭の中では王女の言うことがより確実だし、正しいとは解っているよ。……理解はできるが納得はできないんだ。

王女は呆れたような顔をして俺を見つめる。

「他に方法があるなら言ってみるがいい。それができないなら余計な事は考えない方がいいわよ。

寄生根そのものを見つけ出すなんて不可能に近いのは、お前でもわかるだろう？　誰かに取り憑けばその人間はそれまでとは異なる明らかにおかしな行動を取るようになる。そうなればわたしたちにも発見することが可能になるのよ。それしかヤツを見つける方法は今のところ無いし、それが被害を最小限に抑える最良の方法だって事はわかりきってるじゃない」

それは事実。でも納得ができない。……それを覆す解決策は思いつかない。

「しかし……」

俺は、俺はそれでいいのか？　本当にいいのか？

「お前、……何様のつもりなの？　確かに、お前は強くなったかもしれない。その力で寄生根を斃すことはできるかもしれない。でも、人に寄生する前のサイクラーノシュの寄生根を見つけることができるというの？　いいえ、それは出来ない。……それは理解できるわね？　」

「ああ。それはわかってるよ。……でも」

自分の無力さが何とも言えなかった。

日向寧々を護れなかった後悔が再び沸き出して来るんだ。

どうしようもない無力感。

王女は俺に近づくと背中を優しく撫でる。

「お前の言いたいことはわかる。……でも、認めなさい。全ての人間を救えるほどお前の両手は大きくないということを」

彼女を見つめ俺は頷くしかなかった。

「ここでヤツを逃がしてしまえば、次はどこへ行くかわからない。わたしたちが見つけられる場所にいないと何の手も打てなくなる。そうなるとあいつは宿主を次々と乗り換え、どんどん強くなる。当然、犠牲者も増え続けることになるわ。

……もっと問題なのは、最初の戦いでヤツは気付いてしまったということよ」

「え、それは……」

「ヤツの力では、わたしを捕らえる事ができない可能性が高いということを、よ。

お前の力を見てしまったヤツにとって、お前を斃さなければわたしを捕らえることはできないことを理解した。そして、それを行う

には相当な労力と犠牲、時間が必要だと認識させられたはず。……つまり当初目的を達成するのは困難だと判断していると思うわ。
ならば、目的を達成を出来るようにするためにはどうすればいい？　と考えるわよね。つまり、より確実な手段をとるはずよ。それは、向こうの世界のサイクラーノシュ本体をこちらの世界へと導くために【第二の目的】達成の方へシフトする可能性が高まったということ」

「つまりはこちらとあちらの世界の結界を解くいうのか？　でもそれってどうやるんだ？」
なんかＳＦ？　ファンタジー？　じみた話が展開されているため理解力がついていかない。俺の知っている世界がどんどんおかしくなっていく。

第17話　王族

「結界を張るためにどういったことが行われたかを考えれば簡単よ。人柱、生け贄、人身御供……いろいろとあるけど、結界とは常に誰かの命を犠牲にすることで形成されてきたの命を代償として世界は閉ざされる。

結界はそれぞれの世界の内側で作られる。中の世界を護るためだから当然ね。向こう側の世界で施術された結界は向こう側からでないとこわせないし、もちろんこちら側の結界だって同じ。

いくら強大な力を持つ者がいたとしても、違う世界に設置された結界は外側からは破壊することは、まず、できないのよ。誰かがその世界に入り込み、中から破壊しない限りはね」

「そんなことをやった連中なんているのかい？」

俺は興味本位で聞いてみる。

「遙か昔、両方の世界は普通に行き来できていた。やがていろんな争い事が起こるようになり、双方にとってあまり利益があるとは思えなくなった。そしてある時……双方の世界の賢人がそれぞれの世界の権益を護るために結界を張ったの。それにより行き来は無くなったんだけど、たまにこちらの世界に来る必要が生じたりすることがあって、一部の王族がこちらの世界の人間と魂を交流させることで彼らと血の契約を結び、自らをこちらの世界に召還させて結界を解いたことがあったと聞いているわ。

とはいっても必要でない時は結界を閉ざすことになっているし、もはやこちらの世界の協力者もおそらく死に絶えている。だから、わたしたちの世界の結界を解いたとしても、こちら側の結界は依然として残ったままだ。それゆえ、世界を行き来するためには結界の解除が必要となる。

でもそんな芸当はサイクラーノシュたちにはできないし、そんな知識も無い。そして奴らと共闘している王族だって、あまりに昔の事だから、その方法があったことさえ知らないみたいね。
ヤツらにできることは寄生根をこちらの世界に送り込み、そいつを人間に寄生させることで操り、こちらの世界に施術された結界を一つづつ潰していかなければならない」

それにしても話を聞いていると、こちらの人間によって召還されて結界を解いたって？　まるで彼女が悪魔の子孫のように思えてしまう。まじか？

「その結界を解除するために、寄生根は何をやろうとしてるんだい」

「方法は向こうの世界もこちらの世界も同じだから、サイクラーノシュ本体も知ってるわけ。結界を作るのと同じ方法を用いるのよ。つまり結界の施術に使われた生命体の命を潰すことで中和崩壊させるわけ。こちらの世界では人間になるわね。
一つの結界を潰すのに何人の命がいるかはその施術によって違ってくる。かなりの数の人間の命が必要となるでしょうね。それはわたしにもわからない。でも寄生根はその作業を淡々とそれをこなしていくでしょうね」

当然、沢山の人が犠牲になることになる。

「その通りよ。時は待ってはくれない。お前のように自分の無力さを嘆いてる時間は無いのよ」

確かに嘆いていたって仕方がない。
寄生前の寄生根を叩くことはほぼ不可能。どっちにしても誰かが犠牲になるということなんだ。……辛いことだけど。それは仕方が

ないんだな。

「ふと思ったんだけど、君がこの世界に入ってくることはどうして可能だったんだい。結界に阻まれて誰も侵入できないんだろ？　」

「それは、わたしが王位継承順位一桁の王族だからよ」

「継承順位が一桁だったら可能なのか」

それ以前に一桁って何なのという疑問もあるが、おとなしく話を聞くこととする。

「一桁の王族は他の王族とは存在の次元が違うのよ。生まれながらにしてそれは定められている、完全なる序列・秩序というものなのよ。

結界というものは、そもそもわたしたち王族の一部が作ったモノで、それをこちらの世界の人間達に伝えてやっただけ。つまりはただの物真似。ならばそんなものにわたしたちが影響されるわけなどないでしょう？　そしてそもそも、一桁の王族にはいかなる強力な結界も効力を持たないし、結界を無視することができるようになってるの」

「なんと便利な体だ」

「それが王族の王族たるゆえんだ。そういう存在だから当たり前のことでしょう？　理由などは所詮後付のものでしかないわ。すべては【そうなっている】だけなんだから」

ごくごく当たり前のように彼女は言う。

「ひえ」

「でも、それは過去の遺産のようなものしかないわ。今のわたしたち王族には、それ以外は特筆するような能力はないのよ。他の王族と呼ばれるもの達と力の差がそれほどない。わたしたちは先祖が作り上げた遺産を食いつぶして頂点に君臨していただけかもしれない。そしてそれを退化というのかはわからない」

その話し方はどこか寂しげだった。

「結局はやらなきゃなんないってことだよな。解ったよ。……でも俺は諦めないよ。明日は朝一番で学校に行って、寄生根を探すよ。……難しいってことはわかってるけど、何もしないで誰かが犠牲になるのは耐えられないからね。とにかくできることはやってみたいんだ」

おそらくそれは徒労に終わるだろう。でも、何もできずに誰かが犠牲になるのはもう耐えられないんだ。

自分の無力さはわかってる。それでも何かをやらずにはいられない。

そんな俺を悲しそうな顔で王女が見ていたが、俺は何も言わなかった。

唐突に携帯が鳴る。

第１８話　月人　亜須葉　（つきひと　あすは）

「柊様、お待たせしました」
十さんからの電話だった。
すぐ側まで来ているそうで、詳細な場所を教えてくれとのことだった。
俺は公園の場所を伝えた。

俺の親父、……最近は会ってないけど、は学園都市の建築にもだいぶ関わっているようで、そのせいか、ある程度の地位・権力が行使できるようなんだ。だから通行規制や立ち入り規制のあるエリアでも自由に出入りできる。当然、彼の車も自由に出入りできる許可を得ている。だからこんな時間にもセキュリティなど関係なく入ってこれるんだ。

数分のうちにまっ白い４ドアセダンが現れた。
遠目にもその車が高級車であることがわかる。

俺の親父の趣味が色濃くでている車。
……メルセデスベンツだ。
それもノーマルじゃない。
やたらとでかい６本スポークのホイールを履かせていて、タイヤの厚さはかなり薄い。
ブラバスとかいったように思う。
エンジンが低く唸っている。

ライトがスモールになり運転席のドアが開く。

背の高い人間が現れる。

「柊様……お待たせしました」
俺の姿を見て一瞬だけ動揺したような顔をしたが、すぐに平静を取り戻した態度になる。
素肌に学生服を着て、ズボンの右脚が千切れていてそれがずり落ちないように手で引っ張り上げている姿はとても異様で滑稽に見えただろうに。
そして彼には俺が全身血まみれだということは、すでにばれているみたいだ。
十さんはグレーのスーツを着こなし、髪を短く切りそろえ、おまけに顔はちょっと厳つい。目つきだって人を射るような感じなんだ。何も知らない人がみたらヤクザにしか見えない。特に凶暴な態度や威圧的な雰囲気なんてちっとも漂わさないけど、常にピンと張り詰めた何かを感じさせる人だった。
まあ俺や妹の亜須葉にはとても優しい兄貴みたいなもんだったけど。
「十さん、スミマセン。こんな夜中に来てもらって……。見てわかると思うけど、まあこんな状態なんだ」
「はあ。電話の感じからまさかとは思いましたが、これほどの状態とは……。しまったな」
なんだか申し訳なさそうに彼が言う。
俺を見、隣に立っている王女を見、なにか不審気な顔をしたと思ったらまた困ったような顔をした。
「十さん？　どうかしたの」
「いやその。……柊様、申し訳ありません」

そう言って彼は車の方に目をやる。

ガチャリ。

突然、車の後部座席の扉が開いた。
そしてそこには一人の少女が降り立つ。

あ……。

そこには、少しつり上がり気味の大きな瞳をした、長い真っ黒な髪の少女が立っていた。

「にいさん！　……どうしたんですか。どうしてそんなことに」
俺が何かを言い返そうとする間も与えず、俺の側に駆け寄って来る。

妹の亜須葉（あすは）だ。

なんてこった。こんな時によりによってこいつが来るなんて……。
俺は恨めしそうな目で十さんを見る。

「すみません。亜須葉様に見つかってしまって、何かあったのかと聞かれ、誤魔化そうと思ったのですがそれもうまく行かず……。話を聞くとどうしても連れて行けというもんですから……。まさか柊様がこんな状態だとは思わなかったもので、つい」
頭をかきながらすまなそうな顔をするけど、ちっとも反省しているようには見えないのは気のせいか？

亜須葉は泣きそうな顔で俺の顔を見上げる。瞳は涙で潤んでいる。

一年ぶりくらいかな？　こいつとまともに顔を合わせるのは。ちょっと見ない間にまた色っぽくなっちゃったなあ……と思ってしまう。まだ中学生なのに大人びた顔をしているからなあ。

感慨深げにしている俺に構わず、亜須葉は俺の体を叩いたり触ったり撫でたりしている。

「にいさん、大丈夫なの？　こんなに服がボロボロになって……、これ血じゃないんですか？　怪我をしたんですか？　すぐに病院に行かなくっちゃ。十、お願い！！」

腕を取ると無理矢理車に押し込もうとする。

「あ、亜須葉。うん、俺は大丈夫だよ。全然平気だから」

本当に大丈夫なんだけど、常識的には全然そうは見えない感じなんだろうな、うん。そんなことを考える。

「ほら、全然痛くもないし、血も出ていないよ」

そういって俺は手を振ったり、腕をグルグルと回してみたり、体を揺すったりしてみせる。

「でも、何でこんなにボロボロになってるの？　何をしたらこんな格好になるというんですか？　こんなの、誰かに暴力を振るわれたりしないとならないはずです。一体、誰が？　まさか……、にいさん、学校で誰かに虐められているんですか」

妹の瞳からは涙がこぼれ落ち始めている。

「わたし、ずっとにいさんの事が心配だったの。家を飛び出して行ってから、ずっと連絡もくれないんだもの。……お願い、本当の事を言ってください。もし学校で虐められたりしているんなら、わたしにだけは話してください」

「いや、そんなことなんてないよ。これはちょっとした事故みたい

なもんで……」

「にいさん。わたしにだけは隠し事はしないで。真夜中にこんな格好でいるなんて普通あり得ないわ。一体どうなっているというんですか」

真剣な目で俺を見る亜須葉。本当にマジな目だ。本気で俺の身を案じてくれているんだから嬉しいことではあるんだけれど。

やばいなあ。こまったなあ。

「もし俺が誰かに虐められてたらどうするんだ？　」

「もちろん、ただではすませません。十に命じてそれ相応の償いをしてもらいます。そうよね、十？　」

「亜須葉様のご命令とあらば」

十さんは、ごくごくあっさりと言う。

彼にどんなことがあったのかは知らないけど、彼にとっては娘といってもおかしくない年齢差のある妹に対して絶対的な忠誠を誓ってるみたいなんだ。親父に命じられてそうなっているのか、本当に妹に帰依しているのかは知らないしわからない。何か絶対的な恩義でもあるのかな。

でも本当に亜須葉が命じれば彼は躊躇なく、自分の肉親さえも殺しかねないんだな。シャレになんないと思うぞ。

「大丈夫だよ、亜須葉。本当にちょっとした事故があっただけで、俺は無傷だ。ただ、なんだかんだでこんな時間まで学区エリアにいることになっちゃって、身動きが取れなくなったんだ。お前だって中等部に通っているからわかるだろ？　こんな格好で誰にも見つか

らず、カメラにも写らずにここからは出られないからね。そんで、こんなところを見つかったりしたら、とっても厄介なことになるからね。だから十さんに助けを求めたんだよ」

ちょっとした事件が何かは言えないんだけどね。

本当のこと知ったら、半狂乱になっちゃうだろから。

どういうわけかそれについては亜須葉は聞いてこなかった。納得はしてないだろうけど。

第１９話　二人の会話は……

「さて。……シュウ、痴話喧嘩は終わったかしら？　こんな寒空の下で馬鹿話にずっと付き合わされていたから、さすがに寒くて凍えそうになってるんだけど。……風邪ひいちゃうわ」

俺たちの会話をしばらく聞いていた王女は、どうやら、めんどくさくなったようだ。話に割り込んできた。

「にいさん、この可愛い女の子は誰？　……うわー可愛い子！　あ、ティアラもつけてるんだ。お人形さんみたいに可愛いね……。でもどうしたの、こんな夜中にこんな場所で？　迷子にでもなったの？」

亜須葉は、しゃがみ込むと王女と同じ目線にし、話しかける。

無邪気そうに王女の頭をなでなでしている。

そういや亜須葉は子供好きだったな。

突然、王女は亜須葉の手をピシャリと叩いた。

「ふう。お前がシュウの妹か？　一応はお前にも自己紹介をしておかないといけないようね。。

……わたしはシュウの主となった者だ。お前もわたしの事は姫と呼ぶことを許可してやろう。　さて、……兄妹の話が盛り上がるのは結構なんだけど、そろそろここから移動したいの。わかる？

わたしたちにはやらなければならないことがあるんだから。こんなところでモタモタしてられないの。……わかってくれるわね？」

諭すように話す王女。

一瞬言葉を無くし、俺の顔を見る亜須葉。

俺は肩をすくめて見せた。

「にいさん。……この子は誰なんです？　一体どうしたっていうんですか？　にいさんの言ってる事故みたいなものにこの子は関係があるんですか？」

少しムッとした表情をしている。目にはどこか怒りに似た色合いが出てたりする。

「まあ確かに事故に関係があるといえばあるし、ないといえばないし。うん」

とかいって適当な事を喋る。

困ったなあ。

王女は俺と妹との会話を退屈そうに聞いている。

どういうわけか、時折、何か不審そうな顔をしているのに気付いた。

さて、何を考えているのやら。でもあんまりほったらかしにしておくと、怒り出すかもしれないなあ。めんどくさいから移動しようかな。

「まあとりあえず、こんなところでずっといたらパトロールに見つかるかもしれないから。さあさあ、みんな車に乗って乗って。姫もさあさあ」

と、俺は王女の肩に手を回す。

「なあ、シュウよ」

と、俺を見上げる。

「うん？　」

「お前、やはり鬼畜だな」
汚い物でも見るような視線。
「は？　」
唐突に、エロゲとかでしか聞かない【鬼畜】という言葉が、異世界の王女から出たので俺は驚いて言葉に詰まった。
何言ってるんだ、この子は？
「お前、覚えていないのか？　本当か？　本気で覚えていないというのか？　あんなことをしたというのに」
「いや、何を言っているのかわからないんだけど、俺なんか悪いことした」
「本気でそんなことを言っているのか？　では、亜須葉、……お前はどうなの？　」
子供に呼び捨てにされ、一瞬言葉を失ったように見えたが、すぐに好戦的な目をして亜須葉が王女を見る。
いや、睨む、かな。
「だめよ、年上の人にそんな言葉遣いをしちゃ。……そうか、あなた、日本に来てそんなに時間がたってないのよね。だから、まだちゃんとした日本語が喋られないのかな？　」
「はあ、……まったく、お前も無礼ね。少なくともお前のほうがわたしより年下なんだけど……まあいいわ。
お前も覚えていないというのか。……人としてお前達は下劣だと思うけど、どっちも忘れてしまっているっていうんなら仕方ないわね。まったくお前達の頭の中を見てみたいわ。よくも簡単に忘れら

れるものね」
　そして興味が無くなったかのように歩き出し、勝手に車の助手席のドアを開け乗り込んだ。
「あ、おいおい。勝手に乗っちゃ……」
　俺はきょろきょろと十さんと亜須葉を見る。
　十さんは呆れたような顔をし、亜須葉はあきらかに頭に来ているみたい。
「じゃあ、こんなところにいてもなんだから、とりあえず行こうか」
　仕方ないので俺は二人を促した。
　車内を見ると、王女は助手席でふんぞり返っていた。
「……そうですね、亜須葉様もお乗りください」
　そう言うと十さんは後部座席の扉を開け、俺たちが乗るのを促した。
　俺が反対側のドアを開けて乗り込むと、慌てて亜須葉も乗り込む。何か言いたそうな顔をしているが、特に何も言わなかった。
「では発進します。どちらまでお送りしましょうか？　」
「俺のアパートまで行って貰えますか？　それとできたら途中で店によって、彼女の服を買ってもらいたいんですけど。あ、ついでに俺の学生服も」

第２０話　家路

久々に会ったというのに、妹との再会はあっという間に終わってしまった。

ゲートはさすがに親父の車だということで警備もフリーパスで通過できた。

途中、２４時間営業のショッピングセンターに行き、俺の学生服の替えと、王女の着替えを買ってもらった。お金は亜須葉に出してもらった。

俺はこんな格好だから車で待つことにし、十さんと亜須葉、そして王女で店へと行ったんだ。王女は物珍しさからかいろんなものを亜須葉に買わせて、彼女を大変不機嫌にさせた。

亜須葉は俺といたかったみたいだけど、女物の衣類を十さんに買いに行かせるのも悪いと思ったんだろうな。しぶしぶついて行った。そのせいで、あいつをさらに不愉快にさせたんだけれど。

「この貸しは大きいですからね、にいさん」と意味ありげなことを言われたけどね。

あれは本気で怒っていたなあ。

まあ、そんな感じで自宅アパートに着いたのは深夜３時過ぎだった。

亜須葉は一緒に残ると言い張ったけど、明日も学校があるし、自宅住まいの妹が朝帰りはマズイいんじゃないってこと、それも一緒にいた相手が家を飛び出している俺（ほぼ勘当状態）のところにいたんじゃ、十さんの監督不足になって彼の責任問題になるかもしれ

ないからって言ったら、しぶしぶ、本当にしぶしぶ諦めてくれた。
それでも王女は自宅に連れて帰ろうとした。
理由は、年頃の男女が同じ部屋で泊まるなんて問題があるとのことだった。
でも、小学生（くらい？）だぞ？
「亜須葉は、実の兄のシュウが幼女性愛者というのか、お前は。わはは、それはあり得るな。確かに、こいつは変態だからな。うん、本気で身の危険を感じるわ。……助けてお姉ちゃん！！」
怯えたような顔をして亜須葉にしがみついて見せる。
「怖い怖いよ。このお兄ちゃんがわたしをいやらしい目で見るの。気持ち悪いよ。……お願い、わたしをこの人と一緒にしないで」
王女がおもしろがって話すので、ばかばかしくなったのか、それについては何も言わなくなった。
「……また来ます」
王女を睨みつけながら、亜須葉は帰って行った。
どうも二人は相性が悪いようだ。心のメモ帳に書き留めるのを忘れずにしないと。
帰って行く車を見つめながら王女は呟いた。
「面白いな、お前の妹は。それに可愛いぞ。ちょっとからかうと真っ赤な顔になって、本気で反応してくる。実に面白い。これからもからかってやろう」
悪戯っぽい笑顔で俺を見た。
か、可愛いなあ。……などと思い、その笑顔に見とれてしまう。
駄目だ、これじゃあ、ただの変態ですね。

「さ、さっさと部屋に行くわよ。もう疲れたわ」
そう言いながら、本当にさっさと部屋に入っていった。
入るなり買ってもらった着替えを持つと風呂へと消えていったんだ。

俺は買ってもらった弁当をテーブルの上に置き、テレビをつけた。
血まみれで汚い服はさっさと脱ぎ捨てる。すぐに着替えなくちゃなんないけど、全裸でいるわけにもいけないので、とりあえずジャージに着替えることにする。
学生服もズボンも乾いた血でザラザラ。びっくりしたのは脱いだ靴はまだ血が乾いていなくてグズグズだったこと。どうりで気持ち悪かったわけだ。
もうあの靴ともお別れだ。高かったんだけどなあ。

ソファーが血で汚れたら行けないので、フローリングの床に座る。
少し動くだけで肌がざらついて気持ち悪い。
顔を洗いたい、頭も洗いたい。でもユニットバスだから入っていけない。仕方なく台所で顔を洗うと、シンクに流れる水は真っ赤になった。
すげー、これ、血だ。
風呂場からはシャワーの音が聞こえてくる。鼻歌まで聞こえてくる。
タイトルはわからないけど、そのメロディはどこか懐かしい曲だ。

俺はポットのお湯をカップに注いだ。コーヒーの良い香りがする。
一口飲むと、心が落ち着く感じ。カップを持ったままリビングに移動し、仕切りの扉を閉めた。脱衣所が無いからドアを閉めておかないと王女が出てきた時に吃驚するからな。
再び座り込む。

テレビは深夜アニメかお笑いをやっている。あとはドラマの再放送だ。どれを見ても大したモンじゃない。
気がつくとウトウトしている。遠くでドライヤーの音が聞こえる。
ホント不思議なのは異世界から来たというのに、こちらの世界の電気製品を普通に使えるのは何でなんだろう？

風呂場が静かになったと思うと、扉が開き、パジャマ姿の王女が現れた。
「待たせたわね。……やっとさっぱりしたわ。このセンスの悪い服は気に入らないんだけど」
王女が着ているのは幼児向けのアニメのキャラクター柄のパジャマだからね。サイズ的にそんなのしかなかったって亜須葉は笑いながら言ってたな。
金髪の女の子が着ると凄い違和感があるけど、何故か似合ってしまうところが恐ろしい。

「ご飯あるけど、食べる？　お茶なら入れるけど」
俺はテーブルの弁当を指さした。

「ありがとう。でもおなかは空いていないわ。それよりもそろそろ朝が近づいているから、もう眠くて仕方ない。先に寝るからシュウもシャワーを浴びてきたら？　とっても酷い格好だから、ただでさえ汚い顔がさらに汚くなってるし臭いわよ」
酷い言い方だ。あんまりだ。
朝が近いから眠くなるのはなぜだかわからないが、聞くのもめんどくさい。

「ああ、ありがとう。じゃあ行ってくるよ」
俺は洋服ダンスから下着とジャージを取り出すと扉を開けようと

する。

「それと、お前はソファーで寝なさいよ。ベッドはわたしが使うから」

「そんなのわかってますよ」

分かり切ったこと言わないでよ。

「どうしても一緒に寝たいのなら、拒否はしないわよ。……でもなにもしないこと」

と、ドアを閉めようとする俺にからかうように言う。

「はいはい」

俺はユニットバスの扉を閉めた。

王女が入った後なので部屋中に水がぶちまかれている。

「あーあ、ひでぇなあ」

ぼやきながらタオルで曇った鏡を拭き取った。

「げ……」

鏡に映った自分を見て驚かされる。髪の毛はべとべとになっているし、あちこちにシミのような痕がついている。こするとボロボロと落ちていく。

血が乾いたんだろうか？

まあそんなこと、普段なら驚きまくりなんだけど、今日に限ってはハッキリ言ってどうでもいいこと。

一番驚いたのは、如月にほじくり出されて再生した左眼だよ。

なんか、ありえないんだけど、その瞳の虹彩の色がブルーになっ

ていたんだ。その色は人間のものとは思えないくらいハッキリとした青だった。
まるで王女の瞳の色と同じなんだ。
右目は濃褐色で普通の日本人なんだけど、左眼がブルーになっちゃったらまるで虹彩異色症だよな。

これは、あきらかに目立つぜ。……格好いいけど。

でも、王女はともかく、十さんや亜須葉はその事について何も言わなかったんだろう……。こんな瞳をしてたら嫌でも気がつくはずだよ。
そう考えてすぐに気付いた。

ああ、そういやずっと暗闇だったもんな。
彼らと会ったのは闇夜の下だし、車の中だって暗かった。おまけに俺は店には行かなかった。だから、亜須葉たちは明るいところで俺を見ちゃいないもんな。それじゃあ良くは解らなくて当たり前かな。

とりあえずは明日は眼帯でもしていかないと目立ち過ぎる。
あとでカラーコンタクトでも買って誤魔化そう。そうすりゃいいや。

問題が解決？　したから俺はさっさとシャワーを浴びる。
暖かいお湯が全身の疲れを落とすようだ。
排水溝へと流れ込んでいく水は真っ赤になっていて、俺を再び驚かせる。おびただしいほどの出血をしたから仕方ないか。
制服や靴を洗ったら凄いことになりそうだ。

石けんでごしごし洗い、シャンプーをしてやっと人心地。

風呂を出ると、冷蔵庫からお茶を取り出し、一気に飲み干す。
「さて寝るかな」
俺は部屋のドアを開けた。
すでに部屋は真っ暗になっていて、ベッドで王女が寝ているのが見えた。
暗闇でも見えるのは幻覚じゃなく俺の体の機能としては当たり前になったようだ。

押し入れから毛布を取り出し、それを頭から被ると目を閉じた。
今日はいろんな事がありすぎた。
あまりに多くの事があったせいでなかなか寝付けない。どうも体が興奮状態になったままで静まることがないようだ。
でも明日は、いやもう既に今日なんだけど、学校で寄生根を探さないといけないんだ。だから少しでも休んでおかないと……。そう思えば思うほど、睡魔がやってこない。目が冴えるだけなんだな。

第２１話　君の悲しみは俺が受け止めてあげたい

呻くような声がした。
それは、ごくごく近くから聞こえてくる。
誰かが泣くのを必死で堪えているような、何か切ない呻きだった。

俺はむくりと起き上がる。
王女が寝ているベッドを見ると、ベッドの上で王女がこちらに背を向けて横になっている。その肩が小刻みに震えているのがわかった。

「おい、大丈夫か？　」
心配になって声をかける。
鼻をすする音と、微かにすすり泣くような声だけが聞こえる。

俺は心配になってベッドに腰をかけて、王女を確認しようとする。
「だいじょう……ぶ」

声の途中で王女が起き上がったかと思うと、ぶつかるように俺にしがみついてきたんだ。
「お、おい」

「お願い、お願いだからしばらくこのままでいて」
消え入りそうなくらい小さな声で彼女は呟いた。
首に回した両手のそのしがみつく力はとても強かった。彼女の震えが俺にも伝わってくる。必死に何かに耐えているようだ。
そして無関係に彼女からは何か魅惑的な香りが漂ってくる。

「な、何かわかんないけど、大丈夫なのか」

大丈夫としか言えないのか、俺は。でも言葉が見つからないんだ。
軽く彼女を抱きしめ、背中をさすってやるだけだ。

突然、息せき切ったように、王女が泣き出した。抑えていたものが一気に噴出したかのように声を上げて泣き出す。あまりの感情の吐露で激しく咳き込む。

俺は何が何だかわからない。さっきまでの王女の姿からは想像も出来なかった反応にどうしていいのかそれすら思いつかない。
王女を強く抱きしめ「大丈夫だ、大丈夫だ」と言うしかなかった。

王女は呻き、泣き、咳き込みながら次々と意味不明な言葉の羅列を吐き出す。
「なぜ、兄様は、そんな、ことをする、のですか」
「みん、な、しん、でしまった」
「おいてい、かないで」
「にいさま、たす、けて、わた、しをたべ、ないで。どうし、て、こん、なめに、あわない、といけないの」
「おまえた、ちのしを、むだに、はしない」
「たとえ、いのちに、かえても、たおす」
「もう、わたし、には、だれもいない、のだ。もうなに、も、しんじられない、のか」

彼女から伝わってくるのは後悔、痛み、悲しみ、孤独だった。ハッキリとした映像が見える訳じゃない。でも俺と王女の間に特殊な回路ができたと言ってたように、俺の側からも少し彼女の心が今は見えるようになっているようだった。
あいまいなイメージしか受け取れないけど、すべてが彼女の未来に向けての暗闇しか感じられなかった。
長くその負の波動を浴びていたら頭がおかしくなりそうな……。

感情の高まりのためか、けいれんを起こしたかのように体が激しく震える。
ぐっと抱きしめているのに、その拘束をはずそうとするその力の強さに驚かされる。
「しっかりするんだ」
少女の悲しみに触れ、俺は猛烈に彼女に対する愛おしさとなんとか護ってやりたいという気持ちが一気に高まるのを感じた。
どんなことが向こうの世界であったかはわからない。ただ、世界を追われ、誰も知らない世界に、たった一人で投げ出された少女の孤独を思うとどうにもならない感情が俺の心を支配した。
ただただ、護ってあげたいと願った。

衝動的に暴れる彼女をぐいと引き寄せ抱きしめると、少し強引に口づけた。
口づけてしまったというべきか。

びくんと一瞬反応をしたが、すぐに彼女はおとなしくなっていくのが感じられる。抵抗しようとする力は急速に衰えていった。
しばらくの間、口づけたままでいた。

王女の耳元に顔をよせ、ささやくように言った。
「君は一人じゃない。……俺がいるよ。俺が必ず守ってあげるから。安心して」
そうやって背中をさすってやる。

永遠にも続くかと思われるような彼女の悲しみが、やがて、次第に落ち着いて行くのがわかった。
呻きやすすり泣く声が徐々に収まり、それが寝息と変わるまでそれほどの時間はかからなかった。

あんなに凛としていた、意地悪で冷たくてワガママで無遠慮で傲慢な王女の振る舞いの奥底にある悲しみや孤独を知った俺は、強がったあの振る舞いは彼女が自分を護るための鎧だと気づき、なんか、すごい王女が愛おしく思ってしまっていることに気付いてショックを受けた。

……やはり（やはりなのかな？）、俺はロリコンなのか？　などと認識させられ、衝撃を受けたりする。

ほっとすると、ゆっくりと王女を寝かせつけ、布団をかける。

寝顔はとても安らかに見えた。

カーテン越しに漏れてくる光でもう完全に夜が明けたことに気付く。

結局眠ることはできなかったか……。

まあ、いいや。

王女の違う一面を見られたということで成果はあったといえるもんね。ただ、衝動的にキスしたのは、ばれたらまずいなあ。

いろんな事を考えてしまうが、今はやらなくちゃいけないことがある。

伝言を残して、俺は部屋を出ることにした。

【俺なりにやってみる。何かあったら電話します。腹が減ったら食べるものは冷蔵庫にあります。でも、決して勝手に外に出たら駄目だからな】

命令調になるのは仕方ないかな。

あまりに彼女は目立ちすぎる。何も知らない少女が町を一人でウロウロしてたら確実に警察に保護されてしまうからね。

とりあえずはおとなしくしてもらわないと。

俺は部屋を後にした。

第２２話　学校

早朝だというのに、学校は普段とは異なる慌ただしさに包まれていた。

校門の前には制服警官が立ち、出入りする人間をチェックしている。

奥の駐車場には数台のパトロールカーと同じくパトランプをつけたワゴン車が２台、消防車が２台停めてあるのが見える。

あの事件が発覚したようだ。でも、消防車は変だな。

俺は携帯を見るが、学校からのメールはない。通常連絡事項があればまずメールで周知するんだけど、そこまで回っていないんだろうか。

ニュースサイトに接続する。……俺の高校で火災が発生というニュースが目に入った。

読んでみると、使用されていない廃校舎で火災が発生したこと。普段人気は無く、火の気は無いこと。消防と警察で出火原因について調査中（ＡＭ５：００）。

つまり犠牲者は出ていない？……まだ発見されていないと言うことなんだろうか。だから学校からも連絡がない？　ということなんだろうか？

時間がまだ早いから、登校する生徒の数はまばらだ。部活の朝練に来ているヤツらくらいだろう。

普段こんな時間に来ない俺が行くのは、他の人から見ると変に思われるんじゃないか？　と一瞬考えてしまったが、今はそんなこと

を言っている場合じゃない。

「おはようございます」

俺は制服警官に挨拶をし、促されて生徒手帳を提示する。

機械的に内容を確認し、すぐに返される。

終始無言だ。

「何かあったんですか？」

「ああ、奥の校舎で火災があったんだよ」

と、事実だけを教えてくれた。

俺は軽く会釈をすると、敷地の中へと歩いていく。

廃校舎の方へ行ってみたけど、立入禁止のテープが貼られていてとても入れそうじゃなかった。

まだ始業まで時間があるから、俺はブラブラと歩く振りをしながら敷地内を歩いていく。

昨晩、如月は地下へと沈んでいった……。

地面の中を高速で移動でもできない限り、遠くへは行けないに違いない。如月のままなら当然人目につくから廃校舎付近の木立の中で身を潜めるはずだし、仮にアイツの体から出ていたとしたなら、寄生根は自力では動けないとか行ってたから、風任せで動くしかないだろう。

俺は再び携帯を取り出し、昨晩の風の状況を検索する。

――ほぼ無風――

つまり、どちらにしてもこの付近にしか存在し得ないんだな。

極力目立たないように探そうと思っていたが、事態はこちらにと

っては不利だ。
火災があったせいか、廃校舎付近には消防や警察の関係者がいまだに実況見分を行っているようだし、それに学校関係者も付き合わされている。
さらに部活とかで早出してきた生徒も校門に停めてあったパトカーを見て野次馬根性丸出しでやって来て、そのたびに教員に追い払われている。
俺も同様に草むら付近を探っているところを担任に見咎められ、追い払われたところだったんだ。

何度か野次馬に紛れながらアプローチをするも同じように発見される。あまり回数を続けるとさすがに不味いな。

そう思った頃にはもう始業が近づいていたんだ。

教室に行かないわけにもいかない。
俺は校舎に足を踏み入れ、その時初めてこれからの俺を待ち受ける困難な状況を思い出させた。
そう……。
教室に行けば、そこには日向寧々の姿は無い。そして、当然、彼女と付き合っていた、俺の友人の漆多伊吹（うるしだいぶき）と顔を会わさざるをえないんだ。
あいつは寧々がどうなったかを知ってしまっただろうか？　それとも知らないんだろうか？
俺はアイツに問われたとき、どう答えればいいんだ？

「月人、寧々ちゃんが殺されてしまったんだ。なんでなんだよ」

「なあ月人、お前、昨日、寧々ちゃんがなんであそこに行ったか知らないか？　」

「月人、お前、あそこで寧々ちゃんと何してたんだ？　」

「月人、寧々は……死んでしまったんだ。なんで一緒にいたお前だけが生きているんだ？　」

「月人、なんで寧々を護ってくれなかったんだよぉ……」

俺は締め付けられるような苦しみを感じた。

それは、如月に殺されかけた時に感じた痛みなど比にならないくらいの苦しみだった。

第２３話　柳　紫音（やなぎ　しおん）

俺は重い足取りで教室への階段を上っていく。
それはまるで絞首台への階段のように感じられ、一歩一歩踏み出すだけで息苦しかった。

出来ることならこのまま逃げ出してしまいたい。
でも、それは一時しのぎでしかないんだ。結局、いつかはその話に触れる事にならざるをえないんだから。先送りしたって苦しみが長引くだけだ。そして長引かせているわけにはいかないさらに大きな問題があるんだから。
俺は頭を何度か振り、気合いを入れて教室に一歩踏み出した。

いつも通りの風景がそこにはあった。
机で予習をする者、集まってバカ騒ぎしている者、寝ている者……昨日と変わらない風景だ。
ただそこに、窓から二列目の前から三番目の席、日向寧々の机が空席であることを除いて。

そして、聞こえてくる話が昨日までと異なることに。
昨夜の連ドラやお笑いの話、週末の予定、ゲームの話、先生・部活の先輩の悪口。それが今日だけは廃校舎の火事の話一色になっていたんだ。みんな自分が知っている情報を教え合っている。
火の気が無いのに何で火事、誰かの遺体が見つかった、セキュリティシステムが壊れていたといった話が飛び交っている。

俺は極力聞こえないふりをして、教室を見回す。
漆多の姿はなかった。
少し安心して腰掛けると、大きくため息をついた。一つの問題に

とりあえずぶち当たらなくて済んだか……そんな後ろ向きな安心感だった。

「あれ、柊くんどうしたのそれ？　」

突然声をかけられる。

「ああ紫音か。おはよう」

俺は隣の席に座っている少女に応えた。

左隣の机にセミロングの銀縁めがねの少女が足を組んで座っている。

幼なじみの柳（やなぎ）　紫音（しおん）だ。

他の女の子のスカートが膝上何？といった感じで相当短くしているのに紫音だけはどういうわけか標準の長さの膝より下の丈のままだ。ファッションとかにはかなり無頓着みたい。でも他の子よりだいぶ長いスカートの下からのぞく脚は凄く細くておまけに長くて綺麗だ。モデル体型なんだよな。でも銀縁めがねに無造作に伸ばしただけで少し寝癖まであるセミロングヘアの彼女の素顔が実は美形だということをどういうわけかクラスの男は知らないようだ。

この年代の割に色気がないんだよなあ。人とそんなに話したりもしないし、休み時間も一人でぼーっとしてたり本を読んでいることが多い。スポーツも勉強も中の中くらいの成績だから目立たず結構地味な子って思われているみたいだ。

俺といるときは結構面白い事を話すし、教え方が上手だから勉強も教えてもらったりしている。何度助けられたことか……。

「ちょっとものもらいができたみたいだからね、隠してるんだ」

当たり障りのない適当なことを言って、眼帯をしていることを説明する。

「大丈夫なの？　」
そういって紫音は立ち上がると俺のすぐ側まで顔を近づける。
「いやいや見ない方がいいよ。っていうか触ったらうつるよ。誤って触ってしまったら汁が飛び散って紫音の顔にかかるよ！　大変だぜぇ」
両手で左眼を覆いながら俺は紫音を驚かすような口調で話す。実際見られたらやばいからね。必死なんだ。左眼が青く光ってるの見たら腰抜かすからな。

「そう……」
それ以上その事には触れないでいてくれた。
何か俺にとって聞いて欲しくない話題については彼女は必要以上には聞いてこない。長い付き合いだから俺の好みや苦手なものとかを全部把握しているのかもしれないなって思う。でも、俺自身は彼女の事をよく知っているようで実はよく知らないんだ。彼女は聞き上手ってやつで俺の話のツボを押さえるのがうまい。それで俺は何でもかんでも彼女にはペラペラと話してしまうんだ。まあその話を誰かに言ったりはしないから結構きわどい話でも平気でしていたりするんだけど。
でも、俺が紫音の事を聞いたりすると上っ面な所は何でも話してくれるんだけどある一線を越えた話になるとやんわりと拒否されたり、違う話へと知らない間に誘導されてしまうんだ。かれこれ１０年以上の付き合いなんだけどなあ。
「なあ、漆多はどこに行ってるんだろう？　教室にはいないみたいだけど」
「ちょっと前まではいたんだけど、いつもとだいぶ違っていたよ。なんか凄く落ち込んでいたように思うけど……。どうしたんだろ？

柊君は何か知っているの」

「あ、いや何でもないよ。この時間に席に着いてないなんて珍しいなって思っただけ」

「へえ、そうなんだ」

紫音が何かを言おうとしたとき、ドアが開いて担任が入ってきた。

席を立っていた生徒達がザワザワと席へと戻っていく。

担任の佐藤先生が教壇に立つ。３０歳半ばの独身教諭だ。主に数学を教えている。いつもだらっとした感じのジャケットを着ている。それなりに生徒思いで、まあまあ人気もあるようだ。　たまにジョークを飛ばしたりするんだけれど、今日は何か重苦しい雰囲気だ。

何かを重大な事を話そうとしているその雰囲気をみんな察知し、生徒達は固唾を飲んで次のセリフを待っている。

それはおそらく廃校舎の火災に関連する話なんだろう……。

「知っている者もいるかもしれないが……」

そういって佐藤先生は話し始めた。

第２４話　そして事件が語られる

教室は静まりかえった……。

佐藤先生は大きく息を吸い込むと話し始める。

「立入禁止になっている廃校舎の事はみんな知っているだろう？実は昨日の晩、正確には夕方なんだがあそこで火災が発生した。うん、知ってる人もいるかもしれない。いや……まあ朝からあんな状況じゃ知らない方が無理かも知れないけど……、な。放課後だったけどそれほど遅い時間じゃなかったから誰かが気付いてもおかしくなかったんだけど、不思議なことに発見者は誰もいなかった。火災報知器も鳴らなかったらしい」

そう言って、今度はため息をつく。

誰も言葉には出さないけど、気付いてはいるはず。

夕方なら生徒達もまだ学校にたくさんいたし、先生だって残っていた。火事が起きて気付かないはずがないんだ。確かに廃校舎ということから、他の校舎から離れた林の中にあるけど、火事になれば煙が上がるし、夜になれば炎が見えない訳がない。そして学校のエリア内にあるから各種警備システムにカヴァーされているから、システムが火災という警報を鳴らさないはずがないんだよ。

でも人の眼人の耳、機械の眼・耳は寄生根の封絶という施術により完全に目を逸らさせられていたんだ。だから誰も知らない、システムにも記録が残っていないということなんだろう。

「消防の人の話だと、校舎3階の教室の一つがめちゃめちゃになり、1階の教室の一部が爆発したように窓が吹き飛ばされていた。それはかなり酷いモノだったそうだ」

教室の端から端へと視線を送り、再び佐藤教員が語る。

「そして、……。みんな心して聞いてくれ。
クラスの日向寧々さんが、焼け跡から発見された。残念ながら変わり果てた姿で発見されたんだ」

悲鳴が教室に響く。女子生徒の誰かが悲鳴を上げたんだろう。続けてすすり泣くような声。

「そして、さらに悲しい事だが、クラスは違うが同じ学年の如月流星君も違う場所で遺体で発見されている」
先生の語った事実が教室の生徒達の心を貫く。
まずは衝撃が貫き、遅れて疑問と悲しみが襲ってくるんだ。
先ほどの悲鳴に続いて疑問の声を上げる者、泣き出す者。悲しみは伝播し、教室中にすすり泣く声が響いた。

「ウソ、どうして？　」

「なんで寧々ちゃんが死んじゃうの？　そんなの信じられない。先生、ウソだと言って下さい」

「どうして日向があんなところにいたんだ」

「ありえねー何でなんだよ」

様々な疑問がを口々に生徒が言う。

「詳細は先生にもよくわかっていないんだ。私が知っている事はすべて話した。それ以上は本当に知らないし、わからないんだ。現在、警察と消防で詳細については調査中とのことです。皆さん落ち着いて下さい。……それと事務連絡です。皆さんショックでしょうけど事実は事実として受け止めて下さい。今後、警察や消防の人が学校

内を調査のために行き来します。また皆さんに話を聞きたいと言ってくるかも知れません。その場合は、知っていることを包み隠さず正直に話してくれるようお願いします。これは校長よりの指示であることも伝えておきます。先生が新たに情報を入手したらすぐに皆さんとご家族の方にはお伝えします。……以上です」

そういって話を打ち切った。

佐藤先生も実際の所、すべて真実を知らされてはいないんだろう。あとは、ごくごく事務的な話が少しあっただけでだった。一つだけ明確に指示されたこと、それは《廃校舎には絶対に近づかないこと》だった。

休み時間になると、クラスの話題は廃校舎の火事、いや事件の話で持ちきりだった。……火事というよりは、日向寧々と如月流星の死因についてだったけど。

俺は席を立ち教室の外へと出た。

女の子達が悲しむ姿や、無遠慮に寧々と如月の関係についてあれこれと話題にしているのを見たくも聞きたくも無かったからだ。

俺が無力だったせいで日向寧々を死なせてしまった。その事実が俺を苦しめる。

昨日まではすぐそばにあったものの不存在。その喪失感。

ただ、悲しい。

「柊君……」

背後から声をかけられた。

そこには紫音が立っていた。

「ちょっといい？　」

そういうとさっさと歩き始める。俺は仕方なく彼女の後をついて行った。

屋上までの階段を上がる間、会話はなかった。

屋上には誰もいなかった。

「日向さんが亡くなったのはとても悲しいことだわ。そして、柊君にとっては私が思っている以上に辛いことだと思う。とても仲が良かったもんね。でも……」

「でも、何だい？　」

「よくはわかないんだけど、柊君は何か他にも原因があってより辛そうにしているように見えたから」

ズバリと言い当てられている。俺は悟られないように、動揺を押し隠したけど果たして？

「クラスメートが死んだんだから、落ち込まないわけないよ」

「そうね。友達が亡くなったらショックを受けるのは当たり前だもんね。ほとんど話したことのない私だって、凄いショックだもん。……でも、柊君からはそれ以上の苦しみ悲しみが見えてくるの。私の気のせいかもしれないけど、小さいときからずっと一緒だったからあなたのことは他の誰よりわかっているつもり」

やはり付き合いが長い分、俺のことをよく知ってる。何が原因かはわからないだろうけど、俺の感情をなんとなく理解してしまっているんだ。

俺は思わず今の俺の置かれた状況を紫音に打ち明けてしまいそうになる。

でもそれはできないんだ。彼女まで巻き込んでしまうわけにはいかないから。

「……日向は漆多とつきあい始めたばかりだったんだ。いきなり彼女を失ってしまったあいつのことを思うとなんだかどうしようもない気持ちになるんだよ。あいつになんて声をかけたらいいのかって。おまけにさっきの先生の話じゃ、あいつにとってとても耐えられない噂が出ているみたいだし」

言ったことに偽りは無いけど、本心じゃない。俺は幼馴染の紫音にも気持ちを偽っている……。

少し上目遣いに俺を見る紫音。

「そう。そうね、確かに。友達の事を思うと辛くなるわね。……漆多君はもっと辛い立場にあるんだものね。彼を慰めてあげられるのは多分、あなたしかいないと思う。でも無理をしないでね。柊君はいつも無理して無理を重ねてパンクしちゃうんだから。自分だけで抱え込まないで、何かあったら私に相談してね。柊君は一人じゃないんだからね」

「ああ、ありがとう。うん、何かあったら紫音に相談するよ」

紫音は俺が何かを知っていて隠していることをなんとなく感づいているみたいだ。でもそのことについては聞いては来なかった。あえて聞かなかったんだ。それを聞いたら俺が返事に困ってしまうのがわかったから聞かなかったんだ。

いつも俺のことを気にかけてくれてたから、今回もそうなんだろうな。少し安心する。

紫音はいつでも俺の見方になってくれたんだよな。

「柊君、絶対の約束だよ。困ったら私に相談して。私がなんとかするから」

そういって微笑むと彼女は階段を下りていった。

第２５話　罠、そして彼は暴走する

少しの間、ぼーっとしていた。
外は青空。ちいさな雲が風に流されてゆっくりと動いていく。
なんだかだるいな……。穏やかな天気に凄く嫌な気分のまま授業を受けるのがなんだか嫌になってきた。とりあえず授業をサボろうか……。あの悪夢をまき散らす寄生根が誰か取憑くかも知れない状態の時に、チンタラ授業なんて受けていられない。
考えることがあまりに多すぎて何もまとまらないまま、階段を下りていく。

階段の下から音が聞こえてくる。壁に反響しその声は一際大きく聞こえてきた。
声の主がすぐにわかった。
……漆多伊吹の声だ。声というより叫び、いや怒鳴り声といってもいいくらいだ。いやに激高しているように聞こえてくる。そして他の男子生徒の怒鳴り声も聞こえる。
何かトラブルが発生しているようだ。慌てて俺は階段を駆け下りる。

階段の踊り場で漆多達がいるのが見えた。
顔を真っ赤にした漆多が一人の男子生徒の胸ぐらを掴み、今にも殴りかかろうという勢いで壁に押しつけていた。
周りには数人の男子生徒が少し離れて輪を作るような感じで取り巻いている。
階段を駆け下りる足が止まってしまう。
漆多が胸ぐらを掴んでいる奴と周りの連中を見て俺は気分が滅入るのを感じた。
蛭町（ひるまち）　時優（じゆう）。

クラスは別だけど有名な奴だ。それは悪い意味でだ。
教員と一部の生徒の間でコイツほど評価の異なる人間はいない。ルックスはそこそこ良いし、成績もそこそこだし人当たりも結構良い。教員のいうことをよく理解して行動できるし、世話好きで嫌な仕事とかも進んでやるタイプ。それが教員と大多数の生徒の彼に対する評価だ。しかし、俺は知っている。この男の二面性を。
如月流星を徹底的にいじめ抜いたあのクラスのリーダー格の奴が蛭町なんだ。しかしそれはいじめの事実と一緒に巧妙に隠蔽されていたということをどれほどの生徒が知っていたんだろう。実にうまくクラスの生徒達の共犯意識をあおり、連帯の名の下に如月をなぶりものにしていたんだ。
とはいっても俺がそれを知ったんだってごく最近のことで、蛭町って奴が首謀者だとは思ってもいなかった。
できることならコイツとその仲間に関わりたくはない。関わっても決して良いことはない。恐らく何らかのトラブルに巻き込まれる事になるだろう。
しかし、今、そんなヤバイ奴と関わろうとしている漆多を止めないといけない。それが最優先。
俺は階段を下りようとする。
「てめぇ、もう一回言ってみろ。何ウソ言ってるんだ！　ぶっ殺すぞ」
胸ぐらを掴んだ腕に力を入れ、漆多が激高している。
普段は温厚なあいつがここまでキレているのは見たことがない。あまりの迫力にまわりも唖然となる。
それでも蛭町はどういうわけか余裕たっぷりの顔をしてむしろヘラヘラ笑っている。その影響か仲間の連中も緊張感欠如といった感じで傍観しているようだ。。
「漆多、何をそんなに怒ってるんだい。僕はただ【聞いた話】を言ってただけだよ。……日向さんは廃校舎の三階で全裸で死んでいたんだって。そして如月君もおなじく全裸で発見されたらしいよ。そ

れだけでわかるじゃない。そもそも廃校舎がウチの生徒達にどういう利用をされていたかを君も知らない訳じゃないだろう？　だったら僕の聞いた事実から想像できるのは一つしかない。あいつらはやってたって。ふふん。いやらしいよね。まあそんな最中に火事に巻き込まれたらたまんないだろうけど。……まあ如月君は満足か？日向さんは美人だったからね。俺もお世話になりたかったくらいだよ。ヒヒ」

その刹那、漆多の右拳が蛭町の顔面にめり込んでいた。そしてそのままもみ合いとなる。奇声を上げながら一方的に漆多が殴る。

蛭町は必死に防御を取っているように見える。仲間の連中もこの期に及んでもどういうわけか傍観しているだけだ。みんな口元に冷笑を浮かべているだけだ。それはなにか不気味に思えた。こいつら何を考えている。

こいつら結構喧嘩早い連中ばっかりだったはずなのにどうしたんだ？

奥から怒鳴り声が聞こえ、数人の教員が走ってきた。

「お前らなにやってんだ！　」

馬乗りになっている漆多を取り押さえ、二人を強引に引きはがす。別の教員に介抱されている蛭町は教員の問いかけに頷いている。両方の鼻の穴からは血が流れ落ち、唇も切っているようだ。それでもその顔は何故か不敵な笑みをたたえている。

俺はどういう訳か寒気がした。

「とにかく、漆多と蛭町、職員室へ来い！！　」

教員達に促され、彼らと取り巻き連中は職員室へと歩いていったんだ。

結局、俺は漆多を助けることも加勢することも何もできずに見ているだけだった。

しばらくして、教室に漆多が帰ってきた。

異常なほど憔悴した漆多がそこにいたんだ。

思い詰めたような表情でどこか心ここにあらずといった感じで、フラフラ歩いている。
喧嘩をしたことでこっぴどく叱られたのかもしれない。
そして彼はぐったりとした歩調で歩き、崩れるような感じで席に着いた。
俺はあいつに何かを話そうとして近づく。
様子を見た紫音も心配そうな表情を浮かべながら来た。
「大丈夫、漆多君……」
何も話せない俺の代わりに話しかける紫音。
俺はというと何もできずに彼女の後ろに隠れるように立っているだけだ。
空ろな眼で俺たちを見る漆多。
「ああ、柳か。スマン。心配してくれてありがとう。俺は大丈夫だ。サンキュ……」と消え入りそうな声で答えるだけだ。
「漆多……」
と、それだけ言っただけで次の言葉が出てこない。
「月人か……。寧々が死んじゃったよんだ。俺、俺どうしたらいいんだ？　月人、教えてくれよ。何で何で、あいつはあんなところにいたんだ？　何で如月もそこにいたんだ……よぅ？　」
漆多は寧々と如月の関係を疑っているんだ。死んでしまった彼女への切ない思いと、裏切られたような黒い疑惑。その二つの思いの間で苛まれているんだろう。きっと苦しいだろう。

【裏切られたと思っているのか？　そうだよ。お前は裏切られている。恋人の日向寧々に。でもそれだけじゃないんだぜ。お前の親友の月人柊にも裏切られているんだよ。日向寧々の逢い引きの相手は如月じゃなく、俺なんだぜ。ウヒャヒャヒャ！！】
どす黒い想いが俺の心で蠢く。……なんだこれは。俺が俺じゃない感情が心の底の底の遙か底にあるような感じ。それを覗いてみようとするが、それは高所恐怖症の人間が高層ビルの屋上から地上を

見下ろそうとする感覚に似ている。とてもできやしない。

俺は彼の質問に答えることができなかった。本当の事を俺は知っている。そのことを話せば、漆多の寧々と如月の関係への疑惑は晴れるだろう。でも俺と寧々が一緒にいた事がばれてしまう。……親友への裏切りを俺は告白することができなかったんだ。

本当の事を知ること、それはむしろ漆多に辛い思いをさせるだけだ。知らない方が良いこともあるんだ。

俺と寧々が漆多に隠れて浮気をしていて、その最中に寄生根に乗っ取られた如月が現れた。そして寧々をレイプし殺害した。俺も半殺しにされたけど危機一髪逆に如月を撃退した。こんな事が信じられるというのか。

「月人、お前は寧々と如月が付き合っていたって知っていたのか？」

動揺を悟られぬよう平静さを保とうとする。

「いや、知らないよ。……っていうか、そんなことってあるわけないだろう？　何かの間違いに違いだ。だってお前と付き合い始めたばっかりじゃないか、日向は」

「当然俺だってウソだと思っている。でも、あいつらが、蛭町君達が言っていた事は本当らしいんだ……。あの廃校舎に二人がいたのは間違いがない。二人が裸で発見されたのも本当だったんだ」

苦しそうに漆多がうめく。彼の言葉に若干の違和感を感じながらも、語られる事実に耳を傾けている。

「でも、二人がそんな仲だったって決まった訳じゃない」

「だったら！　だったらなんであんなところに寧々がいたんだよ。なんで裸なんだよ。お前だって知ってるだろ。あの校舎がラブホ代わりに生徒達が使っていたったことくらい。それに立ち入り禁止エリアになってるんだぜ。一体、何の用事があって放課後に行かないといけないんだよ。……それに寧々と如月以外には誰も見つかっていないんだ。だから寧々の相手は如月以外あり得ないんだ」

それ以上は俺は何の反論もできなかった。事実と異なることを知っているのは俺だけなんだから。
警察は被害者のプライバシーに関わることだから何も言わない。でも事件としては捜査するだろう。二人の死に方が普通じゃないからだ。
「スマン、お前にあたっても仕方ないよな。今日はもう俺は帰るよ……とてもじゃないけど授業なんて受けていられないや」
肩を落として漆多は教室を出て行った。
その寂しそうな後ろ姿にかける言葉が浮かばなかったんだ。
俺の心は罪悪感で満たされていた。不貞を知られたくないために本当のことを語ることができなかった。本当の親友だと思ってくれている奴に対してだ。本当の事を言ってしまったら更に親友を苦しめることになるから……それが理由だ。そしてそのために日向寧々の名誉が傷つけられているということを知っているのに、俺は何も言えないんだ。
命の危機にあった寧々を守れずに死なせてしまい、さらにその死後、彼女の名誉まで傷つけている。本当に最低だ……俺は。ただ、ただ俺は我が身が可愛いだけなんだ。だから何も言えないんだ。何かと屁理屈をこねくり回して自己保身に奔走する糞みたいな男なんだ。
わかっている。それが最低なことを。親友にとるべき態度じゃないことも。わかっているけど何もできないんだ。
してはならないことをしてしまう事と成すべき事をしない事のどちらが罪が重いのか？　何処かで聞いたせりふが俺の頭の中を浸食する。

第２６話　沸き上がる怒り

放課後になってしまった。

結局、休み時間の間に廃校舎付近を調べてみたが何も見つからなかった。

近づくことさえ禁止されているため監視の目を避けながらの捜索だったために最初から期待はしていなかったけど、やはり徒労感のみが残った。その結果については、本当にショックだった。夜になるまで待ってみようかと思ったけどそれは不可能だとすぐに気づいた。

校舎への出入りはカード管理されていて、朝登校した生徒が学校内に残っていたら、警備システムに把握されてしまう。一定時間を過ぎればエラー表示がされ、警備員が帰宅を促すために構内を捜索する。

昨日の晩に俺が学校に残っていられたのは、寄生根の封絶の影響によるシステムダウンのおかげなんだ。学校への申請無く夜中まで残っていたらすぐにわかってしまう。仮にやるとするなら深夜に外から進入するしかない。

しかし、あんな事件が起こってしまった後だから、警備は普段より遙かに警備レベルが引き上げられているはずなんだ。難しいな。誰も寄生されずにいてくれよ、と俺は祈るしかなかった。

重い足取りで校門へと歩いていく。

途中、運動部の部室棟が並んだ一角を通った時に何か変な音が聞こえた。それはごくごく小さな音だった。おそらく部室のどれかから聞こえた音だろう。普段なら聞こえないような音。肉と骨がぶつかるような音と呻き声だったんだ。

俺は音の聞こえた方へと歩む方向を変えた。

この部室エリアは学校中に配置された監視カメラの死角になっている部分がある。生徒の誰かのいたずらかもしれないけど、カメラの向きが微妙に変えられているんだ。
誰しもプライバシーは守りたい。息抜きができるエリアが欲しいからね。

いきなりドアが開き、漆多がヨロヨロと出てきた。
表札を見るとサッカー部の部室だ。漆多はサッカーなんてやっていないし、部員にそれほど親しい奴がいたとは思えないけど。
よく見ると漆多の学生服は泥があちこちに付着して汚れ、口からは血が出ている。それに確か早退したんじゃなかったのか？　何でこんな時間に学校にいるんだ？？
「ど、どうしたんだ、漆多？　」
俺は慌てて彼に駆け寄る。

「月人、……なんでもないんだ放っておいてくれ」
見られてはならないようなところを見られた、そんな動揺を顔に浮かべて俺から遠ざかる親友の姿。
足下は覚束ず、ヨロヨロと歩む。
心配になり後を追おうとしたけど、足が前に進まなかった。
漆多は明らかに俺を避けている。後を追ったところで煩がられるだけだからだ。そう思いこもうとする。俺の思考の根底には漆多に関わることで日向寧々とのことが話題になることを避けたいからだ。

俺は漆多が出てきた部室へと近づいた。部屋を確認したかったからだ。きっとそこに答えがあるはずだから。
中から下卑た笑い声が聞こえてきた。
ドアの前に潜むようにしゃがむ。はっきりと話し声が聞こえてくる。恐らく連中はドアの外までは聞こえていないと思っているようだ。

確かに、常人なら中の物音を聞きとる事なんて不可能なんだろうけど、俺の聴力は王女と契約して以後、異常にレベルが高まっているから筒抜けなんだ。

内容を聞いている内に俺の頭に血が上っていくのがはっきりとわかった。【ゴゴゴゴゴゴ】マンガでキャラクターに背景に出てくる効果音が本当に聞こえる。

内容を要約すると、こうだ。

あいつらが漆多を如月に変わる次のいじめの儀式の対象にしたということ。そのために教員を巻き込んだ罠を仕掛けて暴力沙汰を起こさせ弱みを握りそこからぐいぐいと更なる弱みに食い込んだこと。今後もそれでどんどんいくということを打ち合わせていたんだった。学生生活の鬱憤のはけ口が死んで困っていたけれど、次の相手が見つかって良かった良かったとみんなで大笑い始めた。

俺の中で何かがぶち切れたんだ。

ドアノブを掴むと一気に開ける。

漆多に本当の事を言えなかった罪悪感。自分を責める感情の行き場のない怒りのはけ口をただ求めていただけのかも知れない。とにかく暴れたい。凶悪な衝動をどこかにぶつけたい。何もかもメチャメチャにしてやりたい。

部室の中には如月を【いじめ抜いていた】主犯格の連中が顔を揃えていた。もちろん蛭町の顔もある。

何気にこいつらはサッカー部の連中だったんだ。スポーツをやってる奴に悪い人間はいないんじゃなかったのか？　おい。

「なんやこらぁ！　」

と反射的に怒鳴る連中。急に開けられて驚いたのか？

一瞬、驚いた顔をした連中だが、すぐに見下すような笑みを浮かべて俺を見る。普段の俺を知ってるせいか奴らには相当な余裕があるみたいだ。

「話は聞いたよ……。お前ら糞みたいな連中だな。漆多をよってたかっていじめの対象にしやがったのか」

「はあ？　……ふふん、月人、お前何偉そうに言ってんの？　頭おかしくなったの」

一人が立ち上がり、俺のそばに近づいてたばこ臭い口臭をまき散らす。顔は知っているけどクラスは違うし、名前は何だったかなんて覚えてない。

「お前達に言っておくよ、漆多のどんな弱みを握ったか知らないけど。あいつにちょっかいだそうなんて考えてるんだったら、今すぐやめるんだ。これは警告だよ」

「アホか？　月人。ついでだからお前にもこれやらしてやろうか？」

そういって立っている名前の思い出せない男が携帯を取り出し動画を再生し始めた。

小さな画面の中で漆多が泣きながら全裸になっていく動画だった。

汚い顔に汚い笑いを浮かべてそいつが俺を見る。素早くもう一人が出口に回り扉を閉め、鍵をかけた。

「月人君、もう逃げられないよ。さあ漆多みたいにフルチンショータイムだよ」

蛭町が携帯を取り出し撮影モードに切り替える。どっと笑う連中。

「さっさと脱げよ。自分でやらなかったら俺たちが脱がしてやってもいいよん」

そういって一人が俺の肩を掴んだ。

「やれやれだな、お前ら」

俺はつぶやくと眼帯をはずした。

内から溢れ出しそうな暴力的衝動を解放すること、決定だ。

こいつらにかける情けは無い。
肩においたままの男の手を優しく握ってそのまま無造作に振り払う。男はふわり、くるりと宙を舞うとそのままロッカーに背中からたたき付けられる。蛙が潰れたような悲鳴が上がる。
続けてドアの前に立った男子学生の右耳を平手ではり倒す。俺的には軽くなでる感じでやったんだけど、どうも加減が甘かったようだ。男は重量級フォワードのタックルを食らったように立った体制のままクルクルと錐もみ状態で数メートル吹き飛んだ。倒れ込むと同時に激痛に襲われたのか耳を押さえて悲鳴を上げる。
鼓膜が破れるような衝撃は与えていないから大丈夫なはず、とは思う。でも押さえた手から血が垂れてきてるや。

「うん、どうも加減ができない感じだなあ」
俺は反省しながら残り4人がいる方を見る。
ほんの十秒で二人がめちゃめちゃになったことで連中は恐慌状態となっているようだ。俺の左眼の色が違うことも一因か？

「驚くんじゃ無い！　糞が、4対1なんだ。月人なんかに負けるわけがない」
「おうよ！　本気でやってやる」
口々に彼らは声を上げ、ポケットから、どうやって校門のセキュリティを逃れて持ち込んだのか、ナイフを取り出した。3人が俺を囲むように立つ。蛭町はその後ろにいる。
「一斉にかかるんだ。殺すつもりで行こう！　」
と偉そうに指示をしている。

「お前らがんばるみたいだけど、無駄な努力なんだよ。……でも俺は本気で頭に来てるから加減しないよ。最低でも、しばらくは病院から出られなくなる覚悟で来いよ」
なんだかワクワクしてきたよ。死なない程度にやらないといけな

いな。難しいけど。
話している途中で3人が一斉にナイフを振りかざしてきた。前に立った二人の内、一人が俺に向かって踏み込みながらナイフを俺の腹に向けて突き出す。もう一人は水平に撫でるように斬りつけてくる。後ろに回り込んだ奴はナイフを腰だめにして体当たりしてくるつもりだ。
こいつら俺を殺す気満々じゃん。結構いい連係プレイだね。……思わず口元に笑みが浮かんでしまう。
3方向からの同時攻撃。しかも明確な殺意をもってこいつら来てやがる。殺したら殺人で捕まるぜ。未成年だからすぐに出られるという計算でもあるのかな？　でも俺も未成年だからお前ら全員殺しても同じなんだよ。そんなことをのんびりと考える。
視界の中で彼ら3人がゆっくりと殺意をもった攻撃をしかけてくる。
必殺に近い勢いなんだけど、ほとんど止まっているのと同じだ。俺は一歩後ろに下がりながら振り向きまずは後方の男の足を思い切り払う。男はもんどりうって飛び上がり前転をするように宙を舞う。その襟首を掴むと俺はその回転力を加速させてあげる。くるくると何回転かして落下していくところへ二人のナイフを振り回した男達がいた。
聞くも耐え難い悲鳴とともに頭を逆さになりながら地面に落ちようとする男の尻に前方から攻撃を仕掛けてきた二人のナイフが突き刺さる。
相当の勢いで俺が蹴り上げながら投げ飛ばしたから、尻にナイフを刺されながらもまだ回転を続ける男は二人の男を巻き込みながら地面にたたき付けられた。
どすんという鈍い音と固い物が床に叩き付けられる二つの音が同時に部室に響いた。
俺を前から襲おうとした二人の生徒は後頭部を強打したようで泡を吹いて悶絶している。尻にナイフを二本デコレーションされた男

はまだ意識はあるようだが、背中を強く打ったために呼吸困難に陥り口をパクパクしている。
糞連中5人を戦闘不能にするのに1分かからなかったかな。
俺は振り返り一人だけ無事な蛭町を見た。

「さて、残りはお前だけだよ」

「ひ！　」
蛭町は情けない声を上げた。
「助けて助けて」

俺は無言で近づく。
逃げ道を探してあたりをきょろきょろと見回す蛭町。しかし部屋の出入口は一カ所しかないから逃げ道なんてない。すぐに追いつめられてしまいへたり込む。

「お願い、お願いです、助けてくれよ～」

「携帯を出せ」

命令にあわててポケットから携帯を取り出す。俺はそれを受け取ると床に落とし踏みつぶした。残りの連中の携帯も同様にスクラップにする。漆多の全裸動画を保存している可能性があるからな。
再びおびえてしゃがみこんだ蛭町に近づくと襟首を掴んで立ち上がらせる。襟元を両手で掴んだ。

「な、なに。許して下さい」
泣きそうな声をだす男を無視して一気に服を引き裂いた。奇声をあげてしゃがみこもうとする奴のズボンを掴みグルングルンと振り回す。

プロレスのジャイアントスイングみたい。すぐに勢いに耐えきれなくなってズボンがパンツと一緒に引き裂かれる。プリンと汚いケツがはみ出す。
蛭町は靴と靴下だけの全裸になって床をすべり壁に激突する。
俺は携帯を取り出すと動画撮影を始めた。
取られていることに気づいた彼は局部を隠して逃げようとする。お腹のあたりは床で擦りむいたのかずるむけ。
俺は近づいて尻を蹴り上げた。
「ひゅいーん」
情けない悲鳴を上げて彼は気を失ったようだ。

「やれやれ」
俺は適当に蛭町のフルチン動画を撮影すると、他の倒れている連中の服も引き裂き全員を並べて撮影してやった。
そいつらは、ぶちのめされてヘロヘロになりながらも全裸で這いながら逃げようとする。
「うひゃひゃ、さあ逃げろ逃げろ。トップで逃げられた奴だけは助けてやるよ。他の奴らは殺すよ」
俺は大笑いしながら連中を一人ずつ丁寧に蹴り上げていく。その度に全裸の男達は情けない悲鳴を上げる。中には小便を漏らす奴もいた。
「うわーこれは汚い」
そんな情けない姿を逃さず撮影する。
邪悪な人格がさらに俺の中で影響力を発揮する。
仲間を押しのけなんとかトップでドアにたどり着いた奴を捕まえ、
「うん。君が優勝だよ、おめでとう」

「た、助けてくれるんですよね」
情けない声を出す。

俺は優しく微笑み彼を立ち上がらせた。そしてニッコリと笑い、首を振った。
「ウソでーす。全員許さないもんね」
そう言って下腹部に蹴りを入れる。
眼をひんむいたような衝撃顔を張り付かせたまま、男は宙を舞い、必死で這って来ている仲間の上に落下する。俺の蹴りの威力が強かったのか、落下と同時に衝撃のためか思わず脱糞している。痛みで転がり回るため、下にいる男達の全身に黒茶色い糞がぶちまかれる。
悪臭と痛みでみんながヒーヒー泣きわめき、情けなくうめき声をあげた。
猛烈な悪臭に俺の鼻まで曲がりそうだ。それでも笑いをこらえ、冷徹に撮影はやめない。
悲鳴と悪臭と醜態と狂気が充満していた。
なんだか笑いが止まらない。糞連中が糞まみれだ。

これくらいが潮時だ。臭くてたまらなくなった。
まだ意識のある連中に向かって
「漆多にこれ以上ちょっかいを出したらこんなもんじゃ済まない。それにこの動画をネットに投稿するからな。わかっているな」
と言い残して俺は部室を後にした。
連中はずっと土下座をして必死に謝っていた。
ここまで痛めつけたらもうあいつら再起不能だろう。あーあ楽しかったよ。
結構暴れたつもりだけどどうも誰にも気づかれなかったようだ。
まあ、あんな事件があった後だからほとんどの生徒が部活をせずに帰ったようだけど。
胸くそ悪い連中をぶちのめして少しすっきりした夕方だった。

第27話　王女と俺。やっぱり王女は悪魔だ。

自分の部屋に帰り着いた時には7時を回ったところだった。よけいな事に巻き込まれてずいぶんと遅くなってしまった。途中の弁当屋で二人分

の弁当と豚汁を買っていた。王女が暖かい物を食いたいだろうと思ったんだ。

ここの弁当屋は普通のチェーン店なんだけど、調理するおばちゃんの腕がいいんで、うまいって評判なんだ。店には普段以上に行列ができていたけど、また待つのも楽しみ。

本当は外に連れて行ってあげるのが一番なんだけど、人の多いところに彼女を連れて行くのは危険な気がしたし、彼女は肉体的にも精神的にも

王女は、かなり疲れているように見えたから、まだ休ませてあげることが必要だって思っていたんだ。もう少し元気になったらとっておきの飯屋に連れて行ってあげようとは思っているんだけどね。……もちろん行ける店は予算との相談も必要だけど。

先ほどまで俺の意識の上に上がってきていた邪悪な何かはどこかに消え去っていた。

ドアノブに手をかけて開けようとするより早く扉が開いた。

そして、そこには王女が両腕を組んで立っていた。

「遅い！　今まで何をチンタラやっていたの！！　私はこの世界に来てまだ日が浅いのよ。何をするにもやり方がわからないっていうのに目が覚めたらお前はもういないし、外には出られないし。むさ苦しいお前の部屋で一日過ごさなくちゃいけなかったのよ！　おか

げで気が狂いそうになるくらいテレビを見せて貰ったわ。お前には本気で感謝してるわ」
いきなりの剣幕に俺はただ嵐が通り過ぎるのを待つしかできなかった。確かに俺が悪いもんな。朝起きたときには寝ていたし、それに夜中に彼女が恐慌状態に陥った時、仕方なかったとはいえ彼女にキスをしちゃったせいもあってなんだか顔を会わせづらかったんだ。だから反論なんてしなかった。ただただ頭を下げてただけ。

「……もういいわ。これ以上お前を責めたところで何も変わらないし」
王女はいろいろとまくし立てていたが、唐突に説教をやめた。彼女のお腹が可愛い音を立てたのだ。

「それよりお腹がすいた……」
顔を赤らめながらつぶやいた。

「ちょうど良かったよ。弁当食べるか？　暖かい豚汁もあるよ」
俺はにっこりと微笑み、包みを彼女に見せた。

部屋に入ると早速弁当を広げての食事となった。
一日中部屋でゴロゴロしてたわりには部屋は片づいている。ゴミもほったらかしになっていないや。ベッドそばのテーブルに飲みかけのペットボトルが一本おいてあるだけだ。
何気なく冷蔵庫を覗いてみると、朝入れてあったコンビニ弁当やヨーグルトはそのままになっていた。
もしかするとずっと寝ていたのかも知れない。……それほど疲れていたんだろうか？
王女を見ると弁当の中身についていろいろ文句を言いながらも食べている。とりあえず元気にはなったんだろうと思うことにした。
俺的には牛焼き肉弁当はとってもうまかったんだけど。

「結局、寄生根は見つかったの？」
唐突に問われ、俺は言葉に詰まる。
「……そう。やっぱり見つからなかったのね」
何も言わなくても態度でバレバレなんだろう。さも当然の事のように言われてしまった。

「でも、誰も寄生されたようじゃなかったよ」
と、弁解めいた口調。

「今日は、というだけの話よ、それは。寄生根は新たな宿主が見つからなくたってすぐには死なない。明日になればどうなるか、それは誰にもわからないのよ」

そう言われ、俺は落ち込むしかなかった。

「まあ、……済んだことを責めても仕方ないわ。些末なことをとやかく言うよりは明日以降どうするかを考えることが最重要だから。反省は必要だけど、次にどうするかを決めなければただの馬鹿だから」
俺の気配に気付いたのか、彼女は慰めるような口調になっている。
「ところで、今日の学校はどうだったの？　ちょっと詳しく教えてくれるかしら」

朝から警察や消防の車が来ていた事。日向寧々と如月流星の全裸遺体が廃校舎の中と近くの庭で発見されたこと。そして俺の親友であり日向寧々の恋人だった漆多伊吹の事を話した。遺体が発見されたために、当然ながら事件のあった廃校舎への立入は禁止となり、警察消防おまけに教師がうろついて警備が厳重すぎて、ほとんど近づくことができなかったこと。そんなこともあって寄生根を探すと

いう目的をほとんど達成できなかったことを続けて説明した。そして、追加説明ながら、親友の漆多が如月流星をいじめていた連中の次の標的になってしまったこと。それを知った俺はそいつら全員を半殺しにし、とてもスッキリしたことまで詳細に話した。

「ヤレヤレね。お前、普通の人間相手に能力を使ってしまったのか？　そんなのただの弱い物いじめでしかないじゃない。……確かにお前がその生徒達を許せないと思ったのは当然だし、半殺しにしたことは仕方ないとは思うけど、それにしても後処理のことを考えずになんてことするの。そいつらが誰かに話したら騒動になるわよ。目立つ行動を取ったら状況から考えてもあまり利口だとは思えないわよ」

呆れたような口調で言われる。

「ごめん。そうは思ったんだけど……何かあいつらのやり方がどうにも我慢ならなかったんだ」

「……まあ、仕方ないわね。私だったら、お前のような手加減なんかせずにもっとそいつらをぶちのめしたとは思うわ。再起不能になるくらい人格まで徹底的に破壊してやったはずだわ。肉体を壊すだけじゃなく精神的にも再起不能になるくらいにね。うーん、それでも甘すぎるわね。やっぱり潰して埋めて証拠を隠滅したかもしれないわね」

そういって笑顔を見せてくれたので、俺は少し安心した。

「明日以降どうするかが課題になるわけなんだよね。明日はきっと見つけられるようにがんばるよ。……ところで寄生根の事だけどもっとわかるように教えてくれないか？　何か手がかりがないと探すにも探せないんだ」

その問いに少し考えるようなそぶりをした後、「私も良くは知っているわけでは無いんだけど」と前置きした上で説明を始めた。

第２８話　講義：王女による（寄生根）解説講座　１

「まず、寄生根はまだ存在していると思うわ。アレは単体では移動する能力がないから地面か何かに張り付いた状態で、今も存在しているんじゃないかしら」

「どんな形をしているんだ」

「基本的に糸くずみたいな形で大きさも数センチくらいしか無いの。重さがほとんどないから風が吹いたら跳ぶし、雨が降ったら流されたりもするわけ。だから非常に不安定な状態で今はいるはずだわ。でもはっきりと言っておくけど、寄生根を肉眼で見つけるのはほとんど不可能よ。」

「それはわかってるよ。でも困難さは寄生根が宿主を見つける事についても同様じゃないか。そんな風任せな状態で移動もままならない寄生根が宿主なんて見つけるのはかなり難しいんじゃないのか？」

俺はもっともな疑問を述べた。誰にでも寄生できるわけではないようだからそんな受動的な移動で合致する人間に取憑くことなんてできないんじゃないか？

「アレが宿主を見つける方法は自分で宿主を探すわけではないの。テレパシーのようなもので宿主に呼びかけ、宿主はそれに反応することで通じ合うらしいわ。寄生根は呼ぶのよ。自分の宿主に相応しいモノを。つまりアレが発する呼びかけの電波のようなものを受信できる人間だけがそれに気づき、アレのもとに呼び寄せられるというわけ。その電波のようなものが怒り・嫉妬・憎悪・ねたみ・セックスなんかの人間にとっては負の想いへの強い渇望の充足というこ

となの。対象となる人間は負の感情を持っている者なら誰でもなりうるわ。でもその思いが強ければ強いほど寄生根とのリンクが強くなり、強く強く寄生根に引き込まれることとなる。その思いが強ければ強い者ほど寄生根と出会う確率が高くなるわ。当然想いの強さに比例して寄生後のアレの能力は高くなる。……そこがまた厄介なところね。今まだ動きが見えてこないのは、負の想いが強い者がいないか、いてもその想いがそれほど強くないから寄生根の呼びかけ反応していないだけかもしれないわけなんだから」

そう言いながら王女は冷蔵庫から持ってきたペットボトルのお茶を一口口に含んだ。そして「オエッ、これ苦い……不味いわね」とぼやいた。

だったら飲みかけの水飲んでろよ。……と思っただけ。

「でも、姫。俺は見つけられるかな？　寄生根を」

「どれだけ強運かにかかっているわ。多分無理だとは思うけどね。……寄生前に発見できたらそれを焼き払えば済むから簡単なんだけど。とはいってもどのあたりに寄生根があるかわからない現状では打つ手がないわね。いっそのこと学校を丸ごと焼いちゃえば簡単かもしれないわよ。うん、それが一番手っ取り早いわ」

と無茶苦茶な提案をする。

「そんなのできるわけ無いじゃん」

「馬鹿ね、ただの冗談よ。……だから結論はもう出ているわね。誰かが寄生されて暴れ出さないかぎり、発見することはできないってことが」

その事実を否定することはできない。最初からわかっていることだから。

つまり犠牲者が出るのは避けられないってことだ。

「まだ諦めた訳じゃないけど、俺だってそうなったらそうなったで仕方ないって思っている。そして、戦いも避けられないってことだってね。本当は厭だけど、避けて通ることはできないようだね。……もし、そうなった時のために教えて欲しいんだけど、俺は新たに寄生された人間と戦った場合、勝率はどれくらいになるんだろう」

少女は少し考えた。答えは出たようだけどそれを伝えるべきかどうか悩んでいるように思えた。

「シュウ、はっきり言うわよ。前にも話したけど、寄生根は宿主を変えるごとに強くなるって言ったのを覚えているかしら」

そう言って俺の反応を見た。

俺は頷く。

「如月流星が最初の宿主。そして次は二人目ということになる。如月流星との戦いではまだお前が戦いになれていなかったせいもあったし、本当はお前があれほどの戦闘力を発揮するとは思っていなかったんだけど、まあ互角以上の戦いだったわ。どちらかといえばお前の方が強かった。でも宿主が二人目ということは、前の宿主に憑いていた時に得た能力を保持したまま新たな宿主を確保することになるわけだから、戦いはより厳しいものとなる。お前が戦いになれたとしても、今度は良くて五分五分。今までの経験から言うと、お前の方が不利になるかもしれないわ」

「そうか……。やっぱり今のままだと不利なんだなあ。でも俺たちに負けるという選択肢はありえないんだろ？　だったら教えてよ、姫、俺はどう戦えばいいんだ」

「【俺は】じゃないでしょ、【俺たちは】よ。お前の敗北は考えたくもないんだけど私の死に直結するんだから。あんなのになぶり殺しになんかされたくないから私も必死よ。当然一緒に戦うわ。……私が加勢すれば、なんとか互角にまでは持って行けると思うんだけ

ど、うーん、どうかなあ」

王女が加わっても互角なのか。少しショックを受けた。ただ、王女が面白そうに話すのでそんなにヤバイ状況のようには思えないんだけど。

「今のままでは勝敗は不明ってことなんだよな。俺は、いや俺たちはどうすればいいんだ？　戦いまでになんとかレベルアップを図らないとまずいんだろ？　何か手立ては知らないのかな。こうなんていうか、パーッとパワーアップするような特訓とかさ」

「レベルアップっていったってゲームみたいに簡単に人間の戦闘力は上がるもんじゃないでしょ。本来なら日々のたゆまぬ鍛錬と、とにかく実戦をくぐり抜けて力を上げるなしかありえないわ」

「そんなリアルなこと言われても困るよ。敵はいつ現れるかわかんないんだよ。そんなチンタラやってたら間に合わない。姫だってそんなこと分かり切ってるでしょ？　」

「そうは言っても一朝一夕に能力値を上げるなんて魔法のようなことができるわけないでしょう？　でも、まあもうすぐ満月だから……」

「満月だから？　」

俺は姫が言う満月が近いという意味に即座に反応した。満月に力が増すといえば狼男。ウェアウルフ、ルーガルーなどなど。しかしそれと王女がどういう関係にあるっていうんだ？

「私たち王族のバイオリズムの事を言っているのよ。私たちは満月をピークに、そして新月をボトムに能力値の上限が変化するわけ。それはどの生命体も同じでしょ？　生物は月の満ち欠けという自然の力に影響されているわけ。そして、もうすぐ満月が近いというこ

とは私の力も最大値まで引き上げられるということなの。それすなわち、私が使役する式鬼の能力も最大値になるということなの。前に戦った時以上に強い式鬼を使役できるし、数だって前より多く使える。それをうまく使えれば互角の状況を私たちに有利な方向へ持っていけるかもしれないわ。

それにシュウ、お前は私の下僕となっている。当然、主たる私の能力値が上がるということはお前の力も上がるということになるのよ」

つまり戦いが満月近辺になれば、戦闘能力がマックスに近い状態で迎えられるということなのか。

「今度の戦いが俺たちが勝利するチャンスになるということか」

「そう、そのとおり。寄生根は二人目の宿主を得て相当にパワーアップし、勝利を確信して襲ってくるだろう。その慢心の隙を突き勝利するのは私たちだということだ。今度の戦い、必ず私も一緒だ」

「もちろん」

俺は戦いに備えることになる。

「それと……」

王女は俺を見る。

第２９話　講義：王女による（寄生根）解説講座　２

「もう一つ、勝利への鍵があるわ。それは、お前が秘められた能力を解放できるかどうかにかかっているとも言えるんだけど」

「秘められた能力？」

そんなのあるのか？　さらなる能力が俺の中に？　一体なんだそれ。

「……勝利は紙一重。どっちに転ぶかは私にもわからない。お前の秘められた能力の正体が何なのかは私にもわからないけど、その潜在力を相当なものだと私は信じているわ。……だって、寄生根と互角の勝負をし、しかも撃退に成功しているんだから。……それは奇跡に近いことなのだから」

「でもそれは君と契約したから、力を得たんじゃ……」

王女は首を横に振った。

「前にも言ったかもしれないけど、私と契約したところでそれは不死の能力を得るだけで、戦闘力が上がるなんて便利なものじゃないのよ。所詮、中身はもとの人間のまんま、何も変わったりしないわ。それなのに、お前は寄生根の憑いた生物と互角以上の戦いを展開できたのは何故かしら？　どうみたって格闘技とかやったことなさそうな、ただのヘッポコ君なのにね。……お前、何か武道をやっていたのか？　まあ仮に武道をやっていたとしても、そしてそれが相当なレベルだとしても、あれ戦い、勝利することなど不可能なのだけど」

王女の問いに俺は首を振るだけだった。

武術なんて習ったことなど無かった。運動神経も人並み程度しかないしね。高校に入って授業で剣道をやり始めたばかりだ。始めたといっても授業でやっていたというだけで、部活動じゃあない。それも柔道か剣道かの二択しかなくて、剣道を選んだだけだから。

「……そういや、俺のご先祖にはかなり武術にたけた人が多いって聞いたことがあるよ。親父もよくは知らないけど何かの武術の師範クラスだって聞いたことがある」

「聞いたことがあるって自分の身内のことでしょう？　しかも自分の父親のことなのに。人間とはそれほどまでに肉親との関係が薄いものなのか？　」

「いや、昔から親父は自分のことはほとんど話さなかったし、聞けるような関係じゃ無かったんだ。正直、親父の仕事が何かさえ知らないんだよ。事業をやっているってことは知っているけど詳細はしらないし、教えてもくれなかったからね。もちろん小さいときには教えて貰っていたかもしれないけど、そんなの覚えてないから。俺も親父も、もともとそんなに話したりする人じゃ無かったし、よく分からないけど俺のことも疎んじてたようだから。そして今じゃ完全に絶縁関係だからね。聞こうにも聞けるわけない」

「そうか、それなら仕方ないわね。お前の複雑な家庭環境を聞いたところで戦力にはならないし、時間の無駄だし」

いやにあっさりと王女は納得した。

普通なら親の仕事を知らない子供なんてないだろうって言うんだけど……。今までそんなことを言ったらみんなそう聞き返してきた。紫音にだってそう言われたし。「お父さんと話さないっていうのは良くあると思うけど、そこまでって珍しいっていうか徹底してるよね」って。

「どうかしたの？」
王女は気付いたのか聞いてきた。
「うん。王女は俺が親父の仕事が何かさえ知らないのをそんなに変に思わないんだなって思ったんだ」
「人間の親子の関係がどうなのかなんて私にはわからない。そもそも私は人間ではないからな。比較などできないよ……それに私とて父や母と話した記憶すらないから」
一体どんな親子関係なのか気になったけど、なんだか辛そうな顔をしていたのでそれ以上のそのことを聞くのはやめた。
「とにかく、お前には何か秘められた能力があるんだろう。その素質を寄生根との戦いの時にさらに開花させることができればいいんだけど。……とはいっても、どうやれば発現させられるかは私にも見当がつかないんだから手の打ちようが無いわ。もう不確かなものを調べている時間はないんだから。なんだかんだで結局のところ、行き当たりばったりの運任せということか。全くの無策で挑まなければならないなんて最悪だわ。これがすべてを決するという勝負になるかもしれないのに……でも、それも仕方ないわね」
諦めたように言うと、ペットボトルのお茶を口に含んだ。
「うえ、やっぱり不味いわ。こんなのよく飲めるわね、お前達は」
と、またぼやいた。
俺の秘められた能力……。
あの心の奥底に潜んだ凄く邪悪な【意志】。
俺であって明らかに俺じゃない何かが、たまにおれの意識の表層に現れて俺の意志を支配することがある。その時、明らかに普段から比べると数段上の力が出る。それは戦いの中で知ったことだ。そ

の力をうまく使えれば明らかに勝機を掴む確率が上がりそうな気がする。あのときの力の増幅感・飛翔感は半端ではない。でも【あれ】の力を借りて戦ったとして、再び【あれ】を押さえ込むことができるんだろうか？　そう思うとその力に頼るわけにはいかないって思う。

それは自分が自分でなくなるんじゃないかという恐怖と、乗っ取られた後の俺が果たして人としての行動がきっとできないという確信めいた恐怖の二つの恐怖に怯えを感じるんだ。

俺は学校で蛭町達をぶちのめしたときに、その【あれ】が俺の意識の表層にまで上がってきて、その意志のままに俺が奴らに暴行を加えたとは結局、王女には言えなかった。

あの時は何とか引っ込んでくれたけど、今度はどうなるか分からない。

あの時、【あれ】がずっといたままだったら、俺は蛭町達を殺していた。それもただ殺すだけじゃなかったはずだ。徹底的に、そして残虐に解体していたはずなんだ。

俺に制御することが可能なのか？

最悪はあの力に頼らなければならなくなったりするんだろうか？

できればそれは避けておきたいけど、選択肢としては残しておかないといけないな。

俺は王女を守らなければならないし、寄生根は叩きつぶさなければならないんだ。

これ以上の犠牲者を出すことは耐えられないもんな。

俺自身が被れば済むことなら、すべて引き受けようじゃないかって思うんだ。

それは想いというよりは、誓いだ。

第３０話　呼び出し

そして、また夜が明けた。
悶々とした気分のままだったせいだろう、なかなか寝付けなかった。睡眠不足のためかかなり頭が重い、そして痛む。
ベッドは王女に譲り、窮屈なソファーで横になっているのも原因の一つだろう。
鉛のように重い疲労感が体を支配している。
それでもなんとか起き出すと、熱いシャワーを浴び強制的に体を目覚めさせた。
王女のためにコンビニでパンや弁当、デザートを買ってきて冷蔵庫に放り込むと机にメモを残した。

（朝はパンと牛乳もしくはコーヒー。昼は弁当。デザートやお菓子は適当に食ってくれ。飲み物はフルーツ系の飲料も買い足してる。）

王女は俺のベッドで丸くなって眠っている。前にちらっと言ってたような記憶があるが、本当に昼夜逆転の生活なんだな。目覚める気配はまるでなさそうだけど、起こしてしまったら可愛そうだ。そっと玄関から出て学校へと向かった。

通学途上の電車の中は、相変わらずの混雑。
学園都市には５つの高校と２つの付属中等部が設置されている。大学の付属高となっているところもあり、また学園都市内には主要企業が支店・研究所等を設置しそこへの就職にも有利となっていることから、近畿一円だけでなく、他地域からも生徒が一応集まって来ている。とりわけ中等部が設置されている高校は大学の付属校でもあるからエスカレータ式に進学でき、さらにいわゆる一流企業へ

の就職も約束されているからとりわけ狭き門となっている。まあ俺は高校からなんだけど。ちなみに妹の亜須葉はそのエスカレータ式の学校の中等部なんだけど。

それぞれの学校へと向かう中学生、高校生は普段と何も変わらぬ様子。

俺と同じ高校の生徒でさえ、普段と変わらず雑談をしている。それが俺にとって、その風景には違和感を感じるけど、それは事件の真相を知っているからだとすぐに思いついた。他の生徒達にとっては、廃校舎で起こった火災によって、それは不審火であったかも知れないけど、二人の生徒が煙に巻かれて死亡したという事実しか知らされていないのだから。たしかに一部の生徒からラブホテル代わりに使われているという事実があったから、二人を知らない生徒にとっては、日向寧々と如月流星の関係が噂された程度で、所詮、「やってる最中に火災に巻き込まれたかわいそうな連中」「学校からは立入り禁止措置がとられていたのにそれを無視して入り込み火災に巻き込まれたバカな連中」ぐらいの感想が交わされただけで、すぐに日常に埋没していくその程度のニュースでしかなかったんだ。

二人を知る生徒でも性的で卑猥な噂が囁かれるだけで、それ以上はタブー視されるために突っ込んだ議論など起こりようもなかった。

やがては時間が忘れさせるというだけの、ごくごく平凡な日常の一コマでしかないんだろう。

学校に着くと、相変わらず制服警官が生徒達を監視するかのように校門に立っている。

みんなはそれがもう当たり前のようになっているんだろう、さほど注意も向けず普通に登校している。

捜査はどの程度進展しているんだろう。それを聞きたくて仕方がないけど、どうせ教えてもくれないだろうから、ぼんやりと警官や

一緒に立っている生徒指導の教員達に挨拶をしながら学校へと入っていった。

教室の日向寧々の席には花瓶が置かれ花が添えられている。

今日は漆多も登校していて、自分の席について本を読んでいるのが見えた。

声をかけようと思ったけどヘッドホンをしていて音楽を聴いているようだ。息苦しい思いをしなくてすんだかと思ってほっとした。思い詰めたような顔をしているのが斜め後方からも見えたけど、「安心しろ、漆多。昨日お前を痛めつけ、今後の地獄を約束した連中は俺がボコボコにして二度とお前にちょっかい出せないようにしてやったぜ」と声に出さずに言ってやった。

一応気になっていたので、教室に来る前に蛭町達のクラスを覗いたが、６人とも今日は休んでいるとのことだった。

そりゃそうだよな。あんだけやられたら学校に来られないだろう。怪我をしたりしてるけど誰にも言えないはず。脅すにはなれている奴らも脅されるのにはなれていない。おとなしく布団を頭からかぶって家で怯えているんだろう。ざまー見ろって思った。これまで如月や他の誰かにやってたことがどれだけやられている側にとっては辛いことか少しは分かっただろう。まあ分かったところで許される物ではない。それでも知らないよりは奴らにとっては良い薬だ。

この警告をきちんととらえ、奴らがすこしでもまともになれば良いと思った。……こりもせず漆多にちょっかいだしたら今度は本気で殺してやるくらいの気持ちに俺はなっている。

力を手に入れたせいか、かつて無いほど攻撃的な気分になっている自分に少し怖いとも思っているから、まだ異常ではないんだと安心する。

椅子に座って軽く伸びをしたとき、クラス委員の佐奈（さな）　更（さら）に声を

かけられた。すぐに職員室に来るようにとのことだった。

「え？　誰が何の用事なの？　」

「佐藤先生が用事があるから来てくれだってさ」

理由も何も聞いていないとのことだった。

さて何だろう？　蛭町達を痛めつけたのがばれたかな？　それ以外は浮かばなかった。

面倒くさいな。

それでも呼ばれたからには行かないわけにもいかないし、俺は立ち上がった。

すぐに紫音が駆け寄ってきて、「何かあったの？　」と心配そうな顔で聞いてくる。

どういう訳か、いつでも真っ先に俺のことを心配してくれるのは紫音だ。学校ではどうしても孤立しがちだった俺の事をいつも気にかけてくれていた。だから余計に心配になるんだろうか。幼馴染の腐れ縁ということで、どうしても放っておけないんだろう。

それにしても、何を好きこのんでか、へたれの俺をいつもサポートしてくれてたからな。それについては感謝している。

でもいつまでも紫音の世話にばっかりなってもいられない。もうガキじゃないし、紫音だってほかにやらなきゃなんないことがいっぱいあるはずだもんな。心配なんかさせたくない。

「よく分からないなあ。テストの成績が悪かったからなのかなあ」

と答えるしかなかった。

薄々は思っていた事、ついにそれが来たんじゃないかって本当は思っていたんだけど。

職員室に入るとすぐに佐藤先生が反応した。立ち上がって俺のそばにやってくると、そのまま生徒指導室に津入れて行かれた。

佐藤先生がドアをノックすると部屋から「どうぞ」と声がした。
聞いたことのない声だ。
先生はドアを開けると軽く会釈をし、「月人柊を連れてきました。
……おい月人」と促すように顎をしゃくった。

第３１話　刑事と俺と

部屋は四畳半程度の狭い部屋だ。進路指導とかで普段は利用されている。
中央に小さいテーブルとソファーが並んで配置されている。
奥のソファーに二人のスーツを着た男が座っていた。どちらも３０代の男で、どちらも髪を短く刈り込み少し小太りだった。
そして一人の男はどこかで見たような顔をしている。
「じゃあそこに座って下さい」
その見覚えの無い方の男が座るように促した。
佐藤先生もドアを閉めると俺の横に腰掛けた。
「私は府警捜査一課の三叉目（さんさめ）と言います。こちらは菜下（なしも）」
そういって自己紹介をした。見覚えのある方の刑事は事件の翌日の朝俺が寄生根を探し回っているときに付近にいた男だった。どうりで見たことがあったはずだ。
俺はペコリと会釈をした。
「授業があるところ来て貰って申し訳ない。……ところでその眼帯はどうかしたのかい？」
「ちょっとものもらいができたんでつけているんです」
「ほう。そうなんですか……」
聞いておきながらあまり興味がないように三叉目刑事はつぶやいた。
「では、本題に入りますが、……月人君、すでに知っていると思うけど、君のクラスの日向寧々さんと１組の如月流星さんが亡くなった。我々はそれについて現在調べている所なんです。そこで生徒の皆さんにいろいろとお話を聞いているところで、今回、月人君にもわざわざ来て貰ったわけです。……主に確認作業だけなのでそれほど時間はかかりません」
事務的口調で刑事は話し続ける。

「二、三確認させてください。月人君は亡くなられた日向寧々さんとはお友達ですよね。如月流星君とは？　」
笑顔で問いかける三叉目刑事。そして隣で俺の動向のすべてを見逃さないかのような鋭い目線で見ている菜下刑事。彼らはどこまで知っているんだろうか？　そんな疑問を感じながらも平静を装い、俺は答える。
「日向寧々さんとは友達です。如月は、如月君とは全然交流がありませんでした。クラスも違うし、それに彼は転校生でしたから」
「日向さんとお友達ということはどういう関係ですか」
【ともだち】という部分を強調するように問いかけてくる。
「言葉通りです。中学が一緒でその頃からよく話しをする関係でした」
刑事は俺と寧々との間に恋愛感情があったかを確認でもしているんだろうか？
「わかりました。日向さんと仲の良かった……これは恋愛関係にあったかということの確認ですが、そういった生徒はいましたか？　もしくは如月流星君と日向寧々さんが付き合っていたということを知っていますか？　」
「日向さんと付き合っていたのは僕の友達の漆多です。如月君と日向さんが付き合っていたということはないと思います。もし付き合っていたとしたら僕が知らないわけ無いと思います」
どうせすでに寧々と漆多が付き合っているという事実は調査済みだろう。そして如月と付き合いが事実は無いことも知っているはずだ。なのにこんなことを聞いてくるとは。……そして、寧々が好きだったのは如月では無く、俺だったから。彼女に告白された自分だからこそこれははっきりと言い切れる。このことは誰も知らないんだろうけど。
でもそれは言えなかった。言うべき事ではなかった。
「そうですか。では次に確認させてください。事件のあった夕方、あなたはどうしていましたか？　」

警察はどこまで知っているんだろうか？　ここでの回答は慎重を要するような気がした。
「もともと僕は部活をやっていないんで、授業が終わったあとは教室で少し残っていて、その後ぶらっとしてから帰ったと思います」
すべてでたらめだ。寧々に誘われて廃校舎に言ったとは言えなかった。
菜下刑事がさらさらとメモを取る音が部屋に響く。
「何時だったか覚えていますか？」
「良くは覚えていませんが家に着いたのは7時だったと記憶していますから、6時には学校を出たと思います」
学校を退出するときには改札呼ばれる駅にあるのと同じようなゲートを通らなければならない。当然その記録は残るから嘘をついたらすぐにばれる。でも如月が廃校舎に現れた時間を考えるとその時間あたりのデータは奴の封絶の影響でシステムダウンをしていた可能性が高いと思い、ある意味賭けに出た感じで答えた。
ウソがばれたら確実に疑われる。
二人の刑事が顔を見合わせる。
それを何事もないように見ている俺の心臓は恐ろしいほど高鳴っていた。
刑事達は頷くと再び話し始めた。
後は如月と寧々が付き合っていた可能性があるかどうかとか、廃校舎に行ったことがあるかどうか、そこがホテル代わりに使われていたというのは本当か？　知っていたか？　他に何か知っていることはないかなどのありきたりの質問が形式的になされていった。
俺は言葉を選び慎重にそれらの質問に答えていく。今日この場で答えた事はきちんとメモをしておこう。警察は何度も同じ事を聞いてその都度前の証言とに矛盾が無いかを調べ、あればそこを突いてさらなる矛盾を引き出すはずだから。
「ありがとう。協力を感謝します。今日、私たちに聞かれたということは他の生徒の皆さんには秘密にしておいて下さい。よろしくお

願いします。……また何か思い出したことがあったら教えて下さい」
そう言って刑事は名刺をくれた。
俺は立ち上がると二人に会釈をして部屋から出ようとした。
「また何か聞くことがあるかもしれないけど、その時はよろしく」
意味ありげな台詞を言われ、やっと解放されたんだった。

ドアを閉めると思わずため息が出た。
「お疲れ。なんだか俺まで緊張したよ。まあ気にすんな。刑事さんはみんなに確認をしているだけだからな」
そういうと一緒に入ってくれていた佐藤先生は、大きく伸びをしながら歩き去った。

漆多や他のクラスメートも尋問されるんだろうか。
警察は事故と事件どちらに傾いているんだろう。……そういや刑事さんは所属を名乗らなかったな。ちゃんと聞いておけばよかった。

しかし、警察が仮に事件だと気づいても、解決することは不可能だ。やれたとしても、せいぜい冤罪を生み出すだけだ。
相手は人間じゃない。そんなあり得ないことを警察が信じられるはずがなく、結局適当な容疑者をでっちあげるしか解決策はないんだろう。
今回の事件に限っては、人間では解決することはできないし、知ることさえできないだろう。

俺は思った。
必ず事件にカタをつける。俺自身の力で。
この事件、いやそんなものじゃない。これはあまりに危険な事なんだ。ただの殺人事件とはレベルが違う。
漆多も紫音も、他の誰も巻き込むわけにはいかない。これ以上の犠牲者はこりごりだ。

本気で思っていた。

第３２話　罠

やはり、その日も寄生根を発見することはできなかった。

昨日の衝撃は未だにクラスの生徒達に影を落としてはいたが、生徒達の間では事件性は低いらしいとの噂になっているらしい。たまたま運が悪かった二人が火災に巻き込まれて死亡したということで落ち着きそうだった。

ニュースも昨日火災について報道したものの、それは単なる火災によって生徒が死亡したと伝えたのみで、続報は一切なかった。

学校と警察の情報操作がうまくいっているってことなんだろうか。

警察が学校に残っているのは火災原因がはっきりしないということで念のために調べているらしい。

警察や先生に見つからないように気をつけて校内を捜索することは思った以上に辛い作業だった。そしてそれはすべて徒労に終わったことから、心底ぐったりとしてアパートに帰りつく。

王女には今日も成果が無かったことを伝えると、想定通りとでもいうように頷くだけだった。

時間だけが無為に流れていく気がした。でも何もないということは犠牲者は出ていないと言うことだから、それはそれで喜ばしいと言うことでもあるんだけど、何か落ち着かないいいようのない焦りが日々募っていく感じだった。

何か終わりへのカウントダウンがすでに始まっている、そんなとてつもなく厭な感覚があったんだ。

さすがにコンビニ弁当ばかり食わすわけにもいかないから、王女を連れて外食に行くことにしたんだ。……といってもファミレスに

連れて行っただけなんだけどね。
　王女の好みがよく分からないし、ファミレスでメニューを見て決めてもらった方がいいかなって思ったんだ。ずっと部屋の中に閉じこもりっきりだから、少しは気分転換にもなるかとも思ったんだ。
　実際、久しぶりのお外なので、王女はいつもより少し、はしゃいでいた気がする。
　ファミレスに入ると彼女はワイワイはしゃぎながらメニューを選び出した。
「何を頼んでも良いのか？　お前、お金はあるのか？　ドリンクバーって何だ？　シュウは何を頼むの。何が人気なんだ」
「うん、好きな物を選んで良いよ。お金だって姫が頼む分なら全然大丈夫だから気にしなくていいよ。好きなだけ頼んで。それとドリンクバーはあそこのものが飲み放題だ。ここの一番人気はハンバーグだよ」
　矢継ぎ早な質問に答える。
　メニューを見ながらあれやこれやと話しかけてくる王女はとても楽しそうだ。それを見て俺も思わず微笑んでしまう。
　ひとときの安らぎなんだろうか、これは。

　結局、食べられない数の物を頼み、残した分は俺に押しつけて満足げにダージリンティーを飲む王女を俺は恨めしげに見つめている。
「残したらもったいないから、全部食べるのよ」と残すことは許されなかった。頼んだのは王女なのに。
　完食はしたものの、お腹が破裂しそうなくらいぱんぱんにさせられてしまった。
「うー気持ち悪い……」
　会計をしながらも腹が痛かった。
「さあ、帰ろうか」
「ちょっとコンビニってところにも寄りたいんだけど……、あ、あ

そこだわ」
と王女は言うとさっさと歩き出す。
「ちょ、ちょっと待って……」
お腹を押さえ、猫背気味に彼女の後を追う。

唐突に携帯が鳴り出した。
ポケットから取り出しディスプレイを見る。
【漆多伊吹】
俺は一瞬固まってしまった。
どうして漆多から電話がかかってくるんだ？
すこし前ならごく当たり前のことが、今は凄く違和感を感じるし、電話に出るのが鬱陶しい、面倒くさく感じる。
……いや本当は怖いんだ。
「もしもし」
指が震える。声が震えるのが自分でも分かった。
何をそんなに緊張しているんだ。

少し離れて歩いていた王女が俺の異変に気付いたのか、慌てて戻ってきた。
「どうかしたのか、シュウ」
俺は彼女に静かにするように目で合図をした。彼女も俺の意図に気付いたのか、頷く。

「つきひと……、俺だよ。聞こえるか」
漆多の声だった。疲れ切った声だった。

「ああ、聞こえるよ。どうしたんだ」
何故今電話してきたのか、その意図が分からず、俺は探るような口調で話す。

「すまない……。ちょっとお前に話したいことがあるんだ。……今から逢えるかな」

「……電話じゃダメなのか？　」

「ああ、直接逢って話したい……、いや聞きたい事があるんだ。いいかな？　」

「今からなのか……」

と俺。

「……今からじゃダメか？　」

と返してくる漆多。

俺はとっさに断る理由が見つからない。

「それは、日向の事か」

俺はおそるおそる問う。

「……そうだ」

一呼吸置いて、漆多がはっきりと答えた。

「寧々のことでお前に聞きたいことがあるんだ」

ついにこのときが来てしまったのか。ずっとずっと避けてきた事。それがついに来てしまった。それでも俺は来るべきものがついに来たということである意味ほっとしていた。

「分かった。じゃあ今から会おう。どこに行けばいい？　」

俺の問いかけに漆多はある場所を告げ、唐突に切られた。

それは、俺がこの【通称】学園都市に来てから一度も行ったこと

の無い場所だった。

第３３話　移動する俺は不安とともに。

そこは学園都市の南のはずれに位置する、まだ開発中の地域だった。

正確にはまだ学園都市に編入されていない地域だ。

学園都市は三方（北・南・西）を山にそして残りの一方（東側）を川に囲まれている。そして、漆多が待ち合わせに選んだ場所は俺の住んでる居住エリアからは直線距離で１０キロほど離れている、山の麓にあるあたりだ。まだ開発中の編入前エリアだから、当然、学園都市の公共交通機関網からはずれていて、最寄りのモノレール駅からはタクシーを使用するしか無く、２０分程度の距離だ。

携帯で地図を呼び出す。

地図から読み取れるのは病院と田んぼだけしかなかった。その病院名をさらに検索すると５年前までは営業していた特別養護老人ホームで、不正受給問題とかで経営者が逮捕された。その結果、彼の経営していた会社は倒産し、あっというまに債権者達に差し押さえられた。違法建築だったせいもあり買い手もつかず、現在は廃墟となっているようだ。

「こんな場所に呼ぶなんて……」

俺はつぶやく。

「漆多って人はどこに住んでいるの？　」

いつの間にかそばまで来ていた王女が問う。

「漆多は自宅組だから、学園都市の外から通ってきてる。だからあいつが指示してきた場所には何の用事も無いはずなんだけど」

「生徒はみんな外から通っているのか」

「学園都市に住んでいる人間はみんなこのあたりの居住地エリアにマンションを借りているか、自宅を持っているかのどちらかだよ。学校は学区エリア、企業の研究施設は研究エリア、住居と商業地は居住エリアにきっちりと別れているだ。目的以外に使用することは禁止事項になってる。高校生までだと半分は学園都市の外の自宅から電車通勤なんだよ」

王女はだいたい理解したようだ。

「だったらどうして、漆多はそんな場所を指定してきたのかしら」

俺が感じている疑問を彼女も指摘してきた。

「それは電話だけではわからない。確かにあんな場所に呼び出すのも、しかもこんな時間なのも変だとは思うよ。何らかの意図があるのは間違いないだろうね。……でも分かってることは一つあるんだ。それは俺はアイツに会わなくちゃ行けないこと。そして話さなければならないことさ」

王女は腕を組んで少し考え込む。

「……罠ね。間違いなく。漆多が意図したのかそれとも別の誰かかは分からないけど、悪意があるのは間違いないわよ、それでも行くの」

「もちろん。……漆多が俺に会いたがってるのは間違いないから。今まで俺はアイツを避けていたからね。もう逃げたりしない」

「まったく、仕方ないわね。じゃあ、私もついて行ってあげるわ。今のお前の力なら何も問題ないとは思うけど、日々の生活は退屈だ

し刺激が欲しかったところなの。なんだか面白そうだわ」

単なる興味本位で行ってたのか……。俺は少し呆れた。単なる暇つぶし気分なんだろうな、この子にとっては。俺にとってはかなりしんどい決断なんだけど。

「姫は気楽でいいな。俺はかなりタフな状況だと思ってるんだけど」

王女は笑う。

「どうせ漆多って子がそいつを虐めてる連中に拉致でもされて、お前を呼び出そうとしているだけでしょ？　この前お前がボコボコにしたっていう連中の仲間でしょうね。仕返しをしてやろうって企んでるんでしょう。……しかし馬鹿な連中がいるものね。あきれてしまうわ。人間が何人かかってこようが、安心しろ、お前なら負ける要素は無い」

ああ、そういうシチュエーションもあるんだと俺は今更ながら指摘されて気づいた。

蛭町達が俺にやられた仕返しに漆多を脅して俺に電話をさせ、呼び出そうと考えたという説もあり得る訳か。

「そうでしょう、シュウ？　」

「あ、うん」

しかしそれはあり得ないはずだ。俺は本気であのとき、あいつらに言った。漆多にこれ以上ちょっかいを出したら殺すと。あれだけ痛めつけてやったのにそれが本気だと思えない奴がこの世に存在するとは思えない。それほど痛めつけたんだ。だから王女が指摘するようなことなんてあり得ないって最初から考えもしなかった。だから余計に驚いたんだ。そこまで懲りない連中がいるなんて想像もつ

かなかった。
でも、できればその方がいいかもって思った。

「とにかく行くよ」
そう言って俺は一番近いモノレール駅へと向かった。
途中、コンビニでオモチャのフィギュアを2体買わされてしまったけど……。

第３４話　呼び出された場所　ここは、普通じゃない。

モノレールの駅を下り、タクシーを拾うと目的地を告げる。
運転手は少し怪訝な顔をしたが、何も言わずに車を発進させる。
研究エリアと居住地エリアのちょうど境目をタクシーは南下していく。
だんだん町の灯りが少なくなり、道路の街灯だけしか見えなくなってきた。それ以外は完全な暗闇。東の方角に企業の研究室らしい建物の明かりが見えるだけで、居住地エリア側は、もはや畑か山しか無い状態なんだろう。

道もだんだん狭くそして舗装も荒れてきた。
路面の振動が結構気になるようになってきたあたりで車が停止した。
「お客さん、つきましたよ。３，３００円です」
ぶっきらぼうに運転手が言う。

「あ、はい」
俺はお金を払うと車を降りた。後を追って王女も下りる。

「ねえ、お客さん。私、待ってなくていいのかな？　ここ何もないし、何よりも人は住んでませんよ。仮に電話でタクシー呼んだって、こんなところへこんな時間には来てくれないかもしれませんよ。どうすんです？　帰り大変ですよ」
商売上お客のことが気になったのか運転手が問う。

「ちょっと友達が待っているんで時間がかかると思うんです。もし必要だったら連絡します」
と俺が言うと、彼は名刺を差し出した。

礼を言ってそれを受け取ると、「こんな所に友達なんて待ってるんですかねえ……」と独り言を言いながら、運転手は車を発進させていった。

車が去ると、周りには街灯や家の明かりが全くないことが分かる。もはや完全な暗闇があたりを支配している。民家も存在していないし車が通るとはとても思えない。

しんしんと冷え込む夜の空気だけがあたりを満たしていた。

俺は眼帯を外す。

すぐに視界がクリアになっていく。

わずかな月明かりがあたりを照らすだけ。

肉眼では、ほとんど何も見えない。遠くにうっすらと建物らしき物の影が見えているのは分かる。それ以外は荒れ果てた畑と山が見えるだけだ。民家らしきものはそもそもここには無かった感じだ。

タクシーの中でネットにつないでこのあたりを調べたら、居住エリア拡張工事の予定地にはなっているようだった。ただ、完成は未定となっている。つまり荒れ地で誰も住んでいないということだ。

こんなところで一人で待つなんてまともな人間の感覚だとあり得ないな。現地に来てみて初めて思った。

俺は眼帯を外した。

それまでは薄ぼんやりとしか見えなかった景色が一気にクリアになりすべてが映し出される。

「こんな所に友達を呼び出すなんて、お前の親友というのも変わった奴だな」

王女が呆れたような顔をしている。

「さて、どうしてなんだろうね。やっぱり漆多の意志ではないのかも知れない」

だとすると急がないと行けない。漆多は拉致されている。どんな目に遭わされているか分からないから。

「姫、ちゃんと俺の手を握ってるんだぞ。迷子になったらこんな所じゃシャレになんないよ」
俺はこの闇夜に明かりなしで来た準備不足を後悔した。ここまでの暗闇とは思っても見なかったんだ。せめて街灯くらいはあるもんだと思ってた。これじゃあ王女は何も見えないだろう。
「心配するな。私にとっては夜の闇のほうがより近しい存在なのだから。視界は遙か彼方まである。お前は何も見えないと思っているようだけど、お前以上に見えているのよ」
「そうなんだ」
当たり前といえば当たり前の事を知らされて思わず納得した。
彼女を見るとその双眸は青白く光っているようにさえ見える。俺だって、片眼だけだけど、この暗闇でも昼間と同様に見えるのだから、当然彼女だって闇夜は闇夜ではないってことだったんだよね。
「了解。……じゃあ、あそこに行きますか」
と、俺は山の麓、今いる場所から数百メートル離れた所に建っている円柱型の４階建ての建物を指さした。
あそこが漆多が待つと電話をしてきた場所。

会員制特別養護老人ホーム「慈しみの郷」。

近づいていくと思ったより新しい立派な建物であることが分かる。山を切り開いて作った平地に４階建ての建物と隣に平屋の建物が何戸か並んでいる。門構えも立派で並木道を歩いて建物にたどり着くような造りになっている。
現在は周囲をフェンスでぐるりと囲まれていて、門はしっかりと閉じられ、チェーンが幾重にもまかれそこに大きな南京錠がはまっている。そして大きな看板が立てかけられている。
【管理者に許可無く立入りを禁止します】と赤文字で書かれている。
しかし、少し迂回するとフェンスの網が何者かによって切断され、

ちょうど人一人が入られるようになっているのを見つけた。
俺と王女はそこから中へと入っていく。

敷地の中はしばらくの間、人の手が入っていないようで、かつては綺麗に整備されていたであろう並木道は荒れ果て、木々の枝は伸び放題、石畳の隙間からは雑草が生えだして石畳を持ち上げ、通路をいびつなモノへと変貌させている。
４階建ての建物も経営者が撤退した後は無人となり廃墟巡りの連中や地元の不良達のたまり場になってたりしてたせいか、あちこちの硝子が割られ、壁に落書きもされている。

建物に近づくと俺は電話をかけた。

「もしもし」
と５回目のコールで漆多が出た。
「月人だけど、今建物の玄関に着いた。どこに行けばいいんだ？」

「ああ、もう来たのか。思ったより早かったな……」
無音のまま、少し間が開く。背後からガサガサ音が聞こえてくる。ノイズか？
「玄関から……自動ドアは壊れていて手で開けられる、入って、エントランスのすぐ左に階段がある。……そこから地下に来てくれ。そこで待っているから」
そしてすぐに切れた。俺の質問を拒否するかのようだ。

「せっかちな奴ね、お前のお友達は」

「そうだね……」
漆多が話す向こう側からは、彼以外の気配が明らかに感じ取れた。もはや確定的だ。漆多は拉致されているということが。

俺は少し考える。

「シュウ、何をしているの？　どうせ馬鹿なことしか考えてないんでしょうけど」

「馬鹿って……。あきらかな罠だから、どうしたものかって思っているんだよ。漆多は明らかに誰かに脅されて俺に電話をしてきている。敵は何者か、何人いるのか分からない。おまけにそいつらは準備万端だからね。どういった対策を取っているかわかったもんじゃない。無策のままでいったらヤバイかなあって考えるだろう」

王女は不思議そうに俺を見る。

「何を言っているの？　たとえ何人いたってお前の力ならそんなのは物の数に入らないだろう？　所詮人間だ、相手にならない。さっさと行って虫けらのように全員ぶちのめして、友達を救出して帰るだけだろう」

「でも、漆多が人質に取られているんだ。万一ってこともありうるよ」

「それならお前がやり合っている間に私が救出してやろう。式鬼を使えば人間ごとき皆殺しだ」

そう言って王女は俺に買わせたフィギュア2体を見せた。

ヒーローものの主人公のキャラクターとライバルのキャラクターだ。どちらもヘルメットの様な仮面をつけてぴっちりとした戦闘スーツを着込んでいる。そして右手に刀を持っている。いわゆる光剣だ。腰のホルスターには銃まで持っている。

こいつらが王女の魔力でサイズアップし、動き出すというのか。如月と戦った時のポ〇モンキャラクターより明らかに強そうだし、凶暴そうだな。

「了解。何かあったらフォローを頼むよ。……じゃあ行こうか」

第３５話　漆黒の遥か向こう側、敵陣のただなかへ。

ごく一般的な一枚ガラスの自動ドアに隙間があったので、そこに手を引っかけて扉を開く。

高さは２メートルほど幅は１．８メートル、厚さは１センチメートルほどのガラスの扉は、重さをまるで感じさせず、ほとんど抵抗なく開いた。有る意味拍子抜けした。何年も前から人の手が入っていない建物なんだから立て付けもガタが来ていて玄関ドアも開きにくいのかと思っていたんだ。

玄関ホールにはまだわずかに月の光が届いているため、肉眼でも何かあったらぼんやりと輪郭が見えるんだろう。しかしそれ以上奥へと進むともはや完全なる闇が支配していた。

建物内には隙間風が吹き込んでいるのかカタカタという音が時折聞こえる。

「地下室って言ってたわね。さっさと行きましょうよ」

俺は彼女を制し、小声で囁く。

「こんな真っ暗な中にライトも無しで平気で入っていくなんてどう考えてもおかしいでしょ？　【普通の人間】なら何も見えないはずだよ」

「そうなんだ。おまえたちは……なんか、うん、めんどくさいわね。手続きをいちいちふまなくたって、さっさと行ってさっさと片付けちゃえばいいのに」

ブツブツ文句を言う王女は置いておいて、ポケットから携帯電話を取り出す。

黒いボディに４インチディスプレイ。そしてタッチパネルだ。

これは学校から支給されているもので、大きな液晶画面が自慢の

最新型だ。学校の出入りや各教室の電子キーの解除、本の貸し出し、購買や食堂での支払いも可能。当然、学校の内外では学生証という身分証明書にもなるし、学校からの様々な連絡もすべてこの端末に送られてきてペーパーレス化に大貢献している機器なんだ。通話・通信料は激安で、当たり前だけどネット閲覧も快適で、当然ながら学校側がセキュリティ権限を持ち閲覧の制限をかけることもできるんだ。噂ではＧＰＳ機能もついているからその気になれば生徒の所在地も検索できるそうだ。おまけに通話通信履歴もすべて学校が把握しているとかしないとか言われている。

ちょっとよろしくない機械なんだけど、これが無ければ学校での生活はできない仕組みになっているから全生徒は所持せざるを得なくなっている。

なんせ、学校や教室に入れないんじゃ話にならないからね。買い物だってキャッシュレス。もちろん上限は生徒の銀行口座の預金額が上限となるから使いすぎも無くて安心。ちなみに銀行は指定されていて、学校の出資社でもある。

「この携帯はライト機能や防犯ブザー機能がついているから、こんな暗闇もへっちゃらさ。おまけに１０気圧防水だから風呂に落としても大丈夫。対ショック機能もあるから、落としたってそう簡単には壊れないタフさなんだ」

誰かが聞いているのを前提で王女に状況説明する。

「へえ、……何がすごいのかはわからないけど、まあいいわ。さっさと行きましょう」

二人は玄関通路を抜け、ホールへと出た。

そこは建物１階の半分近くを使用した巨大な待合いとなっていて、かつては高価な調度品とかが置かれていたんだろうと推測できる。中央付近には受付があり、向かって左隣に２台のエレベータの扉がある。

当然、電気が来ていないから、それは使用できない。
携帯のライトを照らし、その隣にある階段へと歩いていく。床は基本的には埃っぽいけど、何人もの人の出入りがあったのがその埃の積もり具合でよくわかる。人の出入りのあった場所だけ、埃が無くなっているんだ。
最近も地下へと行っている人間がそこそこいるようだ。

「さて、階段を下りていきますか」
そういうと王女の手を握り、階段をゆっくりと下り始める。王女もおとなしく付いてきている。わざと蹌踉けて俺にしがみついてきたりもした。
むむん……。
階段はライトを消せば完全な闇に包まれるほど濃い黒色だ。
今のところ、先ほどまであった人の気配がもはや感じ取れなくなっている。
意識集中し辺りに探りを入れてみる。
……先ほどまであった気配はどうやら無くなっている。ただの気のせいか、もしくは既にどこかに去っていったのか？
連中は息を潜めて部屋で待っているのかもしれないな。
そんなことを考えながら階段を下りると、すぐに地下一階のフロアに降り立った。

中央にエレベータと階段があるこの建物の地下は、階段を中心に扇形に部屋が構成されているかのようだ。
階段を出たすぐのフロアを取り囲むように、同じようなドアが円を描いてずらりと並んでいるのが見える。扉の向こうはさらにいくつもの小部屋に分かれていたりするんだろうけど、それをいちいち見て回る暇もないし、あまり興味もない。
「ウルシダという奴はどこにいるの？　」

「ちょっとまって。電話してみるから」
といって携帯の画面をみると【圏外】表示が出ていた。……地下だから当然か。それに一応は病院なのだから電波を遮断する措置がとられているのかもしれない。
電話が使えないんなら仕方ないな。とれる方法っていえば音声による呼びかけしかないだろう。

「おーい、漆多ぁー。俺だ、月人だ。どこにいるんだ」
声を張り上げて叫ぶ。
建物に声が反響する。わんわんわん。

少し間をおいて反応があった。
コツコツと地下に響く足音がかすかに聞こえる。

ガチャリ……。
俺たちが立つ場所から左手のほうにある扉が、金属が擦れる耳障りな音とともにゆっくりと開く。同時に明かりが漏れてくる。
ドアの向こう側から手が伸びてきて、こちらに手招きをする。
「こっちだ、こっち」

ライトの光で向こう側がよく見えない。誰かが立って手招きしているのだけはわかる。
くぐもった弱々しい声ではあるけれど、声の主が漆多であることは間違いない。
俺は扉の中へと入っていった。
携帯のライトで照らしてみる。部屋の奥にはいくつもの扉付きのが並んでいて視界を遮る。
どうやら倉庫だったようだな……。
部屋の全体像を見るために俺たちは部屋の中央へと歩む。

第３６話　尋問

刹那！

背後のドアのほうでガチャリと音がして扉が閉められ、と同時に前方の部屋の奥から強烈な光が放たれてきた。それがいくつかのライトの投光だとすぐに分かった。しかし、今まで暗闇になれていたため、その光に思わず目が眩む。

俺は慌てて外していた眼帯をつけ直す。

ほんの一瞬の時間だったと思う。

俺が背後を振り返ると、ドアの前には二人の男が立ちはだかっていた。顔を見ても、そいつらには見覚えがない。

「うぉへぇやらぁぁらぃ」

下卑た笑いが聞こえてきた。そして、その声には聞き覚えがあった。

「蛭町……か」

胸くそ悪い嗤いを顔に貼り付けたまま、奴はライトの向こう側から歩き出てきた。

一人の男を引っ立てて……。

それが漆多であることはすぐに分かった。

全裸で後ろ手に手錠をされ、足首もロープで縛られている。全身には殴られた跡があり、引っ立てられながらも痛みをこらえているのか時折顔を歪める。

むき出しになった局部を隠そうとしているのか腰を屈め、足を内

股にしながら歩く。しかし恐怖のせいだろう、そんなことをしなくても彼の局部は極端に縮こまり、陰毛の中に隠れてしまっていた。
よく見ると彼の足を伝って白と赤、そして茶色の混じった液体がヌルリとたれ落ちていくのが見えた。……あれは、なんだ？

蛭町と一緒に4人の男が歩み出てきている。
蛭町とドアのところにいる男を入れて計7人。蛭町以外は学校で見たこともない連中だ。
リーダー格の男は見た目からして大学生くらいじゃないだろうか。あとの3人は俺とそう年代は変わらない感じ。残りの2人はまだ中学校に入ったばかりのようで顔に幼さが残っている。。
こいつらみんな一見、普通っぽい格好をしているから威圧感は感じない。どちらかと言えばまじめそうな奴らばかりだと思ってしまうだろう。でもよくよく見ると、どいつもまともじゃない眼の色をしていることが分かる。

第一印象は危険を感じさせないが、その笑顔に見えるその瞳の奥底には例えようのない獰猛さ凶暴さを隠しているんだ。
コンビニでたむろしている連中のほうが可愛げがある。

「月人……すまない」
折れ曲がった鼻が痛々しい漆多が泣きそうなうめくような声で喋った。「ぐめんよ、仕方なかったんら。お前を呼ばないと俺、俺、こいつ……蛭町君達にメチャクチャにされれ、いや、されそうになったんら」
あまりに惨めな顔をして俺を見る漆多。きちんと言葉を話せなくなるくらいまで殴られたりしたのか？

俺はどういえば良いか分からない。友人を哀れに思うと同時に、性懲りもなく同じ事をした蛭町達を許すわけにはいかないと思って

いた。

「お前ら……なんて事しやがるんだ……。お前らが漆多を脅して俺を呼び出したのか？　早く漆多を解放してやるんだ。あれほど念押ししたっていうのにお前らは分かってないようだな」

少し凄みをきかせて奴らを睨んでやる。

しかし、蛭町達はニヤニヤと薄気味悪笑いを浮かべるだけで何もしようとしない。

どういう事なんだ？　外の連中は知らない奴らばかりだから仕方ないとしても、蛭町には俺の強さを嫌というほど分からせてやってるはずなんだけど。馬鹿だからすぐに忘れちゃったのか？　んなことは無いよな。

「ウン、相変わらず良い感じだね、月人君。きちんと言っておくよ。俺たちが漆多を脅して電話させたワケじゃない。……すべて彼の意志なんだよ。彼が君を呼びたいっていったから、俺たちにも異存がないから従っただけだよ」

「ふざけるな、そんな訳ないだろう。お前ら寄って集って漆多にこんな目に遭わせて……。そうだろう？　」

俺は漆多を見る。しかし即座には反応が返ってこない。どういう訳か俺から眼を逸らす。そうして呟くように喋ったんだ。

「……蛭町君が言っているのは本当だよ。お前を呼んだのは俺の意志だ。殴られたりして無理矢理電話させられたんじゃあない」

「どうしてなんだ？　」

「それは、……それは」

何かを言おうとして躊躇するかのように彼は口籠もる。本当は聞

きたいのにそれを口に出すことを憚っているような沈黙。黙り込んでしまった。

「仕方ないなあ」

そういって蛭町が割ってはいる。「漆多君はお前に聞きたい事があるんだよ。でも、お前とは親友らしいからな、なかなか面と向かって言えないみたいだ。だから、聞いてやる。月人、日向と如月が火災に巻き込まれて死んだあの時、お前はどこにいたんだ？　火災は夜に発生したみたいだけど、お前はその時どこにいて何をしていた？　」

いきなりそんなことを聞かれて動揺を隠すのに必死になった。漆多もそばにいるんだ。うかつなことは言えない。

「……その日は放課後、さっさと帰った」

「学校は何時くらいに出たんだ？　」

「時計なんか見てないから何時に学校を出たかは、あまり覚えてないよ」

「まあそうだろうな、じゃあその時はまだ明るかったんだろうな」

「ああ、部活もやってないから暗くなるまでいる理由もない」

「ふふん。すぐに家に帰ったのか？　」

「いや、……コンビニで晩飯買ってからだから、すぐじゃない」

「じゃあ家には何時頃に帰り着いたか覚えているか」

「さあ、はっきりとは覚えてないけど、……たぶん8時には帰っていたと思う」
嘘を言っている事がばれないように曖昧な調子で答える。本来なら蛭町なんてぶちのめしてそれで終わりなんだけど、漆多がいるからいきなりの行動はとれない……。

「つまり、月人。今までの証言からすると、お前は放課後少しぶらついてから日が暮れる前には学校を出て、途中コンビニで買い物をし、家に着いたのは8時頃ということでいいな。じゃあ次の質問だ。その日の放課後、日向寧々と逢ったか？」

「……いや、逢っていない。彼女は授業が終わったらすぐにどこかに行ったんじゃないか。俺が帰る時には教室にはいなかった」

「間違いないな。……放課後、彼女には逢っていないと断言できるな、天地神明に誓って」

それは明らかに嘘だ。でも俺は、
「ああ、逢っていない」と断言した。漆多が疑いの目で俺を見ているからだ。

「よっし。これではっきりしただろう？　漆多。フフン、お前の親友は大嘘つきだってことがな！」

第３７話　暴き出される真実

「何を訳の分からないことを言うんだ？　お前、頭おかしいんじゃないのか」
そう言って漆多を見るが、彼は眼を逸らした。ちらりと盗み見る彼の顔には疑いの色が濃厚になっている。
親友が俺を信じてくれないことにショックを感じながら、必死で弁解しようとする。
「何を根拠に嘘を言ったっていってるんだ。ふざけるなよ」
「クックックック……。月人、俺は須佐野から聞いたんだよ」
勿体ぶって言う蛭町の言葉に言いようのない不安を感じる。須佐野は俺たちの通う学校の教頭だ。
「先生は立場上、警察からも事情をいろいろ聞いていたようなんだよ。そんで、訳ありで俺の親父は教頭とはツーカーなんだよな。で、いろいろ事件のことは教えてもらってるのさ」
俺は顔面蒼白になっていないだろうか？　俺の顔には動揺が出ていないだろうか？　俺の眼は泳いでいないか？
「お前は夕方学校を出たって言ってたな。……学校からの出入りはゲートシステムで管理されているっていうのはお前も知っているだろう？　ふふん。須佐野は下校者リストを持っていてな、機械が一時ダウンしていたみたいだが、午後７時までのデータはしっかり残っていたんだよ。お前は日暮れまでには学校を出たと言った。あの日の日没は６時１２分だ。当然、システムがダウンする前なんだよな。当然リストにはお前の名前が載っているはずだよなあ……」
そして蛭町は俺を見、仲間を見、王女を見、漆多を見、再び俺へ

と視線を戻す。
「ＯＨ！　Ｎｏ！！　ナンテコトデショウ！　アリマセーン！！
オ前ノ名前ハ、しすてむだうんスルマデアリマセーン！　オ前、嘘ツイテマスネ」
ふざけた調子で蛭町は戯けてみせる。

「そ、それは……。システムの調子が悪くて俺をカウントできなかっただけだろう、そうに違いない」
自分で言いながら嘘くさいと思う。学校のシステムは最先端技術で構築されている。サポート体制も最高レベルだからそうそう故障もしないし、仮にしたとしてもすぐに復旧する。おまけに予備のシステムが何重にも構えているからダウンなどしないんだ。
ダウンしたのは寄生根の封絶の影響なんだから。

「ほうほう。お前は少なくともシステムダウンした後でないと帰っていないわけなんだな。で、さらに！！　この写真を見てくれ」
そういってポケットから1枚の写真を取りだした。
そこには歩いている俺の姿が映っている。
日付は寧々が殺された日、王女と出会った日、如月流星と戦った日。そして時間は午後5時３０分。
言葉を失ってしまった。
その写真が如実に真実を語っている。
……俺が廃校舎へ歩いていっている姿を鮮明に捉えた写真だったんだ！
そしてさらに、蛭町はもう一枚の写真を取り出す。
そこには同じように廃校舎へと向かう寧々の姿があった。時間は5時。
「ちなみに、このカメラは廃校舎側から撮影しているんだよな。学校の生徒なら、みんな知ってる。この道は一本道で、この先には廃校舎以外何も無いんだよな。さてさて、嘘つきの月人君、君はどう

答弁するのかね」
しばらくの沈黙。何も言えない。漆多を見ることもできない。どうしたんだよ……俺は被告人席に立たされている。蛭町達をぶちのめしにきただけなのに……。

「そ、それは……」
言葉に詰まる。本当の事を言うべきか、それとも誤魔化すべきか。まだ決定的じゃない。決定的じゃないからなんとか誤魔化せるんじゃないのか？　そんな誘惑に駆られそうになる。
でも、そんなの駄目だよな。今まで隠してきたのも駄目だけど、この期に及んでまだ嘘をつこうなんて無理だよ。嘘に嘘を塗り固めたってすぐにぼろが出るだけだ。
それにこれ以上、友達に嘘はつけない……。嘘がばれて友達を失うより、本当の事を告白して友達を失う方がいい。
「実は、」
俺が告白しかけた時、かぶせるように漆多が唸るような声を出す。
「もう、嘘はやめろぅ。……全部、蛭町君から聞いたんらよ。彼のお父さんは警察にも顔が利くみたいれ、いろんな情報を知っているんだ。そして何もかも教えてくれた。写真も見せてくれらんよ。……お前が廃校舎に行くところ、寧々が同じく行くところ。廃校舎の惨状。そして、寧々の遺体。……本当に素っ裸だった。ただの噂だって思ってたんだ。そんなことする子じゃないって俺は信じてたんだ。でも、証拠を見せられて、俺は気が狂いそうだった。何かの間違いだって。……れも、そんなの甘い幻想でしかなかったんだな。……何を信じたらいいんだぁよ。俺は、俺は、お前の事だって信じていたんだぞ、この裏切り者、馬鹿野郎がっ……」
その言葉が心に突き刺さる。
痛いよ、……殴られるよりずっと。

「違う……」

「何が違うっていうんだよ。お前と寧々は廃校舎に放課後待ち合わせていた。そんで、あそこはラブホ変わりに使われていた。じゃあ結果は明らかだろ。糞っ、やったんらろう？　お前ら。　お前と寧々は俺を裏切ったんらよ」

「じゃあ如月は何であそこにいたんだ」

「そ、それは」

俺と寧々が逢い引きしていたのなら、なんで如月が全裸で発見されたんだという問いに、漆多が戸惑う。そう計算が合わないのだから。

「そんなのどうでもいいんじゃないのか？　漆多。まずはこいつが日向とどうだったかが大事だろ？　そこをきちんと確認しておかないといけないんじゃないの？　」と、蛭町が口を挟んでくる。「もう結論は出てるだろうけど、な」

「そうだよな。……月人、正直に答えてくれよ。お前と寧々は、本当に会っていたのか？　」

俺は力なく頷いた。

それを見て漆多は大きなため息をついた。

「やっぱりか。……でもどうしてなんだよ」

「日向に呼び出されたからだよ。何でか分からない。……メールが来たんだ。放課後待っているって」

「呼ばれたからホイホイ言ったってわけだな、まあ当然だけどな、

確かに、……日向はいい体してたっからな」
　蛭町がまた割り込んでくる。困惑する俺を見てせせら笑っているように見えた。

「どうして行ったんだよ」

「それは、……あそこはラブホテル代わりに使ってる連中がいるっていう噂は俺も知っている。覗き目当てにうろついてる連中もいるって聞いたことがあるからな。だから、そんなところに彼女一人放っておくなんてできないだろう？　メールでは待っているってことだったから、とにかく行って連れ帰るしかなかったんだ。無視して放っておくなんてありえない。分かるだろう？　」

「それなら、俺に声をかけてくれたら良かったんじゃないのか？　寧々と俺は付き合ってるんだからな。……それに、あんなところで待っているって言われてお前一人で行ったら、誤解されるって思わなかったのか。普通そう思うんじゃないのか？　それとも俺はおかしいのか」
　漆多は傷みもだいぶ収まったのか、滑舌も良く俺を責め立ててくる。

　被告人席に立つ俺はどんどんと追い込まれている。
「……そうだ。確かのお前の言うとおりだよ。一人で行くべきなんかじゃなかった。でも俺は行ってしまったんだ」

「どうしてだ？　」
　と漆多。

第３８話　どちらにしても、俺は許されない

「さあさあ、さっさと本当の事を言えよ、しゃきっとしろ、月人、しゃきっと！　」

蛭町の連れが低い声で笑う。面白い見せ物でも観ているようにはしゃぎ騒ぎ立てる。

彼らは二人のやりとりを興味本位で見物していやがる。

「そ、それは……」

掌が汗ばんでいるのを感じる。心拍数も上がっているんだろう。

「もういいでしょう？　……それくらいにしなさい。もうお前達、これ以上シュウを責めてやるな。こんな奴でも良心の呵責で苦しんでいるのが馬鹿なお前達でもわかるだろう？　十分反省してるようだ。もう勘弁してあげたらどうなの」

さっきまで黙っていた王女が俺たちの間に割って入った。

「おうおう、金髪ちびちゃん。邪魔したらいけないだろ？　今、とってもデリケートな話の途中なんだからさあ。子供は黙っていないと。なんなら、お兄ちゃん達が向こうで遊んであげるよ。……ちびちゃん、あんた、へへへ、すげーかわいいもんな」

外野の連中から下卑た笑いが起こる。

「下がれ劣等種が。……貴様らのような淀みきった欲望の対象になぜ私がならなければならぬというのだ。貴様らのしょぼくれたペ〇スを串刺しにして電線にぶら下げて焼き殺してやろうか？　」

一瞬、王女の瞳から炎でも吹き出したかのように、不良グループ達が圧倒され炙られたように思わず後退る。しかし、蛭町だけは下がらずに彼女を見つめる。いや睨むというほうが正しい。

「ガキは黙ってろ。お前は月人とどういう関係にあるかは知らないけど、今、俺と月人が話しているところなんだ。だから黙っていてくれ。俺には知る権利があるし、月人には喋る義務があるんだよ」
と漆多が喚くように怒鳴る。

「あの日、日向寧々とシュウとの間に何があったか知ったところで、もはや何も変わらないだろう？　なのになぜ知りたがるの、お前は」と王女。その瞳には僅かながらの哀れみと蔑みの色が滲んでいる。

「言ってあげるよ。俺と月人は小さい頃から友達だった。少なくとも俺は親友だと思っていた。……そして寧々は俺と付き合っていた。月人は俺と寧々が付き合うのを応援してくれていたし、いろいろ骨を折ってくれたんだ。そしてなんとか告白できて、彼女もＯＫしてくれて付き合いだしたのはほんの最近なんだぜ。毎日が楽しかったし、仲を取り持ってくれたこいつに本気で感謝していたんだ。……なのに、こいつは俺に内緒で俺の恋人と逢い引きをしていたかもしれないんだ。俺はそれが本当か知りたいんだ」

「知ったところで日向さんは生き返らないわよ。それに、もし、シュウと日向さんが男と女の関係にあったら、どうするっていうの？」

「事実はどうだっていいんだよ。問題は月人から本当のことが聞きたいんだ。たとえ、事実は変わらないとしても」

俺はもう黙っていられなかった。

「分かった、漆多。あのとき、俺と日向は廃校舎で会っていた。そして俺は彼女に呼び出され、もしかしたらって期待して行ったんだよ。お前の恋人だって知っていたのにね。お前に本当の事を言えな

かったのは、そんな下心を持っていたことを知られたくなかったんだ。それに、全部話すよ。俺と彼女はキスをした。だから、お前を裏切っていることを認めたくなかった。それに、あんな場所に行ったために、彼女は、彼女は」

次の言葉が出てこなかった。あんな場所に行ったために、彼女は化け物に蹂躙されて殺されてしまったんだから。でもそれは言うことができない。誰も信じてくれないから。

「ぬぬぬぬ……やっぱりか……やっぱりやっぱりか。分かった。お前がそんな男だったってことは分かったよ。許せない。許せない。……お前をどれだけぶん殴っても気が済まないかもしれない。でも、その前にお前の知っていることを教えろ。なぜ寧々は死んでしまったんだ。なぜ如月もあの校舎にいて死んでいたんだ」

「それは知らない。俺は彼女と会って少し話しただけなんだ。キス以上は何もしていない。そこで別れたんだ」

「お前馬鹿か、そんなこと信じられるかよ。別れたとしてもなんで寧々だけ残ったんだ。如月はどこから来たんだ。お前はしらないのか」

「それは……」

それ以上の事は言えなかった。

「それはだねえ」

と、黙って聞いていた蛭町がつまらなそうな顔をしてしゃべり出す。

「警察の話によると、確かに日向寧々の口からは月人君のＤＮＡが採取されている。残念ながら彼と日向さんはその日は性交渉が無かったようだ。それは解剖の結果で判明している。まあゴムでもつけてたら分からないけど、口内以外からは彼の体液は見つからなかっ

た。体液ったって唾液だぞ。精液ではなかったんだ。ただ、日向さんには性交渉の痕跡はしっかりと残っていた。そしてそれは如月流星が相手だったということも判明しているそうだ。つまりは二人は、……やってたってことだ」

こいつなんでここまで知っているんだ？　被害者のプライバシーに係わることまで警察がばらすのだろうか？　ありそうでもあり、信じられなくもある。

「そんなことあり得ない。……寧々が如月なんかと」

このことは漆多も聞いていなかったんだろう。狼狽して蛭町を見る。

「でも事実なんだから仕方がない。警察関係者が言っていたことなんだから、嘘じゃ無いと思う。確かに如月となんて信じられないけどな。……あんなチビのブサイクとね。よっぽど辛かったんじゃないの？　せっかく月人君を誘い出して告白したのに、キス以上はしてくれず逃げ出しちゃったのかな。それでつい、近くにいた如月と関係を持ってしまったっていう、ちょっとした過ちなんだろう」

知ったかぶっていう男に俺は腹が立ってきた。寧々の名誉のためにそんなことはあり得ないと否定してやりたい。でもそんな話、誰も信じてくれないだろう。

「俺は信じない。絶対に信じない。そんなことあるわけ無いよ。寧々があの寧々が興味もない奴と関係を持つなんてあり得ない。……付き合っているはずの俺にさえ、あいつはなかなか……」

そういって突然、漆多は黙り込んだ。

「俺は彼女と付き合ってたんだ。まだそんなに経っていないったって恋人同士だったんだ。なのに最近やっとキスをした程度だったんだ。これからだったんだ。なのに、付き合ってもいない月人と廃校舎に行き、キスまでしてたんだ。寧々は……。なんでなんだ？　」

「簡単なことだぜ、それ」と、蛭町が彼の肩に手を回した。

第３９話　事実と真実　その間にあるもの、そしてふたつの距離

「お前も、うすうすは気づいていたんじゃねーの？　日向寧々が好きだったのは、そこの月人だったってことだろう？　なのにあいつは彼女の想いに答えてやらなかった。それどころかお前とくっつけようとしていたんだな。……付き合いだしたお前は、彼女にキスを求め、体を求めたんだろう？　まあお前の事もそれほど嫌いではなかったから拒否はしなかっただろうけど。たた、お前とそうなる前にどうにかして月人との関係を、月人の気持ちをハッキリさせておきたかっただけだろう。だから、あえてあいつを廃校舎に誘ったんだろう。生徒ならすぐにわかる。そこに呼んだらもうやることは一つだからな。そして月人は来た。当然、彼女は自分を選んでくれたって思っただろう。それにキスまでしたしな。でもそこから先にはこいつが行かなかった。最後の最後で拒否されたんだ。それがショックだったんだね。だからどうでもよくなってたまたま来ていた、どうせ、覗きにでも来てたんだろうな。やけくそに如月と関係を持ったんだ。いや、もしかしたら襲われたのかもしれないな。どっちにしたって……やっぱり、月人が悪いんだよ」

「そんなはずない」

必死で否定しようとする。

「漆多、お前なら分かるだろう？　日向はお前の事を好きだから付き合っていたんだろ？　それは間違いないだろう？　」

「そんなこと、お前に言われなくても分かっている。寧々が好きでも無い奴と、如月となんかするはずがない」

「日向は何も悪くないんだ。悪いのは俺なんだ。……俺があの時、断っていたら何も起こらなかったんだ。なのに俺は何もせずに行っ

てしまったんだ。すまん。彼女が死んでしまったのは俺の責任だ。……でも、彼女は蛭町が言うような子じゃないことだけは分かってくれ」
恋人だった寧々が誰とでも寝るような女だと思って欲しくなかった。そんな尻軽な訳がない。それを知っているのは俺と王女だけだ。

「月人、そんなに言うなら証拠を見せろよ、俺みたいに。日向が如月とやっちゃったという証拠は出そろってるぜ。なのにどうして、お前はそこまで言い切れるんだ？　」

「それは、如月が彼女を襲ったからだよ……」
一斉に笑い声が起こる。
蛭町とその仲間達が大笑いをしたんだ。
「ぎゃはははは、そんなことあり得るのかな？　みんな知ってるだろう、如月はチビでやせっぽちで運動音痴な格好のいじめられっ子だぜぇ。女だって喧嘩したら負けるわけないぜ。おまけに俺の仲間がどつきまくったりして肋骨にヒビが入ってたはずだから、ちょっと叩いたら転がり回って泣きわめくはずだぜ。ははは。そんなのがどうやってレイプなんかできるんだ。漆多、お前だってそう思うだろう？　」
と言って蛭町は見る。

「……ああ、如月なんかが例え不意打ちをしたって寧々を襲える訳がない」
あきれた様な瞳で俺を見てきた。

「違う違う」
と、俺。

「何が違うってーの。ついに月人君も塗り固めた嘘にボロがでたか

らやけくそになったのか」
　そうやって俺を責め立てる蛭町。
「もういいじゃん、蛭町。そろそろ俺たちも退屈になってきたからさ、ゲームやらせてくれよ」
　後ろで突っ立っていた男が舌なめずりしながら催促してきた。
「もうちっと待ってくれよ。いまいいところなんだから。あとでたっぷりお礼をするからさ、……ね」
　そうやって連中を宥める。蛭町はこの不良グループを何かの代償を差し出すことで協力を得ていることが如実に分かる。偉そうに言っていても連中を恐怖しているんだ。
「しかたねえな。まあ月人君が可愛い外人ちゃんを連れてきたから楽しみは増えたからいいけどさ。でも、もう我慢できねーかも！」
　そういってそいつはジーンズの上から股間をごしごしとしごいた。
　何のゲームをするつもりかしらないし、何をトチ狂ったか知らないけど王女を襲うとしているようだ。
馬鹿だな本気で。こいつらはもはや明日を迎えることはできないことを知らないのだ。俺の中ではこいつらには既に死刑宣告が告げられている。
　それはともかく、とにかく漆多の誤解を解かないといけない。
「分かった。本当の事を言うよ。こんな事言ったって信じてくれないだろうから今までは言わなかった。でも日向が死んでなお名誉を傷つけられるのには耐えられない。……よく聞けよ」
　そういって俺はあのときの事を話した。
　如月が如月でない、得体の知れないモノに変形し、俺を半殺しに

した後、寧々をレイプしたことを。

話を聞いてしばらく漆多は黙っていた。そしてあきれたような顔をした。

「いい加減にしてくれ。そんな子供でも信じないような嘘を言われて、それを信じろっていうのか。お前、俺をどこまで馬鹿にしたら気が済むんだ。くそ。俺は本当に馬鹿だ。……お前みたいな奴をずっと親友だと思っていたのか。くそくそ。寧々と付き合えるようういろいろやってくれたって感謝してたのに、お前は俺をからかっていたんだな。そして寧々の心を弄んでいたんだ。……俺を馬鹿にするのは良いよ。でも寧々の気持ちを踏みにじったお前を俺は許す事なんてしないからな。寧々はもうこの世にはいないんだ。慰めることも、励ますことも、抱きしめてやることもできない。……お前に謝らせることさえできねえんだ。可愛そうだよ、寧々は。くそくそくそ」

大粒の涙をぼろぼろと流しながら、親友は地面に跪いた。呻き喚き歯ぎしりをする。

「嘘じゃないんだ……」

俺はほとんど声にならない声で呟き続けた。涙が出そうだ。

第４０話　悪鬼たちの胎動

「もういいでしょ、こんなの」
我慢の限界が来たかのように王女が話しに割って入ってきた。
「漆多、これ以上グタグタ言うのはやめなさい。シュウは本当の事を言ったわ。確かにあなたに嘘をついていたことは非難されることでしょう。それから日向寧々といろいろあったことも、それを隠していたこともね。でも、彼女が如月流星に襲われた時、命がけで守ろうとしたことは本当よ。それに、お前達は親友なんでしょう。だったら信じてあげたらどうなの」

「……そんなこと信じられるか！　如月が化け物だっただって？　月人は半殺しにされただと？　如月は死体で発見されたんだろ？　化け物になっていたら警察が大騒ぎだろ？　それに半殺しにされただって？　……月人は次の日には普通に登校してきたじゃないか。何処もけがなんてしてなかったぜ！　嘘ばっかり言ってるんじゃねえ、このクソガキが」
殺意すら感じさせる眼で漆多は王女を睨み付ける。
王女はまったくたじろぐことさえなく漆多を見下ろすと、にっこりと笑い、一歩彼に近寄った。
刹那、王女は思いっきり漆多に平手打ちをした。乾いた、そして心地よい音が地下室に響き渡った。

漆多はしゃがんだ姿勢から数メートル吹っ飛び、情けない声を上げながら転がり回る。

「いい加減にしなさい。……もういいわ。こんなくだらない見せ物に付き合ってられない。シュウ、もう帰りましょう。情けない奴ね。それでも男なのかしら。まったくこんな奴、助けになんか来なけり

ゃ良かったのよ。もう、なんで私がこんな不愉快な想いをしないといけないの。馬鹿馬鹿しい。ゲスな連中と一緒の空気を吸うだけで自分まで落ちぶれた気分になっちゃうわ。……もう、苛つくわね」
そういうと、王女はクルリと背を向けてこの場から立ち去ろうとする。

「て、てめぇー」
地面に這い蹲っていた漆多が唸るように叫ぶ。

「友達の言うことを信じられないような屑は、そこの変態連中と遊んでればいいのよ、馬鹿。死になさい」
と、吐き捨てるように王女が言う。
ドアまでたどり着くと、ノブを掴んで開けようとする。しかしドアはビクともしない。
「なによ、これ」
押したり引っ張ったりするが反応は全くない。
蛭町達が一斉に笑い出す。
「早く扉を開けなさい！　シュウ、どうにかしなさい」
怒った王女を見て、さらに連中が興奮する。

「もういいだろう、蛭町。わざわざ付き合ってやったんだからそろそろ俺たちに楽しませてくれないかな」
そういってリーダー格らしい男が前に出てきた。淀んだ眼以外は至って普通の高校生という感じだ。

「うん、仕方がないね」
と蛭町は頷くと後ろに下がった。
男は俺のすぐ前まで近づく。思ったよりでかい。１８０センチは超えてる。
ちゃんと見るには彼を見上げないといけない。

「さてと、月人君。茶番はおしまいだ。……これからはゲームだ。今から5分だけ時間を上げる。その間に君とその女の子、ついでに漆多君はできる限り俺たちから離れなければならないんだ。5分過ぎたら俺たちは追跡を始める。……そして」

とそこで間をおいて、俺と王女を交互に見る。どうだ、これからとんでもないことを言うぞといった感じで勿体ぶる。

「ゲームの始まりだ」

「ゲームだゲームだ」

「ゲームゲーム」

「うっひょー」

「まったく、大変だね！　」

連中が奇声を上げる。狭い地下室では音が反響してうるさい。彼らは奇妙なステップを踏んで部屋の奥へと言ったかと思うと、何かを持って帰ってきた。

それを見たら、数日前の俺なら蒼白になっていただろう。

鉄パイプ、木刀、日本刀、ハンマー、チェーン……どう考えても夜中に集まった高校生が持つにはふさわしくない凶器だった。

「俺たちはハンターだ。で、お前達はモンスターだ。双方戦わねばならない。……それを人は宿命と呼ぶ。狩らねば俺たちが殺される。情けは無用。これは命をかけた真剣勝負なんだ」

興奮した口調で男が話す。

「俺たちに捕まらないように必死に逃げないといけない。そして捕まりそうになったら、命がけで戦わなければならない。俺たちは本気で君らを殺そうとするぞ。特にその女の子は間違いなく輪姦されるぞ。児童だけどそんなの関係ない。どうせ死ぬんだからな、少々酷い目にあってもそれはやむを得ないんじゃないか。がんばってくれ」

圧倒的優位な立場にいるからか、恐ろしいまでに高圧的に語る。

蛭町は俺のことを伝えてないのか？　知ってたらこんな態度には出られないはずだ。それよりも、蛭町はあれほど痛めつけてやったというのに、またやられるという可能性を考慮してないのか？　どういうことなんだろう。

「俺たちには武器は無いのか？　」

とりあえず聞いてみる。

男は首を横に振った。

「モンスターが武器を持ってるなんて聞いたことがないだろ？　」

当たり前のように言うんだなあ、こいつら。……でもまあ良かった。ちょっとは手加減してやろうと思ったけど、うん、これなら必要ないな。ボコボコにしてやろうっと。

背後では男達が自分の獲物をそれぞれ手にして、ウオーミングアップをしている。木刀を降る音が聞こえる。鞘から抜かれる刀身の音まで聞こえてくる。

「さあ、始めようぜ！　」

スタートスイッチを入れようとする男に、俺は少しあきれながらもお願いをした。

「漆多に服を着せてやってくれないか。手錠も拘束具も外してやっ

てほしい。でないと逃げられない」

「ああ、良いだろう」

男は仲間に目配せをする。一人が部屋の奥に捨てられていたコートとズボンを持ってきた。蔑みの笑みを浮かべ、衣服を漆多の足下に投げ捨てた。

「おい、漆多の手錠を外してやれよ。それから、下着とかは無いのか？　」

一斉に連中が笑う。

「とりあえず隠せればいいだろ？　よーし、カウントダウンだ」

「え、なに、そんな」

漆多が慌てて手錠をはめられたままなのにズボンを履こうとする。足が縛られているのにズボンなんてはけるはずがない。ズボンが引っかかってそのまま後ろに転倒し後頭部を痛打した。

ゴンという鈍い音。

漆多は全裸のまま転倒したから、局部全開になっている。もはや性器だけでなく肛門までおっぴろげになっている。

連中は大笑いだ。

俺は漆多に近づき、起こしてやった。そしてコートを彼の肩にかけた。

「触るな……」

呟くような声で彼は俺を見た。恥ずかしさで顔を真っ赤にしながらも、俺に対しては完全に心を閉ざしているかのようだ。

「さあさあ、あと４分３０秒で追跡が始まるぜ」

その大声に反応して、漆多の顔が青ざめていく。

第４１話　あまりに哀れな親友の姿

「早く逃げないと……マズすぎる」
呻くように言うと両足を縛られた状態なのでピョンピョンと跳ね、出口のドアへと向かっていく。
ジャンプするたびに股間のモノがぶらんぶらんと上下する。

「おーおー助けに来てくれた親友を置き去りにして逃げようってのか、漆多」

「そりゃ無理だろ、彼女を寝取った奴なんかと一緒に逃げられるかっての」

「ははは、そりゃそうだな」
哀れみと蔑みの混じった口調で彼らは話し合っている。
漆多はその間も逃げ続け、あまりにも遅い動きではあるが、なんとかドアにたどり着いた。横に立っている王女を押しのけ、ドアを後ろ手で開けようとする。当然開くわけがない。

「早く開けろ、クソガキ。逃げないと殺されるぞ、くそっ早くしてくれ、早くしろ」
口からつばを飛ばしながら、必死で喚く漆多。

「……フルチンで偉そうに、何様なの、お前。知らないわ。臭いし汚いし気持ち悪いから向こうに行ってくれないかしら？」
冷たく言い放つ王女。それでも退かない漆多に愛想をつかし、ドアから離れていく。

「あらら、漆多君。また振られちゃったんだ。可愛そうだね～寧々

ちゃんにフラれ、こんどはチビちゃんにもフラれたんだ。……おっと全部、月人君が唾つけた女ばっかりなんだね。あはは、残念」
連中の中ではどうやら一番年少の奴が面白そうに指さす。
「うるせぇ……お前らに何が分かる」
唐突に漆多が怒鳴った。怒りに狂いそうな眼をしている。
「フルチンで怒鳴られてもね。……でもなんかすげーむかついた、俺。真っ先にあいつ殺す事にしよう」
一人がそう宣言すると、他の連中も「そりゃいいや。でももう一回あいつのケツ掘っておきたいかな」と異様な台詞と一緒に同意する。
「そうだな、おれも、も〜一回ウルシダを掘っておこうか」
気持ち悪いことを二人の男が言う。まだあの二人は中学生になったばかりじゃないのか？　幼さを残した容貌をしているが、中身はかなり壊れている感じがする。町であったら避けておいた方が良いタイプだよ。人を殺しても重罪には問われないから何でもやりそうな雰囲気を充満させていやがる。欲望のままになんでもやりそうだ。
「ヒッ……そ、そんなあ」と、本気で怯えた表情を見せ、情けない声を漆多は出した。「俺じゃなく、月人を先に殺せば良いじゃないか。俺は何も悪くないだろう？　何も喋ったりしないよ。俺は被害者なんだ。頼むよ、せめて、せめて俺だけでも助けてくれ」
「フンお前、やっぱり最低ね」
王女が吐き捨てるように呟く。
確かに自分だけが助かればいいって考えにはむかつくけど、今の俺たちの置かれた状況を考えればそれも分からなくもないんだ。相手は武装した男が7人。辺りには誰もすんでいない廃ビルの地下に

拉致された状態でこれから殺人ゲームを始めるって宣言されたら、どう考えたって異常な状況だって分かる。おまけに彼は手錠をはめられ足も縛られている。俺たちの中で一番サバイバルのチャンスが無い人間だ。助かろうって思ったらどんな手も躊躇ってはいられないだろう。そもそも普通なら全員生存の可能性は無い状態なんだから。

こんな人気のないビルのしかも地下室なんか誰も来ないだろう。俺たちは白骨化してもしばらくは放置されるはず。取り壊し工事とか再開発計画が進み出さない限り、こんな不便なところに出入りする奴はこいつら以外はいないからな。安心して【ゲーム】を楽しめるってことだ。

彼らの口ぶりからして、過去に何度かそのゲームが開催されたようだし。

「さあ、あと4分を切ったぞ。さっさと逃げないのか」

あまりにトロトロしているせいでいつもと訳が違うようで、あいつらも少し困惑している。まあ困惑したところで俺たちを逃がしてくれるもんでもないのだろう。生け贄が必死で逃げ、命乞いする様を楽しみたいんだろう。そうやって生け贄達を蹂躙し殺戮することでこいつらの欲望は満たされているんだ。

第４２話　能力解放

あーあ。
なんかめんどくさくなってきた。さっさとこいつらをやっつけようっと。
俺は一歩前に踏み出した。踏み出したといっても逃げるのではなく、逆に奴らの方へなんだけど。
一瞬驚きの表情を見せた不良達。しかしすぐに持ち直した。
「先に死にたいのか？」
そういって一人が俺の前に立ちはだかる。
「……カウントダウンはもういらないよ。めんどくさいだけだし。お前らをぶちのめして、さっさと帰るよ」
そういって眼帯を外した。
視界が一気にクリアになり、今まで見えていなかったものまで把握できるようになる。
「死ねやっ」
かけ声と同時に背後から男の脇をすり抜けて、本当に眼にもとまらない速さで日本刀の刃先が俺の方へと突き出されてきた。
その速度は並の素人ではない、尋常ならざる突きだ。しかも前に立ちふさがった男に遮られた死角からの不意打ち、そして辺りはそれほど明るくない状態での攻撃だ。二人の見事な連携。確実に俺の腹部に刃先が刺さったと確信しただろう。
……でも残念。
俺は左手でしっかりとその刀身を握りしめていたんだ。眼にもと

まらぬ剣撃ではあるけど、俺にとっては止まっているのと何ら代わりないし。簡単だ。

「な、なんだと」

前に立った男は驚愕の表情を浮かべた。

必殺の不意打ちを防がれた事、そして日本刀の刃を手で掴んでいる事の二つに驚いたようだ。

「くそったれ」

男の後ろからうなり声が聞こた。日本刀を突き出した男が掴んだ刀を引き抜こうとしている。思いっきり引けば俺の指は日本刀に刀身でザックリと切られ、痛みで離すと思ったんだろう。

でも離れない。1ミリすら動かない。万力で挟まれたかのようにビクともしないんだな。掴んだ手の中で日本刀がぐにゃりと潰れる感触。

「なんとかしろ！　」

怒号に反応し、俺の前に立ちはだかっていた男が不意に俺の右肩を掴むと、手に持ったハンマーで俺の脳天を狙い、渾身の力で振り下ろしてきたんだ。

まさに万力のような馬鹿力で俺の肩が鷲づかみにされている。真上からはハンマーが降りてくる。ほとんど動けないや。避けるには日本刀を放して交わさなければまずい。

しかし、日本刀を放せばすぐさま、あいつは必殺の突きを再び繰り出してくるだろう。逃げなければハンマーで頭を割られて脳症をぶちまくし、逃げれば日本刀で串刺しだ。

まさに絶体絶命！

俺はとっさに日本刀を掴んだ左手を引き寄せる。

予想以上の力に刀を掴んだ男がこちらに引っ張り出される。左腕を引く力を利用して、右腕を俺の肩を掴んだ男の脇腹へと打ち込む。
パンチはそれほどの力では無かったけど、その衝撃でハンマーの軌道が逸れて引っ張り出された男が攻撃エリアに入り込んでいく。
それが分かったのだろう。日本刀男は悲鳴を上げて刀から手を離して逃げようとするが、勢いがついているので避けられない。
ハンマーを振り下ろす男は味方にハンマーが当たるのを防ごうと俺から手を離し、その腕で振り下ろす右腕を止めようとする。

ぶちん。

ゴン。

かろうじて左腕で軌道を逸らしたハンマーは床にたたきつけられ、火花を散らした。
その前に妙な、何かが切れるような音がしたけど。

「ほっほう。やるじゃないか」
俺はなんとかハンマーで味方の頭をたたきつぶすのを回避した男に向かって賞賛の言葉を唱えてあげた。仲間を守ろうという意識はあるんだな、こいつらでも。

「ち、ちくしょう。痛ぇ……痛えよぅ」
無理をしたのか、ハンマー男の右腕はだらりと垂れたままだ。どうやら関節でも外れたのかな？　さっきの変な音はそれか？
日本刀を奪われた男はハンマー男を引っ張って背後に避難させる。そして腰に隠していたナイフを取りだした。
殺意満々のぎらついた眼で俺を睨む。

「糞う、なんだ、その眼は。カラーコンタクトを片方だけ入れて格

好いいって思ってるのか？　馬鹿じゃね？　粋がってるんじゃねえよ」
そう言った男の声が尻すぼみに小さくなる。「な、な、眼が光っていやがる……。お前何なんだ？　」
え、そうなんだ。俺の目って光るんだ。
それほど明るくないこの地下室では、その光もはっきりと見えてしまうんだろう。
男の声は震えている。

「さあね。お前らには教えてやんないよ。どうせ教えてやったところで、理解なんてできないしね」
そう言うと日本刀を床に突き刺した。刀は３０センチくらいは床にめり込んだ。
こんな連中相手に武器有りじゃあハンデがありすぎるからね。

「くそ、思ったよりこいつやばいぜ。一斉にやるぞ」
ナイフ男が怒鳴る。
リーダー格の長身が背後に回るのを感じた。
中学生くらいの二人は部屋の奥でのんびりと観戦を決め込んだようだ。　蛭町も二人の隣で壁にもたれ、偉そうに腕組みをしている。

「おい、お前らも来いやぁ」
とハンマー男（今は右腕を負傷中）ががなり立てる。
「大丈夫でしょ？　先輩達ならあんなの、俺たちが行かなくったって、楽勝でやれるっしょ」
ニタニタと気持ち悪い笑いを二人の中学生がする。二人とも歯並びが異常に悪く、薄汚く汚れている。妙に隙間がある感じで、嫌悪感を感じてしまう。
「やれやれだな、まったくお前らは性欲だけ一人前で他は全然役にたたねえな～。立つのはあれだけかよ」

あきれたようにリーダーらしき男も笑う。釣られるように他の奴ら、必殺の突きを俺に止められた奴と右腕を痛めたハンマー男も吹き出す。
なんだかんだ言いながらもあのガキ2名は、連中の中では可愛がられているようだ。少々生意気な口を聞くのも仲間にとっては好ましいものと感じ取れるらしいんだろうか。
笑う事で奴らの中で何かが変わったようだ。
冷静な狂気を取り戻したように感じられる。

「俺たち、よにん。こいつは、ひっとり。まるごしまるごし」
と、突然、なにやら呪文めいた言葉を履き始める。

「ｙｏｙｏｙｏ」
リズムを取り足踏みしながら、各々が手にした武器を体の前で揺らせ始める。
「ころっせ。ころっせ。太もも突き刺せ！　つっきさせ」

「目つぶし、目つぶし、右目をえぐり出せ」

「ケツノアナから串刺し串刺し」

「やきとりやきとり。塩味大好き大好き」

奇妙なリズムに合わせた不思議な踊り……。
俺の周りをグルグル回り出す。

どうやら幻惑することにより、攻撃の確率を上げるように思われる。……くだらない。

ふいにリズムと踊りが激しくなる。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

目の前で立ち止まったリーダー格の男がニヤリと笑いながら、それほど早くないスピードで釘バットで俺を凪いできた。

ほぼ同時に四方から撃が始まったのを感じた。それも一斉に。

緩急をつけた多方面同時攻撃ってやつだ。巧いこと回避スペースを潰しているのがわかる。思った以上に連携されている。こいつら何度も実戦でシミュレートし、精度を上げていってるのがわかる。

相手が普通の人間だったら、少々武術の心得があったって、ほぼ間違いなく血だるまにされているだろう。

こんなくだらないことに能力を発揮せずに他のもっと役立つことをしろという思いが頭をよぎる。

残念ながら俺は人間という尺度で測れるレベルじゃないんだな。

……よって彼らが編み出した攻撃もまったくの無意味。

俺は全ての攻撃の軌道を確認し、体をかがめたり反らしたりしながら、全てを回避した。すべてがハッキリと見える。あまりにも。

連中は攻撃が当たる前提で振り切ってきている。かわされたために空振り状態になり、大きく体勢を崩した。それぞれの顔に驚愕の表情が浮かんでいる。

俺は素早く体を捻りながら飛び上がり、右脚で凪ぐ。体は空中で駒のように回転する。

足先に衝撃が連続する。足が俺を取り囲んだ連中の体に激突した衝撃だ。

……旋風脚。

格闘ゲームの中でしか再現不可能な技だ。

４人の男は、はじき飛ばされるように四方にふっ飛ばされ、悲鳴

を上げ激しく転びながら壁や障害物に衝突し転がっていく。
車にはねられたようなもんだから、恐らくは立ち上がることなどできないだろう。
あちこちで呻きと悲鳴と鳴き声と泣き声が起こっている。
ほんの一瞬前までの威勢は遥か彼方まで吹き飛ばされたはずだ。
情けない。

第４３話　深淵に棲む忌まわしきモノの蠢動

「次は誰だ？　」
俺はゆっくりと蛭町たちのいる方向へ歩いていく。

「うひゃっ」
ガキ二人が大あわてで外への逃げ道を求めて走り出す。
　こちらは慌てる出もなく一瞬で奴らの前に立ちはだかる。
二人と俺の間には数メートルの距離があったから、奴らはどうして俺が目の前に現れたか分からなかったはず。……いや現れたことすら認識できなかった。
俺は二人に足払いをかけた。
全速力で逃走しようとしているところに不意打ちで足払いを受けたらどうなるか？　二人は悲鳴を上げるまもなく転倒する。想定すらしていないハプニングのため、受け身などとることさえできず、まともにコンクリートの床に顔面からたたきつけられる。
鈍い音と何かがつぶれるような音がした。
しばらくして事態がやっと把握できた二人のガキが絶叫ともいえる悲鳴を上げた。
「うぎゃー痛いよう。ぎゃーん」
子供のような声で泣き出す。まだ声変わりもしていないのか？
俺は一歩脚を奴らに踏み出す。
「ひえ～！　助けてくれー！！　前歯が折れてるよぅ。鼻血がとまんねーよ。お願いです、助けてください」
「俺たち、先輩に脅されてついてきただけなんす。許してください。なんでこんな酷い目に遭わないといけないの」
「俺たちまだ小学生なんすよ。だからなんもわからないっす。こど

もなんでなんもわかんない」

「うええん。前歯が折れてる、何本も。しゃれなんねえ。保険きかねえ」

ピーピー甲高い声で泣きわめく。眼をうるうるさせて哀れみを誘う。よく見たら、ほんとまだまだ子供だ。

つぶれた鼻から盛大に血を流し、歯が折れてスカスカになった口を変な形にしながら懇願する。

「ふっ……駄目だね。ガキだからって許してやらない。お前らだってそんな風に謝る奴を許してやったりしないだろ」

と、にっこりとほほえんであげる。

「く、くそったれ」

泣きそうなか弱そうな声が一気に凶暴なものへと変化する。しかしそれはすでに捨て鉢な行動でしかなかった。

ナイフを手にし、飛び上がるような勢いで同時に飛びかかって来る。

しかし、その速度は、俺にとってはあまりに緩やかすぎる。突き出すナイフを交わし、すれ違いざま二人の片耳を掌で叩いてやる。

ぽん！　といい音がした。

二人はきりもみをしながら床へと倒れ込む。

再び悲鳴が響き、彼らは叩かれた耳を押さえ転がり回る。

「いてーよぅ。救急車呼んでくれよう」

「くそー。耳が聞こえねえ。くそうくそう」

耳を押さえた掌から血が流れ落ちていく。泣きそうなそれでいて憎しみと怒りの眼で睨んでくる。

俺はそっと二人に近づくと、一人づつ腹部を蹴り上げた。

「ぎゃん」
犬みたいな悲鳴を上げて、二人は悶絶した。念のため、2回ほど同様のケリを二人にお見舞いする。うめき声さえ出なかった。
「しかし、……まったくロクな大人になんないな、こいつら。どうせ親もロクでもない連中なんだろうな。そうは思わないか、……蛭町」
独りごちたあと、最後に残った蛭町を睨み付けた。

「フフフ、まったく、お前ほど懲りない奴はいないんじゃないのか？　あれほど痛めつけてやったっていうのにまだ刃向かうっていうんだから。……まあ、それはそれで褒めてやってもいいとは思うけどね。お前がそれほどの気骨ある奴だって知らなかったよ。ある意味賞賛に値するんじゃないか」
軽く笑みを浮かべて、ゆっくりと蛭町へと歩いていく。
「とはいっても絶対に許してやらないけど、ね」

まともな神経をしていたらもう顔面蒼白、失禁、脱糞、悶絶ものの状態なのに、平然とした顔でこちらを見ている。
体を壁に預け、腕組みして薄ら笑いさえ浮かべている。
「ははは。許してもらえないと困ってしまうな。こいつらのやったことは軽い冗談なんだから。笑って許してやれば良かったんだよ、月人。それなのに馬鹿力でぶっ飛ばすから、こいつらまじ死んじゃうんじゃねえの？　お前殺人までやっちゃったのか？　まあどうでもいいけど」
まるで事態を飲み込めていないような台詞。
こいつ、恐怖でおかしくなったんじゃないか？　とさえ思ってしまう。

「もうお前1人だけだぜ。どうする？　謝るか？　それとも俺にぶっ飛ばされるか？　」

「どっちもいやだね。お前にぶっ飛ばされるのはもうごめんだし、それ以上にお前に謝るなんてあり得ないよ。人の女を横取りしたくせに、その女を見殺しにするようなくそったれなんかに謝るなんてね。ははっ」
最後の笑い方は、ミッキー〇ウスの笑い声の物まねだった。

瞬間で臨界突破した。
俺は蛭町の顔のすぐそばの壁を思い切り殴った。激しい破壊音とともに、拳が手首の辺りまで壁にめり込み、壁材や埃が舞う。

「全く……乱暴だな、お前は。巨大な力を得たら直ぐに誰かに使いたくなるんだろうな。……まったくのガキだな」
瞬き一つせずに俺を直視してくる蛭町。その顔には現在の置かれた状況からはありえない余裕が浮かんでいる。
何がいったいどうしたっていうのか？　俺は拳を壁から引き抜きながら考えた。力の差は圧倒的なはず。それは奴も認識している。いや認識させてやった。なのに何を根拠にこれほどまでに余裕を持って構えていられるんだ？
この前の時は、泣いて助けを請うていた奴とは思えないほどの変貌ぶりに、少し圧倒される気がした。
圧倒？　……何に？　何か脅威があるのか？　どうみたって何の変化もないごく普通の人間のナリをしているじゃないか。ボコボコにしたときの蛭町と何ら変わりない。……なのに何か違和感を感じるんだ。
これはどういうことだ??

「そいつは寄生根だからよ」
いつの間にか側に王女が立っていた。俺の思考に反応したんだ。
「この建物に入った時から何か変な感覚があった。すごく嫌な感じ

がしてたのよ。それが何だったかよく分からなかったけど、やっと気づいたわ。何のことはない、……寄生根が二人目の宿主を手に入れて、発芽しただけよ。……まったくしぶといモノね」

第４４話　第二形態の強大なエナジー

蛭町がとぼけたような顔でこちらを見る。
「きせいこん？　なんだいそれ？　よく分からないな。寄生とか何のことだ。俺にサナダムシでも入り込んだっていうのか。そりゃいいや。花粉症で困っていたところなんだな。これで免疫機構の暴走が無くなるよ」

「真性の馬鹿なのか、お前は」
相変わらず高飛車な口調で王女が言う。
「残念だけど、お前達が知っているような寄生虫ではないわ。とりつかれたが最後、もはやお前は【人】では無くなり、己が欲望のままに人を喰らい続けるだけの化け物になるのよ。化け物というくらいだから、外面もかつての【人】の姿を留めない醜悪なものになる。もっとも、その頃にはお前の意識というものも曖昧なものになっているでしょうから、外見の変化には拘泥しないんでしょうけどね。もう何のために生きているのかさえ分からなくなるでしょうから。……可哀想だけど自業自得よ。残念ながらお前に残された道はここで私たちに殺されるか、逆に私たちを殺して殺戮の限りを尽くしながら魂まで寄生根に食い尽くされるしかの二択しかないわ。…どちらの選択肢を選んだとしても、お前という存在は、この世から消えることになる」

「うお、そうなんだ。そりゃこまったな……って思うわけないだろ？　確かに俺はすばらしい力を手に入れた。この力は神様がくれたものに違いないんだよ。月人、お前は強い。助っ人に頼んだ連中があんなにボロボロだもんな。まあこれでこいつらにいらない金を払わなくてすんだんだけどな。……だが、お前など今の俺の敵じゃないぜ。へっへっへ。力の違いを見せつけてやるかんな。……わくわ

くするぜ」
ぶるぶるっと体を震わせ、俺を睨んでくる。
「シュウ、さっさとやっちゃいなさい」
と、王女。
俺が身構えるより速く、蛭町の右手が動いた。
直ぐ目の前に奴の手刀があった。
シュッ。
遅れて空気を切るような音。

ぎりぎりまで引きつけて顔をわずかに逸らして手刀の突きをかわしつつ左足を前に踏み出す。
蛭町が慌てて左手を繰り出すより速く、俺の拳が奴の顔面を捉えた。
しかし、蛭町は拳が顔面に触れると同時に後ろに飛び退き、衝撃を最大限に殺す。
再び反撃を繰りだそうとする奴の前に既に俺が立っていた。これは驚いたようで、一瞬フリーズした。すかさず右膝で蹴りこむ。
背後には壁があり、奴は飛び退くことができない。
「ぐへん！　」
妙な呻きを上げ、蛭町は壁に激突し、その勢いで跳ね返ってくる。左手で肩を掴むと、連続しての蹴りとパンチを打ち込む。攻撃しながら壁まで追い込み、さらに連続攻撃。
蛭町は地面に倒れ込むこともできず、壁に貼り付け。

確かな手応え。
一撃一撃全てに殺意を込めていた。
普通の人間なら、間違いなく5回は死んでいるところだ。……人間ならだけど。

「ククク、酷いな、……マジで殺す気だったんだな、お前」
俺は危険を感じ、とっさに蛭町から飛び退いた。
蛭町は体を左右に揺すり、めり込んだ壁から脱出した。首は変な角度に曲がり、両腕も関節じゃない場所で折れ曲がり、白いものが突きだしている。
「容赦ねえやつだな」
そう言いながら腕を交互に引っ張ってはみ出した骨を格納する。ぶしゅぶしゅと音を立てながら割けた皮膚が治癒していく。
腕が治ったと判断すると、今度は両手で頭を掴むと、折れ曲がった反対方向へとねじ曲げた。
「痛って」
軽く呻くとゴキリと妙な音がした。
「ふう……。なんとか直ったようだ」
そしてニヤリと嗤った。

「くそ、ホントに化け物だな……」
俺はある意味あきれていた。
余裕を見せてはみたけど、俺は本気で攻撃をかけた。実際に殺すつもりで殴ったんだ。確かにダメージを与えたようだけど、ものの数秒で復活、しかも完全復活した。……ありえない回復力だ。前回戦った如月の時と比べると、遙かにその回復力が高まっている。普通の打撃系の攻撃では奴の回復力を超えてダメージを与えることは無理みたいだ。

仕方がない。
俺は眼に力を込める……。左眼が熱くなっていくのが感じ取れる。
左眼の視野が碧い光を帯びてくる。ひんやりとした風が頭の中に入ってくる感覚。脳内が一気にクールダウンされ、焦りが次第に消えていく。そして、目の前の世界にひび割れのような黒い黒いラインが這い回り出す。ラインを大小様々の瘤のようなモノが、あるも

のはゆっくりと、あるものは高速でそのライン上を行ったり来たりしている異様な世界が展開され始める。
目眩と落下する浮遊感を感じる……。

そう。
今見えるものは【死】。
動いているものも【死】。
脆い脆い生物の、いや万物の死を暗示するもの。
それは人には見えない。
もちろん触れることなど絶対にできない。
それどころか、視ることも、存在すら知ることのできないもの。

【死】【死】【死】【死】【死】【死】【死】【死】

それを視ることができる。……否、それどころか触れることができる。
そしてそれはあまりに脆いもの。少しでも乱暴に扱えばあっという間に、粉々に砕け散るんだ。

粉々にね。何もかも。

俺は死を操ることができる。死＝万物の終焉。

蛭町の体にもいくつものラインが這い回るように絡みついている。
そしてその線の上をいくつもの奇怪な瘤がゆっくりと回遊するかのように漂っている。

勝てる……。
いかなる快復力をもってしても、その根源が絶たれてしまえば、復活はできないんだから。

第４５話　呪眼と魔手

「さて、今度は俺がお前をぶちのめす番だな。……月人、この前はよくも酷い目にあわせてくれたよな。でも今度はそうはいかない。お前の卑怯なチートにやられたけどな。俺も力を手に入れた。さて、どうなるかな」

にやっと嗤った瞬間、残像を残し一気に距離を詰めてきた。

疾い。

同時に右肘打ちがえぐるように俺の側頭部を狙って打ち込まれてくる。とっさに左手でガードするが、威力がでかすぎる。体ごと吹き飛ばされる。同時に反対側からそれを迎え撃つように左腕がボディを狙ってくるのを視野に捉えた。しかし、回避も防御もできないまま、そのパンチの直撃を受けた。

衝撃のサンドイッチで思わずうめき声を上げ、思わず跪いてしまう。

反撃のチャンスをうかがおうと上を見た時、奴が顔面を狙ってけり込んでくるのが同時だった。

一瞬、視界が真っ暗になったと思った刹那、俺は宙を浮かんでいるような感覚を受けていた。十秒くらい宙に浮いていた？　実際は瞬間的なものだったんだろう。

落下して激しく背中と後頭部を床に打ち付ける。

「ぐはっ」

呻いた俺が見たものは、蛭町が宙を舞い、俺の体に落下してくるところだった。

両膝が俺の胸にめり込む感覚と同時に激痛が襲う。

ボキリ。

枝が折られるような嫌な音を聞いた。どこかの骨が折れたんだろう。でも俺にはどこが折れたのか確認することができなかった。マウントポジションになった蛭町が両腕を振り回して俺の全身を殴りだしたからだ。

猛烈なラッシュ。

俺は防御するのに精一杯だ。

「うりゃりゃりゃらららっ！！」

奇声を発しながら恍惚の表情を浮かべながら蛭町が子供の喧嘩のように両腕を振り回して俺に叩きつけてくる。

子供の喧嘩と違うのは奴の一発一発のパンチは全て必殺の威力を秘めていること。

圧倒的状態に興奮はさらに高まる。

「うおおお！　死ね死ね死ね。俺様を馬鹿にした罪を償いやがれ。お前みたいな奴が俺様を侮辱するなんて許されないだよ。くそったれめ、俺様に恥をかかせた罪は万死に値するんだよ」

唾を飛ばし、眼を血走らせながら喚き散らす。極度の興奮が彼の理性を奪っていくかのようだ。

一撃一撃が鉄のハンマーで殴るような威力の攻撃。その攻撃を微妙に反らせて威力を半減どころか十分の一くらいに減殺させながら俺は冷静に現在の状況を認識しようとしている。

周囲の音が次第に小さくなり、世界の時間がゆったりと流れているように感じる。

王女が何かを俺に向かって叫んでいるようだけど、ゆっくりすぎてよく聞き取れない。

相変わらず漆多は局部を露出させた哀れな姿で必死に逃げ道を探しながら喚いているようだ。

そして静寂。

そして時が止まる。

俺は動きを止めた蛭町の両腕にある死の線をなでる。

プチプチという柔らかな感触が指先に伝わってくる。

なんだかくすぐったい。

そして右腕は肩のすぐ上、左腕はちょうど肘のあたりに見える瘤をそっと掴んだ……。

少し暖かく柔らかい。

そして少し力を入れて、それを握った……。

ぷしゅ。

裂けるような音がして、赤黒いものが瘤からあふれ出した。

あまりにも簡単に壊れちゃった。

刹那、止まった時間が動き出す気配。

無音の世界がいきなり騒々しくなるのを感じた。

ぶしゅる。

直ぐ近くで何かが千切れるような音が聞こえた。それも2回。

相変わらず俺の体の上では蛭町が喚きながら両腕を回転させている。

その彼の背後を2つの物体が舞っていくのをぼんやりと俺は見る。

それぞれは何かから切断されたもののように見え、真っ赤な液体を

ロケットのように噴射させながら飛んでいる。
くの字型になったその2つ、いや2本だな。その物体はくるくると宙を舞い、やがて床に落下した。
結構派手な音を立てて落ちた物体は、床に真っ赤な液体をぶちまける。
釣りあげた魚のように床で少しの間飛び跳ねたそれは、やがて動かなくなった。

「ほげ、なんじゃこれ」
蛭町が思わず声を上げて、それを見る。
グルグルと腕を回しているが、その先にあるべきはずのモノがないことにまだ気づいていないようだ。
「腕じゃねえか。誰の腕？　」
辺りをきょろきょろと見回す。
眼球は飛び出しそうなほど露出し、血走った彼の瞳はもはや人間とは思えない。
辺りを見、俺を見、そして自分の腕をみた瞬間、彼は絶叫を放った。
「俺のかよぉ～！　」
初めて自分の両腕が失せたことを認識し、神経が繋がったのか？

「そう、お前の腕だよ……」
俺は囁くように言うと、両手を彼の顔へと差し出す。
彼のおでこ付近を漂っている瘤を掴もうと思ったんだ。

「ひへぇっ！　」
咄嗟に危険を察知したのか、蛭町は瞬時に後方へ飛び去った。
「てめー何しやがったんだ」
両腕を失ったことでバランスを崩しているように見える。
俺を見る眼は怒りに燃えている。

「くそうくそう！　」
ジリジリと後退をしながら、逃げ道を探しているよう辺りを見回す。
蛭町が近づくことで一緒にいたチンピラどもは恐慌状態に陥り、奇声を上げて必死に這い回り彼から離れようとする。

「そっちに逃げても無理だよ」
俺は一歩脚を踏み出す。
奴の背後は壁。逃げ道は無い。逃走するためには俺の横を通過し、ドアから出て行かなければならないんだから。
「終わりだな」
俺はさらに一歩踏み出す。

「何で勝てない。俺が負けるはずがない……。くそくそ。なんでこいつに。なんで恥をかかされたままで負けなければならねーんだ」
悔しそうに全身を震わす。
哀れな目で俺を見、絶望と怒りが入り交じった表情を見せた後、悔しそうに顔を歪ませる。
拳を床にたたきつけたいのだろうけど、彼にはその両腕が無くなっている。
「……なあんてね、ププ」

第４６話　超自然力によるｍｅｔａｍｏｒｐｈｏｓｉｓ

あまりに唐突に蛭町は嗤う。

ケタケタケタ……。ケタケタ。

その嗤い方は尋常じゃなかった。おかしいわけでもやけくそになったわけでもない、何の感情も無い空虚な嗤いにしか聞こえなかった。とりあえず形式的に、それっぽく、嗤ったというだけにしか聞こえなかった。

「ケタケタ。……やはり月人、お前は人間ではありえないほどの強さを持っているな。信じられねえよ。この俺をここまでにするんだからな。ニンゲン如きがここまでできるとは信じられない」

「ついに蛭町を乗っ取ったのか？」

先ほどと明らかに口調が変わったことを感じ取り、本気でそう思った。

「そう、そのとおり。俺はもはや宿主のニンゲンではない。別次元の存在なのだよ。こんな怪我など無意味なのだ。超越種たる俺の力を今から見せてやるよ」

ゆっくりと立ち上がる。その顔には先ほどまでの負け犬の負のオーラは無い。

「騙されるな、シュウ。寄生根は意識を持たない。目的を持つだけだ。それっぽく見えるのは宿主の記憶と思考を切り貼りしたからだ。根底にあるのは宿主だった人間のもので、寄生根はそれを強化し目的の為にその強さを誘導するだけでしかない。ただの単細胞生物でしかないわ。だから今以上の力も出せないはず。所詮それはただの

虚勢よ」
王女が冷静に分析する。
その言葉で寄生根が舌打ちをした。
「チビが偉そうに何ぬかしやがってるんだよ。……俺がこんな状態のままやられるわけないだろう？　お前本気で俺を怒らせたな。マジ許せねえよ。むかつくチビだな。月人ぶち殺してからヒーヒー言わせてから殺してやるからな。糞チビが。……そうはいっても、このままじゃやべえのは事実。……仕方ねえな。奥の手を出すしかないっていうのか。俺の美意識からするとできることなら避けたかったんだけどな。しゃーねえか」
両腕の無い蛭町はそう言うと両足を肩幅まで開き、腰を落として中腰となった。
「うぬぬおううう」
全身でいきみはじめる。直ぐに顔が真っ赤になっていく。

【おいおい。またケツから触手なんてことはないんだろうな？　】
ふとどこかからそんな声が聞こえた。
【それはそれで嗤えるんだけどな。また嗤わしてくれ。でも今度は完全にぶち殺すけどな】

蛭町はお構いなしに全身に力を入れる。顔や首筋に血管が浮き出す。
「ほふう、破っ！！　」

一喝！

刹那、蛭町の体が急激に膨張する。衣服が一瞬で吹き飛び、パンパンに腫れ上がった体が露出する。
彼の背中側の首の付け根が急激に膨れあがったせいで、彼の顔は限界までうつむき、胸に顔面が張り付きそうだ。

かつて脚だったものは膨張によりくっついている。肌色だったその体の内側から茶色と赤と黒の縞模様のような斑点が浮かび上がる。柔らかかったはずの表皮はあたかも蛇皮のようになっていく。

「うげうげ」

窒息しそうなのか蛭町はうめき声をあげ、よく見ると泡を吹き出している。

「うぬん」

ほとんど前方へありえない角度まで折れ曲がった頸。蛭町の顔は自分の胸に強く押しつけられて呼吸困難に陥ってるようにさえ見える。

顔がみるみるどす黒く変色していく。

「ぶぶぶぶぶ」

何かを喋ろうとしているんだろうけど、口を圧迫されているため空気が漏れるような音しかしない。

唇か舌かを噛んでしまったのか、血が垂れ落ちていく。

ゴキリッ。

どこかから折れるような音が地下室に響き渡り、奴の折れ曲がった頸が大きく盛り上がっていく。

まるで首から新たな頭部が生えてくるように、最初は小さなふくらみだったモノが次第に大きくなっていく。それは最初のうちだけ人間の皮膚のようなものに覆われていたけど、やはり表皮は直ぐに蛇皮のように変化していく。

いつのまにか蛭町の頭部には二つの頭ができあがっている。新たにできあがりつつ瘤のようなそれは次第に本来の頭を取り込みながらさらに大きくなっていくのだ。

「ひぃい」

背後で悲鳴が聞こえる。

……漆多だ。
蛭町達に創造できないくらいの酷い目に逢わされ、さらに命の危険にさらされた上、人外の魔物の出現を見せつけられたら、精神はまともではいられないだろう。
眼をひんむいて口をぱっくりと開いたまましばし呆然と立ちつくしていた。涎が垂れ落ちる。もはや精気が感じられない。
彼の心の中では死があまりにもリアルに感じられているのかもしれない。

「ななんじゃありゃ～」
「ひいいい！　ばけもんだ」
俺の蹴りを受けて転がっていた連中が意識を取り戻したらしい。
いきなりの状況、今自分が何処にいて何をしていたのか吹き飛ばすほどの非現実感。
魂が吹き飛ばされそうな異次元空間に置かれた彼らではあっても、本能的に危険を察知したようだ。
かなりの怪我をしているのにまだ体はきっちりと動くようだ。
蛭町から眼を逸らさずに、かつ慎重に、感づかれないように最大限の努力を払いながら、ゆっくりゆっくりと蛭町から遠ざかろうとしている。

彼らの悲鳴に意識を戻されたのだろうか。
漆多の瞳に光が戻ったと同時に絶叫が地下室に響き渡る。
……彼の悲鳴だ。
がくがくと震えながらそのまま座り込んでしまう。
彼の周りに突然水たまりが発生する。
「たた、たたたたたたったたたたたたすけて。たすけて」
あまりの恐怖で失禁をしてしまう。

そんな人間達の姿などまるで興味がないかのように蛭町の変態は

続いている。
骨が折れる……いや砕ける音。体液が絡み合うようなピチャピチャという音。
地の底から聞こえるようなうめき声。
それは生物の誕生の苦しみなのか？

蛭町はついには地面に倒れ込み、小刻みに震えているだけのなんだか訳の分からない血に汚れたどす黒い固まりにしか見えない。

ペキリ。
何かが裂けるような音がした。

俺は蛭町を見る。
どす黒く変色して体を包み込んでいた皮膚にいくつもの裂け目が走り、そのおくには真っ黒の皮膚のようなものが見えていたんだ。
あれはは虫類とかのモノじゃない。おまけに節に別れているように見えるし。

さらに裂ける音がして彼の胴体を突き破るようにして、毒々しいほどの黄色の枝のようなモノが何十本も左右対称に飛び出してきた。
太さは子供の腕ぐらいの太さ。でも長さ1メートル近くはありそうだ。
ピンと張られたその枝が真ん中あたりでクキリと音を立てて直角に折れ曲がった。
どうやらそれは脚のようなものだったらしい。先が地面に触れると急に力が入ったようになり、折れ曲がった部分には節が形成されてまるで関節部のように変形し、何十本もの枝が一気に蛭町の体を地面から浮き上がらせた。
「シュー」
声なのか呼気なんか分からないが蛭町の頭部から音がした。ぐい

と首を持ち上げると頭部を覆っていた皮膚がはがれ落ち、体全体の皮膚もパラパラとはがれ落ちていく。はがれた部分から真っ黒は節がいくつも繋がったものだということが分かる。

……奴の本来の姿がついに現れた。

「なんだこいつは！！」

第４７話　超進化型ミュータント

奇声が地下室に響く。
それは人が発したとは思えないような音。

蛭町の頭頂部は左右にバックりと割れ、そこからは二股の真っ赤な舌がうねうねとはい出している。口の上下には2本づつの長い牙。そして耳の直ぐ側に大きな眼がいつのまにか形成され、俺のほうを睨み付けている。
そう、顔は明らかに蛇のそれだ。

鎌首をもたげ、俺を見下ろそうとする。
体はムカデで頸から上は蛇……。
なんとアンバランスな生き物だろうか。
しかも体型は寸胴で芋虫みたいに見える。芋虫のようにでっぷりした体に何十本もの脚が生え、頸から上だけが蛇というのが正確な描写なのかな。
どっちにしてもかなりグロテスクな生き物だ。
鎌首をもたげたそれの喉元を見ると、そこには蛭町の顔が人形のように無表情な表情で張り付いていた。
まるでお面、デスマスクのようだ。

気持ち悪い……。だけどその程度の存在にしか思えない。
顔は蛇で体はムカデ。
確かに全長は３ｍ近くまで伸びて無数の脚が伸びている。その形態は家の中でムカデを見つけた時とは比較にならないほどの驚きと嫌悪感を感じさせた。でもなんかムカデにしては寸胴すぎる。なんか脚の生えたナマコみたい。

シャー！

威嚇するような音を立てて、かつての蛭町、いまは蛇ムカデが俺を睨み付ける。二股に別れた舌がシュルシュルと伸び縮みする。喉元に張り付いた蛭町の眼がゆっくりと開かれる。

そして、ニヤリと笑った。

次の刹那、奴は飛んだ。

蛇の口を思い切り開き、俺に噛みつこうとした。

すんでのところで俺は左へと飛び退いてその攻撃をかわす。転がりながら直ぐに立ち上がり、奴を見据える。

飛んではいなかった。ムカデの体はそのままで、頸から先が一気に伸びたんだ。長さにして2m超。

シュルシュルと音をさせて蛇の頸が縮み、もとに戻る。

「奇妙な生き物だな。でもそんなんじゃ俺を捕まえることなんてできないぜ」

挑発するような言葉を吐く。はたして人としての意識がまだ残っているか？

俺はゆっくりと移動していく。王女と漆多がいる出口のと反対側へ。そして眼をこらしながら奴を見たんだ。

よく見える。ハッキリと見える。

蛇ムカデの体に無数の死のラインが。破滅の瘤が。

確実に殺れる。

距離をとりながらタイミングを計る。

現状ではまだ奴がどんな攻撃をするか予測できない。不用意な攻撃は危険な場合が多い。でも様子を見ながら闘っている余裕はない。

漆多は怪我をしているようだし、ここは逃げ場が無い地下室。無為に戦いを長引かせれば彼らを危険にさらす可能性が高い。
少々のリスクを冒しても一気にケリをつけるほうが無難だ。
ねらいは奴の、かつての蛭町だった顔の上に見える瘤を潰すこと。
……これで勝てる。

そして動こう重心を前に移し始めたところに再び蛇が俺に向かって飛びかかってきた。今度はさらに早い。
牙の先端から透明の液体を垂らしながら飛びかかってくる。
先ほどと同じように左に回避し、立ち上がろうとしたところに再び大きく口を開いた蛇の頭が来ていた。
「な？　」
俺は大きく後に飛び上がり連続でバク宙をして回避行動を取る。
床を擦るような音と何かが噛み合わさるような音を感じながらも必死で回避行動を取った。
壁が近づいたところで俺はバク宙をやめ、目眩を感じながら立ち上がる。
顔の直ぐ前に蛇の頭があった。
何という速さだ。
頸を伸ばすだけの攻撃はフェイクで、当たり前だけどあのムカデの体を動かして俺を追いながら攻撃してきてたんだ。しかもその移動速度は想像以上に速い。
……回避しようにも後は壁。
蛇の目に感情が表れるかどうかなんてことは分からないけれど、確かにその時、奴の目は笑っていた。
獲物を仕留めたという喜びに満ちているように見えた。

でも俺の眼も笑っていた。
この距離では俺も回避できないけれど、奴も回避できない。

これを待っていたんだ。
奴の喉元を狙うことはできないけれど、この位置なら奴の左頬を殺れる。
頬に見える瘤めがけ俺は右腕を伸ばして突き入れる。

第４８話　心的過負荷を起こす呪い

突然の反撃の真意を知った奴は噛みつく行動から回避行動へと意向させた。
驚くべき反射神経。
俺の手が奴の左頬にある瘤を掴む寸前で何とか回避し、顔面から壁に激突する。

俺が触れることができたのはその瘤が前後に移動していた死のラインのみだった。
触れただけでその糸はプッツリと切れた。

軋むような、呻くような音を立てて、蛇ムカデが転がっていく。
ムカデ様の胴体をくねらせる。
壁に当たった衝撃や痛みではなく、俺が抉った左頬のダメージなんだろう。
直ぐに起き上がった奴の蛇様の顔の左半分には巨大な鉈か何かで切られたような深い大きな傷が縦に刻み込まれ、赤い血がどくどくとあふれ出す。
ピンクと白の混じったものが内側に見えるが、その傷口はゆっくりと重なり合い修復されているようだ。出血が瞬く間に止まった。

化け物でありながらも血の色は俺たちと一緒。それが人間だからなのかは分からない。

蛇ムカデは再び俺を睨む。ムカデの胴体も含めてさらに体を持ち上げる。まるで蛇が鎌首をもたげるかのように。その瞳には驚きと恐怖の色がしっかりと張り付いている。
所詮生物である限り、死は訪れる。どんな化け物のような形状を

していたって死からは逃れられないんだ。そして、俺はその死を操ることができる。

化け物でも恐怖を感じることがあるのかな？　ふとそんなことを考えた。明らかに蛇の顔をした奴の眼には動揺が現れていたんだから。

このまま押せば勝てるはず。

俺は奴に向かって一歩踏み出す。すると奴は押されるように少し後退し、距離を保とうとする。あと少しで俺の間合いに入ることがわかるんだろう。

威嚇するように空気を裂くような音を立てる蛭町。

……必死だな。

虚勢を張れば張るほどこちらに余裕が出てくる。爬虫類っぽい顔になったのになんだか汗ばんでいるようにさえ見える。

ふっ、なんか軽くやっつけられそう。

俺は笑みを浮かべてさらに一歩踏み出す。

ビクンと蛇顔に蛭町の眼が大きく見開かれたように見えた。その眼は俺を見ず、自分の体の下を見た。

つられて俺も奴の顔の下へと視線を向ける。

奴の喉下。

それはかつての蛭町本人の顔のある場所だ。

土色に変色し、デスマスクのようになっていた奴の顔に生気が蘇っていく。ピタリと閉じられていた瞳がやがてゆっくりと開かれていく。

その瞳の色はかつての人のものではなく、真っ赤な色の虹彩で、瞳孔は人間のような円形ではなく、スリット型しかもヤギみたいな水平方向の瞳孔で、その色は銀色だ。その眼で俺を見つけるとニッコリと微笑んだんだ。

いまさらながら人間じゃないことを実感させられ、悪寒が走った。

「月人、まったくお前はつえええな。ムカつくほどつえええな。俺じゃあ、お前を倒せねえんじゃないかって思ってしまうよ、まじで。むむむん。腹が立つ。くそ。……でもな、何度もお前にやられてばかりなんていらないんだよ。

お前なんかにな。絶対仕返ししてやっからな……」

浴びせられる言葉には深い深い呪いのようなものがまぶされているみたいに、聞くだけで何か気持ち悪さと嫌悪を俺に与える。

「お前はいいよなあ。そこまでの力を手に入れてよ。おまけにそんな可愛い女の子をものにしているようだし。お前の周りには可愛い女の子だらけだよな。そういや。ケへへへへ、……柳もそうだし、美里もいい女だな。それから下級生の些沙良ってのもお前に色目使ってたよな。お前が知っているかはしらないけど。それにお前の妹もすげー可愛いよな。へへへ。お前が死んだらその子たちの面倒は俺がみてやるから安心しろよ。……日向みたいにこんなの初めてってひーひー言わせて逝かしてやるからよ。へっへっへ」

「下種だな。……お前、3回は殺してやるよ」

「ふん。でもな、日向はヨガってただろ？　お前は目の前で見てたんだからよ。ヒヒヒ、俺の、まああのときは如月流星君のイチモツだったけど、それをつっこまれたあの子のヨガリ声は最高だったよな。お前も血まみれになってたけど、なんやかんやでオッタテテたんじゃねーのか？　このスケベくん。ふふん？　」

口角を引きつらせて笑う蛭町に明確に俺は殺意を覚えた。悪を倒すとかそんな格好いいもんじゃなく、明確にその対象を殺したいという怒りだ。
ただただ、目の前のこのむかつく奴を殺したい。
「許さない。……殺してやる」

「ふほほほ。怖い怖い。でも俺だって殺されたくないからなあ。まだまだいろいろ楽しいことをいろいろしたいしなあ。だから月人には殺されるわけにはいかないんだ。そこのちびチャンや、柳や……それからお前の妹……亜須葉ちゃんだったっけ？　と乳繰り合いながらじっくりとお話したいからなあ」

刹那、俺は奴との距離を一気に詰めていた。
左手で奴の蛇面の下あごを鷲掴みにすると、力任せに殴りつけた。何度も何度も。
殺意をこめて、ありったけの殺意をこめて。

俺の脳裏には蹂躙される寧々の記憶が甦らされていたんだ。化け物に犯されて殺された。
そしてこいつは再びその惨劇を繰り返そうとしている。
紫音を、王女を、そして俺の妹を同じ目にあわせようとしてやがるんだ！

許さない。

こんな奴、一秒足りと生かしては置けない。
今すぐ殺す、すぐ殺す。
存在の痕跡すらないぐらいに滅殺する。
欠片すら残さない。

意識の残滓さえ許さない。完全に消し去ってやる。

死ね死ね死ね。

死ね死ね死ね。

俺はその呪詛の言葉を声に出して殴り続ける。

ぶっ殺す。

一秒たりとも地上に存在させない。

どんどんとこいつに対する怒りが全身から湧き出して止まらない。

亜須葉に指一本触れさせるか、この糞野郎！！

滅殺してやる。

肉片さえ残さない！！　消し去ってやる。

自分の声とは思えないようなうなり声を上げると、身の力を込めた右拳を突き上げるように奴の胴体へと打ち込む。

何度も何度も。抉るように。

鈍く、重い音が地下室に響く。

「死ね死ね、死に腐りやがれ」

俺は死を念じるように拳に力を込め、更にパンチを打ち込み続ける。

第４９話　感情のまま、策略に埋められて

――――――――――

しかし体力の限界が直ぐにやってくる。次第に打ち込む音が小さくなる。
俺の呼吸が乱れているのを感じる。
腕の力が急激に落ちていくのを感じる。

俺は最後の力を振り絞り、とどめとばかりに左手で奴の口を掴んだまま、その蛇面の左頬部分に思い切りパンチを見舞った。
３メートルはあろうかという巨体になっている蛭町は衝撃で吹っ飛び、転がりながら壁に激突した。

「はあはあ……」
呼吸の乱れを感じるとともに激しく咳き込んでしまう。何百メートルも全力疾走をしたような急激な疲労感が襲ってきて、思わず蹌踉けてしまう。
一体何発のパンチを奴に打ち込んだだろう。感情的になり自分を見失ってしまった。リミットを外して俺は奴に攻撃を続けた。一撃一撃は全てが必殺の破壊力だ。拳がジリジリと痛み熱くなっているのを感じている。もしかすると骨が折れてしまっているかもしれない、な。手を開こうとしても、俺の手はまるで自分の手じゃないみたいに動かすことができない。ずっと拳を握りしめたままだ。おまけに左手を見たら親指と中指の爪がはがれていた。血がダラダラと流れ出している。そして、人差し指はどうも折れてしまったみたいで、変な方向に曲がっている。
必死になって転倒を回避し、片膝をついて壁に転んだ蛭町を凝視する。

たった一言で俺から冷静さを奪いやがった。
偶然とはいえ、奴は俺の中で唯一触れてはいけないものに触れてしまったんだ。
あの攻撃を受けたんだから、奴はもはや生きてはいないはず。
俺がここまで消耗するほどのエネルギーを使い、全力で攻撃をかけたんだから。

生きていられるはずがない……。
俺はニヤリと笑った。

壁際に倒れ込んだどす黒いナマコにムカデのような脚が生えた奇妙な物体。
それがかすかに震えたと思うと、ゆっくりと動き出した。
頭をゆっくりと持ち上げてこちらを見てくる。
蛇の頭。
口が裂けるほど大きく開き、唸る。
そしてその蛇の顔のついた喉元にある本来の蛭町の顔がニタリニタリと嗤った。

全身から血の気が引いていくのを感じる。
あれほどの攻撃が全く効いていないなんて……。
化け物だ。
いや、もともと化け物なんだけど、想像以上に化け物だ。
奴はそれどころか体力を回復させているようにさえ見える。
切り裂いたはずの顔面の亀裂が綺麗に塞がってしまっている。

そこで俺は気づいてしまった。
俺はまんまと奴の策略に引っかかってしまったんだ。
俺が激高するキーワードを使うことで俺の平静を乱し、力任せの

攻撃を繰り出すように誘導したんだ。
死の線、消滅の瘤を狙った攻撃を封じるために。その攻撃は唯一奴を破滅させる攻撃だったというのに。
渾身の攻撃は奴にとってはノーダメージ。むしろ傷を癒し体力を回復させる余裕さえ与えてしまったんだ。

まったく馬鹿だ。せっかくのアドバンテージを感情的になったことであっさりと放棄してしまったんだ。なんて愚かなんだ。

【確かに馬鹿だな、お前は。でも安心しろ。何事も遊び心は大切だぜ。それにあのミミズ野郎は、俺の亜須葉に手を出すつもりらしいからな。まったく、虫けらの分際でそんなことを考えていやがったとはな。……万死に値する大罪だ。あんな糞野郎は簡単には殺　さない。自分の言った言葉がどれほど罪なことかを思い知らさないと、許せない。へへへ、じっくりといたぶり殺してやるから安心しろ】

また頭の奥で何かが喋り出す。これは俺の思考なのか？　なんだか頭が痛い。
しかし、その事を深く考える余裕がないんだ。今は眼前の敵を倒さなければならない。

「く、くそっ」
俺は再び攻撃するために奴との距離を詰めようとする。
しかし、気持ちだけが前に行き、脚がついてこない。
蹌踉けて転びそうになる。
あざ笑うように蛭町は壁伝いにに移動し、俺の突進の進路から消える。

「うっぎゃー」
悲鳴が響く。

蛭町の進路上に倒れたままの奴の仲間の一人が転がっていたのだ。
重傷の為、逃げることさえできない彼は、それでもはって逃げようとする。
しかしそれはかなわなかった。
蛭町のナマコ体がのしかかる。
「うげえげげげ」
恐怖に引きつらせた
黒光りする蛭町の胴体は仲間の体に触れるとすさまじい勢いでその仲間の体を取り込み始めたんだ。
どろどろと溶けるように黒い皮膚が人の体を取り込んでいく。
必死に逃げようとするが、怪我のために逃げられない。
「うおうじ。助けて、たすげてえ」
叫ぶ彼の顔をコールタールのようなものが覆い尽くしていく。
ぴくぴくと体を震わせるが、やがて全てが蛭町のナマコ体に取り込まれてしまった。
そして、一人を飲み込んだ分だけ奴の体は少し大きくなった。奴のお腹あたりで皮膚が波打つ。まるで何かに押されるように。ぶよぶよと突起が現れる。その先端は人間の手の形をしていた。

蛇の頭が周辺を見回す。
「ヒッ」とか「ヒャッ」という間抜けな悲鳴が起こる。
それは蛭町の蛇の頭部と眼が合ってしまった連中の出す悲鳴だった。

悲鳴が止むより早く、蛭町が動く。
一番近くにいた、ハンマー男の側で停止したと思うと、いきなり巨大な口を開き飛び上がった。数メートル飛び上がったと思うとそのまま落下し、がぶりと男を脳天から飲み込んだ。顎が外れてるのではないかと思われるほど開いたその口は軽々と男の肩口まで飲み込んだ。そこで一旦停止。逆立ちしたようにピンとのばしたムカデ

様の蛭町はおもむろにその尾部を回転する。ゆっくりゆっくりと男の体は飲み込まれていく。体を回すことで逆ドリルのように男を体内に取り込んでいったのだ。
ついに男は悲鳴を上げることもできないまま丸呑みにされた。
蛭町だったその化け物は倒立状態だった体を地面へと倒し、こちらを見る。
奴の口の中でスニーカーがばたばたと暴れたが、直ぐにその喉の奥底へと飲み込まれていった。
我に返って動こうとすると、すぐさま数十本の脚を駆使して次の獲物へと突進した。

2人の人間を飲み込んだことで、蛭町の体は大きくふくらんでいた。どうやら二人ともナマコみたいにぼってりした体の胴体部にいるようで、下腹と左脇腹部分が人型にさらに膨らんでいた。
そのためか動きも鈍くなり、バランスも悪いせいかふらふらしている。

皮膚はもともとそれほど厚くないのか、その人型に膨らんだ部分にはハッキリと飲み込まれた連中の手や靴、顔が透けて見えていた。まるで風船のようだ。
彼らは叫んでもいるように、何かゴボゴボという音に混じって「たすけて」といった声も聞こえるように思える。
恐ろしいことに体内に取り込まれた連中の服や靴はどろどろと溶けていってるのも見える。消化でもされるのか？

残りの連中はもうパニックだった。
大けがでまともに動けないはずだが、生への執着が痛みを超越したんだろう。残された連中は折れた脚を引きずり、血まみれの腕を動かし、悲鳴も上げずにはうように出口の扉へと向かっていく。

しかし、怪我をした人間が動ける速度などたかがしれている。あっという間に彼らは蛭町に追いつかれ、取り込まれていく。
助けてやろうなんて気は全くないけど、仮にあったところで今の俺では追いつくことも、まして彼らを助けることも出来ない状態だったんだ。

無駄に体力を消耗させられるどころか、奴に回復の時間を与えてしまった。
右拳は握ったままで元に戻らない。左手は指が3本折れたままだ。
意識を集中してその両手の回復を図る。
どうやれば回復させられるのかはよく分かってないが、ただ動くことは賢明でないってことだけは分かった。たとえ人間が奴らに喰われる？　状況だったとしても助けにはいけない。行ったところで助けられない。

目の前で次々と蛭町の仲間だった男達が取り込まれていく。
そのたびに蛭町のナマコみたいな巨大な体が膨らみ、そして伸びていく。人を取り込んで膨らんだせいで体の中が透けて見える。
そこには眼と口をこれ以上ないくらいに開いて必死に暴れているかつての蛭町の仲間がいた。必死に藻掻いて何かを叫んでいるようだが、泡がぶくぶくと発生するだけで、その言わんとする言葉は届かなかった。
やがて、ウネウネとどこからか現れた神経節のような細長いものが彼らの体に絡みつき、一体化していくのが見える。
体液の中でも彼らは呼吸はできるようだ。出口を求めて移動するが、狭い体内に対して取り込まれた人間の数が多すぎる。やがて彼らはぶつかり合い絡み合う。
眼前で繰り広げられる光景。これは蛭町がわざと見せているのか？

取り込まれた人間達が絡み合い必死に出口を求める。そして恐ろしい事が起こる。絡んだ腕や脚がその接触した部分で結合を始めたんだ。

くっついた手や足を奴らはふりほどこうとするが、逆に腕と腕、脚と脚、いろんな箇所がくっついて離れないようだ。そして体は融合を始める。もともと一つのものだったように組織が溶け合いくっついてしまった。

古い本で見たシャムの双生児の多人数版だ。複雑に結合しまっていて、もはや分離は不可能だろう。

おまけに蛭町のミミズ体の組織も彼らの体と融合している。

もう複数の人間による一つの生命体になったとしか思えない。

本当なら助けるべきなんだろうけど、無理だ。

今は自分自身の回復を図らなければならない。俺は正義の味方なんかじゃない。

悲鳴、うめき声、唸り声がしばらく続いている。

「助けて！　助けて！　」

「痛いよう、苦しいよう」

「熱いよう」

「俺の腕、どうなってるの」

情けない声が伝わってくる。彼らは必死に助けを求めている。理不尽な現実から逃れようとわらをも掴む思いなんだろう。

俺は耳を塞ぎたくなる。

ぷるぷるとその蛇ミミズは震える。

「シュウ！　何をやっている？　そいつを早く殺すのよ。でないと……」

唐突に王女の声が響き、俺は我に返った。

何か目の前で繰り広げられる不気味なショーに魅入られて何も出来ずにいたんだ。
明らかに戦闘力が上がっている……。戦闘力を数値化する機械でもあれば、蛭町は仲間を喰う前と今では倍近い戦闘力の差がでているんだろう。感覚でそれは俺にも分かる。
今叩かなければ、完全化すれば俺に勝つチャンスはあるんだろうか？
まだ折れたり潰れたりした手は治っていない。しかし待ってられない。

殺せ。
拳が潰れていたって攻撃は出来る。今を逃せば今度は俺がやられる。
俺がやられるということは、王女も漆多も守れないってことだ。
亜須葉も、紫音も、誰も彼もみんな殺されてしまうんだ。
絶対にそんなことはさせない。
体力の回復は完全じゃない。でもそれを待つ時間がないんだ。

第５０話　最終形態

第５０話　最終形態

「くそっ」

俺はつぶやき、一歩前に出る。出るしかない。

退くことはありえない。

一人なら逃げられる。でも、王女と漆多を連れて、この狭い地下室から逃げられるとは思えなかった。

その刹那、奇声を上げて蛭町は鎌首をもたげ、威嚇を始めた。

ぎゃひんぎゃひん。

奇妙な音がする。

ずぶずぶという肉が裂けるような音も聞こえた。蛭町の全身が震える。

「な、なんだ」

俺は奴の体の背中に巨大な瘤が出現するのを見た。

それは巨大なカボチャのように見えた。どす黒い体に深緑色の大人でも抱えきれないほどの大きさの肉の固まりだ。

赤黒いヌルヌルした液体がその物体からしみ出して来るのとほぼ同時に、まるでサボテンのように無数のトゲが突きだしてきた。

奴の体から推測するとそのトゲの太さは大人の親指程度はあり、長さは飛び出している部分だけで５０センチはあるだろう。色は黄色いがかなり固そうだ。先端も相当の殺傷能力を秘めた尖り具合。それが数え切れない数で出現した肉塊をハリネズミのようにしたんだ。

あれで自分の体の死角部分をカバーするつもりなのか？　俺はそう考えた。

巨大化したため、奴の胴体部はかなり長くなった。当然、背後の死角は増えているし、背中部分を狙おうと思っていたところだった。あんなトゲがあるとやっかいだ。トゲを飛ばすかもしれないし。

そしてふと奴の全身をみて、衝撃を感じた。

……奴の体から死の線が完全に消えていたんだ。

人間を取り込むまでの間は確かに無数の線と肉塊が見えていた。なのに、完全に人間を取り込み同化したことが原因なのか、完全に消え去っていたんだ。

これでは奴を殺すことができない……のか？　そんな嫌な予感がし、暑くもないのに額から汗がしたたり落ちるのを感じてしまった。

でも、このまま睨み合うわけにはいかない。時間が経てば経つほど奴に有利。

俺はさらに一歩足を踏み出した。

「ぎゃしゅー」

呼気を猛烈に吐き出す音がした。

刹那、奴の背中に出来ていたトゲトゲの肉塊が大きく膨らんだ。

まるで何かを吹き出す予備行動のように……。

「しまった……」

俺は猛然と加速した。

蛭町の方ではなく、奴を回避しつつ王女の元へと駆けだしたんだ。

そう。奴の肉塊が膨らんだこと。それはその肉塊から生えだしたトゲを発射する予備動作なんだ。全方位にあのトゲが発射されるだろう。数はあまりに多い。それがこの狭い地下室内に打ち出される。すなわち王女の身が危ないということだ。

奴は俺を殺すより先に、王女を抹殺することを優先したのか？

破裂音が地下室に響き渡る。

蛭町の背中の肉塊から無数の矢よりも強靱で鋭利なおそらくは恐

ろしく硬度のある槍のようなトゲが一気に射出された。
打ち放たれた矢の様な速さで飛ぶ。
俺は全力疾走で走る。
軌道上のトゲを手や足で払いのけながら王女の元へと走る。
王女は咄嗟におもちゃの人形を盾代わりに立たせるが、防ぎきれない。
「くっそぅ！」
俺は彼女に向かって飛んだ。
王女を抱え込むように抱きしめるとそのまま倒れ込む。
いくつかの衝撃を背中や足に感じると同時に、激しい痛みを感じた。
「大丈夫か？　」
俺は腕の中の少女に問いかける。
目を閉じた王女が眼を開き頷く。
どうやら怪我は無いようだ。

彼女を庇うように立ち上がり、蛭町の方を振り返る。
奴はまだ背中をこちらに向けたまま、発射の余韻に浸っているように見える。

俺は自分の体の具合を見る。
左肩に1本、背中に3本、右足に1本の太く長いトゲが突き刺さっている。かなり深く突き刺さっているため、少々動いても抜け落ちることはなかった。その一本に手をかけようとする。
「ぐがっ」
突然、突き刺さったトゲが動き出した。
ドリルのように回転し、さらに奥へとめり込んでいこうとし始めたんだ。
再び傷口から出血が始まる。
奴はまだ背中をこちらに向けたまま、発射の余韻に浸っているよ

うに見える。
俺は自分の体の具合を見る。
左肩に1本、背中に3本、右足に1本の太く長いトゲが突き刺さっている。かなり深く突き刺さっているため、少々動いても抜け落ちることはなかった。その一本に手をかけようとする。
「ぐがっ」
突然、突き刺さったトゲが動き出した。
まるで意志を持っているかのように、そいつはドリルのように回転し、さらに奥へとめり込んでいこうとし始めたんだ。
再び傷口から出血が始まる。
慌ててトゲを掴むと、力任せに引き抜いた。
肉が抉られるような音と激痛。思わず呻いてしまう。
引き抜いたトゲの先端を見ると、それは膨らみ無数の突起ができあがっていた。その返しになっている部分にねっとりとした物体がこびりついていた。俺の体内の肉を抉ったものだろう。
痛みに耐え、残りの四本も引き抜いた。
トゲが刺さっていた部位はぽっかりと穴が開いている感覚がある。しかし流れ出ていた血は直ぐに止まっていた。急速に負傷した部位の再生が行われ出している感覚。

「うぎょぎょぎょ、たすげて」
人の悲鳴が聞こえる。
とっさにそちらを見ると、全裸の漆多が転がり回っていた。　発射されたトゲの軌道上に漆多がいたのだった。
彼のお尻にトゲが突き刺さっているんだ。そしてそれは回転をし、彼の体内にさらに入り込もうとしていたのだった。
「大丈夫か」
俺は彼に駆け寄る。しかし思うように体が動かない。トゲの直撃を受けて負傷したため、まだ体が回復できていないんだ。
足を引きずるような感じで近づくしかできなかった。

「早く助けてくれ、うぎょ。う。食い込んでくるよう」
ボロボロと泣きながら訴えてくる。
刺さった場所を見ると、子供の腕くらいの太さのトゲがゆっくりと回転をしている。
体内にだいぶ入り込んでいる。
大丈夫か？
「漆多、少し痛いが我慢しろよ」
漆多がぐちゃぐちゃの顔で頷く。
右手でトゲを掴み、左手で彼の体を押さえると一気に引き抜いた。
かつて聞いたことのないほどの大きな奇声が響いた。
同時に肉の抉れる音と一緒に、トゲが体から引き抜かれた。
「ひいひいひい～」
白目を剥いて泡を吹きながら彼はこちらを見ている。激痛のためひきつけを起こしたのか？声をかけても反応が弱い。俺が視界に入っているかどうかさえ分からない。
「まずいな、直ぐ病院にいかないと……」
そう言いかけて俺は言葉を止めてしまった。惚けてしまっていたはずの漆多の顔に恐怖が張り付いていたんだ。眼球が飛び出さんばかりに眼を大きく見開き、声にならない声をだし、口をパクパクする。
「シュウ！　後よ」
王女の声に反応し、俺は背後を見た。……そして愕然とした。

第５１話　危機的状況

振り向いた俺の鼻先ほどの距離まで変形を遂げた蛭町の蛇顔があったんだ。

――――俺は奴が嗤ったように見えた。

次の刹那、蛇は口を大きく開けたと思うと、生えた巨大な牙を剥きだした。カッと何かを吐くような音がすると同時に、その牙からスプレーのように液体を飛ばすのが分かった。

咄嗟に漆多を突き飛ばすのが精一杯だった。

同時に俺は蛭町の吐き出した毒液をもろに顔面に浴びてしまっていた。眼を閉じたつもりだったが間に合わなかったのか。ものすごい痛みが両目に走る。焼けるような痛みだ。

俺は必死になって両目を擦って毒を落とそうとするが、当たり前だけど、そんなの全く効果がなかった。眼球が抉りとられるような感覚。そして何よりも敵前で視力を完全に奪われた事で動揺してしまい、どうしていいかわからない。

そして続けて衝撃を感じた。

首筋から肩口にかけて、何か鋭いものが打ち込まれた。不気味な肌触りと、気色の悪い呼吸音。

それで俺は蛭町の毒牙に噛まれたのだと分かった

……同時に最初は冷たく、でも直ぐに燃えるように熱くなる。

まずい、これは毒液だ。振り切るんだ！！　そんなことわかりきっているのに、体が動かなかった。首付近にしびれるような感覚だったそれは、急速に全身へと広がり、俺の体の機能を麻痺させていった。

体を動かそうとしても思うように動かせない。

おまけに毒液をかけられたことで目は潰れて何も見えない。どこ

になにがあるかなんて分かるはずもない。
全身が振り回されるような感覚がしたと思うと、次の瞬間には宙を舞っていた。
漆多の悲鳴が響いている。

くるんくるん。
体が宙を舞い、意志に反してくるくると回っているのを感じた。そして直ぐに壁に叩きつけられた衝撃が襲ってきた。
「ぐはっ」
体は麻痺して動きが封じられているのに、痛みだけはまともに感じる。いや、むしろ鋭敏になっている感じだ。とてもじゃないが、我慢できる痛みではなかった。まるで皮膚をすべて剥がされた状態のようだ。わずかな空気の揺らぎさえ感じてしまう。強く背中を打ったせいで、一時的に呼吸もできなくなる。
どう考えても肋骨が何本か折れている。
もちろん、毒液を浴びた瞳だっていまだに痛みは続いている。
俺は何処にいるか分からない蛭町を探して立ち上がろうとするが、うまく立ち上がれない。おまけに靴やズボン、服に体がこすれるだけで飛び上がりそうな痛みが襲ってくる。
これは奴の毒のせいなのか？　だったらなんてえげつない毒液なんだ。
必死になって立ち上がろうとする俺の両股に抉るような痛みと衝撃が襲ってきた。予想だにできない攻撃だったため俺はまともに倒れこみ、地面に手を突くことすらできずに顔面から床に倒れ込む。鼻が潰れる感覚。顎と歯が石畳に叩きつけられ鈍い音を立てる。
鼻から大量の血があふれ出る。口内にさびた鉄のような味が広がる。
歯が何本か逝かれたかもしれない。
太股に奴の発射したトゲが突き刺さったんだ。それだけは分かっ

た。そしてそれはさっきと同じくさらに俺の体にめり込むべく回転する。今度は動くことが出来ない。耐え難い痛みを感じるのにどうすることもできないんだ。

ドン！

爆発音がしたと思うと、衝撃とともに両足の付け根が焼けるような痛みを発する。

「うがっ」

思わず口からでる悲鳴。

王女の悲鳴が聞こえた。

トゲはある一定まで目標物の体内に入り込むと爆発する。激痛の中、俺はそれを知った。気を失わなかったのは俺の精神力の強さなのか、それとも蛭町が体内に打ち込んだ毒物の効力か。

ぎりぎりのところで俺は踏みとどまった。いや踏みとどまされたんだろうか？

両足の感覚は無い。……動かそうとしても、重い？　感覚がない？　無い？

先ほどの爆発から想像するまでもなく、両足がぶっ飛んだのは間違いない。

まずい。これは本気でまずい。

ただでさえ、劣勢だというのに、両足を吹き飛ばされるような重傷を負ってしまったら、回復が間に合わない。

焦りの中、直ぐ側に蛭町の気配があることに俺は気づけなかった。

「はーい、大丈夫」

聞き慣れた蛭町の声が直ぐ耳元で響いた。

俺はこの場から離れようと藻掻くが、右腕を万力のような力で押

さえ込まれて動きが取れない。
目が見えないこの状況がどれほど不利か思い知らされる。
何が起こっているか分からないんだ。ただ、どんどん劣勢になっていることだけは分かるんだけど……。
「姫、……逃げろ……。漆多と逃げてくれ。頼む」
情けないほど小さな、消えそうな声しかでない。
哀れな肉塊になりつつある俺にできることはもはや、王女の逃走を促すことしかできないんだ。
彼女に肉団子状態の自分を見せるのは二度目だな。……そんなことを考えたりしている自分に、ああ、もう俺は負けるんだ、死ぬんだなという実感が沸いてくる。
突然、右腕を何かに鷲づかみにされたような感覚。直ぐにそれは蛭町の蛇面の口に噛まれたのだと分かった。もの凄い力で俺の腕を物理的に曲がるはずもない方向へと捻る。
耐え難い痛みにうめき声を上げ、必死に抵抗しようとするが体は言うことを聞いてくれない。

ぶちり。

右腕から奇妙な音。そしておなじみの激痛。
誰の声か分からないような悲鳴が聞こえている。それが自分の声だとはしばらく気づかなかった。
痛みが起こり、さらにそれに被さるように更なる痛みが襲ってくる。もう気が狂いそうだ。
できたら狂ってしまったほうが幸せなんだろうな。でもそうはさせてくれない。意識はより一層クリアになる。そしてさらなる痛みを与えられる。
右腕を引きちぎられたのが分かった。
くちゃくちゃの噛む音が聞こえる。

くそっ。俺の右腕喰ってる。
吐き気が襲ってくる。しかし逃げることはできないんだ。
もう死んでしまいたい。
唐突に俺の頭の中にその言葉が浮かんできた。
うん、そりゃ死んだら楽になるだろうな。何でこんな酷い目に逢わないといけないんだ？　俺が何をしたっていうんだ。こんな痛い思い、苦しい思いをどうして耐え続けなきゃなんないの？　もうさっさと楽にしてくれ。本気で祈った。この地獄から逃れたい一心だった。
……王女を残してか？　親友を残してか？　見殺しにするのか？
寧々のようにまた罪を重ねるというのか。出来ることを全てやり尽くしたわけでもなく、ただ劣勢で苦しいからといって楽な方向に逃げようとするのか？　卑怯者の所行を繰り返すのか？
そんな批判が俺の奥底にわき上がる。
それに蛭町は俺を殺したら、あの二人も生かしては置かないだろう。どんな残虐な殺し方をされるか考えるだけで気が狂いそうだ。
王女は俺を助けてくれたんだ。なのにまた俺はへまをやらかせて死にかかっている。彼女に恩返しをすることなく死んでしまうのか？
そして親友の漆多。俺はあいつを裏切り、寧々とキスをした。そして彼女を守ることさえ出来ずに死なせてしまった。そしてさらに親友まで死なせてしまうのか？　親友を裏切ったままで、俺は死んでいくのか？
考えてみれば、いつも俺の人生ってうまいこと行かなかった気がする。
何かを手にしようとしたときには必ず邪魔が入ってしまう。自ら

の手に届きかけたものが霧散する。そんなことばかりの繰り返しだった。いつも何かに邪魔をされ、いつも空しさ悔しさだけが残っていたんだ。

今度も圧倒的な力を手に入れたつもりだった。何もかも思い通りになるような気がしていた。だけど現実はどうだ。俺はボコボコにやられ、瀕死状態だ。瀕死状態なんてこれで2度目だ。僅か数日でこんな目に二度も会うなんてよっぽど運が悪い。……そんな俺の運の悪さなんてどうでもいい。今はそれどころじゃない。

絶体絶命の状態。もはや逆転のチャンスはなさそうだ。両目は光を失い、どうやら両足は千切れているようだ。両手だってどうなっているかわからない。全然力が入らないんだから……。

俺が立ち上がらなければ、王女は護れない。漆多も見殺しにしてしまう。

俺が負けること、それは俺の周りの人間が皆殺しにあってしまうことなんだ。妹の亜須葉も、幼なじみの紫音も、奴はなぶり殺しにするって宣言していた。きっとこいつはそれを実行するだろう。俺は彼女たちを助けることも、それどころか危険を知らせることさえできない。無力に苛まれたまま、惨めに死んでいかなきゃならないのか？

助けてくれ。

助けてくれ。

僅かでいい、俺に力を貸してくれ。

この危機的状況から救い出してくれ。王女と漆多を。

俺はどうなっても構わない。蛭町を倒す力をくれとは言わない。せめて二人をこの状況から救い出してくれ。

誰とはなく祈った。

それは神への祈りか？　悪魔への契約か？

とにかく、この絶望的な現実を打破してくれたらそれで構わないんだ。

なんとか、なんとかしてくれ。

誰か、誰か助けてくれ。

第52話　開祖

【……ふふん。神と悪魔にしか頼まないのか、お前は】
突然、脳内に声が響き渡る。

「誰だ、お前は？　」
この声には聞き覚えがある。王女と契約してから、時々聞こえてくる声だ。
単なる気のせいだと思って無視していたが、こんな状況でも聞こえてくるんだ。

【幻聴じゃない。俺はここにいる。ずっと側にいた。お前の直ぐ側にな……。ふふん、ずいぶんと厳しい状況だなあ。とってもお困りのようだ。何なら力を貸してやってもいいんだぞ】

「こんな状況でどうやって逆転できるっていうんだ？　毒のせいでまともに動けないっていうのに、四肢はばらばらにされ、目も潰されてるんだ。どうしろっていうんだ。回復するっていっても劇的に回復なんてできるはずない。そして回復したところで、勝機はかなり薄いんだよ」

【ははん。大丈夫。俺と交代すればちょちょちょいちょいさ。千切れた足や腕、潰れた目なんか直ぐに復活する。お前はお前の力の半分も使いこなしていないからな。ひゃひゃ。俺と交代しろ。そうすりゃ、あんなキメラ、瞬殺してやんよ】
恐ろしい自信。しかしそれは全く根拠がないとは思えなかった。
交代という概念がよく分からないが、もしかするとチャンスがあるのかもしれない。
【おいおい、悩んでる場合じゃないだろ？　早くしないとお前の大

事な王女さまがばらばらにされちまうぜ。あんな化け物にチビちゃんがキメラに犯されまくってからバラバラにされちまって構わないのか？　お前の親友も当然ぶち殺されるしな。それどころじゃねえぜ。お前の事を好いている紫音ちゃんもあのキメラにやられてばらされるぜ。……さっさとしねえか】

混乱。

どうしていいかわからない。どうしようもない状況なのに、俺は一歩踏み出せないでいる。こいつの言っていることは正しい。仮に間違っていても現状それ以外に選択肢なんて無いのは分かっている。だけど決断ができないんだ。

こいつの誘いに乗ったら取り返しの付かないことになってしまう。……そんな恐怖があるんだ。

どうしてだか分からない。だけど、俺の心の奥底のものが警告を発するんだ。

【早くしねえと、王女がやられるぜ。さっさとしろ……。奴は最終的に亜須葉をやるつもりだ。お前の大好きな妹をキメラの生け贄にするっていうのか？　お前の一番大事な女なんだろう？　】

その言葉になぜだか動揺した。

【他の女は殺されても、まあ仕方ない。だが亜須葉は死なせたくないだろう。お前の一番大事な女なんだからな】

「何を言ってる？　なんで亜須葉が俺の女なんだ」

【俺はお前の中にあるものだ。だからお前の全てを知っている。お前は亜須葉を妹としては見ていない。一人の女として見ている。だからこそ、あの時、お前は……】

「うるさいうるさい！　黙れ黙れ。訳の分からない事を言って混乱させるな」
こいつはなぜ訳の分からない事で俺を混乱させるんだ。亜須葉は今は関係ないのに。
これもコイツの戦略なのか？　俺から冷静さを失わせ、奴の思うようにするための。

突然体にのしかかっていた重みが消えた。
同時に王女の悲鳴が聞こえた。

俺と王女の心は繋がっている。だから彼女の恐怖が手に取るように分かった。
蛭町が王女を次の攻撃対象として選んだのが分かった。
彼女が武器として使っていた特撮ヒーローのフィギュアはさっきのトゲの乱射で盾となって大破している。もはや彼女の盾となって闘う戦士はいないんだ。
王女の心に恐怖と絶望が広がっていくのが分かった。逃げようのない絶望感。それが暗黒のように彼女の心を浸食していってる。それでも彼女は漆多を何とか逃がせないか考えているようだ。

【さあ、早くしないとチビちゃんのレイプショーが始まるぞ】

「くそ、どうすれば」
俺はそれでも踏ん切れない。コイツの言うことを聞いたら俺が俺でなくなる危険を感じていたんだ。

【さあさあ】
直ぐ側にまでコイツの気配が近づいている。

「シュウ、助けて！！　」
突然、王女の悲鳴が聞こえた。絶望の中、必死に俺に救いを求める声。
死にたくないよ、こんなところで殺されるなんて嫌。シュウ、助けて。お願い！！

王女の叫びが俺に覚悟を決めさせた。
俺がどうなっても構わない。
こんな異世界に、誰も知らない世界に来た王女。たった一人で絶望と闘う少女を死なすわけにはいかない。

「わかった。すべてお前に任せる。頼むから、王女を助けてくれ」

【ふひゃ。了解だぜ、派手に暴れてやる】
コイツの手が俺の方に触れた気がした。
ふっと体が宙に浮くような感覚がし、俺の意識は後に下がった気がした。
まるで車の運転席を譲って、後部座席に移動した感覚だ。
全ては見えるし感じられるけど、夢うつつな感じ……。

【始動する】
俺では無い俺。
起き上がる。

第５３話　魔人、起動

場所を譲ったせいか、先ほどまでの激痛はまったく感じない。穏やかな状態だ。

まだ目は潰れているために、目を開けることはできない。しかし、うすあかりの中の様な景色が広がっている。これは目で見た世界ではないのか？

ゆっくりと俺であって俺でないものは起き上がる。

左手だけしかない。右腕は蛭町に食いちぎられて喰われてしまったのか、視界の中には見あたらない。

両足は付け根から千切れ、直ぐ側に転がっている。それを左手で掴むと、千切れた部位にあてがう。

ぶくぶくと泡立つ傷口。千切れていた筋肉の繊維や血管、神経がウネウネと動いて絡み合い接合されていく。めくれあがった皮膚も元通りになっていき、裂け目で繋がるとあっというまに平らになっていく。出血も瞬く間に止まっていくのが分かる。

恐ろしいまでの快復力だ。

完全に接合するまでに３０秒とかかっていない。

【俺】はゆっくりと足を動かす。何の違和感もなく、両足が起動する。

左腕でバランスをとり、【俺】は立ち上がった。

左手で潰れた両目をゴシゴシと擦る。バラバラとかさぶたになっていたものが落ちていく。そして再び俺はまぶたを開いた。

……そこには再び光があった。僅かな時間で完全に潰された眼球が復活していたんだ。

首まわしてゴキリゴキリと鳴らすと、蛭町のミミズムカデがゆっ

くりと獲物を追い詰めるように王女に迫っているところだった。
王女はジリジリと後退をしている。
それでも漆多からゆっくりと離れ、彼に逃げるチャンスを作り出そうとしているようだった。あんなに糞味噌に言ってたのに、なんとか漆多だけでも助けられるように行動していたんだ。
でも直ぐに追い詰められていく。

蛭町は楽しそうにしているのが奴の無数の足の動きで分かった。
とんでもなくむかついてきた。

【おい、こら。……ロリコン野郎、おめーだよ】
俺が叫ぶ。

蛭町が驚いて飛び上がった。
慌ててこちらを見る。
そして俺が立ち上がっているのをみて眼を剥くのが分かる。
喉もとの蛭町の顔にも驚愕が見て取れた。
まさか起き上がるとは、それどころか話しかけてくるなんて想定もしてなかっただろうな。俺もしてないけど。

【糞野郎、しかし、派手に痛めつけてくれたなあ。今からきっかりと仕返しをさせてもらうぜ、へへ。見てろよ、糞虫】
俺が舌なめずりをする。
【うおんんとうおりゃー】
全身に力を込めた。全身に力がわき上がる。そしてそのエネルギーを右腕、付け根から千切れた部位へと移動させていく。
千切れた傷口が信じられないほど熱くなる。燃えるようだ。そして何か強力なエネルギーがそこに集中していくのが分かった。一体何が起こるのだろう。傍観者的立場で俺は其の情景を見ている。

千切れた右腕の切断部、ねじ切られた骨、派手に損傷した筋肉、血管、よくわからない器官。見てるだけで気持ち悪い。このままだと徐々に腐っていく部位が意志をもったかのようにゆらゆらと動き始めていたんだ。

俺は無い腕を使って野球の投手のように振りかぶり、力任せに振り切った。

にゅるにゅるといった奇妙な感覚が無いはずの腕を伝わっていく。

ヌルヌルしたものが擦れる音も聞こえる。それはやはり右腕の方だった。

俺は目をやる。

――――ありえねえ。

そこには粘度の高そうな透明のジェルのようなものが塗りたくられテカテカしている腕があった。

突然生えてきていた！

そんなのあり得ない。

【よし、まあまあってところかな】

そう言って俺は生えてきた、生まれたての新品の右腕をぶるぶるんと振り回す。

【感度良好。良い感じだ】

キシャー！！

やっと状況が飲み込めたのか、ムカデ蛭町は王女を襲うのをやめてこちらを向いていた。ギラギラとした目でこちらを睨んでいる。

【気持ち悪い生き物だな、お前。さっさとぶっ殺してバラバラにしてやるよ】

そういうと無造作に、奴に向かって歩き出す。

蛇の頭がいきなり地面にまで下がる。同時にムカデの体がくの字になる。高々と持ち上げられた背中にはあの瘤があった。無数のトゲが生えたあの瘤が。

部屋中に響き渡る爆発音がし、再びトゲが一斉に発射された。

今度は全てが俺のほうに向けられている。

何十本のトゲが猛スピードで飛んで来た。

さっきの攻撃より速度は速い。

俺は回避行動を取らずに、ずいと前に歩く。無数のトゲが直ぐ側にまで接近している。俺は手で顔を覆い、目を閉じようとした。

当然、俺の体は俺の意志と関係なくなっているから、そう思っただけだった。現実の時間は流れ続けている。

無数のトゲは止まっているようにしか見えない。完全にスーパースロー画像が眼前で展開されている。

俺はトゲをかわしながら蛭町へと接近していく。どうしても邪魔になるトゲは片手で掴むと、無造作に後へと放り投げる。

飛んでくるトゲはゆっくりと動くのに、放り投げたトゲは普通の時間の中で動いているようにくるくる回って飛んでいき、壁に当たって粉々になった。

これは恐ろしい速度で俺が動いているということなのか？

そんな疑問を感じる内に、蛭町の体が直ぐ側にあった。

蛭町も俺が高速で移動し接近していることを感じ取ったんだろう。

回避行動を取ろうとする。
【ばーか、遅えよ】
ニヤリと笑うと、俺は奴の背中の瘤を両手で鷲づかみにする。
そしておもむろに引き千切った。

「ぎょびー（＾＾；」
間抜けな声を上げて、ムカデ体の蛭町が飛び上がった。背中からは大量の出血。
瘤は血管か神経節かなんかわかんないどす黒い根っこのようなものがあって、それが奴の胴体と繋がっていたみたい。
俺はにっこりと笑うとさらにひっぱり、その根っこをぶち切った。

「ぎょうんんぎょうん」
蛇の口から悲鳴らしきものがあがった。同時に奴の体の中に取り込まれた連中も悲鳴を上げたようだ
。
「いてぇいてぇ」
「ひー」
どうやら、この化け物と取り込まれた連中は完全に同一の体になっていて、痛みは共有しているようだ。
まずい……。
攻撃を加えればあの取り込まれた連中も傷つく。そして殺せば奴らも死ぬということなんだ。果たしてそんなことできるのか？？
俺は動揺を隠せない。明らかに攻撃をしてきてくれたら殺すのを覚悟で攻撃ができる。でも、あんな連中でも今は人質として取り込

まれているんだ。そんな連中を殺せるのか？……それが許されるんだろうか。

でも、そんなことをまるで興味が無いかのように、俺は動くんだ。

第５４話　一切の躊躇無く、冷血に、俺は惨殺する。

蛭町は体勢を立て直そうと後退する。
しかし、その速度はあまりに鈍い。
直ぐに追いつくと数本の足を掴む。思った以上にこの足は硬く頑丈そうだ。掴んだ腕を振り払おうと暴れる。そして他の足で蹴ってこようとする。
俺は握った手に力を込め、思いっきり引き抜いてやった。
掴んだ足は根っこから引き抜かれ、ねっとりとした緑色の液が噴き出す。
再び悲鳴が上がる。化け物と人間の悲鳴の混声だ。
俺は吐き気がするが、俺の代わりに俺を動かす奴は興奮気味だ。
【楽しー。もっとわめけよ。泣いてくれ。たまらねえ】
たとえ絶体絶命状態であっても、体を明け渡したのは間違いだったんじゃないのか？　本気で後悔を始めていた。

しかし、残虐行為は続く。俺は手近なムカデの足を掴むと雑草でも抜くように引き抜いた。
ぶちぶちぶっち。
そのたびに悲鳴が上がる。
俺はムカデの片側の足をすべて引き抜くと、今度は逆の足を引き抜き始めた。
その空隙を縫って、背後から蛇の頭が再び俺に噛みつこうとしたが、まさに後に目があるかのようにその攻撃をかわすと二本の毒牙を両手で掴み、これも引き抜いた。
抜いた二本の牙は奴の胴体に深々と突き立てられる。
【死ね死ね死ね～。キメラは死ね。化け物死ね～】
奇妙な鼻歌で楽しそうに、俺はムカデの足をむしる。

直ぐに全ての足は引き抜かれ、ボディがムカデ、ヘッドは蛇の蛭町のキメラ体は頭が蛇で体がミミズみたいになってしまった。
うねうねと動くがうまく進めない。

俺は指さして大笑いする。
【かっこわりー。ぎゃはははは！！！　】

「痛てええよ、助けてくれ」
声がする。くぐもった声だ。
見ると体の中に取り込まれた奴の一人だ。膨れあがった体なので中が透けて見える。ブクブクと泡を吹きながらこちらを必死に見ている。……たしかまだ小学生だった奴の一人だ。残虐な目をしていた奴が今では完全に怯えきって助けを求めている。
しかし、もはや彼を救い出すことなど不可能だろう。キメラ化した蛭町の組織が彼の体の至る所に入り込み同化している。おまけに一緒に取り込まれた仲間の連中の腕は足がツタのように絡まり、それはもともと同じものだったかのように繋がっている。いかなる外科手術を持ってしてもそれらを綺麗に切り離し、それぞれの生命として生かすことなどできそうにもなかった。
すまないな……助けられそうもない。おれは独りごちた。
すると俺の直ぐ側で鼻で笑うような気配があった。

【安心しろ、助けてやるぜ】
俺の体を使う奴は明言した。その言葉は慈愛に満ちた声に聞こえる。
にっこりと笑う。表情筋が笑顔を形成している。

「ほんとでふか？　」
藁にもすがる感じで少年が訴える。
【もちろん、今助けてやるよ】

そう言って、俺はゆっくりと右手を差し出す。軽くムカデの皮膚に掌を載せる。続いて指に力を込めて押し込む。
ずぶずぶと皮膚を突き破り手がめり込んでいく。
次の刹那、一気に俺は腕を突き入れた。
抵抗なく奴の体内に肘まで入り込む。
少年の腕を掴んだと同時に、力任せに引き抜いた。
「ぎゃいやあああ！！！」
もの凄い悲鳴が聞こえた。それは少年のものか、それともそれ以外のものか、全員の者かは分からない。
ただ、体液の中に入った人間から出たとは思えないくらい大きな音だった。
考えれば蛭町に取り込まれた連中は体が接合されている。つまり痛みも共有しているってことなんだ。

俺は右手を見る。
そこには引き千切られた少年の腕があった。
赤い血がタラタラと垂れ落ちる。

ひえひえとくぐもった悲鳴が聞こえ続ける。

俺は高々と千切った腕を持ち上げた。
赤いものが俺の顔に落ちる。そして俺の口に滴が伝う。

美味い……。

気持ち悪いではなく、最初に感じたのがそれだった。
なんだこの甘美な味は。

俺は少年の腕を口元に近づける。繊維が引き千切られ血管や肉がむき出しのグロテスクな切断面。わき出す肉汁。

だけどそれに俺は猛烈な食欲を感じていたんだ。

喰いたい。

生のまましゃぶりつくしたい。

あり得ない欲望が俺の頭の中にわき出す。

そんなのあり得るわけがない。肉はウェルダン。生食なんてありえなかったのに、なんでこんな事が考えてしまうんだよ。いやだいやだ。ありえねえ。

だけど俺の体は俺の支配下にない。必死で否定する俺をあざ笑うかのように腕の切断面が近づけられる。

嫌悪と渇望。其の二つが俺を引き裂こうとする。

俺はゆっくりと切断面に口づけする。僅かな血が唇に触れ、中へと入り込んでくる。

その瞬間、俺の正気が吹き飛んだ。

全身が痺れるような感覚が俺を貫く。

いままで押さえ込んでいたものが一気に復活したようにさえ思える。

腕の切断面を嘗める。舌を皮膚や骨、筋肉繊維を丹念になぞるように。

口中に広がる香り。味覚。そのたびに全身を嵐のような衝撃が走る。

軽く歯を立てて、肉を食いちぎる。コリコリとした触感……。飲み込んだ。

美味い！！

もう制御不能となった。

まるで飢えた獣だ。音を立てて腕に齧り付き肉を引き千切り、飲み込む。
そのたびに電気が流れるかのように衝撃が走る。
同時に傷ついていた部位が一気に回復していくのが分かる。
弱々しい筋肉が、骨が、神経が、皮膚が活性化していく。
骨すらかみ砕いて飲み込む。
【うお。うめー。たまらん】

欲望は止まらない。
再び腕を突き刺すと、無造作に中の人間の体を掴むと、一気に引き千切る。
そのたびに悲鳴が聞こえる。
蛭町は必死に逃げようとするが、足を全て切断されたから思うように動けないようだ。ウネウネと這い回る。

俺の食欲は全く満たされないのか？
引き抜いた、……今度も腕だ。誰のかはよく分からない。こいつらたこ足配線みたいにこんがらがってくっついてるからな。
まあいいや、そんなことを考えながら、がりがりと食い尽くしていく。
こんなに美味いものがこの世にあったのか？　そんな驚きでいっぱいだった。
全身に活力がみなぎる感じ。何か分からないものが染み渡っていく充実感で喘いでしまいそうになる。
【しかし、いくら喰っても満たされねえ。長く閉じこめられていたからな。修行僧みたいだ。ふふふ、こりゃ食い尽くすぜ】

今度は何を喰おうか？

【蛭町に脳みそに決まってるだろう？　脳みそが一番美味いんだぜ。喰えばそいつの能力を得ることができるって言われているしな】

第５５話　俺は俺でそれでいて俺ではないはず

おぞましい声が聞こえる。
でも俺はその声の誘惑に逆らう気力なんか無かった。
どん欲に求めていた。とにかく飢えていた。なぜだか分からないけど。
口をぬぐうと真っ赤な血と千切れた肉片が腕につく。
それをぺろりとなめると錆の味がした。舌の真ん中付近に肉片の感触。
嫌悪すべきなのに、何故か喜びを感じる。興奮。

脳みそ喰いたい。どんな味か楽しみたい。
生きたまま蛭町の頭を開いて、脳を取りだしかぶりつきたい。
美味いんだろうか？
俺の中では狂気がその支配率を増していた。しかしそれは狂気なんだろうか？

【そうだ、そうだ。生きたままくりぬいてやるからな。美味いぞ。あれはやみつきになるうまさだ。特に生きたままくり抜いた新鮮なものは驚くほどにな。獲物の絶叫が抜群のスパイスを効かせるんだよ。へへへ】

甘美な誘い。俺はそう感じ取っていた。
体は動かすことはできないが、俺の代わりに俺を動かしているモノの感じた事、思った事。全てが伝わってくるんだ。生きた人間の腕を引き千切る感触、絶叫する声、人肉の味、食感。全てが喜びとして俺は受け取っている。

早く早く。

俺の本能が催促する。

【分かってる。少し待てよ】

目には見えないが感じられるものの気配、現在俺を動かしているモノがニンマリと嗤ったように感じた。

俺は蛭町に近づく。

威嚇音を立てて鎌首を上げる蛭町。しかし攻撃の手段を全て奪われた奴の威嚇など何の意味もなかった。

いきなり右脚を奴の体にけり込む。

ずぶりという感触を残し、足は太ももまでめり込む。

絶叫があがる。中にある人間の体のどこか、少し固いもの潰れた感触が伝わってきた。尾てい骨が痺れるような快感。

悲鳴は人間のものなのか、それとも蛭町のものなのか。まあどうでもいいや。

左手を伸ばすと奴の口を鷲づかみにする。

【喰ってやるぞ、お前の脳みそ。生きたままくり引き抜いてやるよ。フフフ】

そう呟くと、右手の指を蛇の頭、眼球のあたりに添えるように触れると、ゆっくりとその指を押し込んでいった。

「ぎゅー！」

何とも言えない妙な呻きが鷲づかみにした蛇の口から漏れる。

指は固いものに触れているが、俺は気にせずめり込ませていく。ごりごりと削れるような音がする。

蛇の頭ってこんな固かったけ？

そんなことがよぎる。しかしよく考えたら、こんなに変形してし

まったとはいえ、元は人間だ。見かけは蛇になっても頭蓋骨とかが残っているんだろう。この抵抗は骨に当たっているということなのかな？　化け物の脳はどうなっているのかとかも気になった。

指は第2関節まで蛇の頭にめり込んだ。
すると俺は頭の中に突き入れるのはやめて、今度はそれを横へと動かし始める。
少々の抵抗はあるが、簡単に奴の頭が切れていく。まるで缶切りで缶の蓋を開けるようだ。ごりごりと俺は右手をのこぎりの様に動かし、頭蓋骨を切り裂いていく。
「いてぇーやめてくれぇ」
下の方から甲高い悲鳴のような声がする。見ると蛇の喉元にあった蛭町の顔が必死の形相でこっちを見ながら喚いていたんだ。
目が飛び出しそうなぐらい大きく見開き、歯はむき出し歯茎むき出し舌れろれろ。鼻水ずるずる状態。
デスマスクのようだった時からは想像も出来ない状態だ。
「たたたたたた助けてくれ。やめてくれ。お願いだから」
唾を飛ばし、必死で命乞いをする少年がそこにあった。
俺は一瞬躊躇した。
しかし体は関係なく反応する。
力任せの膝蹴りが奴の顔のど真ん中にめり込む。
骨が砕け、肉が潰れる音がした。
「ぐげけげ」
膝を戻す時、血や肉が膝にへばりつき糸を引く。

「なんてことを……」
俺の呻きは俺の体からは発せられない。
【こんな奴、助ける気なんかねーだろ？、もともと。もちっと時間をかけたほうがよかったか？　】
「そうじゃない……」

【安心しろ、そんなの直ぐ忘れさせてやるよ】
言葉を交わしながらも俺の右手は蛇の開頭を完了させていた。まるで缶詰の蓋が開いたように、頭蓋骨が切り取られ、中にはピンク色の脳があった。生物の本や、アニメ、映画なんかでおなじみの形、色合いだ。
明らかに人間の脳だよこれ。
抵抗力はすでになくなりぐったりしているが、コイツは間違いなく蛭町の脳だよ。
俺は吐きそうになった。でも乗っ取られているから吐けない。
素手でその脳を抉る。
プリンのような触感。
ぷるぷるしたピンク色の気持ち悪い物体が俺の口へと運ばれてくる。

オエエ。
戻しそうになるが、戻せない。

俺は舌でペロペロ舐める。その臭い、味、舌に触れる感覚、全てが嫌悪すべきモノでしかなかった。なのに何故か電気ショックが俺の全身を貫いていく。射精にも似た感覚が下腹部を襲ってくるんだ。
【うえええおおうおうおうお、たまらねえ】
別の俺が吠える。

ツルツルと音を立てて蛭町の脳みそを吸い込み、ごくりと飲み込む。
気持ち悪い血の臭いと味が口の中に広がり、喉を通り過ぎていく。
必死で戻そうとするけど、体は俺の支配下に無い。
何よりも恐ろしいと感じたのは、それが美味いと感じた事だった。
今までにない味覚が嫌悪感を吹き飛ばしていく。

これは俺の感覚なのか、それとも別のものの感覚なのか。
しかし、しかし、その境界はとてつもなく曖昧になっていく。
大騒ぎをしている人格と俺の人格も曖昧になっていく気がする。

むさぼるように脳漿を口へと運ぶ。
視覚と嗅覚で吐き気を感じ、味覚で美味を感じる。そして心は高揚する。
そして全身に力がみなぎっていくのを感じる。
ありとあらゆる細胞が活性化している感じだ。いつもは倦怠感虚脱感がどこかに重いしこりのようにあった。でも今はそれが完全にどこかに消え去ったかのようだ。
傷ついた体も再生速度を増していく。傷口なんか蒸発するように消えていくんだ。

ありえないありえない。ありえるはずがない。
俺が人肉を喰っている。嬉々として喰っている。それが当たり前の食事の様に。
共食い……。
まさか自分が。そんなの信じられない。

【んなことないだろ？　今美味そうに喰っているのはどこのどいつだ。ほらほら、まだまだ喰えるぜ。人肉は美味いだろう？　ちょっと癖があるけどな。美味いだけじゃないんだ。是を喰うことで更に力をつけることができるんだぜ。それそれ、今までにない力が沸いてくるだろう？　もっと喰ったらもっと力が付くぜ】
耳元で囁かれる。
うん、そうかもしれない。
何故かそう思った。それが当たり前のように。今までが異常だったかのように。
俺はもう分からなくなっている。

指が震える。
【そうだろ、肉がまだ食い足りないんだろう？　さあ、いっちまえよ】
その誘いに頷き、俺は蛭町の頭の中に手を突っ込み、抉る。
ぷるぷるした感触を感じ、引き上げるとそこにはピンク色の肉塊。
口元に近づけ、臭いを嗅ぐ。どういうわけか何も臭わない。
何か分からないけど、むしゃぶりつきたくなり、舌を突きだし、掌に載った脳みそに触れる。
まだ暖かい感触。
そして一気に食らいついた。
自らの意志で……。

そして一気に飲み込もうとする。

その時、遠くから声が聞こえる。聞こえてきたんだ。

「……にをやってるの、シュ、ウ？　」

は？　誰だ、何だ？
俺は周囲を見回す。
さらに声が聞こえる。
「してるの、…の、馬鹿」

聞き覚えのある声だ。
なんかちびっこくて偉そうで、それでいて悲しみを抱えていて、それを表に出さずに我慢しているところが可愛くて守ってやりたい存在……。

「シュウ、お前何をやっている？　」
ハッキリと声が聞こえる。

なんだ王女じゃないか。
うつろな目で目の前で腕組みしている金髪の少女を見る。
なんか怒っているな。
そう思った。

「お前何をしているの？　頭でもおかしくなったの？　」

なんか怖いけど、俺は口の中にある、とてもおいしいモノののど越しを味わいたくなっていた。
だから王女が怒っているのは置いておいて飲み込もうとしたんだ。

其の刹那、視界の隅っこで王女が大きく振りかぶったのが見えた。
同時に頭が吹っ飛ぶくらいの衝撃が俺の顎を襲った。
かなり鈍い音がしたと思うと、俺の体は中を待っていたんだ。
衝撃で口を大きく開けてしまい、口の中にあった脳みそがシャワーのように吐き出されていくのが見えた。

そして浮遊感を感じながら俺は意識が遠のいていくのを感じていたんだ。

第５６話　眠りから覚めて、現実。

――――――――――

遠くで声が聞こえてくる。
眠いのに、まったく五月蠅いなあ。

まどろみのなかでボンヤリ……。
なんかすごく落ち着くんだな、これが。

どどどどどど……

何かほっぺたのあたりに小刻みな衝撃が伝わってくる。
誰かにはたかれているような感じ。攻撃はちっちゃな手で行われている感じ……。

「……きなさい。シュ…、いつまで寝ているの。……お前は馬鹿か！！」
明確に聞こえる。

王女の声だよ……。
また怒っている。

俺はこのまま微睡みの世界に逃避したかったけど、はたかれる感覚が今度は左右に平手で殴られている感覚へとエスカレートしているのに気づき、現実世界に戻ることにした。
無視していたら、グーでぶん殴られそうだから。

「……う、うんぬ」

もやもやとした視界の中に王女の顔が見えてきた。
怒ったような困ったような顔をしている。
俺を揺さぶったり叩いたりしている。
どうやらそれでも心配してくれていたようだ。
俺が目を開けたとたん、その顔に笑顔が戻る。安堵の吐息も漏れた。
「やあ、姫。……それにしても、ずいぶんと乱暴な起こし方だよ……ね」
と巫山戯た口調で話すと、突然怒りだしたように抱きかかえるように俺の頭を支えていた手を退けた。
ドン、と後頭部が床に当たって派手に音を立てた。
「ぎゃっ」
激痛に思わず声を上げてしまう。

「だ、……大丈夫？　」
思わず心配そうに俺をみる王女。しかし、直ぐに我に返り、
「さっさと起きなさい。お前ならそんなのダメージの内に入らないでしょう？　」

「いやいや、んなわけないじゃん。俺は戦いで瀕死の状態だったんだよ。姫だって見てただろ？　満身創痍って言葉がまさに相応しい激戦だったはず。…それなのにこの扱いは酷いよ。しかし、……姫のパンチは今まで受けた攻撃の中で一番強烈だったんだから」

「ああもう五月蠅い。……ああでもしないとお前はとんでもない状態になってしまっていたのよ。そこんところ分かって言ってるんでしょうね？　一体どうしたって言うの、お前は。……まるで別人だった。もう私でも手に負えないくらいにボロボロにされて、生きているのが不思議なくらいだった。なのにあそこから急激に回復し、それどころか寄生根を倒すなんて……」

「いや、ほとんど覚えていないんだよ。ただ、姫が危険な状態で、でも俺は戦える状態じゃなかった。……その時、声が聞こえて……。あとは見てのとおりだよ」

「どういうこと？　」

「良くは分からないし、説明もできないよ。寄生根と闘っている時、よくアイツの声がしたんだ。アイツって言ったって分かんないよね。何かすごく昔から知っている感じの、懐かしいんだけど怖くて嫌や奴としか言いようがないんだ。何かは分からない。……そして俺がマジでやばくなった時、アイツが俺に言ったんだ。手を貸してやるって。あのままだと俺は死ぬしかなかった。嫌な感じがしたんだけど、何もできないまま死ぬくらいなら、姫を死なせてしまうくらいならってアイツの申し出を受けたんだ。其の後は姫も見たとおりさ」

「圧倒的な力でねじ伏せた。そして寄生根に乗っ取られた人間を食べた」

そのキーワードを聞いて、俺は胃の奥の方から何かが逆流してくるような気がして、嘔吐いた。

……でも何も出てこなかった。ゴボっていう変な音が喉からしただけだ。

口の中は血の臭いが残ったままでとても気持ち悪かった。本気で今すぐにうがいをしたかった。

「気持ち悪いことを言わないでくれよ。あれは俺の意志じゃないんだから。勝手に体が動いて、そんで勝手に欲しただけだよ。飢えを癒すため喉の渇きを潤すために、ただ思うままに行動したって感じだったんだから」

俺はあえて他人事のように話した。

自分の意志とは無関係だったとはいえ、肉の味、血の味が忘れられなくなっている。決して嫌悪すべきものではなく、むしろ好ましい時間だったという記憶になってしまっているんだ。ありえないんだけど。

理性と本能のせめぎ合い？　いやそれ以上の根源的な問題って感じだ。ただ欲しいから喰う。それだけだったように思う。それが当たり前だという認識のほうが俺の心の中での勢力があったんだ。

もちろん、そんなこと王女に言えないし、それが間違っているってこともわかりきってる。

「……良くは分からないけど、とりあえず、今はお前がまともに戻っているということは分かったわ。それが分かったらもういいわ。さてと……さっさとここから逃げるわよ」

王女はすべての興味を無くしたかのように言う。

「うん……」

「どうかしたの？　」

「いや、こんなに人が死んでいるんだからちょっとまずいんじゃないかなって」

ごくごく当たり前のことを俺は指摘した。

自分がやったことなんだけど、俺は人を殺している。人間じゃないけど、かつては人だったモノだ。そして寄生根に取り込まれて死んだ人間もいる。唾棄すべき糞野郎達だけど、それでも法律上は人間だ。

死体を転がしたままで放置していいんだろうかって思ったんだ。

「お前の言うことは間違っていないけど、この状況をどうやって説明するの？　……突然人間じゃなくなったものに何人もが喰われ、

そしてその化け物は俺が倒したんです。証人はこのチビちゃんとフルチンの変態高校生1名ですとでもいうのか？　まとめて病院送りでしょ？　運が悪かったら、お前は犯罪者として捕まるわよ。えん罪だけれでその濡れ衣が晴れるのはいつになることやら……」

「たしかにそうなんだけど、こんな状態のまま放置ってのは……」

王女は俺を少し見つめた。

こんな時でも可愛いんだなあ。

「証拠隠滅しろっていうのね。わかったわ……」

そういうと同時に右手を少し上に上げる。

「……」

何か呪文のようなものを詠唱したかと思うと、彼女の差し上げた右手の掌に火の玉が発生していた。最初は赤っぽい小さな炎だったが、やがて光が大きくなるとともにオレンジ色へと変化し、ついには真っ白激しく光る光の玉となる。

直ぐ側だけど不思議なことに直視できないくらいまぶしい。だけどちっとも熱くない。

白い炎なんて本当だととんでもない熱さのはず……。なんでだろ？

「あたりまえでしょ。まともにこんな近くで炎の玉なんか持ってたら服や髪の毛が一瞬で燃え上がっちゃうわ。これは実体ではない炎。これが狙った標的に触れた時に実体化し、全てを焼き尽くす本物の炎となるのよ。こんな芸当なかなかできるもんじゃないでしょう？」

なんだか自慢げに語る。

「この炎があの化け物の残骸に触れたら、一瞬でこの部屋は溶鉱炉と化し、あっというまに骨まで焼きつくして証拠もなにも残らないわ。戦いで使えたらいいんだけど、私が投げる炎じゃあスピードがなさ過ぎて敵に避けられちゃうから無理。こんな状況じゃないと使

えないから役に立たない能力だわ。本来の力が出せるならもっとやりようがあるんだけども。愚痴を言っても仕方ないわ……じゃあやるわね」
といって腕を軽く振る。

ん？　ちょっと待てよ。
部屋が溶鉱炉と化す？？　王女が持ってる光玉は白いから何千度もあるんだろうな。溶鉱炉ってどれくらいの温度か分からないけど鉄が溶けてどろどろになる温度だろう？
ちょいちょい、そんなのにこの地下室がなったら、俺たちもやばいんじゃないの？
骨まで燃えちゃうぜ。
「姫、姫。ちょっと待って」

「何よ」
むっとした顔でこちらを睨む。

「なあなあ、冗談で言ったんだろ？　ちょっと待ってよ。この部屋が溶鉱炉になったら、俺たちだって黒こげどころか蒸発しちゃうんじゃないの？　」

王女は少し考えて首をかしげた。
「あ、わすれてた」

俺はガクリと倒れそうになった。コントじゃないんだぜ。溶鉱炉はテレビでやってる熱湯風呂じゃないんだから。あんな生やさしい温度じゃないぞ。まあ本当に熱湯なら転がり回るレベルじゃない熱さだけど。あれは演出だから本当はぬるま湯だってこと俺だって知ってる。
「あーもう、無茶すんなよ。俺たちまで隠滅されるところだったじ

ゃないか。それにこの建物だって派手に燃え上がるぜ。消防車がワンワンやってくるよ。そりゃもう大騒ぎになるんじゃないの？」

「じゃあどうすればいいのよ」

取り立てて反省の態度を見せずに王女が腕組みをする。

「入り口のドアとかを溶接しちゃって入れなくしておけばしばらくはいけるんじゃないの。丁番とドアノブ部分を溶かしたらまず開かなくなるよ。念のために枠の部分とドア本体を溶接したら完璧かな。……これでうまくいく補償はできないから、あんまり良い案じゃないけど」

ドアの各部を指さしながら俺は説明した。

「……まあそれでいきましょう。死体を移動させて埋めるなんてことやるの嫌だし。何より私はさっさと帰ってシャワー浴びたいんだから」

そういうことで話はまとまり、俺たちは部屋を出ることにしたんだ。

「じゃあ漆多、お前もいっしょに……」

そう言って漆多の見て初めて気づいた。

彼はいつの間にか気絶していたんだ。フルチンのまま、カエルをひっくり返したように仰向けになって口から泡を吹き出していた。

「あれ、あいつ気絶してたんだ？　」

「お前が寄生根に取り込まれた奴の腕を引き千切ったあたりで「ひゅうん」とかいいながらぶっ倒れてたわ」

「そうか。じゃあ、あの後の事は見られていないって事だよね……良かった」

王女は頷いた。

第５７話　姫

俺は部屋を見回し、漆多が来ていたらしい衣服を見つけるととりあえずズボンとシャツ、そして上着を着せた。その時に気づいたんだけれども、漆多からは糞尿と精液と血液とさらには胃の内容物の混じった何とも言えないすごく嫌な臭いが漂っていたんだ。それは彼が受けた虐待のひどさを物語っていた。

俺は再び、友人をこんな目にあわせたあいつらに気分が悪くなった。

しかし、糞便と精液と血液の混ざり合った臭いは相当な悪臭と感じられる。

意識を臭いから遠ざける。

――すると、臭いが全く気にならなくなった。我ながら五感をコントロールできることに驚く。

漆多を軽々と担ぎ上げる。６０キロはあるはずだけど、今の俺にはその重みなどほとんど感じない。漆多を担いだまま何キロでも走れそうな感じだ。

……まじ化け物化してるな、俺。

そして、王女を促して部屋の外に出る。

彼女は先ほどと同じく右の掌に炎の玉を出現させる。同じようにといっても、先ほどとはずいぶん控えめな大きさだ。

金属の扉から距離を置き、その炎をそっと投げる。

炎は揺らめきながらふわふわとゆっくりと飛行していく。扉の上枠に張り付いたかと思うと、まるで意志をもった生き物のようにもごもごと動き出す。

ドアの枠の周りを溶かしながら移動し、ドアノブと丁番を真っ赤に熱しながら動いていく。そしてドアの下枠も移動し完全にドアの周囲を取り囲んでいた。
王女が差し出した手をぐっと握る。
ドア付近が真っ白に光り輝く。激しい音と焦げるような臭いが充満する。それにしても、そのまばゆい光は直視できないほどの目映さだ。しかし光は一瞬で消え、より一層の暗闇に取り込まれた。
光が消えて暗黒に取り込まれると、全ての音さえかき消されてしまったように感じしまう。
静寂があたりを包み込む。

夜目が利くようになっているとはいえ、あの猛烈な光を直視したため視力を取り戻すのに少し時間がかかったけど、やがて目が暗闇に慣れてきた。
俺は扉に目を向ける。

「おお、すげえ」
金属の扉は扉本体と外枠がまるで同化しているかのように綺麗に溶接されていた。どこからがドアなのかは全く分からない。丁番は溶けて一体化し、ドアノブは完全に溶け落ちていた。当然、鍵穴も溶けて無くなっていてこれじゃあドア毎壊さない限りは入ることはできないだろう。
「これなら大丈夫だろうね。アリ一匹入り込む隙間が無いくらいに綺麗にくっついているよ」

「まあこれくらいは簡単だわ。地下室毎溶かしてやっても良かったんだけど、今の私ではそこまでできないから……」
当たり前のように呟く王女。
いやいや、コンクリート造りの地下室を溶かしちゃうってどんな能力なんだよって俺はつっこみそうになったが、本気か冗談か分か

らなかったので口には出さなかった。
王女が肩で息をしていることのほうが気になったんだ。
「姫、大丈夫か？　なんか辛そうだぞ」
「何を言っているのか、意味が分からないな。シュウ、お前こそおかしいわよ」
そういって俺から離れようとするた、何かに躓いて転びそうになる。
俺は漆多を担いだままでも素早く動き、王女の腕を掴んだ。
「大丈夫か！」
声をかける俺。近くで見る王女の顔は少し青ざめ、額には汗をかいていた。呼吸もかなり荒くなっている。
「やれやれだ……。この程度でこんなに疲れてしまうなんて。まさかここまで力が落ちているなんて思わなかったわ……」
誰に言うでもなく王女が呟く。その声には失望の色が濃かった。
「すごい汗じゃないか。それに顔色も悪いぞ。すこし休んだほうがいいな」
そういうとそのまま王女も担ぎ上げた。
「おい、何をする」
王女が騒ぐが、体調が相当悪いらしく、あまり抵抗もしなくなっていた。
地上への階段を上り、外へと出た。
空気が冷たく心地よく感じる。
満天の星が俺たちを照らしている。
淀んだ空気の中に長時間いたため、この新鮮な空気が実に心地よかった。
俺は王女と漆多をおろすと適当に座らせた。

漆多はまだ気を失っているらしい。地面に横たえても反応が無かった。

俺は座り込んでいる王女の横に腰掛けた。

「大丈夫か？　」

「ああ、なんとかね。……でも、あの程度の術式を発動させるだけでここまでの反動が来るなんて、ホントにどうしようもないわね。あの程度の制御にこんなになるなんて」

自分自身に失望したような口調で喋る王女の横顔はなんだか悲しそうだ。

「そんなに体調が悪いのか？　」

「体調なんてレベルの話じゃないわ。根本的に私の能力がスポイルされているのよ。……まあこんなチビッコになっているんだから当然【能力】も落ちてるんだとは思うけど、まさかここまで酷いとはね。炎を絞り込むだけの作業で、まるで年寄りのように息切れ起こしているんだから。こんなんじゃあまともに闘う事なんて考えられない」

一気に喋るが、喋ることさえ苦しそうだ。

「……まさか、ここまで、とはね。こんなんじゃあ、どうしようもないわ」

「姫、どうしたんだ？　」

一人で落ち込んでいる少女をどうにかして励ましてあげないと。俺はそんなことを思っていた。

でもこれといった台詞が浮かばない。

「おいおい、しっかりしてくれよ。こんなところでへこたれてなんていられないんだろ？　俺の契約者なんだからしっかりしてくれよ

……。まあ契約者が何をするのかはよく分からないけど、姫が闘うべき相手は俺にとっても敵なんだから俺も闘うよ。いや俺が姫を守ってやるから、さ。だから落ち込むなよ。落ち込んでいたって何も変わらないだろ？　さあさあ、とっととこんな辛気くさい場所からは撤収して、家に帰ろう。……そうだ、なんか美味いもんおごってやるからさ」

そうやっていくつもの励ましの言葉をつなぎ合わせ、なんとか彼女の関心を惹こうとする。

でも、王女はずっとうつむいたままで何か思いに耽っている。

「俺じゃあ駄目なのかい？　姫の敵と戦っても勝ち目がないっていうのか？　確かに単なる先兵でしかない寄生根相手でこのありさまだからちょっと不安かもしれないけど、なんとかなると思うぜ。そうそう、特訓すれば必ず俺は強くなる。間違いない。だからちょっとは安心してくれよ」

弱気になられると調子が狂ってしまう。いつもどおりの偉そうで生意気なチビに戻ってもらわないと。

「お前の力がどれほどのものかは、私にも図りかねるわ。確かに、私の僕になり力を与えられた者とは比較にならない力を出しているように思う。だけど、自身でも制御できないような状態になる者と共闘なんてできると思える？　今でもお前は僕でありながら、私の制御の及ばないところがある。こんなこと今まであり得なかった。私の力が衰えているのが原因だとは思うけど、これは大変な問題なの。もし、何かあった時に私を攻撃しないっていう保証はある？……無いでしょう。だったら私はお前の暴走を力づくで押さえ込むくらいの力が必要だわ。だけど、そんな力は今の私には無い……」

確かに、あの妙な声の奴に俺は乗っ取られていた。それについて何故かそう強く拒むこともしなかった。理由なんてまったくわからないけど、まあそれでいいやなんて思っていた。自分の意志で自分を動かせないなんてあり得ないことだ。しかも異世界からの化け物

と闘わなければならないのに、コントロールの効かない恐れのある武器を用いようとは思わないな。いつ暴走するか分からないんだから。

「大丈夫、大丈夫だと思うよ。たぶん。絶対にそんなことはさせないから」

確信はないけど、必ず出来ると思う。守りたいものを自ら壊すなんてことは絶対しない自信がある。暴走したのは奴らが敵であったし、同情の余地のない悪党だったから殺すことにそれほど抵抗を感じていなかったからなんだ。そうでなければきっと抵抗する。殺してやるとまでは思っていなかったけど、まああいつらなら死んでもいいやって思っていたのは間違いない。そこにつけ込まれただけなんだ。俺の中では奴らに対する怒りと嫌悪しかなかったんだから。そしてなんとしても王女を護らなければならないという義務感。

人喰らいについては、よく分からないけれど。そこは本能的な部分だったのかもしれない。嫌悪感を感じながらもそれ以上の恍惚感を感じていたし、さらに欲してしまっていた。あの感情はどこから来たのか？　俺を乗っ取った奴のものなんだろうか？　それとも俺の心の奥底に潜んでいたものなんだろうか。

そこだけについては少し怖い部分がある。あれは本能でありもしかすると制御できないのかもしれない、という恐怖が。恐怖といいながらそれを求めている感情が今でも存在することに気づき、薄ら寒くなる。

でも大丈夫。俺は自分に言い聞かせる。

あのとき、暴走を許可したのは、蛭町が王女を、紫音を、妹をなぶり殺しにしてやるって言ったからだ。あれがスイッチになった。俺は満身創痍で、死に直面していた。自分の命がつきようとしていて、もう起死回生の妙案など全くなかった。その時に奴の誘いがあったんだ。このまま自分が死に、王女たちがあの化け物に寧々と同じように嬲りものにされた上に殺されると思った時、もはや倫理や

正義などどうでもよくなっていたんだ。もう誰も寧々のような目に遭わせたくない。目の前で大好きな者が殺されるところなど見たくない。自分が地獄道に墜ちようが護ってみせる。その思いだけだったんだ。

「だから、俺は強くなる。もっと強くなる。そんな状態に陥らないように。だから大丈夫だ……」

俺は自分に言い聞かせるように呟いた。

その声は届いただろうか？

王女は相変わらず何か物思いに耽っていたが、やがて立ち上がった。

「ここでこれ以上考えても結論は出ない。帰るぞ」

もう立ち直ったのか、単に切り替えただけなのかはわからないけど、彼女の顔には笑顔が、生意気そうな笑顔が戻っていた。

第５８話　そして帰路へ

「う、うん。じゃあ、俺が二人を担いで帰るか」

「馬鹿なこと言わないで。どうしてそんな乗り心地の悪い乗り物で帰らないといけないの。おまけにお前もあの男も猛烈に臭い。吐きそうだわ。そんな臭い連中と体が触れあっているなんて耐えられるわけがないわ。それは認めない」

確かに、俺も血まみれ体液まみれになってたから、かなり生臭いんだろうなあ。自分の血もかなりまき散らしたし、蛭町やその仲間の血や肉片を結構浴びちゃってるからなあ。漆多の事を臭いなんて言ってられる立場じゃない。その異臭を感じないのは、俺が無意識にその異臭について遮断しているからなんだろうな。

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。そんな異臭のする男二人と王女の取り合わせなんて、めちゃめちゃ目立つぞ。とてもじゃないけどタクシーなんて呼べない。やっぱり歩いて帰るのが一番目立たないよ。俺におんぶされて帰るのが嫌なら歩いて帰るしかないよ。漆多はあの怪我だからとてもじゃないけどあの距離は歩けないからね」

「歩くなんてごめんだわ」

「じゃあ一体」

「簡単じゃない、お前の妹に連絡すれば済むことでしょう？　お前のためなら、あの子は何とかしてくれるはずよ」

と、あっさりという。

そんな簡単なわけないんだけど。ほんの少し前に、まったく同じような状況で亜須葉を呼んでいる。あの時、あいつはかなり切れか

かっていたよなあ。それがまた同じ状況に陥ってるなんて知ったら今度こそただじゃ済みそうにない。
でも、仕方ないな。今頼れるのはアイツしかいないんだから。

俺は仕方なく携帯を取り出すと、亜須葉の携帯を呼び出す。
要件を言うと何か大騒ぎしてたけど、着替え2人分を持ってくることと場所を伝えると、アイツが言うことは無視して電話を切った。
来たら来たで大変な修羅場になるかもしれないけど、仕方ないや。
「とりあえず、車で迎えに来るってさ」

「だったらしばらく時間がかかるんでしょうね」
そういうと、王女は地面に座り込んだ。体育座りになると顎を膝に載せて目を閉じた。
やっぱりかなり疲れているんだろうな。

俺は立ったまま辺りを見回す。
特に異常はない。
月明かりが俺たちを碧い光で照らす。
ほとんど無音の中、少し冷たい風が吹いている。

空を見上げると満天の星空だ。街の中では見られない綺麗な夜空だ。こんな状態じゃないならもっとロマンチックな言葉を口にするんだろうけど、相手もいないしそういう状況でもないんだなあ。

「うん、うううん」
呻くような声がした。
漆多が意識を取り戻したようだ。

俺は急いで彼の側に駆け寄る。
「漆多大丈夫か？　」

俺の問いかけにしばらく反応できないままだったが、やがて瞳の焦点が合い、俺を認識したようだ。
怯えたような嫌悪するような視線を俺に向ける。
「月人か……。俺は無事だったんだな」
「怪我をしているけど、命に別状はないよ。……しばらくしたら迎えが来るから、横になっていたほうがいい」
俺に言われ、彼は体を動かす。
途端に悲鳴を上げる。
殴られたりした体も痛いだろうが、臀部に受けた寄生根のトゲによる怪我が一番酷かった。ピンポン球くらいの大きさで抉られていたんだから。ちょっとでも動いたら想像できない激痛を感じるだろう。
俺とは違って、漆多は普通の人間。怪我が直ぐに回復することなんてありえない。
「だから無理をするなって。じっとしていたほうがいい。時期に迎えが来るから」
そういってさしだした手を漆多は振り払った。
無言で起き上がる。
相当な激痛を感じたのだろう、漏れそうになる悲鳴を歯を食いしばって耐えているのが俺にも分かる。
安定していた傷口が開いたのだろうか、彼の尻から液体がにじみ出し、足下へと伝い落ちていくのが分かった。
「漆多、無理をするな。お前は重傷なんだぞ」
「う、うるさい。お前の指図なんて受けないよ。俺は自分で帰る」

「何を無茶なことを言っているんだ。ここは町からどんだけ離れていると思ってるんだ。歩いてなんて帰られないぞ」
俺の言葉を無視して、足を引きずり時折倒れそうになりながらも必死で歩いていく。
来るときは気づかなかったけど、少し離れた施設の自転車置き場だった場所があり、そこにはバイクが数台止まっていた。
蛭町とその仲間連中のバイクなんだろう。

漆多はぜえぜえ息を切らせながら一台のバイクにたどり着くと、たどたどしい手つきでポケットに手を突っ込み、キーを取りだした。
フルカウルのレーサーレプリカのバイクだ。

「無茶だ。そんな怪我でバイクなんか乗ったら危ない。しかもレーサーレプリカなんて」
俺は駆け寄る。
同時にセル音が聞こえると彼のバイクのエンジンが点火される。
2ストロークの甲高いサウンドが響き渡る。
「待てよ、漆多。なんで待てないんだ」

「五月蠅い。お前の世話になんか死んでもなるか。助けてくれたのは感謝するけど、それでお前の罪が消える訳じゃないんだぜ」

「そんなつもりじゃない」

「フン、……偽善者め。俺はお前を許さない」
吐き捨てるように呟く。痛みを必死でこらえているのが分かる。

「何を偉そうに言ってるの？　このブサイク。誰のおかげで今お前がそんな偉そうな口をきけると思っているの。シュウが助けてくれなかったらお前なんてフルチンのまま殺されていたんでしょう？

命の恩人にそんな偉そうな口をきけるなんてどんな神経をしてるのかしら？　」

「五月蠅い、糞チビ。ガキのくせに偉そうな事言うんじゃねえ。犯すぞ」

「愚かな奴。どうせお前は亜須葉が来ると思って逃げるんでしょ？　お前の今のあまりにも不格好な姿を見られたくないからよね。気持ち悪いブサイク。そのスケベ根性だけはシュウ以上にタフだって褒めてあげるわ。全く、何を色気づいているの、フルチンお漏らし男が」

漆多の顔から血の気が引いていくのがハッキリと分かった。完全に切れかかっている。

「て、てめえ」

慌てて俺は王女と漆多の間に入る。

それを見て、冷静になったのか。バイクから降りようとするのをやめた。

「まあいい。ガキの言うことに腹を立てても仕方がないからな」

必死に自分に言い聞かせているようだ。大きく深呼吸をする。

「月人、もうお前は親友でも何でもない。俺にとっては寧々の仇だ。彼女を見殺しにした卑怯者の男でしかない。絶対に許しはしない。必ず報いを受けてもらうからな。どんな手を使っても俺は復讐をしてやる」

その眼にはあまりにもどす黒く深い憎しみが宿っていて俺は寒気を感じてしまった。

「口先だけの男はさっさと消えなさいよ。早くしないと亜須葉が来るわよ。ケツを掘られた変態ブサイクを見たらあの子はどう感じる

んでしょうね」
　また王女が横から出てきて挑発する。
「やめろって、姫」
「やめないわよ。この卑怯者は相手がお前だからこんなに偉そうに言ってるのがわからないの。何が許さないよ？　シュウは命がけでお前を護った。寧々だって必死で護ろうとしたのよ。なのになんで逆恨みするの？　感謝こそしても恨んだり憎んだりするなんてあり得ないでしょう？　お前は自分の怒りのもって行き先が無いからシュウにその矛先を向けているだけ。シュウなら怒らないし反撃しないって知っているから。さっきの馬鹿連中や化け物に向かっていったってやられるだけだからね。お前こそ本当の卑怯者でしかない。本当に闘うべき者からは逃げ、しっぽを振り、助けてくれた護ってくれたシュウを敵に見立てて自分を満足させているくそったれの卑怯者のマスターベーション包茎早漏チキン童貞野郎だわ」
　言い終わると笑い出した。
　王女ほどの美少女があり得ないほど汚い言葉で罵り嘲笑するとどれほどのダメージを相手に与えるんだろう？

　完全にこれはぶち切れたか。
　俺は慌てて漆多を見た。
　顔が本当にどす黒くなっている。全身を振るわせ、歯を食いしばり、ぎょろつくほど見開いた目で王女を睨み付ける。今にも飛びかかりそうな勢いだ。
　少し身構える。万一に備えて。

　漆多の全身にみなぎった力が不意に抜けていくのが分かった。
　軽く息を吐くと、ニヤリと笑った。
「ふふん。もういいよ。子供相手に怒るなんて大人げないからな」
　急に悟りきったような口調で話す。
　王女はあまりにも急激な漆多の変化に拍子抜けしている。

アクセルを数回ふかす。
ライトが点灯し、俺たちを照らした。
「おい、漆多」
俺は駆け寄り彼の肩に手をかけた。
「月人、今日助けてくれたことは一応感謝はしている。お前は本当に強い。あり得ないほど強い。……それが一番悔しいよ」
俺は彼の言うことの意味が分からない。
「それほど強いのに、なんで寧々が殺されそうになった時に護ってくれなかったんだ？　」
「そ、それは……」
言い終わるより早く、バイクが加速した。
甲高いエグゾーストノートの残し、漆多は去っていった。
言いたいことだけ言って、帰ってしまった。
「お尻の怪我は本当に酷いのに、良く平気で乗れるわね、お前の親友は」
少し驚いたような口調で王女は話している。
「姫はあまりに挑発しすぎだよ。あんなに言われたら誰だった怒る。あいつは怪我人なんだから」
「あんなむかつく奴に優しくする必要はないわ。シュウは馬鹿なのか、優しすぎる。あの手の奴は対等なんて扱いをしたらつけあがるだけよ。犬と接するようにしなさい。主従をしっかりと力で分からせてやらないと。言葉だけでは絶対に理解させられないタイプよ。私はあの男は受け付けない」

あまりに酷い評価だな。王女の漆多評は。

「いやアイツはいい奴だよ。ちょっと気が弱いところがあるけど、ずっと友達だったからね。良いところはいっぱいある。ちょっと辛すぎることが多すぎたから、ああなってるけけど、俺の親友であることは変わらないよ。だから、姫もアイツのことをそんなに言わないでくれないかな。可愛い子からあんなに言われたらどんな奴だってショックを受けるよ」

「お前は甘いな。……まあその馬鹿さ加減がお前の長所でもあるんだろうけど。仕方ないわ。これ以上は言うのをやめてあげる」

「そういってもらえるとありがたいよ」

そうこうしている間に、遠くに車のヘッドライトが見えてきた。

遠目にもそれが純白のメルセデスであることが俺と王女には分かる。

十(もてぎ)さんの車だな。

とりあえずは無事に帰れそうだ。

俺の長い夜は、とりあえず終わる。

第59話　ふたたびの、幕間

俺と王女はなんとか街へ帰ることができた。

予定と違ったのは、亜須葉がいなかったことだった。

王女は妹をからかってやろうと楽しみにしていたようで、車から十さんしか降りてこなかったことに結構驚いていた。

「あのブラコンの女はどうしたんだ」と十さんにしつこく尋ねていた。

十さんは困った顔をしていたけど、

「亜須葉様は、柊様が無事であることが分かったので、後は私に任せると仰っておりました。少し最近食欲とかが落ちていて今ひとつ状態が優れないのです。夜風に当たるのもあまり良くはないと医師より言われているようです。ですので、今回は私のみが来てしまい、申し訳ございません」

「いやいや、十さんが謝ることなんて何も無いんだから。全部俺が非常識なだけだからね。夜中にこんな場所に迎えに来いって言ったんだから。非常識だったけど、ちょっとトラブルに巻き込まれていたんで、タクシーを呼ぶわけに行かなかったからね」

「……それについては何もお聞きしません。ただ、お困りになった時はいつでもお言いつけください。少々のトラブルでしたらなんとかいたしますので」

少々といってもかなりの事でも解決してくれそうなんだけどね。十さんの場合。

「なあ十よ、お前は何者なの？　前から気になっていたけど、お前からは普通の人間とは違う臭いがする。シュウや亜須葉とは違う臭

いがな。良かったら教えてくれない？　」
王女がズケズケと聞く。
「ご勘弁ください、姫様。若い頃、ちょっとやんちゃだっただけです。今ではただの厳つい外見のおっさんでしかありませんからね」
そう言って笑う。
「そうなのか。まあ言いたくないなら、聞かない。しかし、ひとつだけ確認させて。……お前は、シュウの味方であることは間違いないのよね」
「……私は亜須葉様に仕える身。主が大切にするものは、何よりも最優先でお守りします」
「じゃあ信用してもいいわね。亜須葉はシュウのことが好きみたいだから。自分の兄だからブサイクに慣れていて気にならないのかもしれないけど、物好きだわ」
その言葉には苦笑いのみで十さんは答えた。
否定してくれよ、と俺は少し思った。
十さんは基本的に無口で、必要でないことは昔から話さなかった記憶がある。なんかハードボイルド小説の主人公みたいに渋い感じだし、ちっちゃい頃は怖いけど格好いいなって思っていた。あこがれだったけど、直ぐにどう考えても俺には無理だと気付いてしまったけど。
俺の思考を無視するかのように、王女は後部座席から身を乗り出して十さんに話かけ続ける。
「お前は何故、亜須葉の世話をするようになったの？　シュウの親父の命令なのか」

「そうですね。亜須葉様が小学校に入学される頃にお世話をすることを命じられましたね」

「ガキの相手は大変だったろう？　」

ガキは王女だろ？　俺は思わず噴き出してしまう。

王女から殺気を感じたが俺は無視した。安全圏まで離れているからね。

「亜須葉様は小さいころから姫様のように驚くほど美しかったです。そして本当に素直なお子様でした。わがままなんていうこともなく、手がかかることなんて全くありませんでした。小さいのに良く気がつく子で、むしろ私が癒されることが多かったと思いますよ。天使とは亜須葉様のような人の事をいうのでは無いでしょうか」

そういって懐かしそうに遠くを見る。

「うんうん。亜須葉は今でこそ偉そうな事を言うようになったけど、いつもお兄ちゃんお兄ちゃんってなついてくれてたなあ。兄貴としても自慢の妹だったよ。同じくらいの女の子でもずいぶん違うんだよなあ」

そういって王女を見る。

王女の眼に殺気が宿ったが、俺が彼女の間合いに入っていないと悟って軽くため息をついた。

「ロリコン連中の話はそれぐらいでやめておきなさい。気持ち悪いわ。ロリコン親父とシスコンの童貞野郎の与太話はそれくらいにしましょう。お前達の話を聞いていると気持ち悪くなるわ」

相変わらず厳しい事をズケズケというなあ、この子は。

俺は王女を見つめる。少し気の強うそうな眼がこちらを見返す。

亜須葉はもうちょっと優しい瞳をしていた。可愛さでいえば甲乙つけがたいかな。身内びいきで妹のほうが可愛いかも。亜須葉は王

女みたいに偉そうじゃないし、優しかったぞ。それに王女くらいの歳になっても俺にべったりだったなあ。王女が猫なら亜須葉は犬タイプだな。あの頃までは。今は亜須葉も結構厳しいこと言うからなあ。ああ、あの思い出の日々に戻りたい。

そんな想いが錯綜する。

「おええ」

と、王女。

「どうしたんだ、なんか変なもんでも喰ったのか」

「違う、今、お前は私の事を妹に対するのと同じ嫌らしい目で見ていただろう。卑猥な妄想に私を取り込んだだろう？　ああ、寒気がする」

「そんなこと考えてなんかいないよ。亜須葉にも王女くらいの頃があって、可愛い時もあったなあって懐かしんでいただけじゃないか。なんでそこで卑猥な妄想ってなるんだよ」

「お前は”それ”しか考えていないのじゃないの？　」

「王女の中では俺ってどんな人間として評価されているの？　」

「わかりきっていること、ただの変態ロリコンでしょう？　幼児性愛者と言った方がいい？　」

がっくり。命がけで護ったりしたのに、変態扱いかよ……。

なんだかむなしくなった。

「それは酷いよ。俺は姫を必死で護ったんだよ。なのに変態だなんて……あんまりだ。そんな目で見られていたなんて、心外だ」

と言って拗ねてみる。
実際、王女の毒舌には慣れているつもりだったけど、俺は何の他意も無く、ただ王女を護りたかったから闘ったんだ。死にかけたけど、彼女を救うことができるなら死んでも良かったんだ。これ以上、目の前で誰かを死なすなんて絶対に耐えられないからね。それだけは事実なんだから。貸しを作って王女をどうこうしようなんて全く考えるわけがない。
……それ以前に、根本的な話になるけど、俺はロリコンではない。論理のスタート地点から王女の考えは間違っているんだ！！
俺がロリコンじゃないのは自明の理。よって、王女くらいの年齢の女の子になど欲情しない。するわけがない。ありえない。天地神明に誓える。ガキに欲情してど～すんのって。よって王女の俺に対する評価は明らかな間違いであるんだ。
「俺は自分の命に替えても姫を護るつもりだったんだ。それは誓って言える。もう誰も死なせたくはなかったんだ。ぼろくそに言っても構わないけど、それだけは分かってくれ」

「はいはい。ギャーギャー喚かない。お前が喋っていることも、考えていることも全部聞こえてくるんだから。だから嘘は無駄よ」

「そんなことないよ、まじで」

「ホントにそうなの？　」
そういっていきなり王女は俺の直ぐ側に顔を近づけてくる。
透き通りそうなくらい白い肌をしている……当たり前だけど、つるつるですごい綺麗。どこからか、すごくいい香りが漂ってくるし。なんなんだろう、この香り。顔はまだまだガキっぽいけど、それでも年齢以上の色気を漂わせてくるし……。
じっと大きな瞳で俺を見つめている。誘うような、見つめていると引き込まれそうな魅惑的な瞳。

王女は俺の襟首を掴んでさらに引き寄せる。
唇が触れそうになるくらいまで接近している。王女の吐息が俺の肌をなでてなんとも言えない気持ちになってしまう。

あ、キスしちゃうかも。
でもそれはそれでいいかも。

「ほら、やっぱり」

その声に思わず我に返った。

「ふふふん、今お前は邪な思考をしただろう？　」

「そんなことないもん」
明らかな動揺。それは嫌らしい妄想を指摘されたことではなく、キスをしそうになったことで動揺してたんだけど。

「興味がないはずの子供にキスされそうになって、それはそれでありかもって思っただろう？　お前の思考は読まなくても丸わかりなんだから。いい加減認めたら？　自分が変態なんだって事を。私の僕である者が変態であることは屈辱ではあるけれども、事実を事実として受け入れられる度量も必要。あえてその異常な精神構造をしたお前をあえて受け入れてやろう。……ただしその悪癖は修正されねばならないけれども」
不敵な笑みを浮かべながら、ボキリボキリと指を鳴らす少女。
その美しさとはあまりに不似合いと思える暴力的な発言、そして邪悪な笑み。

「俺は変態じゃないから修正なんてされる理由がないよ」
俺はじわじわと後退しながら、声を絞り出す。

「その判断は主が行うもの。下僕であるお前が判断するものじゃないわ。覚悟しなさい」
軽くステップを踏んだと思うと、一気に王女は加速した。そして高く飛び上がる。
長いスカートの裾から下着が一瞬見えた。何故か俺はそれに目を奪われてしまう。
攻撃態勢に入っていた王女は、自らの下着が露出し、俺に見られたことに気付き、慌てて裾を押さえようとする。当然、姿勢を乱すことになり、そのまま俺にぶつかってきた。
慌てて俺は彼女を助けようと両手を広げる。

王女は丸まった体勢のまま、俺にぶつかる。彼女を地面に落とさないように俺は彼女を抱きかかえる。
そのまま俺たちは地面へと倒れ込んだ。
鈍い音がしたと思うと、俺は地面で後頭部を痛打していた。
火花が散ったような気がしたと思うと、視界が真っ暗になった。

――――しばしの間。

地面に打ち付けた頭が少し痛い。気を失ってしまったのか？　あたりは相変わらずの暗闇だ。どうしたんだろう？
これは夢なのだろうか？　まさに夢の中にいるような気分だ。
俺が今いる場所も、そしてなぜ暗闇なのかも理解できない。
しかし、……なぜかなんの不安もない。
それにしてもと考える。王女と契約する前だったら、失神しているだろうと思えるほどの衝撃だった。確かに小学生高学年くらいの重さの女の子を抱きかかえたまま、地面に倒れ込んだんだからかな

りの衝撃だったんだろう。
彼女を抱きかかえるのに精一杯で受け身なんか取らなかったから。
うん、やはり、夢の中かもしれない。そしてまだ王女を抱きかかえているような気がする。うん、多分そうなんだろう。
まあ、圧倒的な回復力でこんな怪我なんてすぐ回復するさ。考えるのは面倒くさくなっている。
不意に、俺は自分が何かを抱きしめているのを感じる。なんか暖かくて、いい匂いがする。くんくん。それはもごもごって動いたりするんだ。
はて、何だっけ。なんだか柔らかくて気持ちいい感じ。俺は心地よさに、思わずぎゅっぎゅっぎゅっと。その何か柔らかいものを抱きしめた。うーん。なんだか気持ちいい。動物か何かなのかなと思う。
いやがって逃げようとするんで「だめだめ」とかいいながら強く抱きしめる。
ちゅっちゅっ。ちゅっちゅ。
愛情をこめて口付けするんだ。
生き物？　が動くたびになんだか良い匂いが漂うから、ついついまた抱きしめてちゅっちゅしてしまうのさ。
それをしばらく続けてしまう。ある程度繰り返すと、満足した。生き物？　もあきらめたようで抵抗をやめている。
さて、王女は無事なんだろうか？　そう思って俺は思わず閉じた目を開ける。
……そして再び驚くことになる。

顔の直ぐ側には王女の顔があり、俺と彼女の唇はくっついたままで、俺は王女を抱きしめていたんだから。
俺は自分がやったことに驚くき、思わず抱きしめた手を離してしまった。

やっと束縛から逃れることができた王女は、その美しい顔を怒りに満たせ俺を睨みつけると、大きく右腕を振りかぶった。
「この下種野郎がっ！！　」

衝撃を感じたときには俺は再び意識を失っていたのだった。

第６０話　つまり、優先されるのは生活のため……なんだよね

う、……うん。

寒い……。

横になっているのが分かる。

ベッドで寝ているんだろうか？　いや、ベッドは最近王女に独占されて、俺はソファーで寝ているんだった。……でもベッドにしてはなんだか固い気がする。いや、固すぎる。おまけ冷たいんだ。まじで外にいるんじゃないかって思うほどの寒さ。底冷えするんだけど。

「うむむむん」

俺は寝返りをうった。

ガチャンと音がして、頭部に激痛が走る。

「いってぇ」

何か固い物に頭をぶつけたみたいだ。痛みで目が覚めた。

辺りを見回す……。

白い大きな室外機。水垢がだらりと垂れた線をいくつも作っている。

上を見ると洗濯ロープにぶら下がったままのシャツが二枚。

横をみたら掃きだし窓。反対側を見たらアルミ製の柵ごしに夜の街が見えた。

手を床に置いてみる。ただのコンクリートじゃん。

はい、どうも俺は自分のアパートのベランダに寝ていた訳ですな。

ふと気付くと、何か臭ってくる。すごく臭い。何か腐ったような臭いが漂ってくる。

そして、それは俺の体から発される臭いだと気づくまでそれほどの時間を必要としなかった。。血と体液と糞便が混じった異常なまでの異臭だ。
うん、こんな状態の俺は外に放り出されたんだな。うん。

頭がガンガンする……。これは王女にぶん殴られたせいだろうな。なんか一発殴られたところまでは意識があったけど、それ以降は完全に記憶が無い。痛みがある箇所はどうも一カ所だけじゃない。あちこちが痛いってことは、王女にタコ殴りされたってことだ。
たしかに、意図していなかったとはいえ、王女にキスしまくったもんな。
しかも2回目だから完全に切れてしまったようだ。あの怒りに燃えた王女の瞳。殺されなかっただけましかも。
携帯電話をポケットから取り出す。
血まみれになっているけど、防水防塵機能のおかけでとりあえずは生きているみたいだ。
ディスプレイをタッチすると画面が光る。
時間は２：２０。
その時間に焦りを感じた。
今からシャワーを浴びて着替えてなんとか３：００だ。
バイトにはぎりぎりの時間。

俺は慌てて起き上がり、部屋の中を覗く。
部屋の中は電気が点いていて、中でソファーに腰掛けた王女の姿が見えた。
俺は扉を開こうとするが、鍵が掛かっている。
トントンと窓を叩くと、王女が気付いてこちらを見る。
「窓を開けてくれ」
俺と目が合ったのに、彼女はフンと鼻で笑うと視線を逸らした。
「おいおい、姫。開けてくれ」

バイトまで時間が無いんだ。焦りから強く窓を叩く。こんな時間に近所迷惑だし苦情が来そうだけど仕方がない。バイトに穴を開けるわけにはいかないんだから。
しかし、彼女はわざと聞こえないふりをしている。テレビを見ているみたいだ。やっぱりだいぶ怒っているんだろうな。
仕方ないので更に窓ガラスを強く叩いた。深夜だということもあるから結構響く。非常識この上ないのは分かっているけど、今は緊急事態なんだ。ごめんね、ご近所さん。

少しすると王女がやってきてベランダの窓の鍵を開けた。
俺は開けると飛び込むように部屋へと入る。

「シュウ、五月蠅いわよ。近所迷惑じゃないの」
その声には明らかな怒りが含まれている。
「だいたい、どういうつもりなの？　他の人間達は寝ている時間なんでしょう？　非常識この上ないんじゃないの。……まあそんなことはどうでもいいわ。でもね、私が言いたいことが分かるわよね？
バッタの脳みそくらいしかないお前でも分かるわよね、私がどうして怒っているかわかる？　さっきの事よ！　一度ならず二度までもあんなことして」

「すまん、ごめん。言いたいことはわかるけど、後にしてくれないか？　バイトの時間があるんだよ。もたもたしてられないんだ」
そう言いながら俺は下着を押し入れの3段ボックスから取り出し風呂へと急ぐ。
ここで話がぶりかえると長くなりそうだ。

「バイトって？　」
少し興味ありげに尋ねる。

「姫にはまず理解できない事だけどね。俺の生活費は全部自分で稼がないといけないんだよ。……でも高校生だからできるバイトって決まってるんだよ。今から新聞配達の仕事があるんだよ。そんで3時には店に行かないといけないんだ。時計を見てみて。今の時間、わかるよね。もう時間があんまり無いだろ？　……だから、じゃ」

姫に理解をしてもらうにはアルバイトとは何かから説明しなくちゃわからないだろう。そして、どうして生活の為に俺がアルバイトをしなければならないかの理由を説明しなくちゃならない。これにはかなり時間がかかる。

しかし、今の俺には時間がないんだ。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　」

王女が叫ぶが無視。

大あわてで服を脱ぎ捨てると、シャワーを出す。どす黒い水が俺の体から流れ落ちていく。

髪の毛や体に張り付いた血液や化け物や人間の体液がお湯で一気に流されていく。

石けんをたっぷりつけて体を擦る。擦る擦る。髪も3回洗い直す。

血の臭い、動物の臭いを完全に落としておかないと大変なことになりそうだからな。それでも臭いを全部落としたかというと自信が無い。

風呂から出ると髪を乾かし、ジーンズとシャツを着た。

王女は何か言いたげに近づいてきた。俺に文句を言いたいのは間違いない。

「ごめんね、姫。話さないといけないことがあるのは分かっているんだけど、時間が無いんだ。バイト遅れちゃうと他の人に迷惑かけるんだ。帰ってから聞くから……ごめん。それから、子供は早く寝ないといけないだろ？　」

そういうとブルゾンを羽織って部屋を飛び出していった。

謝っておくべきなんだろうけど、寒空の中、ベランダに転がされていたことが少しむかついていてたこともある。何か謝る気にならなかった。大人気ないよな、相手は子供だっていうのに。

バイトが終わって学校に行く前に謝ろう。

俺はそう思いながら自転車をこぎ出したんだ。

第６１話　姫の生態

何とか時間通りにバイト先に到着して、いつも通りの作業をこなした。

アパートに帰ったのは朝の６時前だった。途中でコンビニでスイーツやおにぎりと総菜を買っていた。俺だけだったら昨日の残り物のご飯があるからそれと味付けのりだけで十分な朝飯。でも王女がいるから最近はスーパーで食材をいろいろ買っている。今日はバタバタで時間が無かったからおにぎりと総菜で我慢してもらおう。

その代わり、たいしたもんじゃないけどスイーツを買うことで彼女に機嫌を少しでも直してもらおうって思ったんだよ。

カツカツの我が家の家計から考えるとそれでもかなりの贅沢だ。

ちょっと前までは俺一人の生活だったから、新聞配達と週末にコンビニでのバイトでやっていけてたけど、一人家族が増えたことで我が家の家計は苦しくなっている。王女の衣類も買わないといけないし。

バイトを増やすか、コンビニでのバイトを深夜勤務に替えないとだめかも。

部屋に戻るとそ～っとドアを開ける。

電気は消えていてカーテンも閉まっている。王女が来てから、カーテンは遮光カーテンに替えさせられた。真っ暗になるので昼間の時間の感覚が無くなるんであんまり好きじゃないんだ。朝日とともに起きるってことは今の俺の生活では関係ないから、部屋が朝でも真っ暗でもまったく影響はないんだけどね。これも結構な出費になった……。

「姫……？」

声をかけてみるが反応は無い。真っ暗な部屋の中でかすかに寝息が聞こえる。

【イメージ・インテンシファイア】……オン。

勝手に名前をつけた呪文を唱える。

イメージ・インテンシファイアとは、夜の月や星の光程度の明るさの中での暗視装置のことだ。ごく弱い光を倍増させてみることができるらしい。主に暗視用途に使われている装置だったと思う。実物をみたことがないけど、赤外線カメラやスターライトスコープみたいに夜眼が利く装置だと認識している。

その装置を使うイメージで言葉によりスイッチが入るように暗示をかける訓練をしたんだ。口で言うのは簡単だけど実際はかなり結構難しかった。……それでもなんとか習得することができたんだな。実際、こうでもしないと、姫から与えられた能力の一つ、【いつでも夜目が利く】っていうのは確かに便利なんだけど、常時昼間と同じ感じなんで、そんな明るい世界ではなかなか寝付けないという欠点があったんだ。この暗示を使うことにより、常時昼間という欠点を補うことができるようになり、寝不足を解消することができた。

同じような能力で【地獄耳】っていうのもある。これも数百メートル先で1円玉が落ちた音を検知できるすばらしい機能なんだ。こちらもなんとか克服し、スイッチのオンオフができるようにしている。でないと常時最大音量でテレビをかけているようなもんだからね。たまったもんじゃない。

ちなみに嗅覚は強化されていない。

———掛け布団から金髪の頭が見えている。

どうやら、まだ寝ているみたいだ。

出会ってからずっと、彼女は完全夜型の生活をしている。

昼間は死んだように眠り、日没とともに目覚め、日の出と共に再び眠るといった生活を続けている。その眠りは人間とは異なり深い

深い眠りらしく、少々のことがあっても目覚めることは無いんだ。少々の騒音ではまったく起きる事はなかった。
仮死状態に近い感じなんだもん。
これってかなり危険なんじゃないかなって思うけど、そのことについてはまったく王女は気にしていないらしい。何かセンサーみたいなものでも設置しているんだろうかな？

そして、よほどのことが無い限りはそのリズムを替えることはないようだ。変えられないのかもしれない。
完全に俺たち人間とは逆の生活リズムなんだな。

……まるで吸血鬼みたいだよな、それって。と思う。

部屋は暗室みたいにしておかないと駄目みたいで、遮光カーテンを買いに行かされたもん。それでも完全な暗闇にはできないからぶーぶー文句を言われた。仕方ないんで、スーパーでいらなくなった段ボールをもらってきて窓ガラスの大きさで切り取って、かつガムテープでしっかりと目張りをしている。
見た目はかなり、いや相当に悪いけど、段ボールと遮光カーテンの併用で、昼間であろうともほぼ完全な暗闇が確保されるようになっている。玄関の方にある窓も同じように段ボールで目張りしている。
時計がなかったら何時かわからなくなると思う。

それにしても……、王女は、本気で太陽光線が苦手なのかもしれない。
試してはいないけどね。

でも、彼女のその生活リズムのおかげで、俺は王女との共同生活でもそれほど困らないですんでいる。学校にいる間は、ほぼ寝てい

るからね。人間と同じリズムなら退屈をさせるはずだけど、全然問題なし。すれ違い生活にならないですんでいるんだ。

異世界から来た彼女にとっては、人間達の生活の方が異常だって思っているのかもしれないけれど……。

俺はキッチンへと移動すると、買ってきた総菜を冷蔵庫に放り込んだ。

冷蔵庫の中には王女のために買ってきた飲み物やスイーツなんかが入っている。

うむ？　あまり量は減っていない。

王女は俺と一緒に食事を取るときはそれなりに食べるんだけど、一人でいるときにはほとんど何も食べたりしていないのかな。

アイスが気に入ったとか言ってたけど、それもほとんど手をつけていない。

……あまり人間が食べるものは好きじゃないのかなとさえ思ってみたり。

そもそも向こうの世界では彼女は何を食べていたんだろうって思う。……人間の血だったりして。

でも俺たちと同じ人間がいるかどうかさえ分からないけどね。

そういえば王女からは向こうの世界の話をあまりしてもらっていない気がするな。話したくないんだろうか？

「帰ってきたのか？」

振り返るとアニメキャラクターのパジャマを着た王女が立っていた。

可愛いお姫様の格好をした少女と短パンでリュックを背負ったデブのはげ親父のコンビのイラストがプリントされている。「禿げ親父は王子様」とかいう結構人気の子供向けアニメらしい。

シャツ自体、原色のパジャマだけど王女は何故か気に入っているみたいだ。
妹のささやかないたずらなんだけどどうやら王女には通用しなかったようだ。

外に着て行くには恥ずかしい服なんだけど、王女が着るとなぜか可愛く見えたりする。

「ああ、ただいま。やっとバイトが終わったよ。……お腹すいただろ？　飯でも食べようよ」
そう言って俺は冷蔵庫にしまった食材を再び取りだした。
「いろいろ買ったんだけど、どれ食べる？　」

「おにぎりは真アジ一夜干しとワサビのりがいい。あとひるげ」

「了解。お湯はポットに入ってるから直ぐ出来るよ」

「うん」
そういうと王女は流し台で手を洗うと、部屋へと戻っていった。
俺はお椀にインスタント味噌汁を入れるとお湯を注ぐ。ひるげは安売りしてないけどどうも王女のお気に入りらしい。で、良く買わされる。
俺もその味は嫌いではない。しかし、どういうわけか、これだけは特売品にならない。いつも定価売りなんだな。理由はわからない。某国の陰謀ではないかとさえ言われている。

部屋の真ん中に置いたちゃぶ台の前に腰掛けて、王女はテレビを見ていた。
俺はおにぎりを机の真ん中にどかりと置き、お椀と箸を王女の前に置く。

「ありがと」

「よっし、じゃあいただきます」

俺も王女の向かいに座り、食べ始める。

王女は味噌汁を一口すすり、おにぎりのパッケージを剥がすんだ。でも、何故かうまくできない。順番通りにすれべできるのにこれがなぜかできず、ご飯がぐじゃぐじゃになる。

バラバラになったご飯をお椀に投入する。ワサビのりの味噌汁雑炊のできあがり。それをスプーンで混ぜ混ぜし、すくって食べる。

「どうかしたのか？　」

と不思議そうな顔をして俺を見る。

「いや、変な食べ方をするなって思って」

「これはこんな食べ方をするんじゃないの？　テレビでやってたぞ。みんなこんな食べ方をするんじゃないの？　」

とまじめな顔で言う。

「それは間違いだよ……。それはねこまんまって言って、犬や猫のえさみたいな簡素なものって言われているんだよ。おまけにスプーンで混ぜるその食べ方は姫みたいな子はやっちゃいけないし、やめた方がいいよ。テーブルマナー違反で叱られるところだぜ」

「……ふうん。うむ、そうなのか。それは知らなかった。テレビでやっていたからこれが正しいって思っていたわ。間違ったことを当たり前に流しているのかテレビって奴は？　」

「どっかの国の映像だったんじゃない？　今時テレビドラマではそんな食卓の風景は出ないと思うから。……それとテレビの放送が全

て正しいってわけじゃないことは正解だよ。ニュースのライブ映像でも現場ではシナリオっぽいものがあるくらいだからね。事前にリハーサルとかも入れるからね。国営放送でさえそれなんだから、民放なんてどんなもんかわかるよね。制作者の意図がもろに反映されたりして決して中立な放送なんてされていないんじゃないのかな。全てが間違いじゃないんだろうけど、情報を取捨選択する必要が我々には必要とされている……ってネットでは書いてあったな」

俺は誰かの受け売りの話をそのまま聞かせた。

「ふうん。そうなんだ。いろいろめんどくさいのね、何処の世界も。まあ次からはこの食べ方はやめておくわ。確かに見た目にも汚いわね。郷に入れば郷に従えってことでやってみたんだけど、それが嘘じゃあ駄目ね。うーん、それでもこれはこれで美味しかったんだけれどもね」

そういうと再び食事に戻った。

テレビではニュースが流れている。

いつの間にか全国ニュースにからローカルニュースに変わっていた。

「学園都市において、昨日殺人事件が発生し……」

突然、血なまぐさい話題になっている。

俺はこの前の蛭町達を殺ったことが発見されたかと思い、テレビのボリュームを上げる。

テレビ画面には発見現場らしいビルが映し出される。どうやら繁華街のビルの谷間の裏道で事件は起こったらしい。

どうやら俺の事件ではなさそうだ。

「被害者は３０から５０代の男性で身元はまだ分かっていません。我々の調査の結果、被害者は鋭利な刃物で斬殺されたもようで、事件現場は……」

映像が切り替わり、モザイクで顔を隠された男がインタビューを受ける画面に切り替わった。
目撃者か。
「なんか、こうすごい悲鳴が聞こえて、見に行ったんですよ、そしたら首ちょんの死体があって～。おええ、なんか気持ち悪くなってきた、ごえええ」
「で、その時、付近には誰かいましたか？　」
とインタビュアー。
「うーん、すげえ現場見たんであんまり覚えていないんだけど、ビルを駆け上がってく人影をみたような……」
そこで画面は切り替わり、蝶ネクタイの嘘笑いの似合うアナウンサーの顔がアップで写される。
「事件の続報が入り次第、またお知らせいたします。さて、明日の天気……」
なんだか結局よく分からないニュースだったが、何者かが殺されたという事実だけが分かった。

第６２話　予感

気になって、スマートフォンのブラウザを起動する。

戦いの中で幾度かの衝撃を受けたためか、なんだか動作が鈍くなっている気がする。

……一度見てもらったほうがいいかもしれないな。でも修理となったら結構な出費になりそうだ。これ高いんだよな。

一応拭いたんだけれど、よく見たらエッジ部分とかに血がこびりついている。なんだかぬるっとした液体も張り付いたままで気持ち悪い。ほのかに妙な臭いもしてるし。

ＯＡクリーナを取り出して念入りにふき取る。爪楊枝も動因してこびりついたものをそぎ落とす。

……なんとか綺麗になったかな。

とりあえずは【学園都市】【殺人事件】と入力し、検索をかける。

２０万件近い数がヒットした。

これじゃあ分からないな。

さらに絞込で高校の名前を入れてみる。

すると件数が大幅に減り、トップには寧々と如月の死亡ニュースの記事が出てくる。

上から３件目に某掲示板のタイトルが出ていた。

【連続殺人】学園都市のエリート氏ね【実験動物】

たぶんこれだろう、俺はその掲示板のスレッドにアクセスしてみ

る。

ビンゴ！　だった。

先ほどテレビのニュースで報道されていた記事の要約が記載され、放送局のＨＰへのリンクってあった。恐らくここに記事若しくは動画があるんだろう。

以下にはテンプレート形式で様々な事が書かれてあった。新しい順番で学園都市で起こった殺人事件や犯罪が書かれている。寧々や如月の変死事件も書かれてある。内容はどう考えても学校関係者でなければ知り得ないことまで書かれていた。

読み続けていけば事件の詳細が分かるかもしれない。そう思いながらスクロールさせていく……。

それにしても……と書き込みを読みながら思う。

実験動物なんて久々に聞いた言葉だった。

その成り立ちからして曰くのあった学園都市だもんな。

学生の集め方もなんだかサンプル抽出的な部分があって一時期マスコミも結構取り上げていたんだ。それが俺の通っている高校がまさにそれで、授業料無料、格安の寮も完備、そして公表はされていないけれども、学園都市に新設された国立大学への進学も推薦で認められているんだ。その大学は複数の企業も協力しているようですでに卒業生は優先的に採用される特権を与えられていたりもするんだ。

確かに、近畿各府県からまんべんなく生徒が集められているんだけど、決して選抜メンバーというわけではなく、レベル的には中の中程度の生徒がほとんどなんだ。各県の進学校から来ている生徒はごくごく希だった。それゆえ、どうみたって胡散臭さ全開だから、何か裏があるんじゃないかと噂になったわけだ。

そのなかでも一番おもしろおかしく書いてあったのは、生徒達はモルモットとして閉鎖的な学園都市の高校へ集められ、有形無形の人体実験を繰り返されるのだと。保護者達にはすでに説明済みで補償も済んでいるという話だった。そしてその実験を生き延びたもののみが開かれた未来への切符を手にするとのことなんだな。

学園都市の建設に携わった人間に旧日本軍の関係者が多かったのが原因とも言われている。戦後のどさくさで戦犯とされることなく、名を上げた人物が幾人か入っていたからそういう話が出たのかもしれない。

俺の親父である月人家当主の佐與（さよ）も関係している。ちなみに俺の親父は戦犯扱いになる歳ではないけどね。

俺たちの高校だけでなく、学園都市自体にもいろんな都市伝説的なものが語られているから、あまり気にならないんだけれど。

やたらと健康管理のための診察が多いことや、携帯端末のみでキャッシュレスに生活できるこの街の環境から俺たちのプライバシーがゼロに近いといった、いやな部分があると言えばあるんだけれどね。

うーん。

そういえば、入学に際してやたらと寮へ入ることも勧められたな。どうして外で暮らすのか納得できる理由を聞かないと承認できないとかいろいろ担当者に言われた。

実際、自宅から通える生徒以外は寮に住んでいる。自宅から通えるのに寮に住んでいる生徒もいるくらいなんだ。いろいろとメリットがあるらしい。

俺が外に住むことが出来たのは月人家という名前のおかげのようだ。かなり学校と揉めそうになったんだけど、担当が上に相談した途端、ＯＫがでたもんね。

あれはいまだに何だったかわからない。

まあ、兎に角――――。

こうした都市伝説が出てくる原因のもう一つは、うん、こちらのほうが大きいと思うんだけど、学園都市建設地が、山間の集落が点在するど田舎で、戦前、原因不明の災害により焦土化し多くの犠牲者を出したというところかもしれない。

原因については、昔のこともあるし、おまけに超がつくほどの田舎であったこと、また生存者がいないということから、今でも不明のままだ。まともな現場検証すらできていないようだ。

オカルト的な話と残されているのは、災害による所有者の死亡により、所有者不明になっていた土地が戦中戦後のどさくさで名義がいつのまにか外国人のものに変更されていたことと、学園都市誘致合戦において様々な有形無形の力を暗部で働きかけたとある団体が存在していたという話があることだ。その団体の構成員を調べると、不思議なことに学園都市の用地所有者でしめられていること、そして、かなりの額の税金、数十億とも言われている、が用地取得費用としてその団体へと入ったと伝えられている。

ただ、さすがにこれは結構な問題を孕んでいるということで市民団体やマスコミが騒いでいたんだけれど、団体の中心人物が淫行で逮捕されたり、団体内の不正使用問題が発生したり、新聞社の記者がホテルで滅多刺しにされて殺されていたりとゴタゴタが頻発していつのまにか話題がそちらへと移行し、マスコミも取り上げなくなってそのままになってしまっている。新聞記者殺害の犯人は捕まったみたいだけど、３０代の男と速報で流れて以降は何の報道もなされなくなった。

あれはなんだったんだろうなって当時は思った記憶がある。ネットでは責任能力が無い奴の犯行だったとか、いやあれは某国の人間だからマスコミが触れてはならない領域に行ってしまったからだとか騒いでいた。警察の動きが鈍くなったことから考えると、ほんとに某国の人間だったのかもしれない。

まあいろいろと闇が散見されるということなんだな、この街は。
町並みの見た目はかなり凝ったデザインですごく綺麗だし、統一感もあって憧れる人も多いみたいだけど、一歩裏道に入ればそんなやばい世界に触れる危険を孕んだ街なのかもしれない。

で、事件の詳細の件だけど、掲示板には憶測と感想と嘘が入り乱れてカオス状態だったけど、いくつかの気になる書き込みがあった。

それは、殺されたのがうちの高校の教員だということだった。

第６３話　繰り返す殺人

まさかね……。

それが正直な感想だった。でも書き込みをよく見ると、事件現場が教員宿舎の近くであったこと。生徒からの書き込みらしい物もあり、そいつが担任に確認したところ、生徒指導先生が亡くなったらしいと言っていたこと。また、こんな時間に学校に教員が集まってきていること等々の書き込みがあり、案外、信憑性の高い情報かもしれない。

先生達が学校へ集まっているとするなら、マスコミの取材に対する対応と記者会見の検討を行っているんだと考えられるな。

寧々と如月の変死、そして把握しているかどうかは不明だけれど蛭町の失踪。そして今回の教員の殺人事件。

わずかな間に3人、蛭町を入れたら4人だけど……、の犠牲者が出るなんて大量殺人事件以外では日本では無かったんじゃないか？

こんなのをマスコミに知られたらそりゃ相当騒がれるだろうな。

……でも、学園都市についての都市伝説が本当なら、マスコミもあまり騒げないかもしれないな。

寧々の事件でも予想外にマスコミが騒がなかったもんな。あきらかに普通じゃない死に方をしているのに、深く追求するようなことがなかった。最近のマスコミはそんな対応が多いからあまり気にならなかったのかな。もうしつこいぐらい追求するネタもあれば（これは国民はあまり興味がない）、明らかにおかしいだろうってネタには全く触れもしないことが幾度かあった。この偏向具合についてはネットとかでもいろいろな書き込みがあるけれど、どれも極端すぎてオカルト的でもあり何とも言えない。でも、確かに何らか勢力について、マスコミはまったく弱腰になるようだ。

学園都市にもその力学が働いているんだろうかな。
そいつの正体を知れば、面白いことになるかもしれないけれども、今はそこまで気が回らないや。

「さっきからごそごそやってるみたいだけど、……で、どうなっているの？」
いつの間にか王女が側に来ていて、俺の携帯の小さい画面をのぞき込んでいる。
ごくごく側に彼女の顔がある。

俺は少し距離を取り
「ネットでの情報だけど、どうやらまた誰かが殺されたらしいよ」
と画面を見やすいように彼女に向けてあげる。
しばらく画面を見ていたが再びこちらを見る。
「誰かが、……死んだの？」

「それはまだ発表されていないから分からない。でもこの掲示板の情報を信じるとしたら、教員の誰かみたいだ。……姫、いちおう聞いておくけど、これは寄生根とかは関係ないよね」

「……それは分からない。でも、お前と闘った寄生根は消滅したはず。だから、すくなくともアレではないわ。……ただ、アレ以外にこちらに来ているものがあったら分からない。そうであるなら」
王女は言葉を詰まらせる。

「つまり、もし寄生根が一体でなかったら、如月と同じようなことが繰り返されるって事、……なんだよな」
俺の言葉に彼女は頷く。

「教えてくれ、その確立はどれくらいなんだ」

「そんなの私に分かるわけないわ。異形のものが尖兵としてどれだけの量のサイクラーノシュの寄生を送り込んだか、私を追うことが彼らにとってどれくらい重要かによるんじゃないかしら」

「姫と異形のものは戦っていたんだよね」

「そうよ。とはいっても、圧倒的な戦力差を見せ付けられていたわ。仲間の裏切りによってね。私たちの種族全員が総力をあわせれば、奴らとであっても互角以上に戦うことができたのに、長きに渡ってくだらぬ権力闘争を繰り返していた事が

仇となったわけだ。……滅び行く種族とは案外そんなものなのかもしれないけれどね」

吐き捨てるようにつぶやく。

「その対抗勢力である姫たちはどういう状況になっているんだ」

「……父と第一皇子である私の兄が指揮していた。……父の指導のもと、各地に散らばった一族を集め、配下の族や使い魔達を終結させ反撃を行おうとした時に、あの男が、兄が裏切ったのだ」

握った拳に、ほんの少しだけれど力が入るのが分かった。

「あいつは異形のものと通じていた。わざわざ私たちが集まるように誘導し、罠にはめたのだ。……集まった仲間たちがあの混乱のなかでは分からない。おそらくほとんどが殺害されたか捕らえられたのだろう。父もやつらの凶刃に斃れた。指導者を失った組織は惨めなものだ。その後は坂道を転がり落ちて行くようなものだ。ただただ、敗走し、逃走するだけだ」

「……そうか。うん、ごめん。辛いことを聞いちゃったね」

「ふん、辛かろうがどうだろうが関係ない。所詮、どうあがいたところで過去は変わらないのだから」
内心はどうなのかわからないけれど、平然とした顔で答える王女。クールだな。

「ということは異形のものと戦う勢力にとって、王女が一番大事な存在ということだよね。当然ながら、やつらにとっても姫の生死は一番の関心ごとになるわけだ。君が生きている限り、反乱分子は集う可能性を持つということなんだから」
王女が生きて異世界に逃走している事実。そして、強力な結界のために、二つの世界を行き来し王女を追跡できるのは寄生根しかない。そうなった場合、たとえ困難であったとしても追跡者をたった一体しか遣さないわけがない。

つまり、まだ敵は存在しているってことだよ。

そして、ニュース報道より早く、ネットの掲示板で殺害された教員の名前が書き込まれた。

俺たちの高校の生徒指導教員、戸次空次（べっきくうそ）だった。

第６４話　疑問自答

まだ、終わらない……。
最初に浮かんだ言葉が、それだった。

殺されたのが学校の先生だったことが原因の一つかも知れない。しかし、その事実をもって説得されることよりも、唯一あの寄生根と戦ったからこそ感じられる、感じ取れてしまう例えようのない違和感。暗闇で何か得体の知れないモノを踏んだ奇妙なそして嫌な感覚。

それこそが事件の事を聞いた刹那に俺が感じたことだった。

【あれ】と戦った者のみが感じられる違和感とでもいうべきか。
死線をくぐり抜けた経験から導き出されてしまう結論。

――――それは、最悪の結論――――

多くの犠牲を払い、辛うじて退けたと思ったものがまだ、……ある。
その事実は俺の心に暗い闇を導き出す。
戦い、そして再び勝利ことの困難性、……否、どうでもいい。問題なのは戦うたびに、どこかの誰かが、いや、親しい誰かが犠牲になるということなんだ。そして、その連鎖は無限に続くと言うこと。

俺が斃さない限りは。

学校関係者が犠牲者ということは、新たなる寄生根は、性懲りもなく、それともそれは必然か、やはり学校関係者に根を張ったとい

う事になる。

そして、その結論。

再び相まみえる敵が、果たして俺にとってどのような存在なのだろうか？　誰なのだろう？

――考えたくもない――

王女は言った。寄生根に憑かれる存在は、寄生根に呼ばれるのだと。

負の想いへの、とてつもなく強い渇望の充足を望む人間しか呼ばれないのだと。根源の深き欲望を持つものにしかその声は聞こえないのだと。

それは悪党と呼ばれる者のみが該当するのか？　……人は普段の生活のみで判断できるものではないのだ。

日頃はおとなしかったり、社交的だったり、優しかったり、面白かったりする所謂「いい人」が果たして一人になったときもそういられると言い切れるのか？　仮面をかぶっているだけとは言えないのか？　笑顔の裏で唾を吐くような人間ではないといいきれるのか？

俺は、断言できない。

一般に言うところの、【いい人】が常に充足された生活を送っているとは言えない。

それが、社会の今の現状。

みんな心の奥底に不満を無理矢理押しやり、なんとか誤魔化して

日々を生きているとは言えないか？
……そこに力が働いた時、誘惑という魅力的な甘い罠を仕掛けられたとしたら、どうなるのだろう？　確かに普段ならその罠に陥ることもは無いかも知れないだろう。だがしかし、人の精神状態は常に一定ではない。普段は穏やかでも、大きな波がたつ日もある……。
そんな落ち込んだ時に寄生根の誘いを受けたとき、人は抗うことが可能なのか？

俺の周りの人間だって犠牲にならないとは限らないんだ。
もしそうなった時、その現時に直面せざるをえなくなった時、俺はどうしたらいい？

これ以上、俺の周りの大切な人たちを失いたくない。

俺は寧々を失い、親友との信頼も失ってしまった。これ以上、まだ何かを奪われるのだろうか。
……そして誰かの命を消し去らなければならないのか？

いい加減うんざりする。
逃げ出したい。今すぐにこの現実から眼を逸らし、この街から逃げ出し、安全な場所で怯えることなく暮らしたい。

――――所詮、叶わぬこと……――――

わかっている、さ。

【本気でわかっているのか？　】

もちろん、わかっている。

【俺にそんな事は許されないはずだ】

平凡な生活が許されないことくらいわかっている。……わかっているだけで、どうしてそうなのかは知らない。でも、なぜだかそれが真実だとはわかる。頭ではわかっているつもりだ。

【そうなんだ。人並みの生活など許されるはずがない。人の道を外れた、外道の俺にそんなことは許されないのだから】

教えてくれ、俺は一体何をしたんだ？

【そんなことわかっているじゃないか。俺の夢、……所詮、はかない夢。人としての幸せなど俺に許されるはずもなかろう】

いつしか俺の思考に被さるように何かが語り出す。これは何？

何？　何？

またアレが来たというのか？

いや、そうじゃない。これは俺自身の思考。

知らないけれど懐かしい存在。

俺であって俺じゃないと思っている。なのに俺であることをどこかで認識している。

【ただ言えること、それは命に替えても護らなければならないものが俺にはあること。それだけが唯一の罪滅ぼし。自身が幸福になることは許されていない。望むことすらありえない。しかし……】

希望は、ある。

それは僅かな光でしかない。けれどその僅かな希望が俺を俺であらしめ、墜ちていくことを食い止めているものであることは、なんとなくわかった……。

俺が今できること。やらなければならないことはひとつ。

目を背けないこと。現実を直視し、例えそれが誰かの死に結びつくことであろうとも受け止めなければならないんだ。俺が逃げる事、それすなわち被害が拡大することなんだから。

できることをやる。それしかない。やらなければさらに誰かが犠牲になる。

仕方ないんだ。

誰かがやらなければならない状況。そして俺にその力が与えられている。

俺には奴を止める力があるんだから。

なんとしてもこれ以上の惨劇を止めなければならない……。

俺がやらなきゃ誰がやる。

そんな言葉が浮かんだ。

殺された寧々、そして彼女を失った家族や漆多、そして友人達の悲しみ。同じ悲しみをこれ以上広げちゃいけないんだ。

俺は様々な想いを受け止め、そして行かなければならない。

「ふふん。……やっとやる気をだしたか？　ずっと黙り込んだままで、寝てるのかと思ったわ」
王女が腕組みをして俺を見下ろしている。
いつの間にか俺は床に座り込み俯いて何かを考えていたようだ。
「馬鹿は馬鹿なりにいろいろ考えているようだけれど、答えは出たかしら」
俺の心を見透かしたような顔で見下ろす王女。だがしかし、その笑顔は優しかった。
「うん。ごちゃごちゃ考えても仕方ないって思ったんだ。とにかくまだ敵がいるなら、それを斃す。それが俺の役目なんだってね」
「馬鹿だけにシンプルな答えだけど、悪くはないわね。……で、どうするの？　」
「とりあえず、街へ出る。現場も見たいし学校の状況も確認したいんだ」
「では、私も行くわ……でももう時間が時間だから、眠くて無理ね。行くなら今晩ね」
「了解したよ。姫の力を貸してくれ」
王女は頷いた。
とりあえず学校に行かなくちゃいけないし、今行ったところで証拠物件なんかとっくに警察が回収しているし、まだ事件が起こったばかりだから、野次馬も多いだろうな。

マスコミだってこんな事件に飛びつかない訳がない。周辺は人でいっぱいだろう。
探索なんてできるわけない。
慌てても仕方ない。
夜を待つしかないね。

第６５話　深夜の現場

――――――

予想通りの騒々しい一日が終わった。
そして、まもなく日付が変わろうとする時間……。

俺はモノレールの高架下の空き地にいた。
ここは学園都市の住宅区の駅のひとつだ。少し歩けばいくつかのマンションが立ち並ぶ区域となる。
隣には王女がいる。

「ちょっといい？　シュウ。これどうにかならないの？　……なんかこの服、着心地が悪いわ」
そう文句を言っているのは、王女が普段着ているゴスロリファッションをやめさせて、ニットの帽子を被せ、ジーンズにグレーのジャケットを羽織らせているからだ。ちなみに靴はブーツ。
どれも〇ニ〇ロで揃えたものだ。
それでも総額で２万円近くしたんだから、かなりの出費なんだよ、俺としては。
でも、王女があの人形みたいな格好でうろつくと、流石に目立ちすぎるからね。それを避けるためには、これくらいの出費は仕方がない。

文句を言っていたけど、深夜に児童を高校生が連れ回るという行動がいかに異常に見えるかをこんこんと説明すると納得してくれた。
「確かに……私が助けて～っとか騒いだら間違いなくお前は取り押さえられるわね。お前はいかにも変態そうな顔をしているけれど、

だいたいの男から見たらなら殴り倒せるくらいに弱っちそうに見えるものね。……ふふふ。一躍ヒーローを作り出すことができるわね。それはそれで面白いかもね。お前が困る顔は面白いからなあ」
と、面白そうに言っていた。
本当にやりそうで怖いんだけれども。
「ところでこんなところに何しに来たの？　」

「ニュースで見ただろ？　ここから少し歩いた高架下の公園で俺の学校の先生が殺されたんだよ」
ここは企業の単身者や独身者が住むマンションが多く建ち並ぶエリアだから、降りる客も結構いる。
しかし、学園都市以外から通ってくる人間も結構いるから、最終列車であることもあり、俺たちが降りた後もかなりの数の乗客がいた。この先、さらに電車の乗り換えをして、帰宅する人が多いんだ。
しかし、こんな時間まで働く人間がそれも結構いることに俺は驚いた。多くの見知らぬ人たちの力に支えられてこの学園都市は運営されているんだと実感する。

改札を抜けると人々は各々の家へと散って行く。

「事件のことなら夕方のニュースで観たわ。で、お前は学校で何処まで情報を入手できたの？　」
王女にしては珍しく、日が沈む前に起きてテレビのチェックをしたらしい。

「残念だけど、ニュース以上の情報は得られてないよ。……でも、現場を見てみたら何かがわかるかもしれないからね。特に姫なら、何かを感じるんじゃないかな」
当然ながら、例え内部の者だろうと、目撃者がいるわけでもなく、また箝口令もいちおう敷かれているようだからほとんどの生徒にと

ってはテレビや新聞・ネットからの情報以上の情報など入手できるわけがない。各々に聞いた話なんだけどということで口コミの信憑性もあやふやな情報が飛び交い、それに尾ひれがついてさらに蠢くといったレベルの与太話になっていた。

よって得られた情報なんて本当か嘘かなんて判断さえできなかった。

だからって言う訳じゃないけど、結局のところ、自分の目で現場を確かめて見て、殺人事件という事象が一体何によるものかを確認したかったんだ。王女と俺の眼なら、事件の痕跡を見逃す訳がない。

現場検証も恐らく終わってるだろうし、深夜だからマスコミもいないだろうと思いこの時間にしたというわけ。

のんびりと歩いていると、あっという間に辺りには誰もいなくなっていた。

ホームに降りたときには結構人が多かったのに、もうひとりぼっちだ。

高架沿いに走る道路には数十メートル単位で街頭が立っているが、明るいとは思えない。

景観重視か何かで大きな街路樹が植えられているためか視界が遮断されて、木の陰に誰かが隠れていたとしたら発見に時間がかかりそうだ。

おまけに道路はこの時間帯ということもあるんだろうけどほとんど通行量がない。直ぐ側にモノレールの駅があるし、ハイブリッド・バスの停留所もあるから結構便利だ。さらにエコタウン条例とかで自動車の所有者には結構な税金がかけられることもあり、学園都市の住人は近隣の街と比べてあまり車を持っていないんだ。

公共交通機関が整備されているし、最悪はタクシー（なんと電気自動車）を使えばいいから。なおタクシー利用に際しては学園都市

からの補助金が出るので街の外と比べると大幅に安い。……これにはいろんな利権やらなんやらが絡んでいるとかニュースで取り上げたりもしてた。

それから、外部の人間が学園都市に車で来ようとすると、多種の申請書の提出が必要となっていて、それはかなり煩雑だ。よほどの用事が無いとふらっとやってくることはできやしない。いろいろ外部から文句は出ているようだけど、ほとんど相手にしていないみたい。

いろんなマイナス面があるけれども、自動車の所有者が少ないことから、街は空気が綺麗だし、騒音も少ないからそれはそれで良いんだけれどね。

ＣＯ２削減の為、政権の総理（後に無責任パッパパラパー総理と呼ばれることになる）が大幅削減を高らかに宣言した影響のため、この街のいろんな部分にそのしわ寄せが来ていると言われている。妙に豪華な駅があるのに駐車場が無いとか、スパコンの台数が計画当時より削減されたのに校舎の設計には反映されず妙に大きなままだったりといろいろあるんだ。なんとか仕分けってやつ。そのためにちぐはぐな街作りになっているのは否めない。いろいろ他にも問題があるんだけれど、これは関係ないので割愛。

「……やっぱりね。結局は何も情報を収集してなかったわけよね、お前は」

予想通りといった、結構馬鹿にした目で王女は俺を見る。

「まあ結果論からいえば大して成果はなかったっていえるけど、俺なりには情報は収集してるよ。まず学校は事件についてマスコミから取材を受けた場合、生徒の自主的な判断に任せるってことで特に規制はかけていなかったんだ。学校内での取材はさすがに授業に影響があるからってことで禁止したようだけれど、校外では権限が及

ばないということで黙認してたね。だから俺までカメラを向けられちゃったよ」

「ふん。普通なら憶測だけで情報を出されて混乱するのを防ごうとするんじゃないのかしら」

と、もっともな疑問。

「でも、マスコミへの情報の漏えいを遮断しようとしたって人の口には戸は立てられないからね。絶対、喋る奴が出てくるよ。それに拒否すればするほどマスコミも意地になって取材しようとするからね。その辺を考慮しての戦略みたい」

「なるほどね……。で、結局被害者は誰なの？　」

「殺されたのは俺の学年の生徒指導担当職員の戸次（べつき）先生だったよ、やっぱり。ネットの情報網はすごいよな。どこからあんな情報を仕入れてきたのやら」

「生徒指導担当っていうのはなんだ？　校則を守らせるための仕事か？　」

王女もどこで調べたのか変な知識を披露する。

「まあ校則を遵守するように指導するのも仕事の一つだけれど、カウンセラーの資格も持っている教員がなるんだ。学校生活は勉強の悩みだけではなく、人間関係の悩みもつきまとうからね。いじめ問題や生徒の非行、家庭の問題……まあ、いろいろあるんだよ。そんな生徒たちの悩みを聞くという仕事もやってるよ。俺にとっては嫌な奴だったけど、それなりに信奉する生徒もいたようだよ。だから全般的には1年生の中では衝撃を持って受け止められていた感じだなあ」

「ふーん、お前以外には悲しみを持って受け止められたのか。……でも、お前は何も感じなかった訳ね。最低ね」

「ひっどいなあ、そんなんじゃないよ。あの先生は基本的にはいい人を演じているんだけれど、すごい裏表があるんだ。自分より弱い人間、何かをしても逆らわない人間……つまり生け贄を見つけたら容赦ないぐらいの行動を取る奴なんだ。ほとんどの生徒も父兄も。同僚の先生さえ知らないけれどね。その辺の隠蔽工作をきちんとやるとてもクレバーな奴なんだ。良くは分からないけど、普段いい人、がんばる先生を演じているせいかすごいストレスが溜まっているんだろうね。そのために弱い奴をいびる事でストレスのはけ口にしてるんだ。俺もアイツに何度も嫌な思いをさせられたんだから間違いない。そんな思いを何度もさせられているからなんだか複雑なんだ。そりゃ人が死んだら、そして近しい人なら悲しむべきなんだろうけど」

戸次（べつき）にやられたいくつかの陰湿な仕打ちを思い出していた。

「そうか、お前もやられていたのか。つまりお前も弱いと判断されていたのね。それにしても反撃はしなかったのか、情けない男ね」

哀れみの表情で俺をみる。何かすごく容赦無い。

「俺は成績も良くないし、運動も駄目だからね。おまけに友達も少ないから、社会的少数派に属してるんだ。だから先生の言うことに反論しても信憑性が少ないからただ俺が喚いているだけにしか見えないんだ。やればやるほど俺が悪者になってしまうから、仕方なく我慢してたんだよ」

なんか惨めな気分。

「シュウよ、あのね、この際だからちゃんと言っておくわ」

「う、うん？　なんだい」
王女の言葉に俺は彼女を見る。
「前にも言ったかもしれないけど、お前は私と契約したことで一つの回路で接続されている。だから、お前が何を考えているかもわかるし、お前の記憶……体験したことやその時思ったこともお前以上にわかってしまうのよ。だから……」
「だ、だから何だよ」
彼女が何を言おうとしているのか、なんとなくわかって少し動揺する。
「お前が反撃しないのは単に、その戸次（べっき）という教員が剣道と合気道の有段者でおまけに身長１８０センチ超の巨漢ってことが原因でしょ？　」
うわ。まじで読まれてしまってるんだ……。俺は動揺してしまった。情けないな。
「う、うん。参りました。姫の言うとおりです。怖くて何もできませんでした。できるだけ先生に見つからないようにコソコソ隠れていました。それは事実です。他に先生に酷くいびられていた奴がいても見て見ぬふりをしていました。……姫に嘘をついたりするし、俺はずるい男です。ごめんなさい」
「やれやれ。そこまで卑屈にならなくていいわ、情けない」
呆れたように俺を見る。
「でも、実際そうだったんだよ。俺みたいな力無い者は、力ある者を恐れ、その驚異から何とか一日を生き延びなければならないんだ。

だから犠牲者が自分以外になったら、そいつを可哀想だとは思うけど、一歩間違えたらそれは自分になっていたかもしれないんだ。だから内心はホッとしてたんだよ。情けない話だけれど。いじめなんてどこにでもあるけれど、いじめる者といじめられる者の境界線にいる連中は毎日が薄氷を踏むような思いなんだ……。姫にはわからないだろうけど。そんな情けない生活を送っているとどうしてもこんな捻くれた奴になってしまうんだよ……」

惨めな自分、情けない自分、弱い自分。それが俺の本性なんだから、仕方ない。いつからこんな風になっちゃったんだろうな。

「卑屈なお前の人生など興味ないけど、弱い者の気持ちは理解できるわ。生き延びることが生物の本能だわ。だからそういう生き方になるのは仕方が無いのかもしれない。……それはいいわ。話を戻して」

あくまでも冷静だな、王女は。

「う、うん。どこから話せばいいかな」

「被害者がどんな奴かはわかった。次は殺害についてだ」

「殺害方法については、警察からの発表は無いみたい。犯人のみが知りうる事実って奴なんだろうね。だから詳細な事はわからないけれど、かなり酷い殺されかたをしたというのだけは明かされているよ」

「どんな殺しかたなの」

「切断されたりしているらしいよ」

うわさ話を聞きかじったり、ニュースやネットの情報を総合すれば、どうやら戸次（べつき）は、絞殺や刺殺、撲殺などではなく、何かによっ

て四肢のどれかを切断されたことが死因になっているそうだった。
ニュース映像では現場全面がブルーシートで覆われた中、現場検証を行う警察の姿が見られた。どこがどうなっているのか、そもそも現場はどの辺りかさえよくわからなかった。
それでも情報はどこからか流出してくる。マスコミのリーク映像や、ネットへの流出画像で現場と思われる場所は特定されたし、大量の血がまき散らされていたことがわかる映像もあったりした。

「現場の状況から、おそらくは複数犯だってことみたいだよ」

「ふむ。確かに、１８０センチを超える男を夜道で襲うような酔狂な奴はいないわね。だとしたら、怨恨の線が強いってことね。しかも複数で惨殺するほどの強い恨みが」

「うーん、そういわれるとなんだか変な気がしてきたなあ。戸次（べつき）は弱い奴しか狙わなかったはず。やられる奴は大体がクラスでも孤立しているような生徒ばかりで、とても恨みを持って複数でってやつはいなかったと思う。……もちろん、戸次の被害にあっている生徒を全部知っているわけじゃないから、なんともいえないけど」

「では単独犯なのか？　」

「戸次は相手は弱い奴という思い込みがあったはずだから、その隙をいきなり突けばチャンスはあるかもしれないけど……」
巨漢で格闘技にも通じている男を不意打ちとはいえ出し抜けるような奴があいつに苛められるとは思えなかった。そもそも苛められる奴が逆襲に出る、しかも計画的にという話は聞いたことがないもんな。
「やっぱり、普通じゃ考えられないね」

「……寄生根か」
呻くような声で王女が呟いた。

第６６話　幼女、誘拐する俺、……はあ？

「でも結論を急いじゃ駄目ね。とにかく、出来る範囲でデータを集めないといけないわ。……さあ、行くわよ」
そういって王女はズカズカと歩みを進めていく。
俺も慌てて彼女を追った。

――――。

事件のあった公園は駅から歩いて数分の場所にあった。
モノレールの高架下を有効利用すべく、その空き地を利用して作られている。両脇を道路が走っているせいか、子供の飛び出し防止の為に俺の背丈より高い金網のフェンスで周囲を覆われている。周囲に植栽をしていないのは道路から全く見えない構造とすると変質者が隠れるのに最適となりまた行動を起こしやすいということかららしい。
そして、出入り口は２カ所ある。
中にはベンチが４個。水飲み場と砂場、ブランコと滑り台がある。また、筋トレ用の器具らしいものが何個か置かれている。
また、植えられた植栽は俺の腰ほどまでしかないような低木だ。
全て外からの目を意識させるような安全設計となっている。
一部の柵の付近にはブルーシートで急ごしらえのテントの様なものが作られている。
……あそこが事件現場なんだろうか？？

「あれ？、……誰かいるわよ」
王女が声を上げた。
見ると公園の反対側の道路には白黒ツートンのパトカーが止まっ

ている。よく交番に止まっているのタイプのリッターカーの4ドアセダンだ。
そして柵で囲まれた公園の2つの出入り口にはそれぞれ制服警官が一人づつ立っていた。
パトカーから近くの交番のお巡りさんだな……。

退屈そうにあくびをこらえてるのがこの距離からもわかる。
こんな時間まで立たされているなんて、仕事とはいえ、地方公務員も大変なんだな。

「こりゃまずいな。まさかこんな時間まで警察がいるなんて。誰もいないって思ってたんだけどなあ」
俺は頭を掻いた。現場検証も終わってるし、夜中だから誰もいないってふんでたんだけど、とんだミステイクだ。人が、しかも警官が二人もいたんじゃあ手が出せない。広大な公園なら柵を飛び越えて侵入しちゃうんだけど、あいにく空き地に作られたような公園だ。中に侵入して何かしていたら二人のお巡りさんから丸見えだよ。
「しまったなあ。これじゃ現場が見えないよなあ」

「シュウ、何を悩んでいるの？」
状況が理解できないのか、王女が怪訝そうに見る。

「だって警官が二人も立っているだろ？　これじゃあ公園の中になんて入るどころか、近づくこともできないよ。未成年がこんな時間にウロウロしているだけでも補導もんだよ。しかも、ここは殺人事件の現場なんだ。しかも犯人は捕まっていない。もうそれだけで何考えてるんだってやつだよ」

「ふーん。そんなことで悩んでいたの？　馬鹿馬鹿しい」
あくまで王女は余裕なんだなあ。何も考えてないかもしれないけ

れど。

「いやいや、どう考えても彼らに見つからないように公園に入れないよ。あんな何の遮蔽物もない、しかも大して広くも無いところだ。仮に見つからずに入ったとしても両方の入り口から事件現場は丸見えなんだから絶対に見つかるよ。こりゃ現場検証とはいかないなあ」

「……馬鹿馬鹿しい。そんなことで何故頭を悩ます？　馬鹿は必要以上に考えないほうがいいわよ。すべて私に任せればいいわ」

そういうと、ツカツカト彼女は歩き出した。

「お。おい……」

止める暇も無く、一直線に公園の入り口へと歩いて行く王女。

俺は慌てて後を追う。

真夜中の公園。横を走る道路に通行車両は全く無い。最終のモノレールもだいぶ前に出発している。当然だけど辺りは、しんと静まり返っている。歩く音が高架に響く。それはかなりの音に聞こえてしまう。

すぐに足音に気づいた警官がこちらをみた。

こんな夜中に、殺人現場となった場所に女の子がいるはずがないという先入観で警官は一瞬、目を疑ったようだ。夢か何かと思ったのか右腕で両目をごしごしと擦り、もう一度こちらを見、やっとこれが現実だと気づいたようだ。

俺の存在もも見つかった。

「こらお前ら、こんな時間に何をやってるんだ！」

我に返った警官が駆け寄り、王女を見下ろす。３０歳半ばぐらいの制服の上からもがっしりとした体格だと分かる男だった。背丈でいってもおれより１０センチくらい高い。

「別に。……これから事件のあった公園を見たいんだけど、だめ？」
何事も無かったように王女が言う。
意味が分からなかったのか、警官はポカンとした顔をしたと思うと、王女の異常な言動を聞き、怒鳴りだした。
「こんな時間にチビが何をやっているんだ？　今何時だと思っている？　子供がこんな時間にうろつくなんてどういうことだ」
そして俺に気づき俺をにらみ付ける。
俺を見、王女を見て腕組みして遠くを見つめる。そして再び二人を見、どうやら結論に達した模様。
「ん？　お前はこの子とどういう関係だ？　こんな時間に小さい女の子を連れまわしてるのか？　……どうみても兄妹には見えないな。は！　……さては！！」
男はすばやく動くと、俺の右腕を両手で掴んだ。

「え？　」
驚く間もなく右腕はねじられて後ろに回される。
たぶん痛いんだろうな。
……普通の人間なら。

「佐藤！！　来てくれ」
警官は叫ぶ。
公園の反対側に立ってたもう一人の警官は、こちらの男の声で俺たちが現れたことには気づいてはいたみたい。成り行きを見ていた積極的にかかわるつもりはなかったようだけど、呼ばれたことで慌てたように駆けてくる。

「どうしました？　田中さん」
もう一人の男、佐藤と呼ばれた警官はまだ２０代前半に見える、その割りにちょっと小太りで色白の男だった。気弱そうな眼で上司

であろうと思われる田中を見る。
「このガキ、その女の子を連れまわしていたようだ。この子が助けを求めてきた。補導するぞ」
「え？　……えー！！」
俺は締め上げられながら愕然としてしまった。
なんと！　どうやら俺が王女を深夜に連れまわしていて、隙を見て逃げ出した王女が警官に助けを求めたというシナリオがこの田中という名の警官の脳内で作り上げられたみたいだ。
さっき王女が言った現場を見せろという話は記憶から消えている。
たしかに、知らない人間から見たら、この金髪の美少女がこんな夜中に殺人事件のあった公園に来るということ自体がありえない。そしてその少女を追いかけて現れた高校生。二人は似ても似つかない顔をしている。つまりは肉親じゃない。イコール、少女は誘拐されていて逃げて来たのだ……。
やれやれだ。
佐藤という男もすぐにその推理に納得したようだ。しゃがんで王女の目線に合わせるとやさしい声で語りかけている。
「もう大丈夫だよ、怖かったかい？　おじさんたちが守ってあげるから安心しなさい。あの変態野郎はもう一人のお巡りさんが取り押さえているから大丈夫だよ」
「まじですか？　ちょ、ちょっと俺の話を聞いてくださいよ」
俺は声を上げ体をねじる。
「静かにしろ、このロリコン野郎。ぶっ殺すぞ」
しかし、即座に、警官とは思えないようなドスの利いた声で背後

から田中が話すと同時に腕をねじりあげる。
俺でなければ悲鳴を上げているくらいの力技だぜ。
これは不当逮捕だ。人権蹂躙だ。公権力の横暴だ。ありえないありえない。

「姫、なんとか言ってくれよ」
暴力には暴力で応酬してもいいんだけど、そんなことしたら大変だ。俺は仕方なく王女に助けを求めた。
彼女が否定してくれたら、それですべてが解決するんだしね。夜中にうろついていたことは仕方ないけどまあ謝ればすむんじゃないかなって勝手に思っていたし……。

王女の瞳を見た時、俺はなんだかいやな予感がした。本能的な危険？　いや単なる悪戯心かな。そんな無邪気な残酷さといえばいいんだろうか？　そんなものが彼女の瞳に浮かんだように見えたんだ。

「なあ、姫ったら！」
俺は嫌な予感とうざったさの入り混じった気持ちで再度求める。
王女は俺の目を見て、その後、佐藤と呼ばれた警官を見た。
次の刹那、唐突に、ありえないくらい唐突に瞳に涙を浮かべると、警官の影に隠れるようにしがみ付き、声を上げた。
「こ、怖かったよ～。こ、この人がずっと私の後をついてきて、怖くて、恐ろしくて、でも逃げられなくって、どうしようもなくって。うぇっうぇっ！！」
涙声で訴えやがった！

「貴様ぁ！！」
警官二人が同時に声を上げた、……明確な敵意を持って。
どう見たってか弱そうな女の子が涙ながらに、おびえた声で助け

を求めたら、まあ普通はこんな反応だな。
俺は冷静に思ったんだよ。
かなり頭にきてたんだけど。
またやられたよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3571o/

異界の王女と人狼の騎士

2011年11月5日21時11分発行